

〈学位申請論文〉

近代における『古事記』の享受に関する研究

二〇〇九年一月申請

甲南女子大学大学院  
日本文学専攻

人文科学総合研究科  
博士後期課程 三年

田中 晶



目次

序

第一章 児童向け『古事記』の諸相

第一節	『古事記』の享受研究における問題点	7
第二節	戦前及び戦時下における受容と変容	10
一	刊行状況と上代文献の引用	10
二	「天壤無窮の神勅」と「金鷄」の説話	16
三	書籍の意匠が物語るもの	19
第三節	鈴木三重吉『古事記物語』と渋川玄耳『三體古事記』	26
一	研究領域の問題点	26
二	先行論の検証	27
三	神名の表記、誤植における共通点	30
四	『三體古事記』の版数と新聞広告	32
五	鈴木三重吉と渋川玄耳	34
六	執筆当時の鈴木三重吉	35

第二章 国定国語教科書における『古事記』

第一節 教材としての書き換え

一 教科書享受の諸問題

二 国定国語教科書の誕生と検定教科書

三 国定国語教科書の『古事記』関連教材

四 先行研究と課題

第二節 第一期から第三期まで

一 『尋常小学読本』の「紀元節」「神功皇后」

二 『高等小学読本』掲載の教材と典拠

三 第二期国定教科書にみえる皇統の由来

四 黒表紙本に登場した本居宣長

五 「出雲大社」と国譲り神話

第三節 第四期から第五期まで

一 『小学国語読本』と神話教材の増大

二 『初等科国語』と忠義

第三章 『古事記』を題材にした小説と戯曲

- 第一節 神々を主人公とした小説の登場
- 第二節 芥川龍之介と武者小路実篤の小説
- 一 「素盞鳴尊」―「人間」スサノヲの一代記
- 二 「大国主の神」―恋愛の成就と自己の完成
- 三 「須佐之男の命と大国主の命」―娘への愛着
- 第三節 『古事記』等を素材とした様々な小説
- 一 葛藤する神々と天皇、皇子たち―『古事記』からの創作
- 二 『日本書紀』からの創作
- 第四節 演じられる神話―武者小路実篤と山本有三の戯曲をめぐって
- 一 武者小路実篤の「新解釈」―「日本武尊」
- 二 武者小路実篤の「一日の素盞鳴尊」―「須世理姫」
- 三 山本有三の「海彦山彦」―「スサノヲの命」
- 第五節 『古事記』等を素材とした様々な戯曲
- 一 「神生み」から人代まで―『古事記』からの創作
- 二 『日本書紀』からの創作戯曲

第四章 視覚化される『古事記』

	第一節	神々の視覚描写―絵画解釈の試み	177
	第二節	美術誌掲載の『古事記』関連絵画	180
	一	近代以前の概観および絵画の調査方法	180
	二	菊池容齋「彦火々出見尊」	181
	三	町田曲江「天岩戸」	183
	四	平福百穂「武尊誅梟師図」	186
	第三節	女性向け雑誌における挿画、口絵	195
	一	婦人雑誌と娯楽性	195
	二	『女学雑誌』創刊号と神功皇后像	196
	三	『女鑑』の「良妻賢母」像	197
	四	『婦女雑誌』と同時代情勢	199
	第四節	オトタチバナヒメの祈り―「入水の図」の誕生と変容―	205
	一	描かれ続ける「入水の図」	205
	二	「入水の図」の誕生と模倣	206
	三	大正期、昭和戦前・戦中期のオトタチバナヒメ像	212
	四	戦前の小学校教科書におけるオトタチバナヒメ像	215
	五	愛と犠牲―現在のオトタチバナヒメ像	220

結語

初出一覽

主要参考文献一覽

〈資料〉

児童向け『古事記』等作品目録〈近代編〉

## 序

### 一 本論文の問題意識

二〇〇二年。三浦佑之『口語訳 古事記』（文藝春秋社）の流行は、現代の人々が古代に跋扈した神々の姿に何かを求めようとしていたことを証明した一つの出来事であった。それは、『古事記』の研究史においても、人々が潜在的に抱いていた『古事記』への根強い関心が噴出した好例となったといえよう。

千三百年もの昔に記されたとされる『古事記』の作品世界が、創造も含めたかたちで、現在にも至る長きにわたって受け入れられてきた事実を明らかにする作業は、『古事記』に対して、人々がどのような心の働きかけをしてきたのかを問う過程でもある。それは「享受」という視点を採用することによって可能となる。

本研究は、『古事記』がいわゆる「婦女子」を含めた一般の人々に受け入れられ始めた近代を中心に、どのような媒体を通じて流布していったのか、その具体的な様相を探ることを目的としている。そのため、『古事記』を基にした作品の発掘とその情報の提示を主眼とする。そして、ここで述べる（一般の人々）とは、『古事記』をはじめとした上代文学及び古代史学、神話学等を専門とする研究者以外の、広範囲にわたる層の人々を指す。したがって、彼等（一般の人々）による『古事記』の享受の対象として本研究が扱う文献は、注釈書や口語訳のみならず、主として『古事記』を基にして創造された形態の作品を指している。ジャンルとしては、児童書や教科書、小説、戯曲であり、また、享受の様相を探るために絵画や挿絵などを分析の重要な着眼点とする。

従来、『古事記』の受容に関わる研究は、逸文研究と諸本研究の二つが主なものであった。前者は、成立以後、部分的に他文献に引用され後代に残されてきた各逸文を研究対象とする。そこでは、『古事記』を独立した一篇の書物として復元することが目指されてきた。後者は、散在する様々な『古事記』の諸本を精密に校合し検討してゆき、窮極的には『古事記』の原形を復元することが目標とされている。両者ともに本文の「再建」が研究目的とされている。そのため、両研究においては一般の人々の享受の様相を探るといふ観点からはほとんど論じられることがなく、また近代における人々の受容という

視点も皆無に近かった。近代を含めて論じられる場合には、『古事記』の研究書や注釈書といった専門性の高い書籍類を対象としており、一般の人々に受け入れられる書籍は研究史において蚊帳の外であった。

上代文学や神話学を専門とする研究者を対象とした『古事記』の注釈書、研究書類が当時の思想や学術的位置づけを示してくれるのはもちろんのことである。だが、『古事記』を題材にした小説類や児童書、絵画もまた、当時の人々が求めたものや逆に作家たちが人々に与えようとした思想等を探るうえで欠かせない媒体である。

本研究は、近代における『古事記』の享受について、『古事記』が一般の人々にどのように受け止められてきたのかに関心を寄せ、そのために『古事記』の流布の具体的な様相を、発掘作業を通して明らかにするものである。

## 二 先行研究

『古事記』の享受に関わる先行研究としては、青木周平編『古事記受容史』<sup>2</sup>、徳光久也『古事記研究史』<sup>3</sup>、古事記学会編『古事記の研究史』<sup>4</sup>などに纏められている。『古事記受容史』は逸文研究として中古から近世時期を焦点化しており、『古事記研究史』『古事記の研究史』は全時代を含む『古事記』の研究史を目的としているため、近代については一部の専門的な研究書や注釈書を取り扱うものの、多くは資料名の記載のみである。したがって『古事記』が一般の人々に流布した様相を探るためには適していない。近代における『古事記』に関する専門的な研究書および論文類については、『古事記研究文献目録 単行書篇』と『古事記研究文献目録 雑誌論文篇』<sup>5</sup>にはほぼ網羅されているが、これもまた一般の人々に享受されたであろう『古事記』を基にした小説や絵画、児童書の類に関しては目録に含まれない。一方、日本近代文学、日本児童文学の分野においては、『古事記』に特化して研究する視点がなかったため、纏まった研究として見受けられない状況である。すなわち近代における『古事記』の一般的享受の様相は、実態調査が白紙であるといえる。そのために、『古事記』に関連する内容を記載した書物や雑誌、その他の媒体を発掘し、掲載情報の提示に着手することが要請されている。

## 三 本論文の手法



本研究は、手法として児童書、教科書、雑誌等の資料及び各種目録類を網羅的に調査し資料発掘を行い、現物を確認することによって考察を進めた。たとえば第一章では児童向け『古事記』について考察するにあたり、大阪国際児童文学館をはじめ国際子ども図書館等、各図書館の蔵書を調査し、第三章の小説、戯曲などの分野では代表的な目録類を精査し、且つ国会図書館をはじめとして各図書館の蔵書を検索し、すべて現物を確認している。先行研究から辿った書籍類も、現物の再確認作業をおこなった。現物確認の手法を用いたのは、各書籍の本文以外の挿絵や体裁などの意匠、序文、付言、宣伝文などの情報から窺える刊行当時の『古事記』観を知るためでもある。たとえば戦時下に刊行された『少国民の古事記』（一九四三年）はカラーの内表紙に日の丸と桜が描かれ、神話学者の松村武雄が序文を寄せて国民精神の涵養を訴えている。本文と同様あるいはそれ以上に本文が持つ『古事記』観の調査のため、資料現物の確認は必須の作業といえる。



本論第三章で主に扱った『古事記』を基にした小説、戯曲は、『古事記』を原典としてしていることを了解にした関係性の中で生まれた作品群である。それは、『古事記』を吸収し、書き直し、敷衍したことを明示しつつ現れた作品群であり、したがって『古事記』におけるなんらかの要素を継承し、響かせつつ、新たな創造へと向かったものである。

大正期に開花したこれら『古事記』の作品群は、『古事記』を多様な解釈と新たな表現へと解き放ち、それまで見えにくくなっていた可能性について映し出している。作家たちの『古事記』への関心や取り組みは、『古事記』の新たな解釈の側面を私たちがもとに届けてくれるし、『古事記』に新たな命が吹き込まれ、新たな文学的営為へと紡いでゆくこととなった。それは、『古事記』の作品世界を頑なな理解のもとに閉じ込めてきた歴史事実を振り返る契機ともなり、当時の時代思潮ゆえに融通性のある姿勢で『古事記』を受容しえる可能性を導いたといえる。ここに享受という方法論による研究の重要性がある。

#### 四 本論文の構成と概略

本論文は、本文四章及び資料からなる。第一章及び第二章は、新たな享受者として現れた児童を『古事記』の享受者に据え様々な児童向け『古事記』を調査し、『古事記』原典との比較を中心に考察する。第三章及び四章は『古事記』を基にした

小説及び戯曲作品、図像について流布状況および考察を行う。以下、各章の概略を記す。

## 第一章 児童向け『古事記』の諸相

近代において児童向けに書かれた『古事記』を対象として、主に戦時下における受容と変容について考察する。また、児童向け『古事記』の代表的作品と考えられる鈴木三重吉『古事記物語』（一九二〇年）について、三重吉がどのような『古事記』を参照して同作品を執筆したのかを探る。

児童向け『古事記』には、『日本書紀』など他の上代文献からの引用が見られるものがある。その引用箇所を題材として多いのは、アマテラスによる「天壤無窮の神勅」と神武天皇の「金鷄」の説話である。このことを確認し、これらの引用が施されることによって、児童向け『古事記』にどのような変化が見られ、児童にどのような効果をもたらすのかについて考察する。さらに、児童向け『古事記』への引用が増える時期、すなわち『古事記』の変容が起こる時期を、児童向け『古事記』本文の記述及び、表紙や挿絵、執筆者による序文などから推測する。

また、鈴木三重吉は、どのような『古事記』の研究書や注釈書を参照して『古事記物語』を執筆したのかを探る。『古事記物語』は、後続する児童向け『古事記』に与えた影響を考えると、『古事記』享受史において重要な意味をもつ。上代文学研究者及び児童文学研究者がこれまで解明できなかった三重吉の『古事記物語』参照本を、先行研究を精査し、当時の『古事記』関連書を詳細に見てゆくことで特定する。

## 第二章 国定国語教科書における『古事記』

国定教科書第一期から第五期（一九〇四～一九四五年使用）の小学校国語教科書には、多くの『古事記』関連教材が掲載された。いわゆる「日本神話」などを題材にした『古事記』関連の教材には、『古事記』だけではなく、『日本書紀』『風土記』に依拠したものがある。しかし先行研究では、すべてを『古事記』依拠の教材、あるいは『日本書紀』を依拠としており、異なる見解が見受けられる。本章では『古事記』の享受研究という観点から、『古事記』『日本書紀』等のいずれに依拠しているのかという問題をあらためて掘り起こし、各『古事記』関連教材を検証してゆく。また、各期国定国語教科書には編纂意図を記した編纂趣意書があるが、『古事記』原典と『古事記』関連教材を詳細に比較することで、教材の編纂意図

や時代の様相を再確認してゆく。また、教材の挿絵を数点取りあげ、『古事記』原典の記述との差異を分析することによって、教材としての採録の意図を探る。

### 第三章 『古事記』を題材にした小説と戯曲

近代において『古事記』や『日本書紀』を素材として書かれた小説及び戯曲について考察する。第二項「先行研究」で上述べたように、『古事記』の注釈書や研究書類は『古事記研究文献目録』にほぼ網羅されているが、この目録に小説及び戯曲の情報は掲載されていない。上代文学研究の場においてこれらは研究対象外であり、顧みられてこなかったのである。しかし『古事記』の享受という観点からは、注釈書や研究書という基本的な研究者を対象とした書籍類のみならず、それら以外の一般の人々に読まれた「創作」にも着目してゆきたい。本章ではこれら小説及び戯曲について、まず『現代日本文芸総覧』（一九六八～一九七三年）などの各種目録及び先行研究の調査結果を整理し提示する。そして『古事記』や『日本書紀』を素材にして書かれた小説及び戯曲が大正時代に集中して発表されていること、題材として最も多く取りあげられたのがスサノヲ及びオホクニヌシの神話であることを確認する。なぜ大正期に創作が多く、そしてこの二神が着目されたのだろうか。その理由を探るために、代表的な作家による作品を中心に考察を試みる。作家たちによる上代文献の享受という観点を踏まえ、彼らが『古事記』や『日本書紀』のどのような部分に着目し創作したのかを探る。

### 第四章 視覚化される『古事記』

『古事記』や『日本書紀』を題材にして描かれた近代の絵画を「読み解く」ことを試みる。わかりやすい視覚イメージとして訴えることのできる絵画という媒体は、『古事記』享受の様相を探るうえで欠かせない資料のひとつだが、これまで研究対象とされてこなかった。画家たちが『古事記』『日本書紀』をどのように受け止め描いたのか、絵画をとおしてどのようなメッセージを伝えようとしたのか、鑑賞者はどのように捉えたのか。絵画を分析するという手法を用いて『古事記』享受の具体的な様相を探る。考察の対象とした主な絵画は、日本画と、書籍や雑誌の表紙・口絵・挿絵である。日本画については、美術関係の雑誌に掲載された『古事記』関連の絵画を対象に調査を行い、頻出する画題を指摘し、時代の様相や絵画制作当時の学説や対外意識などを確認する。一般向け雑誌の表紙や口絵、挿絵用として描かれた絵画については、『現代日

本文『芸総覧』をはじめとする目録類の調査を行い、代表的な婦人雑誌に頻出する神功皇后の口絵及び挿絵を中心に取りあげた。最後に、明治期に誕生し、現在まで描き継がれているオトタチバナヒメの絵画に着目し、その時代ごとの享受と変容について概観する。

本研究によって、これまで具体的に見えていなかった、近代における一般の人々による『古事記』享受の様相の一端が明らかになると考える。

本論文には、資料編として「児童向け『古事記』等書籍目録（近代編）」を付す。



なお、本文の『古事記』『日本書紀』『風土記』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）の訓読文に拠る。

1 本研究で述べる「近代」とは、日本史で一般的に近代と区分される一八六八（明治元）年～一九四五（昭和二十）年を指す。

2 青木周平編『古事記受容史』（笠間書院 二〇〇三年五月）

3 徳光久也『古事記研究史』（笠間書院 一九七七年一月）

4 古事記学会編『古事記の研究史』（高科書店 一九九九年六月）

5 古事記学会編『古事記研究文献目録・単行書篇』（国書刊行会 一九九二年五月）、同『古事記研究文献目録・雑誌論文篇』（国書刊行会 一九八六年八月）には一八六八（明治元）年～一九八四（昭和五十九）年に発表された『古事記』に関する研究書および論文の題目が掲載されている。ただし、若干の記載漏れも認められる。

6 本研究で述べる「戦時」とは、特に断りのない限りアジア・太平洋戦争を指す。

## 第一章 児童向け『古事記』の諸相

### 第一節 『古事記』の享受研究における問題点

本章では、児童を対象に書かれた『古事記』の戦前及び戦時下における受容と変容、そして、児童向け『古事記』の代表的作品と考えられる鈴木三重吉『古事記物語』(一九二〇年)について考察する。ここで述べる「児童向け」とは、平易な表現を用い児童への配慮を施す等、読者対象が児童であるということを示すが、より詳しい定義は後述する。

このような児童向け『古事記』としてもっとも人々に認知されてきたのは、鈴木三重吉『古事記物語』であろう。現在まで長期にわたり、繰り返し刊行され続けてきた書物である。児童向け『古事記』は、三重吉の『古事記物語』以外にも多数存在するが、これまで『古事記』や上代文学研究、あるいは児童文学研究の場から着目されてこなかった。しかし近代の『古事記』享受について考察するとき、児童向け『古事記』の調査および検証は欠かせない視点であろう。

『古事記』の訓読本、口語訳、注釈書、研究書類は近代において数多く刊行され、『古事記研究文献目録』や『古事記研究史』、『古事記の研究史』の年表などでほぼすべてを確認できるが、その一方で、児童向けの『古事記』として対象を限定すると、三重吉の『古事記物語』以外の書物はこれらの目録類にほとんど見ることがない。児童向け『古事記』はその存在自体明言されてこなかったのだ。もちろんこれは、いわゆる「婦女子」の読み物が『古事記』研究において差別化されていたことにも起因しよう。しかし児童向けの『古事記』は、四十数点の存在が確認され、少年雑誌等への掲載分を加えればその数はさらに増える。

『古事記』が児童向けに再話されるとき、対象が児童であるがゆえに、表現の平易化に加え、台詞や描写の追加、語句の説明などの「潤色」が加えられるのは当然の処置といえよう。三重吉の『古事記物語』にも多くの潤色が施されている。その潤色には語句の追加などのほかに、『古事記』原典にはない説話が挿入されるなど作品が大きく変容する場合もある。たとえば、渋川玄耳『日本神典 古事記断』(一九一〇年)にも『古事記』にはない説話が引用されているのだが、同書は『古

事記』が全編をとおして児童向けに口語訳された嚆矢であり、そもそも児童向け『古事記』は最初から潤色による変容を受けてきたといえよう。引用元となる説話が記載された文献も『日本書紀』のほか数種類が認められる。また、引用による児童向け『古事記』の推移に目をとめれば、アジア太平洋戦争下において潤色は顕著であるようだ。

本章では前述のように、まず戦前に少国民の教化用、そして結果として「戦意高揚に利用された古典」とされた児童向け『古事記』の変容の様相とその経過を探る。そのため分析期間は「近代」である明治のはじめから終戦時までとし、手順としては、『古事記』に依拠した児童向けの口語訳、再話などの物語や戯曲を紹介し、他文献の引用により変容した児童向け『古事記』の内実を探る。さらに、これらの児童向け『古事記』が時代状況に即してどのような変容の様相を見せるのかを確認する。児童向け『古事記』の本文以外の部分から得られる情報にも焦点を当て、当時の状況をつかむ手がかりとしたい。次に、児童向け『古事記』の変容という観点から離れて三重吉の『古事記物語』に焦点を当て、三重吉が『古事記物語』を執筆する際、どのような『古事記』を参照したかを探る。三重吉が執筆当時に購読できた『古事記』はすべて写本をもとにした訓読本、書き下し文、口語訳などである。このような各種『古事記』を調査し、三重吉が見た『古事記』を特定したい。この作業は、執筆当時の『古事記』の受容状況を検証することでもあり、本研究の観点において欠かせないものである。本章の手順としては、次節で戦前及び戦時下における『古事記』の受容と変容について考察し、第三節で三重吉が参照した『古事記』の特定を試みる。

1 ここでいう「戦」「戦時」は、アジア・太平洋戦争を指す。

2 「赤い鳥の本」第一冊、第二冊として刊行された鈴木三重吉『古事記物語』上下巻は、一九一九（大正八）年七月から翌年九月にかけて雑誌『赤い鳥』に掲載された童話（再話）を校正し、新たに三話を追加し全十九話に纏めたもの。大正、昭和、平成を通じ再版され、現在は二〇〇五（平成十七）年三月刊行の文庫本が最新版である。

3 古事記学会編『古事記研究文献目録・雑誌論文篇』（国書刊行会 一九八六年八月）、古事記学会編『古事記研究文献目録・単行書篇』（国書刊行会 一九九二年五月）。一八六八年から一九八四年までに発表、刊行された論文と単行書が網羅的に紹介されている。但し、同目録類には若干の記載漏れも認められる。

- 4 徳光久也『古事記研究史』（笠間書院 一九七七年一月）
- 5 古事記学会編『古事記の研究史』（高科書店 一九九九年六月）
- 6 本論で用いる「説話」とは、いわゆる狭義の説話文学ではなく、神話や伝説、物語といった広義の意味での説話を指す。

第二節 戦前及び戦時下における受容と変容

一 刊行状況と上代文献の引用

本節では、まず近代における児童向け『古事記』の刊行状況を確認し、次にアジア・太平洋戦争前及びその戦時下における時期を中心に、児童向け『古事記』の受容と変容の様相について考察する。ここで本節における「児童向け『古事記』」について定義しておきたい。それは、児童に対する配慮、つまり平易な表現やルビを付す等の読みやすさに関する工夫、性的表現の緩和あるいは削除がなされた『古事記』や、各著者による緒言等から対象が児童と判断できる『古事記』、叢書名（少年く、児童く）などから児童向けと判断できる『古事記』の類である。刊行状況の調査の方法としては、一八六八（明治元）年から一九四五（昭和二十）年までを範囲とし、主として国立国会図書館をはじめ、大阪国際児童文学館、国際子ども図書館、日本近代文学館、三康図書館および各地公立図書館、各大学付属図書館等の蔵書を検索するという方法を用いた。ほかに先行研究等から辿った場合もある。この調査結果をもとに児童向け『古事記』の刊行状況を一覧にしたのが、次の表である。

児童向け『古事記』発行一覧（明治元）年～一九四五（昭和二十）年

※備考には、書名に「古事記」と付かない書物を『古事記』依拠の書物と判断した理由を記した。

	書名	著者名	発行所	発行年月日	備考
1	『兎と鱈』（日本昔噺14）	巖谷小波	博文館	1895（明治28）年10月10日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る
2	『日本開闢』（日本歴史譚1）	大和田建樹	博文館	1896（明治29）年2月22日	自序に「多く古事記を本として採れり」とある
3	『日本神典 古事記噺』	渋川玄耳	精美堂	1910（明治43）年10月25日	
4	『古事記絵ばなし 日本の神様』	渋川玄耳	有楽社	1911（明治44）年2月11日	
5	「少年日本歴史読本」叢書 第1、2、3編	萩野由之編	博文館	1911（明治44）年2月1日、 3月12日、5月11日	第一編解題に「主として古事記より採り、他に二三の正確なる古史



18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	
『日本建国童話集』 (小学生全集第6集)	『少年古事記物語』	『古事記時代』 (少年国史叢書1)	『神代の日本』 (課外読本 学級文庫)	「白兔」(『国語読本を戯曲化する 児童劇脚本』)	『古事記』(小学国史物語2)	『日本神話 古事記物語』 (世界少年少女名著大系12)	「因幡うさぎ」 (『家庭用児童劇』2)	「神話劇 大国主命と白兔」 (『児童劇脚本』第6集)	『日本武尊』(偉人の幼年時代7)	『現代語に全譯せる古事記』	『古事記物語』上、下	『海のお宮』(世界童話集第5編)	
菊池寛	宮崎久松	田中貢太郎	纂	三浦成作	新免忠	齋藤佐次郎	坪内逍遙	編 児童劇研究会	碧瑠璃園	福原武	鈴木三重吉	鈴木三重吉	
文芸春秋社	大同館書店	社 子供の日本	ヨウネン社	ヨウネン社	厚生閣	紅玉堂書店	出版部 早稲田大学	明治図書	部 霞亭会出版	洛陽堂	赤い鳥社	春陽堂	
1927(昭2)年12月8日	1926(大15)年7月28日	1926(大15)年7月20日	1926(大15)年5月25日	1925(大14)年12月15日	1925(大14)年11月20日	1924(大13)年11月18日	1923(大12)年3月15日	1923(大12)年2月20日	1922(大11)年3月20日	1921(大10)年10月8日	20日 下巻1920(大9)年12月 20日 上巻1920(大9)年11月	1919(大8)年7月1 920(大9)年9月	1917(大6)年10月23日
話は『古事記』依拠が多い 神名表記が『古事記』で統一され、		題名には「古事記」と付くが内容は『日本書紀』中心	改めたもの」とある	附言に「『古事記』を平易く書き る 題材内容共に『古事記』説話である			る 題材内容共に『古事記』説話である	る 題材内容共に『古事記』説話である	いる 物語の展開が『古事記』に即して			をも引用した」とある 『古事記』からとった、と ある (雑誌『赤い鳥』掲載)	

34	『古事記物語』	三宅房子編	金の星社	1939 (昭13) 年8月20日	
33	『大國主命と白兔』 (幼稚園紙芝居 第5輯)	高橋五山	全甲社紙芝居刊行会	1936 (昭11) 年5月20日	
32	『日本神典 古事記畫譚』	渋川玄耳	資文堂	1934 (昭9) 年4月20日	
31	『日本神話 古事記物語』 (少年少女世界名作物語8)	金の星社編輯部	金の星社	1934 (昭9) 年2月15日	
30	『日本建國物語』	中田千畝	丁未出版社	1931 (昭6) 年3月5日	『古事記』または『日本書紀』とあるが、神名表記が『古事記』で統一される
29	『やさしい古事記』	小屋民三著	誠文堂	1930 (昭5) 年9月15日	
28	『日本建國物語』	鈴木三重吉	アルス	1930 (昭5) 年8月14日	『古事記』からとった、とある
27	『子ども国史 神代の日本』	高橋立身	光学堂	1930 (昭5) 年7月20日	「序」に『古事記』の校訂本によつたとある
26	『少年少女 日本建國物語』	藤田淳	文化書房	1930 (昭5) 年6月25日	神名表記が『古事記』で統一。神武段で『書紀』の話が挿入される
25	『オトギエバナシ 因幡の兔』	石川謙次郎	富士屋書店	1930 (昭5) 年5月5日	題材内容共に『古事記』説話である
24	『建國物語集』 (新日本少年文学全集1)	蘆谷蘆村	国民図書	1929 (昭4) 年8月19日	神名表記、話の展開が『古事記』に拠っている。『書紀』『風土記』の話が挿入される
23	『いなばの白兔』(『児童劇集』) (新日本少年文学全集17)	多田不二	国民図書	1929 (昭4) 年7月13日	題材内容共に『古事記』説話である
22	『新訳 古事記読本』	三浦藤作	文教書院	1929 (昭4) 年6月25日	
21	『いなばの白うさぎ』(『二年生の童話』) 学校家庭学年別 模範児童文庫)	刊行会編	大阪宝文館 文教書院	1928 (昭3) 年12月15日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る
20	『伊邪那岐命』(『児童劇集下』) 日本児童文庫22)	長田秀雄	アルス	1928 (昭3) 年5月5日	神名表記が『古事記』に拠る
19	『古事記物語』 (児童図書館叢書第36篇)	田中耕耘	イデア書院	1928 (昭3) 年3月10日	

									(少年少女世界名作物語)
35	『古事記 日本古典児童版』	新屋敷幸繁	日本文学社	1939 (昭14) 年12月12日					
36	『カミサマノオハナシ』1、2	藤田美津子	三省堂	1940 (昭15) 年1月					「コジキノゴホン」とある
37	『大国主命』 (講談社の絵本169)	松村武雄ほか	大日本雄弁 会講談社	1941 (昭16) 年2月1日					物語の展開が『古事記』主体
38	『皇国の鑒め 神代の巻』	納富康之	汎洋社	1942 (昭17) 年1月1日					『古事記』をもとに『日本書紀』 で補う、とある
39	「白兔」(『建国児童劇集』)	渋沢青花	帝国教育会 出版部	1942 (昭17) 年4月5日					題材、内容共に『古事記』の話で ある
40	『少国民古事記 国のはじめ物語』	吉田禎男	輝文館	1942 (昭17) 年7月20日					
41	『日本伝説童話 海幸山幸』	木村小舟	精文堂出版 部	1942 (昭17) 年9月15日					話の展開が『古事記』の話に拠る
42	『古事記 開発社少国民版』	新屋敷幸繁	開発社	1942 (昭17) 年9月18日					
43	『古事記』(青少年日本文学)	平林治徳	至文堂	1943 (昭18) 年2月15日					
44	『カミサマトシロウサギ』	川崎大治	日本教育画 劇	1943 (昭18) 年3月15日					題材、内容が『古事記』に拠って いる
45	『大国主命』	大木雄二	児童の友社	1943 (昭18) 年4月30日					物語の展開が『古事記』主体であ る
46	『少国民の古事記』	佐藤武	文松堂書店	1943 (昭18) 年10月20日					

この調査の結果、明らかになったことのひとつは、『古事記』と題目に付けられながらも、内容に『古事記』ではない説話が引用される書籍が存在することである。逆に題目に『古事記』と付かないものの主として『古事記』に依拠し、且つ他の文献を引用する書籍も見られた。引用元の頻度については『日本書紀』が最も多く、ほかの引用元には『出雲国風土記』や、『尾張国熱田太神宮縁起』などの寺社縁起類があげられる。

『古事記』以外の文献を引用している書籍のうち、『日本書紀』を引用しているものは十六あり、それは3『日本神典古事記』、4『古事記絵ばなし日本の神様』、5『少年日本歴史読本』叢書(1、2、3)、15『神代の日本』、18『日本建国童話集』、24『建国物語集』、26『少年少女 日本建国物語』、30『日本建国物語』、32『日本神典 古事記畫譚』、35『古

事記 日本古典児童版』、36 『カミサマノオハナシ』、38 『皇国の肇め 神代の巻』、40 『少国民古事記 国のはじめ物語』、42 『古事記 開発社少国民版』、43 『古事記』、46 『少国民の古事記』である。具体的に『日本書紀』からの引用箇所を列挙すると、『天孫降臨』部分における「神勅」、神武天皇の段の「金鷄」譚、雄略天皇の段の少子部栖軽の説話、垂仁天皇の段の埴輪の由来譚、欽明天皇の段の伊企儼の説話、允恭天皇の段の真珠の説話などである。

児童向け『古事記』における『日本書紀』の引用箇所のなかでも、最も多く採録されるのは天孫降臨部分と神武天皇の段である。順に見てゆきたい。まず着目される点は、天孫降臨場面の「神勅」の言葉の追加についてであろう。『古事記』の同じ場面に「神勅」の言葉があるにもかかわらず、『日本書紀』が用いられているからである。具体的には、『古事記』でアマテラスが孫ニニギノミコトに向かって言う言葉「此の豊葦原水徳国は、汝が知らさむ国ぞと言依し賜ふ。故、命の随に天降るべし」が、『日本書紀』の言葉「葦原千五百秋瑞徳国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就きて治らせ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、天壤と無窮けむ」に置き換えられている。この『古事記』の「神勅」全文と『日本書紀』の「神勅」前半はおおよそ同内容のことを述べているため、『日本書紀』を引用する目的は、後半の「宝祚の隆えまさむこと、天壤と無窮けむ」の部分を強調することにあるだろう。この部分は児童向け『古事記』では「天つ日嗣の御位は、天地ともに榮えるであらう」(24 『建国物語集』)、「天皇の御位は、天地の続くかぎりいつまでもいつまでも榮えるであらう」(38 『皇国の肇め 神代の巻』)などと記されている。つまり、『古事記』の「神勅」のいう「日本はアマテラスの孫が治める国であるから行って統治せよ」のみに限定せず「天皇による統治は永遠である」という部分が追加されたのである。ほかに『日本書紀』の「神勅」の引用が認められる児童向け『古事記』の中で、注目される書籍は、35 『古事記 日本古典児童版』である。これは、ほぼ忠実に『古事記』原典の展開をなぞった書籍であるにもかかわらず「御神勅」という一章が設けられ、『日本書紀』の「神勅」が用いられ太字で強調されている。また、46 『少国民の古事記』も本文には創作的な記述部分が少なく、かなり原典に基づいた口語訳といえるものの、最後の章の題目が『日本書紀』の「神勅」に見られる「天壤無窮」となっている。

次に、児童向け『古事記』の神武天皇の段について見てゆきたい。『日本書紀』を引用したもののほぼすべてに、「金鷄」の説話が掲載されていることが指摘できる。「金鷄」の説話とは、神武天皇軍と敵軍が交戦中、神武天皇の弓先に金色の鷄が降り立ち、その光に幻惑された敵軍が戦意を失い、神武天皇軍が勝利するという話である。これは『日本書紀』にのみ記

され『古事記』には記されていない部分だ。この説話が引用された書籍のうち注目される書籍をあげると、まず15『神代の日本』である。著者によれば同書は『古事記』をやさしく書き改めたものであるが、『日本書紀』の説話が三編含まれており、その中の一編が「金鷄」である。18『日本建国童話集』は、話の展開がほぼすべて『古事記』に拠っているが、一部に『日本書紀』の「金色の鷄」、同垂仁天皇の段の「埴輪」などが引用されている。26『少年少女 日本建国物語』は、神代の説話は『古事記』に依拠しているが、神武天皇の段の途中から『日本書紀』の説話が入り込み、そのために神武天皇の段が長くなっている。38『皇国の肇め 神代の巻』は副題に「やさしくわかる古事記と日本書紀のものがたり」とあり、著者は、『古事記』を基に『日本書紀』で補ったこと、神武天皇の部分だけは『日本書紀』に拠ったこと、そして神名は『日本書紀』に基づいたことを記している。以上のように、児童向け『古事記』における神武天皇の段は、『古事記』にない説話や『古事記』では短い説話を、『日本書紀』の引用によつて補完、もしくは全面的に『日本書紀』と置き換えている。そして神武天皇の段のなかでも『日本書紀』中の「金鷄」は不可欠の説話として児童向け『古事記』に取り込まれている。その理由を考えてみると、アマテラスの血を引く神武天皇に「金鷄」という祥瑞があらわれたことによつて皇軍に勝利が訪れたのだ、という物語が要請されたからではないだろうか。なぜなら、神武天皇の活躍と、不思議な力（金鷄）による勝利の物語は、正統なる日本の統治者である天皇の神聖化を助長し、畏敬の念を抱かせ崇拜させるといふ効果をもたらすと考えられるからだ。

また、『日本書紀』以外の引用元として「風土記」についても見てゆきたい。引用頻度が高い説話は『出雲国風土記』の「国引き」であることが指摘できる。国が狭いために、海の向こうから土地を引つ張り、国土を広げるといふ神話だが、24『建国物語集』、36『カミサマノオハナシ』、40『少国民古事記 国のはじめ物語』がその説話を引用する。ほかの地方の「風土記」では、『播磨国風土記』におけるオホクニヌシとスクナヒコナの争い譚が5「少年日本歴史読本」叢書第二編『大國主神』に、『伊勢国風土記』逸文の神武天皇の説話が24『建国物語集』に確認される。ここでは、24『建国物語集』が二種類の「風土記」を引用しているので補足しておきたい。この書籍は「風土記」のみならず、「種まき」といふ章を立て『日本書紀』のササノヲの説話も引用している。また、ヤマトタケルの段では、寺の縁起となった伝説も採録され、同書の題目どおり「建国物語」を集めたことが窺える。本文は口語訳の域を出て、著者の独創的な描写や台詞などが相当に多く含まれている。その一例をあげると「国曳き」では、神が国を引き寄せ終えた後に「あゝ、これはよいけしきだ、よい国になつ

た。ひろくとしていゝ形だ 山もあり、海もあり、湖もあり、川もあり、何ひとつそなはらぬものゝない、すてきによい国になつた」とおよろこびになりました。」と言う台詞があるのだが、『出雲国風土記』原文には一切見られないものである。児童向け『古事記』に引用される「風土記」の説話には、神様同士の我慢比べなど内容的に長閑なものが多い。しかし、「国引き」に関していえば、国土拡張の正当化という側面を見出すことが可能である。なぜなら引き寄せる土地には「新羅の岬」が含まれているためだ。

以上のことをまとめると次のようになるだろう。児童向け『古事記』をほかの上代文献からの引用という観点でみてゆくと、『古事記』に加え『日本書紀』『風土記』などから説話を引用し挿入したものがあがるが、引用元として特に『日本書紀』の「天壤無窮の神勅」と「金鷄」の説話が目立つ。これらの引用の特徴から、児童向け『古事記』には、皇統の万世一系の概念を徹底させるということ、天皇への崇拜、忠君愛国の精神を植え付けること、といった側面が見えてくる。

これらの特徴は、イナバノシロウサギ譚といった『古事記』の一部の説話を再話した書籍や、戯曲などには認められず、通史形式の児童向け『古事記』全巻あるいは上巻（神代）にのみあらわれていることにも注意したい。これは、神々の登場からアマテラスの誕生、天孫・ニニギへの神勅と「三種の神器」の譲渡、天孫降臨、さらにニニギの曾孫・神武による東征と即位という一連の物語としての『古事記』が、日本の民族の起源や歴史を語るものとして関わっていったためと推測されるが、このことは次項でさらに詳述したい。

## 二 「天壤無窮の神勅」と「金鷄」の説話

これまでの考察で、児童向け『古事記』が『日本書紀』等からの引用により脚色され、皇統の万世一系の概念が強調されるといふ側面が見出せたことを指摘した。本項ではさらに、通史形式の児童向け『古事記』が時代状況に応じてどのような変容を遂げたのかという観点から考察をすすめる。時代的変容を帯びたと考えられる書籍を対象を絞り、その変容が見てとれるよう刊行年も記載し、時代順に見てゆく。

児童向け『古事記』における、まさに「天壤無窮の神勅」と「金鷄」の説話の引用が変化する時期がある。それは、一九二九、三〇（昭和四、五）年である。この時期までの書籍にも無論「天壤無窮の神勅」と「金鷄」は引用されていたが、多

くはそのどちらか一方であった。しかし24一九二九（昭和四）年『建国物語集』、26一九三〇（昭和五）年『少年少女日本建国物語』には、「天壤無窮の神勅」と「金鵝」両方の説話が引用され、これ以降、ほとんどの児童向け『古事記』に「天壤無窮の神勅」「金鵝」の両方が引用されてゆく。この二書は題名に「建国」が付き、建国に関する話がまとめられたものであり、当時において「建国の物語」が要請されていた様相が窺える書籍といえる。同時に二書ともに神名が『古事記』の表記で統一され、且つ話の順序、展開などからも、『古事記』を土台にしていることがわかる書籍でもある。『古事記』には本来無い「天壤無窮の神勅」「金鵝」が加わることで、「建国」がより強固なかたちで語られたといえよう。この二書の特色は、神武天皇の段に集中して『日本書紀』からの引用、挿入が多く行われていることである。たとえば『建国物語集』は下巻に十八の章が設けられているが、そのうちの三分の一にあたる六章分が神武天皇に割り当てられている。その冒頭には、神武は末子でありながら十五歳で皇太子となったこと、大昔は風習が異なるので長男が跡取りとは定まっていなかったことが解説される。そして「この神倭磐余彦命こそは、わが国の万世一系の皇室のもとをおき給うた、第一代の天皇、神武天皇であります」と続く。『日本書紀』からの引用、さらに著者の脚色を加えた神武の活躍と神聖性が大きく書き込まれ、日本の「建国」＝神武天皇として児童たちに示されている。また、国民精神、万世一系、「天壤無窮」といった言葉も本文にちりばめられている。

他文献からの引用はないが、同時代を参照すると目を引く書籍がある。29一九三〇（昭和五）年『やさしい古事記』がその一例である。ここでは、天皇を殺す、侮辱するといった言葉に伏せ字が用いられている。これは一九二八（昭和三）年六月の治安維持法改正による取締り強化に対する「自衛行為」と考えられよう。

一九三一（昭和六年）九月に満洲事変が勃発する直前の同年三月に刊行された30中田千畝『日本建国物語』はどうだろうか。「日本の国が、世界に誇るべき神の国である」など、過剰な脚色が施されている。各章の終わりに「考えねばならぬこと」という教えが列挙され、「みなさんも成人して軍人となったら、この勲章がいただけるやうな勲功を現はさねばなりません」と記す。ヤマトタケルの西征の章では「私どもも、天皇陛下に忠義の誠をささげまつり、君に叛き国を危くするようなものに対しては生命がけでこれを亡ぼし、日本の国がいつまでも栄えるやうにつとめる決心を持たねばなりません」と付言する。これらの文言は、軍国主義の風潮が高まっていく同時代思潮を映し出しているよう。

一九三七（昭和十二）年七月に盧溝橋事件が起こり、日中戦争が勃発。同年からの学校における教育体制は、国家レベル

の戦時体制の一部にはいり、すべてが「戦時体制下の教育」となっていた。さらに一九三八（昭和十三）年には国家総動員法の発令、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が通達され、児童の読み物すべてに監視の目が向けられた時代である。ここで留意したいのは、この「要綱」が「国民史的記事を取り上げること」として国史に関する読物を推奨していたために、以降の児童向け『古事記』及び『日本書紀』を含めた古典作品の制作、出版が助長されることになった事実である。「要綱」通達以降の通史形式の児童向け『古事記』には、やはりすべて『日本書紀』などの引用があり、説話のポリウムが増加した様相が指摘できるのだ。35一九三九（昭和十四）年十二月刊行『古事記 日本古典児童版』については、『古事記』原典の展開をなぞったと前述した如く、本文はほぼ忠実に『古事記』に拠っているものの「東亜永遠の謀」という章がある。『古事記』における、神武天皇の兄弟が常世の国や海原の国に向かったという説話に、現実の大陸や南の国に渡ったという解釈を施している章である。この章名には『古事記』の内容上の必然性はなく、時局の影響以外に理由は見出せない。このほか、引用にとどまらず、著者の主張や解釈が追加されて長文化した書籍も増えている。典型的な一例は、40一九四二（昭和十七）年七月刊行の『少国民古事記 国のはじめ物語』である。神武天皇の即位場面で「天照大神の御子孫にまします万世一系の天皇をいたゞき、天地と共に窮り無きわが大日本帝国の、世界に輝く国体の基は、実にこの時にはつきりと定まったのであります。なんと有難い事ではありませんか」と、そっくり著者による創作部分が挿入されている。43一九四三（昭和十八）年二月刊行の『古事記』においては、ヤマトタケルの部分が、クマソのオトタケル殺害のあとに「この物語を拜讀して思ひ起すのは大東亞戦争勃發當日、十二月八日、ハワイ眞珠灣に潜入して・・・」と続く。当時現実にあつた九軍神の活躍につなげて解説をしているのだ。ヤマトタケルの話と九軍神の話の共通点は、敵陣に密かに乗り込む、という部分のみなのだが、『古事記』の説話を戦意高揚のために教訓として利用するのである。

なお、一九四〇（昭和十五）年は「皇紀二六〇〇年」とされ、政府主催の「紀元二千六百年記念式典」をはじめとした式典が、国威高揚のために国家をあげて盛大に催された。この記念に即し、「皇紀二六〇〇年」前後には神武天皇関連を中心とした『日本書紀』に依拠する建国物語が数多く出版されている。たとえば「講談社の絵本」では『皇紀二千六百年奉祝記念 國史絵巻』（一九四〇年二月）が出版された。36『カミサマノオハナシ』もこの記念にあわせて出版された書籍であり、これは再版においても一九四二（昭和十七）年二月十一日発行と、神武天皇の即位した日とされる紀元節にあわせて出版されており興味深い。



以上のように、通史の形式をとる児童向け『古事記』を時代状況の観点から見えてゆくと、おおよそ一九二九、三十（昭和四、五）年を境に万世一系の概念の強化、戦時色の高まりの様相を確認することができる。一九三八（昭和十三）年の「要綱」通達以降には、さらに忠君愛国の精神の高揚と皇国史観の徹底という「国史」としての充実がはかられたようだ。

多くの児童に影響を与えたという観点においては、民間の出版物のみならず教室における「ベストセラー」すなわち国定教科書における掲載についても視野に含める必要があるだろう。参照事項として付言しておきたい。児童向け『古事記』への『日本書紀』からの引用箇所のうち頻出の「天壤無窮の神勅」と「金鷄」の説話が国史や国語教科書と深く関わっているためである。

まず「天壤無窮の神勅」だが、国定国史教科書においては、第一期（一九〇三年刊行）から掲載されている。小学校五年に相当する高等小学一年の最初に「第一 天照大神」として学習することになっている。国定国語教科書では第二期（一九〇九年刊行）、国定修身教科書は第四期（一九三六年刊行）に初めて登場している。次に、「金鷄」の説話だが、これは第二期国定国史教科書（一九二〇年刊行）掲載の「第二 神武天皇」で学習することになっている。国定国語教科書では第二期に「神武天皇」があり金鷄勲章の挿絵もある。国定修身教科書では、第一期（一九〇三年刊行）から掲載された。無論、両説話は国定教科書以前の検定教科書にも採録されている。しかし、たとえば一九〇〇（明治三十三年）発行の国史教科書『小学国史』には「天壤無窮の神勅」はあるが「金鷄」がない。一八九八（明治三十一年）年発行『新撰帝国史談』には「神勅」はあっても「天壤無窮」の言葉が無く、「金鷄」は説話が無いのにもかかわらず挿絵が「金鷄」の場面、というように掲載が一定していなかった。しかし一九〇三（明治三十六）年以降は国定教科書に両説話が掲載され、同一教材で一斉に学習されてきたのである。同年の就学率は、男児で九十六パーセント、女児で八十九パーセントを超している。ため、児童の多くに知られる説話となっていたのだろう。そして後述するように、教材で学んだこれらの説話を契機として、児童向け『古事記』を執筆する人物も現れたのである。

### 三 書籍の意匠が物語るもの

成年向けの書籍に比べて、児童書における特徴としてあげることのできるのは、挿絵や序文などに記される保護者へのメ

ツセージなど本文以外の読者への情報の多さであろう。『古事記』の場合、たとえば巻頭に掲載される神社の写真は、成年向けの口語訳や注釈書にも確認できるが、掲載書数やページ数の割合は、児童向け『古事記』と比較すれば、ごくわずかである。また、戦前、戦時中という刊行時期において序文が果たす機能を考えても、それは書籍の置かれた状況を窺い知る情報源として重視できよう。そこでは著者以外の学者や作家などから寄せられた文が『古事記』の位置づけを述べているため、当時の『古事記』観を窺い知ることができる。

ここでは、このような本文以外の挿絵や表紙絵、体裁などの意匠、さらに序文、付言、宣伝文などの情報から分析を試みたい。

序文や付言に記された執筆動機や目的には、児童向け『古事記』の著者の『古事記』に対する思い入れが直接に語られている。8『現代語に全譯せる古事記』では、「いろいろの意味から、とりわけ文学的に、古事記を愛していただけると信じている」と記され、著者の『古事記』への愛着が強調されている。40『少国民古事記 国のはじめ物語』の著者は、子どものころ教師から神話を聞かされ感動した、その精神を伝えたい、『古事記』に親しませたいがために執筆した、と動機を述べる。その思いは「勇武と仁愛に満ちた物語がいかにか子供の血を沸かした事であらう。私はあの頃がなつかしくてならない」という、感激と親しみに満ちた思いだ。ここに見えるのは、著者自身が『古事記』に愛着があるからこそ、児童にも与えたいという姿勢である。

また、次の書籍には、児童の年齢や理解力に合わせてよとする著者の配慮が見える。3『日本神典 古事記断』は、「子供に面白がらせようとして空想的な敷衍に過ぎた所もある」と断っており、本文には多様な脚色が認められる。一例をあげると、ヤマタノヲロチの段で「遠呂智は『はて不思議だ、肝心の娘は居なくって妙な物があるわい』と言つた風に、二三度竹垣の周囲をぐる／＼と廻つたが」と原典にはないヲロチの様子を書き込んでいる。また、児童の興味を引くよう挿絵に工夫を凝らしている。カラーの口絵があり、本文内にも、光沢のある紙を用いたカラーの挿絵が数枚あり、薄いザラ紙に赤インク刷りや、青い紙を使った挿絵も見られる。多くは無色の紙に黒インクを用いているが、ところどころに紙やインクの色が異なる挿絵があるのは、児童の興味を引くための様々な工夫である。4『古事記絵ばなし日本の神様』は、書名が示すとおり絵が多量に用いられている。全ページにわたって見開きの右ページに本文、左ページは全面が絵、こ





図2 『古事記』口絵

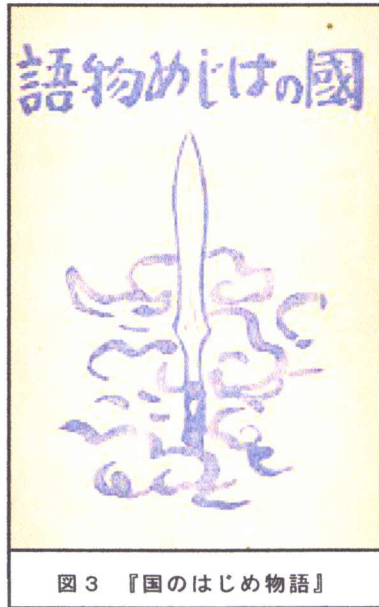


図3 『国のはじめ物語』



図4 『少国民の古事記』

次に、表紙絵や口絵に着目してみよう。12一九二四（大正十三）年『日本神話古事記物語』と13一九二五（大正十四）年『古事記』の表紙及び口絵（図2）はオホクニヌシが傷ついた白兔に声をかけている場面という、温かみのある絵であった。しかし、40一九四二（昭和十七）年『少国民古事記 国のはじめ物語』になると内表紙に剣の絵（図3）、42同年『古事記 開発社少国民版』では表紙に武人の絵、46一九四三（昭和十八）年『少国民の古事記』では、内表紙に太陽と桜が描かれた（図4）。ほかに散る桜の花びらなど、戦争と日本の象徴を用いて愛国心を涵養するテーマが選ばれ、表紙や扉絵を飾っている。

ほかに、注目すべき作品について触れておきたい。18『日本建国童話集』でまず目を引くのは、天皇后、各宮家が台覧したことを記した巻頭のページである。学校で“御真影”に拝礼することが日常であった児童たちにとっては、「天皇が読まれたのだ」という意識をもって、威儀を正してページをめくることが想定される。皇室に対する尊敬と、自分も同じ本を読むのだという一体感が、その読書を後押ししている。巻末には系図が掲載され、アマテラスから一続きになった皇統を確認できる。

さらにもう一冊。36『カミサマノオハナシ』は、文がすべてカタカナで、幼年向けの作品である。挿絵が多く、その絵が当時の尋常小学校四年生、五年生による作品であることが記されている。42『古事記 開発社少国民版』に、この書籍についての子どもたちの反応が載せられている。国民学校一年の子どもが、本屋で『カミサマノオハナシ』を見つけたから買って欲しいとせがむので買い与えたところ、夢中になって読み寝床まで持って放さないというエピソードだ。また、戦後になってこの本を挿絵と共に懐かしく思い出しているのは、詩人の吉行理恵である。「『かみさまのおはなし』につけられていた素朴で美しい挿絵の中の、真紅な長い



図5 『カミサマノオハナシ』（ソノー）のアマテラス

服を着て、ながい玉のくびかざりをかけた、黒い長い髪の天照大御神の姿」と思い出しているが、就学前に母が読み聞かせてくれたらしい。書籍を確認すると、アマテラスの姿は吉行の説明に即しており（図5）、当時の読書においての挿絵の果たした効果の大きさに驚かされる。



以上述べたように、通史形式の児童向け『古事記』には、『日本書紀』などからの引用が施されたものがあり、その題材はアマテラスによる「天壤無窮の神勅」と、「金鷄」の説話を中心とした神武天皇の部分を用いた箇所が多いと確認された。さらに、時代状況に対応した変容が顕著に認められ、その諸相を辿った。『古事記』に「天壤無窮の神勅」と「金鷄」が加えられ併記されることよって、天孫降臨の場面と神武天皇の物語はより一層の威光を放つことになったのである。このように万世一系の概念の強化がはかられ、戦時色が高まった時期は一九二九、三〇（昭和四、五）年頃であると考えられた。いくつかの児童向け『古事記』の挿絵や序文からも、この事実を裏付ける様相が見受けられた。

戦後、皇国史観が否定され、その教化の一端を担ったとされる『古事記』は否定に近い扱いを受けることとなる。久保喬は「戦後それも十年近くの間は、『日本神話』に関する本は一冊も現れなかった」と記す。児童向け『古事記』もまた「新しい書籍」としては刊行されなかったが、戦前版を改訂した書籍が戦後間もなく刊行されている。それは鈴木三重吉の『古事記物語』（小山書店 一九四八年十月）である。後年には『カミサマノオハナシ』も改訂再版<sup>15</sup>されている。戦時色を払拭するために構成や内容に手が加えられたが、その変容と受容を辿ることが、私たちにとっての『古事記』の意味について考察する次なる課題となる。

1 『古事記』『日本書紀』の訓読文は小学館『新編日本古典文学全集』による。

2 ほか二編は「海底の白珠」「伊企儼の髻」。

3 四国遍路における第七十九番札所、高照院（香川県坂出市）の縁起による。

4 『建国物語集』には、前項で述べたように、スサノヲやヤマトタケルの段に『古事記』以外の文献からの引用が見られる。

5 「東亜永遠」という用語は、一九三八（昭和十三）年十一月、近衛内閣による発表「東亜新秩序建設声明」に見える。

「帝国の冀望する所は、東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り、今次征戦究極の目的亦此に存す」。また、開戦の詔書（一九四一年十二月八日）の末尾にもこの用語が確認される。「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亜永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝国ノ光荣ヲ保全セムコトヲ期ス」

6 真珠湾攻撃の際、特殊潜航艇に乗り出撃し、戦死した九人のこと。九人は二階級特進となり、戦意高揚のため大々的に宣伝された。

7 ほかに、香川頼彦『神の国日本 肇国物語』（文友堂、一九三九年十二月）には「皇紀二千六百年記念出版」とある。豊国年亮『日本ヨイ国 建国絵本』（広文社、一九四〇年四月）は裏表紙に「紀元二千六百年奉祝国民歌」の歌詞が載る。蘆谷蘆村『建国物語 神の国日本』（文昭社、一九四〇年二月）では「この記念すべき年を中心にして、わが国は、みだれにみだれた東亜をつくり直し、新しい東亜を建設する大きな仕事にとりかかり、神武天皇の、御即位の勅語に仰せ出だされた、八紘一宇の大理想を恢弘する時機にめぐりあはせてをります。私たち国民は、この大きな仕事をなしとげるため、それぞれ力をささげなければなりません。」と戦意高揚を謳う。

8 修身教科書の第一期から三期は忠君愛国、万世一系は説かれていたが「天壤無窮の神勅」そのものの掲載はなかった。第四期、巻五・第一課「我が国」で初めて「天壤無窮の神勅」の書き下し文がそのまま掲載された。なお、この巻は巻頭に教育勅語が掲げられている。

9 文部省『学制百年史』（ぎょうせい 一九七二年十月）第一編第二章第三節二「就学率の上昇」表11「学齢児童の就学率の推移」による。

10 当時の『古事記』の外国語訳には英訳、ドイツ語訳がある。Basil Hall Chamberlain『Kojiki or Records of ancient matters.』一八八三年（英訳古事記）、Dr. Florenz『Kojiki oder "Geschichte der Begebenheiten im Altertum"』一九一九年（ドイツ語訳）

11 松村武雄は46『少国民の古事記』に序を寄せている。「世の少国民たちが、この書を通して遠い祖先の生活や精神の逞しさ尊さを感じ、進んで自らが国家・皇室のために一身をささげ盡す熱意を燃やし立てることを切に期待する」。五十嵐力は38『皇国の肇め 神代の巻』に「教育の基礎は、幼い国民の精神を、皇国の臣民たるに適するやうに固め成すにある」と序に記している。

12 「子供版古事記『かみさまのおはなし』を、母が私たちに読んでくれたのは、戦争がはげしくなる前のことでした。」吉行理恵「天照大御神」（『浄土宗新聞』第二十六号（二面）、一九六九年一月十日）。小学一年の時に戦争が終わったとある。記事の執筆の二年ほど前に、疎開先であった神奈川県片瀬の海岸を訪れた際「天照大御神の姿が浮かんで」きたという。13 一九四〇（昭和十五）年一月発行の初版は戦災によって消失し、現存の書籍を確認できないため、一九四二（昭和十七）年二月発行の三省堂版（大阪国際児童文学館所蔵）で確認した。図5は一九四二年版である。

14 久保喬「日本神話再論―現代文学の視点で―」（『日本児童文学』三一二号、一九八一年二月号）

15 『カミサマノオハナシ』一、二巻は、新かな遣いの『につぼんのしんわ かみさまのおはなし』三巻本（教学研究社、一九六六年十一月）として改訂再版され、この版がさらに一九八六（昭和六十一）年、二〇〇二（平成十四）年に再版された。16 一九四八年発行の三重吉『古事記物語』は「序」と「朝鮮征伐」という章が削除された。これは、一九五二年四月まで占領政策がとられており、検閲指針に「神国日本の宣伝」「朝鮮人に対する批判」があったための削除と考えられる。しかし、占領が解除された年の十二月にポプラ社から発行された際には「朝鮮征伐」が復活、「序」は一部のみだが掲載された。政策に沿うかたちで出版されていた様相が窺える。また、戦後の『カミサマノオハナシ』では、著者による後書きから「ニッポンハ カミノ クニ」等の文言が消え、内容もアマテラスによるオホヤシマ支配の使いを出す場面がアマテラスの「里帰り」のための使いに変更され、国譲りが無くなるなど大幅に改変された。

### 第三節 鈴木三重吉『古事記物語』と渋川玄耳『三體古事記』

#### 一 研究領域の問題点

鈴木三重吉『古事記物語』は、一九二〇（大正九）年の発刊以来、昭和、平成を通じて数度にわたり刊行、増刷、二〇〇五（平成十七）年には特殊紙を用いた文庫本として出版されるなど長期間に渡って販売され続けた作品であり、同時に『古事記』の口語訳として児童にも大人にも広範囲に受容された著名な作品である。『古事記物語』は、発行後に『古事記』を現代語訳した様々な書物が多く出版され始めた事実が確認されること<sup>3</sup>、それらのいくつかが『古事記物語』を模倣したものと見受けられることから、近代における『古事記』享受史において重要な意味をもつといえるだろう。

また、三重吉にとつても代表作の一つとしての意識があつたようだ。三重吉作とされる童話については、一般に創作と翻訳・再話の二種類に大別されるが、創作童話は数編のみで、その殆どは海外の短編童話の翻訳もしくは再話である。したがって長編作品である点、日本の古典作品を原典としている点で『古事記物語』は三重吉童話の特異作といえよう。加えて、後に三重吉が自ら編集した『少年文学集』<sup>4</sup>にこの作品を自選しているのである。

それでは『古事記物語』を執筆する際、三重吉はどのような（古事記）<sup>5</sup>を参照したのだろうか。この問題は、執筆当時の『古事記』の受容状況の検証と同時に、『古事記物語』の作品研究や『古事記物語』以後の各種児童向け『古事記』への多大な影響を考慮する際、欠かせない視点である。

だが、この作品についての先行研究はほとんど進展していない。『古事記』研究史上では『古事記物語』は研究の対象となっておらず、わずかに研究史年表などにおいて書名等の記載が見受けられる程度である<sup>6</sup>。『古事記』研究の場においては、『古事記』の近現代における享受の研究が、成立論、作品論等といった『古事記』研究の主流からは外れるために取り組まれることがほとんどなく、また、平易な口語体である『古事記物語』は「子供向け」とされ考察対象として着目されることがないためなのか、研究対象の視野から漏れてきた。



半面、児童文学研究者によって、『古事記物語』は童話作家としての三重吉の重要な一作品として論じられてきた。その最も早い論者は恩田逸夫で、『古事記物語』を「彼の全童話の頂点に位置する代表作」とし、執筆に至る過程について論じた。三重吉が「日本的なものに愛着する心情」を持つことを検証し、この理由を再話対象に選んだ一因と位置づけた。次いで瀬田貞二は三重吉の『古事記』観に言及し、「この神話の訳（むしろ再話）は、じつのところ三重吉の最も重んずるところ」と述べた。桑原三郎は「最も代表的な子供向きの古事記の再話」とし、『古事記』を再話対象として選んだ三重吉の、文学者としての目の確かさに言及した。続橋達雄は、恩田、瀬田、桑原の研究成果を踏まえつつ、作品をめぐる諸問題を提起しており、『古事記物語』の典拠に関し最も踏み込んだ。宮崎芳彦は、編集者・出版事業家としての三重吉という観点から、売れ行きや出版状況について述べた。これら児童文学研究者たちの論考は一定の成果をもたらしているが、その一方で研究領域ゆえの限界も見える。たとえば、『古事記』原典との比較のような、上代文学研究者であれば着目する考察はなされない。研究領域外にあたる『古事記』本文や諸本についての考察等を進めることには困難がつきまどっていたのではないかと考えられる。いわば、上代文学研究と児童文学研究の狭間で、『古事記物語』は研究対象として掘り下げることがなされないままだったと考えられるだろう。

『古事記物語』の研究を推進するためには、第一段階として三重吉が参照した（古事記）を探り、『古事記物語』の享受における影響を考える必要があるだろう。本節では、三重吉が参照した（古事記）の特定を試み、さらに三重吉の『古事記物語』執筆時の状況について触れたい。

本節の手順は、以下の通りである。まず、『古事記物語』の参照本についての先行研究を検証し、その問題点を確認する。そのうえで『古事記物語』のもつ特徴を有している（古事記）の選択肢を広げ、『古事記物語』参照本の再検討を試みる。その手法として書籍の構成や漢字の異同を比較する方法を用いる。次に特定した参照本について出版版数や新聞広告等を手がかりに当時の入手状況を探る。最後に、三重吉と、参照本の著者・渋川玄耳との接点を、人物網およびその著作物から触れてゆく。

『古事記物語』は三重吉による長文の「序」が掲載され、そこには『古事記』への賞賛と「天皇の神聖視」に関する文言がある。たとえば「われく日本人」が「その國民的生活の最初の出立から、天皇と、天皇のお位と、すべての祖先とを、いかに絶對の神聖として貴んで来たか」を『古事記』は告げているとする。また『古事記』に語られている日本人は「支那や印度の思想なぞが一寸も這入つてゐない、生れたまゝの純日本人である」、『日本書紀』は「古事記にある同じ事實を支那人たちの思想を通して潤飾して書いてゐる場が合非常に多い」といった文言には、本居宣長『古事記伝』の影響が窺えて興味深い。この「序」には『古事記』の概略も記され、倭建命の段の原文と書き下し文の一部が引用されている。そのほか本文において目に付く特徴としては、神名や人名など固有名詞の一部に『日本書紀』の表記が用いられていることが挙げられる。この『日本書紀』の表記、また後述する誤植という点からも『古事記物語』の研究には『古事記』との本文の比較は欠かせない。

三重吉の参照本特定のためには、本文異同の検証という手法が最も有効だろう。そのため、当時出版されていた各種の（古事記）と『古事記物語』の使用語句や漢字の用法の比較を行う。

まず『古事記物語』上「序」に引用されている『古事記』の原文の異同を確認したい。

爾其后名弟橘比賣命白之。妾易御子入海中。（以下略）

（圈点田中）

『校本古事記』<sup>12</sup>では、「入海中」の「中」字に有無の異同が見られる。兼永筆本、寛永版本、『鼈頭古事記』（延佳本）、本居宣長『古事記伝』さらに『訂正古訓古事記』が「中」字のある諸本である。明治後半から大正にかけて出版された『古事記』注釈書や解説書の多くが『古事記伝』『訂正古訓古事記』を底本としているため、<sup>13</sup>三重吉の『古事記物語』もまた、宣長の版本自体か、これを底本とした書物が参照されたと考えられる。

三重吉参照本が宣長本の影響下にあることは、前述の引用部分以外の使用文字からも指摘できる。それは第四話「むかでの室、蛇の室」の章にある「蚌貝媛」という固有名詞の「蚌」という特殊な文字によってである。『校本古事記』によれば

「蚶貝媛」の表記の諸本はない。『古事記伝』『訂正古訓古事記』の本文については「蟹貝比賣」である。その一方で注意しなければならぬのは、宣長が『古事記伝』において、「蟹は、蚶を量と作るを誤れるものなり」と割注し、「蟹」を「蚶」であると定めていることである。つまり、『古事記伝』を底本とした注釈書の類には、「蚶」を用いている書物があることになる。したがって三重吉の参照本は、この用例からも宣長の『古事記伝』あるいは、この系統の書物だといえる。

先行研究において三重吉の参照本について言及しているのは続橋達雄<sup>14</sup>であり、次に挙げる四冊を候補本として紹介している。しかし、「それぞれ現物にあたって三重吉のものと比較する必要がある」としながら、現物の確認作業はおいたまま筆を止めている。

続橋は、明治末期から刊行された（古事記）に的を絞り、山田孝雄校閲『古事記諸本解題』<sup>15</sup>と上田正昭他『「古事記」・日本書紀総覧』<sup>16</sup>から、池辺義象編『古事記通釈』（啓成社 一九一一年二月）、幸田成友訓註『冠註古事記読本』（至誠堂 一九一一年十月）、校註日本文学叢書（七）『古事記・大鏡・水鏡』（広文庫刊行会 一九一八年十二月）、本居豊穎・井上頼圀・上田萬年『校定古事記』（皇典講究所 一九一一年四月）を候補として挙げた。だが、『古事記諸本解題』、『古事記』の研究史を調査した『古事記評釈』<sup>17</sup>、『古事記伝の研究』<sup>18</sup>、『古事記研究史』<sup>19</sup>等を繙けば、仮に続橋の抽出した同範囲の期間に限っても二十冊を超える書籍が確認されることがわかる。<sup>20</sup>

ここで三重吉が参照した本の条件を挙げたい。次の三点を指摘することができるだろう。①原文と書き下しの記載があること。これは、『古事記物語』「序」に原文と書き下し文の引用があることから必須条件である。②「中」字があり、「蚶」字が用いられていること。これは、「序」の原文引用部分の表記と本文中の特殊な漢字表記から挙げられる条件である。③一九一七（大正六）年十月以前に発行されていること。これについては、雑誌『赤い鳥』への「古事記物語」掲載開始は一九一九（大正八）年七月であるものの、三重吉が『古事記』を題材として初めて再話として採り上げたのは、一九一七（大正六）年十月発行の世界童話集第五編『海のお宮』に収められた「海のお宮」であるためである。

これらの条件に従って、続橋の挙げた候補の四冊について個別に検証したい。

池辺義象編『古事記通釈』は、一九一一年（明治四十四）年二月発行。返点付きの原文にカタカナの訓があり、この本文の後に語注がある。ひらがな交じりの書き下し文はない。訓は『古訓古事記』に従い、註は『古事記伝』を基本とし他の諸書を参照している。「入海中」部分は、「入海中」である。また本文は「蚶」ではなく「蟹」となっており、語注では「蟹は

鮎の誤なるべし」となっている<sup>21</sup>。原文はあるが書き下し文がなく、三重吉が用いた「蚶」の字が見られないことから、本書は三重吉の参照として当てはまらない。

幸田成友訓註『冠註古事記読本』は、一九一一年（明治四十四）年十月発行。ひらがなの書き下し文と欄外注記という構成で、巻末に索引がある。固有名詞や難しい漢字にだけカタカナの振り仮名（ルビ）がある。訓と注は『古事記伝』による。原文がないので「中」字の有無は不明である。本文で「蟹」字が用いられており、注に「蟹は蚶の誤なるべし」と記されているが、原文がないため、この書物も三重吉の参照本としての条件を満たしていない。

『古事記・大鏡・水鏡』は、一九一八年（大正七）年十二月発行。ひらがなの書き下し文と上欄に注記という構成。『古訓古事記』をもとに多少修正を加えたもの。「中」は「海中うみに入りなむ」とあり「蚶貝かまがひ比売」と表記されているがこれも原文がない。発行年もまた参照本としてそぐわないため、これも異なる。

本居豊穎・井上頼圀・上田萬年『校定古事記』（皇典講究所）は、一九一一年（明治四十四）年四月発行。原文にカタカナの訓、上欄に注。注は漢字カタカナ交じり文である。ひらがなの書き下し文はない。訓は主として『古訓古事記』によっている。「入海中」であり「中」字があるが、「蚶」は「蟹」と記されており、書き下し文がないことから、これも参照本ではない。

以上のことから、上記の四冊は三重吉参照本として特定しがたいといえるだろう。

### 三 神名の表記、誤植における共通点

三重吉の引用した「序」の「妾易御子入海中<sup>22</sup>」と、本文中の「蚶」に注目し、さらに一九一七（大正六）年十月までに刊行された各種の（古事記）のなかで、先に挙げた条件に当てはまるものを絞り込むと、渋川玄耳『三體古事記』（有楽社一九一一年三月）と、塚本哲三校訂『古事記・祝詞・風土記（有朋堂文庫）』（有朋堂書店一九一五年八月）の二書が該当する。両書とも、宣長の本を底本とする原文と、ひらがな交じり書き下し文を併せ持つ。

『三體古事記』はその名の示すとおり文章を原文、古訓（書き下し文）、俗語（現代語訳）の三体に分けて記したものである。玄耳の「序」によれば同書は「普通教育程度の者」が『古事記』を読めるように俗語訳を行ない「又、少年の閲讀す

べき場合を慮つて「俗語訳に限り省略・変更を加えた箇所がある。前項で考察した特殊な文字については、原文は「蟹」、古訓と俗語が「蚶」となっている。一方の有朋堂文庫本は、原文、書き下し文にひらがなのルビ、上欄に語釈という構成である。『古事記』『祝詞』『風土記』が収められ、本書のように上代文献の数種類を一冊に纏めた体裁は大正時代から現れるが、その嚆矢の一つである。

二種の候補本をさらに絞り込むためには、さらに別の条件を追加する必要があるが、その前に三重吉の「執拗なまでの推敲癖」<sup>23</sup>について確認しておきたい。三重吉は、推敲に推敲を重ねて執筆したうえ、書籍に纏めるときにも校正し、版を重ねるたびに手を入れた。たとえば「三重吉は、それが新聞もしくは雑誌に載ると、また必ずそれに筆を入れる。纏めて単行本にする時にも、また訂正する。更にそれが別な形で単行される時にも、更に朱を加へ」<sup>24</sup>という。このことを踏まえた上で『赤い鳥』版から『古事記物語』単行本への「校正」を検証すると、第一話冒頭に「そのつぎには高皇産霊神、神産霊神のお二方<sup>ふたかた</sup>がお生れ<sup>うま</sup>になりました。」の一文を加えたほか、同様の追加や文の変更、また句読点や改行の位置の変更が目立つのがわかる。『赤い鳥』版では「天照大神」と誤植が確認されるが、『古事記物語』では「天照大神」<sup>あまてらすおほかみ</sup>に訂正されている。『古事記物語』下巻の「序」では、発刊済みの上巻の訂正箇所を自ら指摘しており、この訂正は次の一九二八（昭和三）年発行『少年文学集』所収版で行われている。さらに、『古事記物語』の書名を変えて一九三〇（昭和五）年に発刊された『日本建國物語』<sup>26</sup>では神名や人名などを、圏点付きひらがなに変えている。つまり三重吉は『古事記物語』においても例外なく、作品を入念に校正し続けている。

以上のことを踏まえて、『古事記物語』におけるある特徴に着目したい。それは、神名、人名、地名の表記についてである。神名の例を挙げると、第一話「女神の死」については、雑誌『赤い鳥』版では「伊弉諾命」「伊弉冉命」と表記され、『古事記物語』上では「伊弉諾神」「伊弉冉神」である。神と命の異同はあるが、「いざなぎ、いざなみ」の部分は同じ漢字である。しかしこれは『古事記』の表記ではない。『古事記』では、「伊邪那岐」「伊邪那美」あるいは「伊耶那岐」「伊耶那美」と表記され、他の例はない。三重吉の表記は、『日本書紀』の表記なのである。他にも『古事記』では「高御産巢日神」と記すところを、三重吉は「高皇産霊神」としている。『日本書紀』と『古事記』の表記は混在されており、<sup>27</sup>一見この神名等の表記の仕方に法則性は見受けられないように思われる。

しかし『赤い鳥』版の神名、人名、地名の表記で使用される『日本書紀』の表記の仕方は、実は渋川玄耳『三體古事記』

の俗語訳の表記とほぼ一致しているのである。先述の「伊弉諾」「伊弉冉」の箇所も、『三體古事記』俗語訳は同じく「伊弉諾」「伊弉冉」である。ほかに『赤い鳥』版第七話「毒の大熊」の「長髓彦」が『日本書紀』表記であり、『三體古事記』俗語訳も同じである。また、第六話の「木花咲耶比売」、第十三話の「岩野媛」などの例は『三體古事記』に即している。そしてこのような『日本書紀』表記は、宣長『古訓古事記』、『古事記伝』を底本とした原文と書き下し文を掲載する、有朋堂文庫本には確認されない。

さらに、同一神名の異同の仕方が同じなのである。『赤い鳥』版第一話で「須佐之男命」と『古事記』表記をしている部分では『三體古事記』も「須佐之男の命」となっているが、第二話「天の岩屋」で「素盞鳴命」と『日本書紀』表記に変更されているときには『三體古事記』も「素盞鳴の命」となっている。

「誤植」にも目を留めたい。『赤い鳥』版の第九話「唾の皇子」に登場する「曙立王」という語句から『三體古事記』との接点が根拠付けられるのである。漢字には異同がなく、『古事記』の表記であり問題はないが、訓みが奇妙である。ここは「あけたつのみこ」が正しい。ルビの誤植も想定されるが、『三體古事記』の該当箇所を確認すると、以下のようなのである。

〈前略〉 又占つた處が、曙立の王が其の占ひに當つた。

「あけたつ」の「あ」が誤植で上の「ところ」に付いており、肝心の「曙立」には一字分あいて「けたつ」と振られて明らかな誤植が確認される。三重吉はこの「けたつ」を見て「曙立」を「けたつ」と誤ったのではないだろうか。『古訓古事記』あるいは他の『古事記』研究書類に目を通していけば、「曙立」を「けたつ」と訓むことは、まず考えられないだめ、三重吉は『三體古事記』の誤植を受け継いで『赤い鳥』版に掲載していると考えられるのだ。

以上、神名等の表記の仕方、誤植の点から『古事記物語』は『三體古事記』の俗語訳を見ながら再話を進めたと推察されよう。

この渋川玄耳『三體古事記』が、表記の面において三重吉の参照本であるとしても、当時入手しやすい状況にあったかを考慮すべきである。したがってここでは『三體古事記』の大正・昭和期における出版状況とその新聞広告について探る。

まずは出版情報を確認する。初版は一九一一年（明治四十四）年三月、有楽堂からの出版<sup>28</sup>である。一九一五年（大正四）年一月に正確堂から再版として発行されている。一方で一九二〇（大正九）年四月、誠文堂発行の訂正九版<sup>30</sup>の奥付には、一九一一年（明治四十四）年十月再版、一九一二年（明治四十五）年九月三版、一九一五年（大正四）年一月四版、一九一六年（大正五）年六月五版、一九一七年（大正六）年十一月訂正六版、一九一八年（大正七）年二月訂正七版、一九一九（大正八）年十一月訂正八版とある。さらに昭和に入っても発行は続き、一九三〇（昭和五）年九月、金正堂から改版発行されている<sup>31</sup>。また、一九四〇（昭和十五）年九月にも誠文堂新光社から発行されている<sup>32</sup>。一九一五年（大正四）年から毎年のように版を重ねているため、需要があったのだろう。たとえば一九一三年（大正二）年十一月に初版が出版された（古事記）の一つ『立国根本之精神』<sup>33</sup>が、一九一四年（大正三）年八月の再版以降、重版された形跡がないという事実と比較しても『三體古事記』の需要が突出していたことは明らかだろう。

しかし、このように幾度も重版されているとしても、『古事記』関連書は他にも多数あり、この『三體古事記』だけが際立って刊行されていたと即断するにはいまだ留保が必要だ。より詳しい出版状況を窺うには、前述のような『三體古事記』自体が記す重版情報に加えて、別の媒体からの情報に目を向ける必要がある。ここでは、当時の三重吉が新聞や雑誌に多くの作品を発表し、<sup>34</sup> 載れば読んで朱を加えていたことから、書物の新刊案内や出版情報が掲載された新聞広告を調査した。

まず三重吉が多く寄稿した『読売新聞』には『三體古事記』の広告が数多く見受けられる。一九一五年（大正四）年九月一日、朝刊一面に「訂正再版發賣」<sup>35</sup>。以降、同年九月、一九一六年（大正五）年一月にも同種の単独広告が掲載、三月、六月、十月には、玄耳の新著『故郷他郷』（誠文堂 一九一六年三月）などとの同時掲載広告がある<sup>36</sup>。十二月一日には『三體古事記』「訂正四版」が単独掲載された。さらに、一九一八年（大正七）年一月二十四日、他の著書とともに「訂正増補六版」の広告文。とりわけ三重吉が「海のお宮」を執筆する直前にあたる一九一五年（大正四）年と一九一六年（大正五）年に『三體古事記』の宣伝広告が集中しているのが確認される<sup>37</sup>。

次に『東京朝日新聞』では、一九一五年（大正四）年は六月二十九日、八月十六日の二度、玄耳の『日本世界見物』の広告と共に「訂正増補」として掲載。一九一六年（大正五）年には三度、一九一七年（大正六）年から一九一九（大正八）年は各年

一度ずつ掲載され、『読売新聞』同様、一九一五（大正四）年と一九一六（大正五）年に集中していることが確認される。なお、三重吉関連として補足すると、雑誌『赤い鳥』の宣伝広告は、創刊号発刊の前月にあたる一九一八（大正七）年六月十五日をはじめ、ほぼ毎月掲載されている。

『大阪朝日新聞』では、一九一五（大正四）年七月十四日の八面で、玄耳の『日本世界見物』との併記で「訂正増補」として掲載。同年八月二十一日七面に、また一九一六（大正五）年一月十四日（十三日夕刊）三面には『三體古事記』単独での「訂正再版」広告も確認できる。<sup>39</sup>

以上のことから、三重吉が「海のお宮」「古事記物語」の執筆を開始する一九一七（大正六）年十月以前である一九一五（大正四）年と一九一六（大正五）年に『三體古事記』が重版し、なお且つ各紙の宣伝広告が集中していたことが認められ、このことは三重吉の入手手段として『三體古事記』が身近な場所にあったことがわかる。

## 五 鈴木三重吉と渋川玄耳

三重吉と玄耳、二人を結ぶ線がある。三重吉の師、夏目漱石である。

三重吉と漱石の交流については論を俟たないだろう。三重吉は漱石門下として活躍したが、「海のお宮」執筆前の一九一五、六（大正四、五）年頃には、小説家としては筆を折っている。一九一三（大正二）年末、「桑の實」以来ぐつたりして一寸も創作に氣が乗らなくなつた三重吉は、書店を出すことを計画<sup>40</sup>、一九一四（大正三）年から出版事業を開始していた。この事業では最初に「現代名作集」二十編を企画し、その第一編に漱石の作品を選定している。また、一九一五（大正四）年二月から自身の全作集を発行しており、この全作集全十三巻の背字は漱石による。後に「お伽話」の出版も計画<sup>41</sup>し、一九一六（大正五）年十二月に童話集『湖水の女』を刊行した。

一方、玄耳は東京朝日新聞社の初代社会部部长であった。一九〇七（明治四十）年三月に社会部部长として入社後まもなく、漱石が朝日新聞社に入社する。そもそも漱石の入社には、渋川玄耳が招請に尽力したようだ<sup>42</sup>。二人の出会い、互いが熊本に赴任していた一八九九（明治三十二）年頃にまで遡ることができる<sup>43</sup>。玄耳は明治末から大正初にかけて、「藪野椋十」の筆名も用いて随筆や見聞録をいくつか記しており、前項で前述した『東京朝日新聞』一九一五（大正四）年八月十六日と



『大阪朝日新聞』一九一五（大正四）年八月二十一日の『三體古事記』の広告は、見聞録『日本世界見物』第四版の宣伝の中に含まれている。この広告文には「夏目漱石と本書 漱石氏序文の一節（以下略）」<sup>45</sup>とあり、玄耳の著書に漱石が序を寄せていたことが知れる。なお、『三體古事記』の広告が集中する一九一五（大正四）年から一九一六（大正五）年には、玄耳はすでに朝日新聞社を退社しており、夏目漱石は「道草」や「明暗」を連載している。

一九一一年（明治四十四）年三月に『三體古事記』を出版した渋川玄耳は、これ以前にも『古事記』関連の著書を記していた。『日本神典 古事記噺』（精美堂 一九一〇年十月）と『古事記絵ばなし 日本の神様』（有楽社 一九一一年二月）である。これらは両書ともに児童向けの書籍であり、『日本神典 古事記噺』は、はしがきによれば「古事記中の説話の殆ど全部を取って、平易なる口語に譯し」たもので、挿絵の多い作品である。先行研究においては、『古事記』全巻を児童向けに再話したのは三重吉が最初とされているが、幾多ある（古事記）の中でも、児童を対象に全編を通して口語訳したのは、玄耳が最初といえるだろう。<sup>47</sup>また『日本の神様』は、見開きの右頁に文章、左頁全面に絵が描かれ、見開きで一話完結というスタイルをとり、絵本を思わせる体裁である。

三重吉は、『古事記物語』の「序」に「古事記」の中のお話はすつかり再話し盡され「平俗な言葉と、普通の語法としか使はないでかき上げ」たと記すが、これは前述した玄耳の「古事記中の説話の殆ど全部を取って、平易なる口語に譯し」という表現に似通い、興味深いだろう。三重吉はまた、「ゆるい意味で「古事記」そのもの、口語譯として迎えられても、お互に差しつかへはない」と記しており、同様の文言は雑誌『赤い鳥』の巻末、『古事記物語』宣伝のための「社告」欄にも掲載されている。<sup>48</sup>三重吉は、『古事記』を「再話」するにあたって、元来「少年の閲読すべき場合を慮つて」、「省略又は変更を加へ」て書いた玄耳の『三體古事記』——特に俗語Ⅱ口語訳部分——を参照していた。そうであるならば三重吉は、『古事記』の「再話の再話」をしたといえよう。『古事記物語』が後続する児童向け『古事記』に与えた影響を考えていくうえで、この事実は重要視されよう。

## 六 執筆当時の鈴木三重吉

最後に、三重吉の『古事記物語』執筆時の状況と、玄耳の『三體古事記』を参照した理由について言及したい。『赤い鳥』

への連載開始前の三重吉は、毎号の『赤い鳥』で童話や少年少女劇などを執筆し、ほかに童話と綴り方の選評、作家への執筆依頼など、作家・主催者・編集者としての仕事に忙殺されていた。小宮豊隆や藤本勇らに「一人で七篇も書き、十日間毎日、午から晩迄活版屋に出張、校正、ずるぶん弱<sup>49</sup>」り、「三號も一人で編輯、ヤリ切れない。多忙<sup>50</sup>」、例により「多忙」と書き送っている。また、「古事記物語」連載直前は『赤い鳥』刊行一周年を控え、「七月號は第三卷第一號とし、多少、排列、裝飾をかへて紀念號にしたい<sup>51</sup>」と計画、まさに多忙を極めていた。

三重吉はまた、自身が「いゝ」「おもしろい」とする投稿作品がない場合や、依頼した作品が届かない場合には代作をし、「月々四十頁も」<sup>53</sup>書いて紙面を埋めていた事情から、再話の材料を常に求め、大量に本を購入していたことが知られる<sup>54</sup>。在米の小池恭にも「The Junior Classics」の一冊を送るよう依頼している<sup>55</sup>ことから、創作はせずに、自身が担当する童話に加えて代作も行なう三重吉にとって、素材の入手は必須の作業であった。

以上のような状況の中で、三重吉は『古事記』の再話を開始したのである。三重吉が当時の主流である『古訓古事記』ではなく、『三體古事記』を選択し、参照した理由として、『三體古事記』の簡便さという長所が指摘できよう。研究者であれば内容を理解し難い『古訓古事記』に比べ、原文に加え書き下し文と口語訳があるため、口語訳をする為<sup>56</sup>に他の諸注釈書に当たる必要がない『三體古事記』の簡便さは好都合であったと思われる。当時『古事記』の注釈書は数多く見られたが、原文と口語訳を併せ持つ『古事記』はなかった。その意味で『三體古事記』は突出している。

また、冊数とサイズを比較しても、和綴じ三冊本『古訓古事記』に対して『三體古事記』は目次も整然とした一冊本であり、一回り小さい。つまり、時間的制約の中、簡便で小さく纏まったテキスト『三體古事記』を参照することは三重吉にとって格段に効率的だったと容易に推測できる。

三重吉が『古事記』を再話対象に選んだ動機については、これまで「古事記の飾らない、素朴な味いを好んでいたから」などと論じられてきた<sup>57</sup>。しかし、『古事記』の文体や性格―素朴さや素直さ―に注目していたという先行諸説には多少の疑問が残る。なぜなら三重吉は、単行本として『古事記物語』を刊行した際にはその「序」に『古事記』が「表現そのもの、偉大な眞實と簡朴とに於て、文學上それ自身が貴い作篇」などとして『古事記』を高く評価しているものの、『赤い鳥』連載中においては「元来私には古事記なぞの理解となると實は少々にがてございます。」（『赤い鳥』「通信欄」<sup>58</sup>）と記し、また連載開始以前に『古事記』に言及した書簡等も見受けられないため、連載前から『古事記』の原典自体に着目していた

という事実は窺えないからである。『古事記』への取り組みは三重吉の嗜好のみならず、多忙であった状況から、素材探しの手間が省ける長期連載というかたちを可能とする『古事記』の分量と構成、そして『三體古事記』の存在自体もまた、執筆動機のひとつとして挙げられるのではないだろうか。



本節では、『古事記』の近代における享受研究の一環として鈴木三重吉『古事記物語』に焦点を当て、三重吉が再話を行う際に用いた（『古事記』の特定を試みた。その結果、参照本の一つを渋川玄耳『三體古事記』であると特定した。『古事記』は玄耳により『三體古事記』として再話され、さらに『三體古事記』は三重吉によって『古事記物語』という作品に再話されたのである。『三體古事記』と『古事記物語』のつながりをみることで『古事記物語』の構成や文体、さらには『古事記物語』に後続する児童向け『古事記』に与えた影響など、『古事記物語』に関するより深い考察が可能となろう。

なぜ三重吉は『古事記』を児童向け雑誌である『赤い鳥』に再話したのか。恩田逸夫はその理由として、『古事記』のもつ「素朴で純粹な迫力」に加え「児童への教化性」を挙げる。三重吉は『赤い鳥』に先立ち、皇統に連なる重要な神話である「海のお宮」の話を手始めに再話している。同じ題材が後に小学生用の国定国語教科書に掲載されていることと関連して、考えてみるべき課題である。

1 「赤い鳥の本」第一冊、第二冊として、一九二〇（大正九）年十一月と十二月に発行された鈴木三重吉『古事記物語』上巻は、一九一九（大正八）年七月から一九二〇（大正九）年九月にかけて雑誌『赤い鳥』に掲載された童話（再話）を校正し、新たに三話を追加し全十九話に纏めたもの。『赤い鳥』版では「古事記物語」のタイトルではなかったが、本論では便宜上『赤い鳥』版も「古事記物語」と呼ぶ。

2 一九二八（昭和三）年三月『少年文学集』（改造社）に三重吉自身が選者として採択している。以来、一九三〇（昭和

五)年『日本建國物語』(アルス)として発刊、昭和7年からは『古事記物語』の名で春陽堂、一九三七(昭和十二)年中  
央公論社、一九四五(昭和二十)年養徳社、一九四八(昭和二十三)年小山書店、一九五二(昭和二十七)年ポプラ社、一  
九五四(昭和二十九)年生活百科刊行会が刊行、一九五五(昭和三十)年からは角川文庫が途中改版も行ない一九九四(平  
成六)年まで版を重ねる。二〇〇二(平成十四)年、原書房が角川文庫本を底本に刊行、次いで角川ソフィア文庫が二〇〇  
三(平成十五)年一月『新版古事記物語』を発行。続いて原書房が『古事記物語 愛蔵版』を二〇〇三(平成十五)年に三  
月に発行、さらに二〇〇五(平成十七)年三月、フロンティアニセンがプラスチック素材の耐水性の文庫本を出版し現在に  
至る。

3 福原武『現代語に全訳せる古事記』(洛陽堂 一九二一年十月)、加藤玄智纂註『古事記神代卷 全』(世界文庫刊行会  
一九二二年七月)、桜園書院編輯部『標註 訳文古事記』(桜園書院 一九五二年)、鈴木友吉『日本神話』(磯部甲陽堂  
一九二四十月)、齋藤佐次郎『日本神話 古事記物語』(金の星社 一九二四年十一月)など。齋藤佐次郎は「赤い鳥」創  
刊に触発され児童雑誌「金の船」を創刊、後に金の星社を設立した人物。以降も『古事記』口語訳の出版は毎年のように続  
く。

#### 4 前掲『少年文学集』

5 本節では『古事記』原典に加え『古事記』の研究書、注釈書、訳本などを総括して指す場合(古事記)で記す。

6 中島悦治『古事記評釈』(山海堂出版 一九三〇年四月)の巻末「古事記書目抄」内「注釈的参考書」に『古事記物語』  
がある。山田孝雄校閲『古事記諸本解題』(國幣中社志波彦神社・鹽竈神社 一九四〇年十一月)では「諸説」の項目に含  
まれているが、一九二八年改造社発行の『少年文学集』所収「古事記物語」をあげている。福田久道編『古事記伝の研究』  
(聖文閣 一九四一年三月)に、「古事記参考文献 注釈書」として挙がる。さらに古事記学会編『古事記の研究史』(高  
科書店 一九九九年六月)の「古事記研究史年表」内にみえる。いずれも書名・著者名・出版社の紹介程度である。

7 恩田逸夫『古事記物語』の成立』(日本児童文学会編『赤い鳥研究』小峰書店 一九六五年四月)

8 瀬田貞二「解説」(『日本お伽集』 神話・伝説・童話』東洋文庫二二〇(平凡社 一九七二年十一月)。『日本お伽集』

は森林太郎、松村武雄、鈴木三重吉、馬淵冷佑同撰の標準お伽文庫『日本神話』『日本伝説』『日本童話』(培風館 一九二  
〇年、一九三〇年)を復刻したもの。

- 9 桑原三郎「解説」(桑原三郎編『鈴木三重吉集』日本児童文学大系一〇 ほるぷ出版 一九七八年十一月)
- 10 続橋達雄「鈴木三重吉『古事記物語』考」(『野洲国文学』第五十四号 一九九四年十月)
- 11 宮崎芳彦「鈴木三重吉の仕事―編集者、出版事業家の原像」(『白百合児童文化V』一九九四年七月)。出版状況に関して  
は前掲桑原の「年譜」を参照している。また「昭和13年3月〜14年1月のあいだに、中央公論社より1冊本で刊行され」た  
とあるが、中央公論社版(大阪国際児童文学館所蔵)は一九三七(昭和十二)年十二月発行である。注2参照。
- 12 倉野憲司編『校本古事記』(続群書類従完成会 一九六五年)。真福寺本を底本とし、道祥本、春瑜本、道果本、兼永筆  
本、寛永版本、鼈頭古事記(延佳本)、古事記伝、訂正古訓古事記を校異に用いる。
- 13 一九二五(大正十四)年に古典保存会から『真福寺本古事記』が複製されるまで、『古事記』といえは宣長の『古訓古事  
記』が主流であった。宣長の本から真福寺本への転換については、及川智早『古事記』底本の変換―本居宣長『訂正古訓  
古事記』から真福寺古事記へ―(『国文学研究』第一三七集 二〇〇二年六月)に詳しい。
- 14 前掲続橋論文。
- 15 前掲『古事記諸本解題』。『古事記』の古写本、刊本、註釈書、諸説、雑誌所載諸説を、明治以前、明治、大正、昭和時  
代に分類し解説。
- 16 上田正昭他『「古事記」「日本書紀」総覧』(新人物往来社 一九九〇年十二月)
- 17 前掲『古事記評釈』。
- 18 前掲『古事記伝の研究』。
- 19 徳光久也『古事記研究史』(笠間書院 一九七七年一月)
- 20 奈良県立図書情報館その他の図書館所蔵本を含めれば三十冊余りの存在が確認される。
- 21 「鮎」は『和名抄』による説。直後の「和名抄」が「名和抄」に、二ヶ所ある「鮎」のルビが「サキ」「キサ」と乱れる  
など誤植が目立つ書籍である。
- 22 三重吉の引用した「妾易御子入海中」は、「中」の有無を別として、これと全く同じ表記の諸本はなく、「妾易御子而入  
海」か「妾易御子而入海中」の二種類であり、「而」のないものは現存しない。一九三〇(昭和五)年八月アルス社発行の  
『日本建国物語』は、三重吉自身による『古事記物語』に手を加えての出版だが、この「序」では「妾易御子而入海中」と

訂正されている。三重吉が引用ミスに気づいたと考えられる。

23 佐藤宗子「三重吉と「赤い鳥」、その表と裏」(『神奈川近代文学館』六三 一九九九年一月)

24 たとえば「自分の文章をいつまでも推敲して倦む事を知らなかった」という。(小宮豊隆「三重吉のこと」『漱石 寅彦 三重吉』岩波書店 一九四二年一月)

25 「上巻には、事實の上の一つ、うっかりして飛んだ間違ひをかいだ。第三七頁の一行から三行までの間の「末の弟さまの月讀命」は「二番目の弟さまの月讀命」、「二番目のお子さまの須佐之男命」は「末のお子さまの須佐之男命」となるべきである。」など。また「そのまま読んで、誤りなりに意味の分る誤植が一番いやである。」と記す。

26 序を変更し、『古事記物語』の一部の章を削除し発行された。

27 『赤い鳥』版第四話「むかでの室、蛇の室」で「高皇産霊神」、第五話「雉のお使」で「高御産巢日神」と表記される。

28 神戸市立図書館所蔵の初版本を確認。

29 甲南女子大学図書館所蔵本を確認。

30 神戸市立図書館所蔵本。

31 筆者所蔵本。

32 国会図書館所蔵本。

33 美濃部伴郎『立国根本之精神』(寶山堂 一九一三年十一月)。神話部分のみだが、原文とひらがなの書き下しルビ、現代語訳、文字解釈という構成が、『三體古事記』に似通っている。凡例によれば「婦女児童などの読み易きを本意と」している。

34 『世界童話集』(一九一六年十二月〜一九二三年四月)を手がけるまでは、読売新聞、国民新聞に多く寄稿しており、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、時事新報にも見られる。一九一七(大正六)年二月から七月までは、大阪朝日新聞にほぼ毎週日曜の夕刊に短編童話を十五編書いている。

35 以下、広告文に見える版数と本の奥付の版数は一致していない。

36 一九一五(大正四)年九月一日、朝刊一面に「訂正再版發賣」。同年九月八日、朝刊一面「訂正増補再版」。一九一六(大正五)年一月三日、朝刊一面「訂正増補」。同年三月二十六日、朝刊一面「訂正増補大好評」は玄耳の新作広告に添え

られている。六月二十七日、朝刊一面「訂正三版」。十月八日、朝刊一面「訂正四版」。これらも玄耳の他の著書と同時掲載。

37 『読売新聞』一九一三（大正二）年から一九二一（大正十）年を確認。ほかに雑誌『赤い鳥』で連載中にあたる一九二〇（大正九）年五月二十六日、朝刊一面に「訂正増補八版」の広告がある。

38 『東京朝日新聞』一九一五（大正四）年一月から一九一九（大正八）年六月分を調査。他に一九一六（大正五）年三月二十四日、同年六月二十九日、八月十一日、一九一七（大正六）年十二月一日には「訂正増補六版」が他の著書とともに掲載。また、一九一八（大正七）年一月二十九日、一九一九（大正八）年一月十六日、これも他の著書と共に掲載される。

39 『大阪朝日新聞』一九一五（大正四）年と一九一六（大正五）年の宣伝広告部分を確認。

40 一九一三（大正二）年十二月二十二日、青木健作宛書簡。「只今本屋を出す計畫で奔走中だ。」（『鈴木三重吉全集第六巻』岩波書店）

41 一九一六（大正五）年三月二十三日、井本健作宛書簡に「僕は春陽堂でお伽話を出す」、同年八月十五日、加計正文宛書簡には「お伽話の出版は九月からやる」とある。

42 「漱石入社背景には玄耳のひとかたならぬ働きがあった」という。安田満「玄耳と猫と漱石と」（『玄耳と猫と漱石と』邑書林 一九九三年三月。初出は「火山地帯」八七号 一九九一年三月）

43 熊本赴任時代については、蒲池正紀「渋川玄耳と紫溟吟社―漱石をめぐる初期の熊本文学者たち」（『熊本商大論集』第四〇号 一九七三年九月）に詳しい。

44 従軍の記録『従軍三年』（春陽堂 一九〇七年）、隨筆『閑耳目』（春陽堂 一九〇八年五月）、見聞録『世界見物』（有楽社 一九一〇年一月）、『日本見物』（有楽社 一九一〇年十月）、『一萬金』（至誠堂書店 一九一三年一月）、『鈍語』（誠文堂 一九一四年一月）など。のちに中国伝奇、書道関係の著書も記している。

45 漱石の序文は本来、一九〇七（明治四十）年六月出版『東京見物』に寄せられたもの。『日本世界見物』は、この『東京見物』に『上方見物』（一九〇八年六月）などの国内紀行と『世界見物』（一九一〇年一月）を加えた縮刷合本版である。

46 前掲桑原論文など。

47 一八九四（明治二十七）年から巖谷小波が「日本昔噺」シリーズとして「玉乃井」「兔と鰐」などを記しているが、短編

であり出典を『古事記』と明言していない。また一九〇二年、井上友吉が『言文一致 通俗古事記』を記し「童児の教と」したが、神代巻のみである。

48 「社告」欄ではさらに、「或意味での「古事記」の殆最初の口語訳」（一九二一年一月号）、「或意味で「古事記」の最初の口語訳」（同二月号）と、三重吉が初めて口語訳をしたかのような文言にすり替わっていることに注意したい。

49 一九一八（大正七）年七月五日、小宮豊隆宛はがきによる。

50 一九一八（大正七）年七月十四日、小宮豊隆宛書簡。一九一八（大正七）年七月二十五日、藤本勇宛はがき。

51 一九一九（大正八）年四月十四日、清水良雄宛書簡による。

52 三重吉が多くの代作をしていることは書簡からわかる。例えば一九一九（大正八）年二月二十五日、丹野てい子宛「童話は、あなたが書いたことにおいておいてくれないと困ります。雑誌の内幕がバレて、だれでも代作のように思われると困る。

（中略）また代作をしますかな。」

53 一九二〇（大正九）年四月十五日、小宮豊隆宛書簡による。

54 「全部、翻訳もので、直接の注文か、丸善で買われるのか知らないが、各国のフェアリー・テールズや、民話の本が廊下につくりつけた本棚に、いつの間にかいっばいになっていった。（中略）先生はよく『いまに、書くことがなくなるぞう。』と笑いながらおっしゃった。」野町てい子「赤い鳥と私」（『赤い鳥代表集 三』小峰書店 一九五八年十一月）

55 「私は童話のタネもカナリ仕入れましたが、何分日本では思ふものも手に入りません、お序のとき The Junior Classics の一冊お送りくださいませんか。」一九一八年十月（？）<sup>（？）</sup>、小池恭宛書簡。

56 前掲桑原論文による。これ以外に「雑誌の内容に変化をもたせる意味も」あったとする。

57 ほかに「素材で純粋な迫力が好ましかった」（前掲恩田論文）、「真率と簡朴さを見ていた」（前掲瀬田論文）など。

58 一九二〇（大正九）年四月『赤い鳥』第四巻第四号。



## 第二章 国定国語教科書における『古事記』

### 第一節 教材としての書き換え

#### 一 教科書享受の諸問題

本章では、第一期から第五期（一九〇四―一九四五年使用）の小学校国定国語教科書に掲載された『古事記』関連の教材と原典との差異を分析し考察する。小学校段階の『古事記』関連の教材は平易な口語文に書き換えられたものがほとんどで、文語文の場合でも原典と同じものはなく、すべてなんらかの“加工”がほどこされている。この点において、第一章第二節で考察した児童向け『古事記』と教科書に掲載された『古事記』は似通っている。異なるのは、児童向け『古事記』は執筆者個人によって加工され、国定教科書の場合は国家の監修の元で加工されたということである。『古事記』の原典が教材化される際にどのように書き換えられたかを辿るとき、編纂意図や背後にある国家の意思が浮かび上がってくるだろう。無論各期の教科書には編纂趣意書等があり、その中に含まれる解説によって編纂意図をある程度知ることができる。しかし、時期によっては編纂意図をその期全体の概要として示したり、教科書の巻ごとに示したりしており、一課一課の教材ごとに詳細に示したものは少なく、各教材にどのような編纂意図が反映されているのかは、ほとんどの時期にわたって個々に見てゆくほかない。

『古事記』の享受研究において、教科書に採録された『古事記』は考察対象として欠かせないと考える。その理由はいくつかある。一つめは、教科書は“読者人口”が圧倒的に多いという点である。第一章第二節で考察してきた児童向け『古事記』は“媒介者”である大人によってもたらされる書籍であった。大人が書店で購入して与えられたもの、あるいは地域の図書館等で借り出されたものなどがあげられる。このようなルートで『古事記』を題材にした書籍を読むことは出来る。しかし、そのルートは一部の児童にのみ開かれており、またそれぞれが同じ書物を読むことにはならない。しかしながら、教

材の場合は児童のほぼすべてが同時に「同一の『古事記』」を読むことになり、その意味で享受の観点から外すことはできない重要な対象であるといえる。

二つめの理由は、児童に与える影響の深さによるものである。たとえばスサノヲやヤマトタケルといった英雄たちを扱った『古事記』関連教材は、児童にとって人気がある話であったとされる。教師が語った神話に胸躍らせ、後に児童向け『古事記』を執筆した吉田禎男を生み出したことは前章で述べたとおりである。吉田だけではなく『神の国日本 肇国物語』（一九三九年）の著者、香川頼彦もまた小学校で習った神話教材を執筆の動機としている。教室で学ぶ『古事記』の影響は決して小さくはなかったといえよう。戦前においては、教科書によって「記紀の内容の輪郭は、小学校を出た人ならば知らないものはない、という日本文化史上画期的な現象」が起こっていたのである。

## 二 国定国語教科書の誕生と検定教科書

まずは、第一期国定国語教科書の誕生について概観を示す。

一九〇三（明治三十六）年四月、小学校令第二四条の改正により「小学校ノ教科用図書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルヘシ」と定められ、国定教科書制度が確立した。この改正は前年の教科書疑獄事件<sup>1</sup>を機に行われたもので、それまでの教科書会社各社の制作した検定教科書から、文部省が著作する国定教科書一種に定められたのである。

国定教科書制度は翌一九〇四（明治三十七）年四月から実施され、第一期国定教科書として国語科は『尋常小学読本』（八冊）が使用されることとなった。発行は一九〇三（明治三十六）年で、義務教育である尋常小学校の四年間で使用された教科書である。この修業年限は一九〇〇（明治三十三年）年の小学校令の定めるとおりだが、この上の学年についても「将来の義務教育年限延長に備えて、二年制の高等小学校をなるべく尋常小学校に併置することを奨励し、尋常小学校と高等小学校第一・二学年の学科課程の関連を図った。これによって近い将来に義務教育年限六年の制度を実現するための準備とした」という経緯から、本論では第一期の高等小学校一、二年を尋常小学校に連続した課程と考えること、年齢的にも第一期の高等小学校一、二年が後の小学校五、六年に相当することから、考察の対象とする。第一期に高等小学校で使用されたのは、『高等小学読本』（八冊）であり、これも発行は一九〇三（明治三十六）年である。

この第一期国定国語教科書（『尋常小学読本』『高等小学読本』）に『古事記』『日本書紀』の話が教材として採録されたが、実は国定化以前の検定教科書においても、上代文献を題材とした話はすでに取りあげられていた。たとえばヤマトタケルのクマソ征伐、スサノヲによるヲロチ退治神話、神武東征、仁徳天皇などである。中にはイザナギ・イザナミによる国の興りから説き起こして桓武天皇の代までを記載する、国史教科書の冒頭部のような課を組み込んだ『高等科用帝国読本』（一八九四年）のような国語教科書もあった。そして、第一期国定教科書は短期間に編修されたという事情もあるためか、これら検定教科書と類似した部分が少なくないのである。

### 三 国定国語教科書の『古事記』関連教材

それでは、『古事記』『日本書紀』『風土記』の各話のうち、どのような話題が第一期から五期のどの時期に、そしてどの学年に取りあげられたのだろうか。次頁の一覧表にそれを示した。

第三期にはいわゆる「黒表紙本」と「白表紙本」の二種類が存在した。<sup>10</sup>「黒表紙本」は第二期の修正であり、「白表紙本」は新たに編纂されたものである。両書の編纂の大綱は共通していたにもかかわらず、担当者の違いや編纂方法の差異が両書を隔てたようだ。「黒表紙本」は修正ゆえに教材にあまり新味がなかったためか、しだいに使用されなくなったとされる。それゆえ「国語教科書の歴史においては特にこれを重視することができない」ともされ、各期教材をを比較するといった先行研究でも省かれていることが多い。しかし、「黒表紙本」には『古事記』の各話の中からはじめて採録された話があり、また同時に、この「黒表紙本」まで採録され、その後無くなった『古事記』関連教材もある。同時期の「白表紙本」および次の第四期『小学国語読本』との関連からも着目に値すると考えることから、本研究では「黒表紙本」も考察対象としている。

国定国語教科書採録の『古事記』『日本書紀』『風土記』教材名一覧表

内容名	期別	第一期		第二期	第三期(二期修正)	第三期	第四期	第五期	
	教科書名 (通称)	1年次用発行年	1903(明36)年	1903(明36)年	1909(明42)年	1917(大6)年	1918(大7)年	1933(昭8)年	1941(昭16)年
『古事記』上巻 『日本書紀』巻一・巻二	天の岩戸			③あまのいはと	③天の岩屋		③天の岩屋	③天の岩屋	
	素戔鳴尊			⑤草薙剣(一)	④天叢雲剣	③大蛇たいぢ	③八岐のをろち	③八岐のをろち	
	白兔			②白ウサギ	②白うさぎ	②白ウサギ	②白兔	②白兔	
	少彦名神						③少彦名のみこと	③少彦名神	
	天孫降臨						③天孫	③ににぎのみこと	
	出雲大社(国譲り)					⑥出雲大社	⑥皇國の姿	⑥出雲大社	
	伊勢神宮			②伊勢神宮				③二つの玉	③つりばりの行くへ
	海幸山幸							③神武天皇	②金しんしゃう
	神武天皇	②紀元前		③神武天皇	③ヤタガラスト金色ノトビ	③金雞刺章	③熊襲征伐	③神武天皇	②金しんしゃう
	日本武尊		①日本武尊の川上 梟帥征伐	⑤草薙剣(二)		③熊襲征伐	③日本武尊(一)川上たける (二)草薙剣	④日本武尊	④日本武尊
	弟橘媛				⑤弟橘媛	⑤弟橘媛	④弟橘媛	⑤弟橘媛	⑤弟橘媛
	野見宿禰(垂仁紀)			②ノミノスクネ	②のみのおすくね				③田道間守
	田道間守(垂仁紀/記)								
	神功皇后(神功紀/仲哀記)	②神功皇后							
小子部(雄略紀)			③小子部のすがる	③小子部のすがる					
草香幡枝姫皇后(雄略紀)			①草香幡枝姫皇后						
出雲大社(出雲国風土記)							②国びき	②国引き	
速鳥(播磨国風土記逸文)							②早鳥	②早鳥	
古事記の話							⑥古事記の話	⑥古事記	
松阪の一夜(宣長)					⑥松阪の一夜	⑥松阪の一夜	⑥松阪の一夜	⑥古事記	
他									

縦軸には『古事記』等での登場順に沿って内容名を、横軸には各期と教科書名を時系列で示した。また、各タイトルの前に学習する学年数を○付き数字で記した。

#### 四 先行研究と課題

『古事記』関連教材を対象とした先行研究には、棚田真由美による昭和戦前期における『古事記』の教材化に関する一連の研究がある。<sup>12</sup> 皇国民育成を目的として『古事記』が教材化された実態を、各期の教材における該当箇所を引用し、編纂趣意書、教師用指導書、そのほか同時代の資料を用いて確認している。棚田は愛国心、天皇そして国家への忠誠心を称揚するために『古事記』は利用されたと結論づけている。棚田は、基本的には『古事記』にほかの要素が入り込んだとみており、いわゆる「日本神話」関連の教材を『古事記』からの採録として論じている。<sup>13</sup> しかしこの見解は、編纂趣意書に教材名を示して「日本書紀・古事記ニ拠ル」「出所、古事記及び日本書紀」などと明記されていること、ヤマトタケルなど『日本書紀』に依拠していることが明確な教材があることから、妥当な意見とはいえないだろう。また考察対象は『古事記』にある話だけに絞られているため、「国びき」「ノミノスクネ」といった『出雲国風土記』『日本書紀』など他の上代文献に基づく説話は含まれていない。

一方で、第二期国定国語教科書を検証したのは三浦祐之である。教材「草薙剣」と巖谷小波のお伽噺を比較し、お伽噺のもとに教材を作成した可能性について述べている。国定教科書が依拠する神話が正史の『日本書紀』であること、神話が「ひとつの日本」を称揚するための恰好の材料であり、その模範は律令国家の正史である『日本書紀』に求められる必要があることを指摘している。<sup>14</sup> 三浦は第二期の教材「草薙剣」のみを対象としたことから『日本書紀』に依拠したという見解を示したのであるが、同じ第二期の国語教科書には「白ウサギ」という『古事記』『出雲国風土記』に基づく神話も含まれている。三浦の見解は第二期国定教科書すべての神話教材には該当しないだろう。また、第一期から第六期（一九四七年発行）までの国定国語教科書の一覧表を挙げているが、第三期「黒表紙本」は含まれていない。

ほかに『古事記』関連教材を対象とした研究には、杉田征吾の「因幡の白兔・熊襲征伐」がある。<sup>15</sup> 各期におけるイナバノシロウサギとヤマトタケル教材の特徴を分析し、原典『古事記』『日本書紀』と比較しその差異について述べている。

国定教科書の研究としては、教育学の立場から文体論、教育史といった方面での研究がなされている。しかしながら、小学校国定国語教科書の『古事記』関連教材に的を絞ったものは主に上記の三つといえる。

国定国語教科書の各『古事記』関連教材が『古事記』『日本書紀』等のいずれに依拠しているのかという問題は、『古事

記』の享受研究という観点から重要な課題のひとつと思われる。棚田論文ではすべてが『古事記』、三浦論文では第二期が『日本書紀』である、と異なる見解が示されているが、本研究では該当教材を改めて考察してみたい。前述のとおり編纂趣意書が典拠を「古事記及び日本書紀」と記している場合もあるが、どちらにより多く依拠しているかは該当教材を詳細に検証することである程度明らかになる。各教材の原典を確定することで、「加工」の実態もより明確となり、編纂意図も浮かび上がってこよう。

考察の具体的な方法としては、第一期から第五期の小学校国定国語教科書に採録された『古事記』関連教材のうち、話題として初登場の教材について、原典である『古事記』等との比較を行う。たとえば「因幡の白兔」の話は第一期教科書にはじめて登場し、以後の国定国語教科書すべてに採録され続けるが、このうち最初に登場する第一期の教材に着目している。同話題における後の時期の教材については、本研究では取りあげない。その理由としては、連続して同じ話題が採録される場合、後の時期の教材は、基本的に語句の訂正、追加を中心とした前の時期からの引き継ぎとなっているためである。本研究では教材から教材への変容ではなく、『古事記』関連教材が国定教科書にはじめて登場したときに、原典から教材へとどのような変容が生じたのかという点を掘り下げてゆく。

1 『古事記』関連教材とは、主に「因幡の兔」「草薙剣」といった『古事記』等上代文献の各話をもとに作成した教材(課)を指す。また『古事記』に記載された話だけではなく、「古事記の話」といった関連教材も含める。

2 三浦佑之「巖谷小波と古事記」(『大阪大学日本学報』二十三号 二〇〇四年三月)

3 吉田禎男『少国民古事記 国のはじめ物語』輝文館 一九四二年七月

4 香川頼彦『神の国日本 肇国物語』(文友堂 一九三九年十二月)の「自序」による。神話教材によって「心のときめきを小さな胸におぼえ」という。

5 家永三郎「古事記の受容と利用の歴史」(久松潜一編『古事記大成一 研究史編』平凡社一九五六年十一月所収)

6 召喚・検挙者が二〇〇人に達した、教科書会社と教科書採用担当者との間の大規模な贈収賄事件。

7 「明治三十三年の小学校令」 文部省『学制百年史』（帝国地方行政会 一九七二年十月）第一編 近代教育制度の創始と拡充 第二章 近代教育制度の確立と整備（明治十九年〜大正五年）第二節 初等教育 二 小学校制度の整備」

8 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第七卷 国語（四）』（講談社 一九六三年十一月）では、『尋常小学読本』と『高等小学読本』を連続して掲載する。「所収教科書解題」でも両書を併記している。

9 学海指針社編『高等科用帝国読本 卷之一』（訂正再版）一八九四年。当時の尋常小学校は三年〜四年制。この教科書はその上の高等小学校一年用。三十課のうち四課を「上古の歴史」其一〜其四にあてていた。

10 表紙の色からの俗称だが、「白表紙」は実際にはねずみ色。両書には、田園用・都市用といった区別もあったようだが、どちらが田園用でどちらが都市用であったかは不明。

11 「所収教科書解題」（海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第七卷 国語（四）』講談社 一九六三年十一月）

12 「小学校国定教科書における古事記」（『教育学研究紀要』第四十五卷第二部 二〇〇〇年三月）、「昭和戦前期小学校国定教科書における『古事記』の教材化に関する考察」（『国語科教育』第四十九集 二〇〇一年三月）、「昭和戦前期における『古事記』教材化と時代社会」（『教育学研究紀要』第四十八卷第二部 二〇〇三年三月）など。ほかに国民学校高等科、師範学校、高等女学校、青年学校の場合についても論じている。

13 「『古事記』教材は、『古事記』だけでなく、『日本書紀』を援用したり、創作によって添加や削除が行われ、さまざまに加工された教材文であった」とし、あくまで『古事記』が主である。前掲棚田論文「昭和戦前期小学校国定国語教科書における『古事記』の教材化に関する考察」による。

14 前掲三浦論文による。

15 杉田征吾「国定国語教科書における『古事記』『日本書紀』の教材化―因幡の白兔・熊襲征伐を中心に―」（『横浜国大語教育研究』第一〇号 一九九九年五月）

第二節 第一期から第三期まで

一 『尋常小学読本』の「紀元節」「神功皇后」

ここでは第一期国定国語教科書『尋常小学読本』をとりあげる。『古事記』関連教材には、次の表に示したように巻四第十五課「紀元節」と同第十八課「神功皇后」がある。

巻	課	教材名	発行年
巻四	第十五課	紀元節	一九〇三（明治三十六）年発行
同	第十八課	神功皇后	同年

まず「紀元節」から考察する。

紀元節とは現在では「建国記念日」として国民の祝日になっている日のことである。紀元節は初代天皇・神武が即位しためでたい日とされ、教材「紀元節」は由来となった神武天皇の東征と即位を簡潔に記したものである。教材から、原典の『古事記』『日本書紀』の神武東征と即位にあたる部分を引用する。

神武天皇が、まだ、わが国のうちの西のほりに、おいでになったころ、わるものどもが、おほぜい、をりました。

神武天皇は、このわるものどもをせめに、おいでになって、とーとー、まかしておしまひになりました。

神武天皇は、このときまで、まだ、天皇におなりになりませんでした。そこで、はじめて、天皇におなりになりました。

原典の神武東征譚すべてがこの短い文章にまとめられていることから、この教材は『古事記』『日本書紀』のどちらに依拠するのか判然としない。しかしながら、原典との差異がいくつか認められるので見てゆきたい。まず、教材では神武が西



の方にいたとする。そして悪者退治のために来たとする。この記述から、現在語られている起点が東であることが読み取れよう。一方、原典では日向から東に向かうこと、最終的に奈良県橿原の地で即位することが記されている。しかし教材には具体的な地名や場所が省略されており、即位地なども曖昧なままである。これは、この教材には地名が不必要と判断されたためであろう。教材の冒頭は「二月十一日は、紀元節で、おめでたい日でございます。」、末尾にも神武が天皇になった日が同日でありこれを紀元節というのだと繰り返されている。このことから、即位の場所ではなく日付が重視されていることは明らかだ。これは「今」ある紀元節の由来をあらためて低学年児童（二年生）に説くための教材なのである。ここには、紀元節を国民に徹底させる意図が窺える。紀元節は、明治政府が一八七二（明治五）年に『日本書紀』の記述（神武天皇の即位日）をもとに定め、創設されたものである。『古事記』にも『日本書紀』にも「紀元節」という言葉は登場しない。なお日にちが二月十一日と定められたのは翌年の一八七三（明治六）年で、旧暦一月一日を新暦に換算した日付である。

教科書の国定化以前の一九九一（明治二十四）年から、小学校の儀式において紀元節に天皇皇后の御真影に向かつて最敬礼や教育勅語の奉読などを行うことが規定されていた。しかし検定教科書が使用されていた時期は、教材として紀元節を掲載しているものとそうでないものがあつた。したがって国定教科書によって、より多くの児童に一齐に教えられるようになったのである。小学校における儀式と国定教科書によって、紀元節の徹底がはかられたといえよう。

次に、第十八課「神功皇后」について考察する。

この教材は「神武天皇 ヨリ スコシ、アト ノ 天皇 ノ トキ ニ」と書き起こされていることから、第十五課「紀元節」の「続き」の話として設定されていることがわかる。内容はいわゆる「三韓征伐」の話であり、これは『古事記』『日本書紀』さらに「風土記」にも掲載されている。『古事記』に基づきこの話を簡単に記しておくことと次の通りである。仲哀天皇と神功皇后がクマノを討つため筑紫にいたとき、皇后が神懸かりし、その神から西の方に国があるのでそれを授けようとの託宣が下つた。天皇はその神の言葉信じなかつたために崩れる。神はさらに、皇后の腹の子が次の天皇になると告げる。皇后が軍隊を率いて海を渡ると新羅に到着する。新羅王はこれを恐れて天皇に仕えることを誓う。皇后は新羅、百済を配下とし、帰国する。

一方この話は、『日本書紀』本文においては新羅が降伏した後、百済と高句麗も相次いで降伏したとしている。教材では神功皇后が向かう国の名を「ガイコク」「ムカフ ノ 国」とのみ記しその数も明らかではなく、教材全体が簡潔に記され

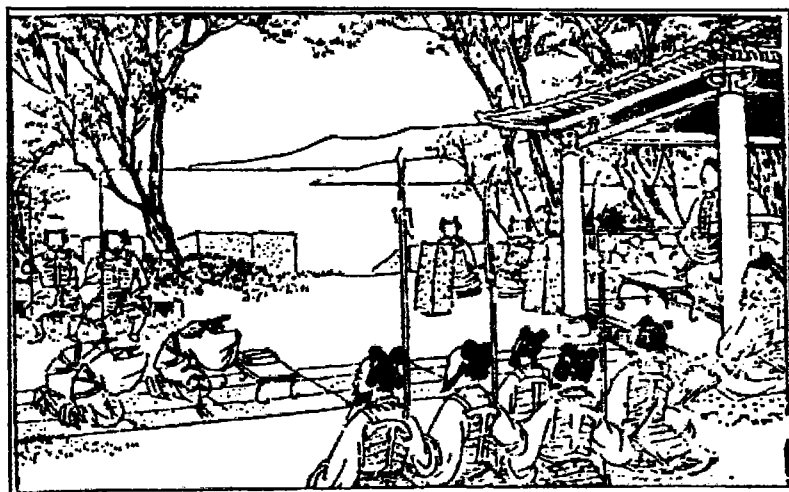


図1 『尋常小学読本』神功皇后

ているために『日本書紀』特有の話も見られない。したがって教材が『古事記』『日本書紀』のどちらに多く依拠しているのか判断できない。しかしこの教材には別の「素材」が取り込まれている可能性が見て取れるのだ。ここで注目したいのは、「西ノホーノワルモノドモ」の反抗は「ガイコクノモノガタスケテラルカラダ」と神功皇后が述べ、まずガイコクを攻めることにしたという部分である。外国（新羅）がクマソを後押ししたという話は『古事記』『日本書紀』ともに見られない記述である。これは一八九四（明治二十七年）年の検定教科書『尋常小学読書教本』の「神功皇后」を受け継いでいると考えられる。児童向けの歴史本にも神功皇后の話は掲載されており、その中にもクマソの後ろに新羅がついているとする記述がみえる。すなわち、明治期には「新羅後押し説」なるものがある程度人々に流布していたことが窺われるのだ。このように、教材には『古事記』『日本書紀』にはない素材も取り込まれる場合があったと考えられる。

この教材には挿絵が付いているので考察したい。これは国定国語教科書の『古事記』関連教材においてもはじめて登場する挿絵である。場面は「ガイコク」の王が神功皇后に拝謁しているところである（図1）。神功皇后が右手の建物の中に見え、やや高い位置に座していることがわかる。顔ははっきりとは描かれていないが、顔が見えないのはほかの人物も同様である。左手に座って恭しく礼をしている人物が三人いる。いちばん前の人物が王であろう。この三人の前には文机が置かれ、その上に巻物が見える。この巻物が『日本書紀』という「図籍」と見てよい。建物の手前、画面右端に座っているのはおそらくタケウチノスクネであろう。鎧を着た武人達がこの対面を見守っている。背景は左右に木、間に海があり、その遠くに陸地が見える。このような「神功皇后三韓征伐の図」は、江戸期の錦絵で頻繁に見受けられることから、すでに定型化したものであったと考えられる。描かれる人物は神功皇后、拝謁する新羅王、タケウチノスクネが常にセットであり、景物は木と海、向こうの陸地という組み合わせがほとんどである。新羅王との対面時にタケウチノスクネが側にいたことは原典には記されていないが、江戸期から描かれている神功皇后の錦絵では、常に側に配置されている。教材の構図とほぼ同じ挿絵は、児童書では元木貞雄編『家庭教育』日本歴史



図2 『家庭教育 日本歴史談』神功皇后



図3 『女学雑誌』神功皇后



図4 朝鮮伝統様式の屋根（八角亭:1897年築造）

談』（一八九三年）、雑誌では『女学雑誌』（一八八五年七月）などがある（図2）（図3）。教材にはこれらの定型材料に加え、かなり細かい点まで描き込まれている。特に、神功皇后がいる建物の屋根の形はやや反った形になっており、この形式は朝鮮半島の宮殿などの屋根に見られるものである（図4）。日本の神社建築においても屋根に反りを持つ形式はあるが、この場面は舞台が新羅であることから、朝鮮半島式の屋根の形を忠実に模したものと考えられる。したがって挿絵は、宮殿を明け渡した新羅王が神功皇后に玉座を譲り、拝謁している場面となる。単なる屋外や、朝鮮式建築とはわからない室内で行われる拝謁の絵とは異なり、より政治的な側面が表出された挿絵になっているのである。

この第一期『尋常小学読本』に採録された上代文献の話が「天皇」と「皇后」のセットであることは、偶然ではないだろう。古代の天皇と皇后の偉業を語ることで、現実の明治天皇と昭憲皇后の威徳を想起させる効果を生み出していると考えられる。

二 『高等小学読本』掲載の教材と典拠

次に、第一期『高等小学読本』を見てゆきたい。

『古事記』関連教材の掲載状況を次の表に示した。合計五課、四つの話題が採録されている。

巻	課	教材名	発行年
巻一	第一課	因幡の兔(一)	一九〇三(明治三十六)年発行
同	第二課	因幡の兔(二)	同年
同	第十二課	日本武尊の川上梟帥征伐	同年
同	第十六課	草香幡梭姫皇后	同年
巻三	第一課	伊勢神宮	一九〇四(明治三十七)年発行

巻一から順に見てゆきたい。

最初の「因幡の兔」は、第一期から五期、さらに戦後の第六期まで連続して採録された話である。この教材はタイトルに「因幡」が冠され、兔が自ら隠岐の島出身であることを語っている点、末尾で出雲大社に触れている点、他の期にはない第一期のみの特色であることから、この第一期教材がもつとも『古事記』原典に近いと指摘されている。確かに兔が隠岐の島出身であることや出雲大社についての言及は『古事記』のみに見受けられる記述である。しかし後述するように、第一期国定教科書の教材がすべて『古事記』に拠っているのではないことに留意が必要だ。この教材の冒頭は「天照大神の御おひに、大国主命と申す御方がございました」と書き起こされており、『古事記』ではなく『日本書紀』本文におけるアマテラスとオホクニヌシの系譜関係が示されているのである。系譜に『日本書紀』を利用して理由としては、『古事記』の系譜「アマテラスの弟スサノヲの六世孫」の場合、アマテラスとオホクニヌシの関係性が薄れるということが指摘できよう。アマテラスについては修身教科書の四年生用で登場済みであること、国史教科書では国語と同じ高等小学一年の第一課で学習することから、アマテラスとオホクニヌシを結びつけ、その近い関係を強調する意図があったと考えられる。

次に、同巻一の第十二課「日本武尊の川上梟帥征伐」は、景行天皇の皇子ヤマトタケルがクマソのタケルを征伐する話である。『古事記』『日本書紀』にほぼ同じ話が掲載されている。この教材の場合はタイトルから『日本書紀』に依拠したことがわかる。「日本武尊」の漢字表記は『日本書紀』、そして「川上梟帥」という人物は『日本書紀』のみ登場するためである。教材の内容もほぼ『日本書紀』に拠っているが、『古事記』にしかない部分も認められる。たとえば「兵卒ども、家のまほりを、三重に、とりかこみ」といった描写や、ヤマトタケルが梟帥に言う「はなはだ、無礼なれば、天皇われをしてうたしめたまふなり」の台詞は『古事記』特有のものである。このように『古事記』から引いた部分は、具体的な情景の描写や征伐の理由の付け足しなどであり、児童の理解を助けるためと考えられる。

また、『古事記』『日本書紀』の両方がない、次のような教材独特の箇所もある。

つねの人ならば、ただ「あ。」と、さけびて、息たゆべし。されど、梟帥はごーのものなり。

前節で第一期国定教科書はそれ以前の検定教科書と類似していることに触れたが、第一期に最も発行年が近く頻繁に利用されたという金港堂『尋常国語読本』（一九〇〇年）、坪内雄蔵『国語読本 尋常小学校用』（一九〇〇年）には、この箇所は見られない。したがって第一期から追加された部分と考えられる。この追加は、児童の興味を引くよう仕向けた脚色と考えられる。

次の第十六課「草香幡梭姫皇后」は、雄略天皇の皇后の話である。『日本書紀』に基づき要約すれば次のとおりである。雄略天皇が狩りをしているとき、猪が人々に向かってきた。天皇は舍人に射るよう命じるが舍人は臆病で木に登って逃れる。天皇は自ら猪を殺し、臆病な舍人をも殺そうとする。しかし皇后である草香幡梭姫が天皇を諫め、天皇は皇后の善言を得たことに満足する――。この話は『古事記』に類似の話があるが、『古事記』では皇后が登場せず、木に登って逃げたのは天皇自身となっていることから、教材は『日本書紀』のみに依拠していることがわかる。教材と原典の異なる点は、舍人の歌が教材では省略されていること、そして雄略天皇の性格について原典にない一文が教材に挿入されていることである。「記紀歌謡」は他の『古事記』関連教材においても省略されている。これは歌の口語訳や解釈の問題、歌を文中に挿入していることの解説など、教材としての取り扱いの困難さが影響していると考えられる。また、雄略天皇の性格と行動について「天

皇は、いったい、どりよーの大きな御方でございましたから、すぐ、お許しになりました」と具体的な文が挿入されている理由としては、次の二点が考えられる。まず、原典では草香幡梭姫が言う諫めの言葉の後、天皇が舍人をどう処分したかが述べられていないために、教材ではわかりやすく結果を補ったこと。次に、天皇の寛容さを強調するため、である。合理的且つ天皇の寛大さを植え付ける効果のある書き足しといえよう。

この教材のタイトルは「草香幡梭姫皇后」であることから、皇后が重要な役割を果たす話であることは言うまでもない。「御きげんがわるく」なった天皇に対し、切られそうになった舍人を「たいそー、きのどくに」思った皇后が「どうぞ、許してやってくださいませ。」とおいさめになり、「その結果天皇は「御きげんよく」なる。皇后の慈悲深さと天皇を氣遣う心が天皇を動かすという展開である。この皇后の説話に関しては、採録状況についても触れておきたい。国定国語教科書への掲載はこの第一期のみであり、国定直前の検定教科書である金港堂『尋常国語読本』、坪内雄蔵『国語読本 尋常小学校用』にも「草香幡梭姫皇后」は無く、国史教科書にわずかに認められる程度である。教科書以外に目を向けても、巖谷小波のお伽噺やそのほかの児童書では、雄略天皇の代そのものが単独で語られることがなく、草香幡梭姫の説話が特に取りあげられた形跡が見えない。雑誌では、第一期教科書発行以前では『女鑑』第十号（一八九二年三月）に史談「草香幡梭姫の御事を記す」と口絵「大草香幡梭姫皇女」が掲載されている程度である。教材としても、お伽噺としても着目されてこなかった草香幡梭姫皇后は、第一期国定教科書によって「皇后」として見出されたと考えられる。

尋常小学校と高等小学校を合わせた、第一期国定国語教科書の『古事記』に関する教材全六種の話題のうち二種類、つまり三分の一が「神功皇后」と「草香幡梭姫皇后」という皇后を主人公としていることに留意したい。この現象は第一期のみで、第二期以降は姿を消す。第二期以降、上代文献に登場する女性が小学校の国語教材に登場するのは、第三期まで待たねばならない。それはオトタチバナヒメである。しかし彼女は皇后ではなく皇子の妃であり、第三期教材ではその身分さえ記されていない。したがって第一期国定教科書では、皇后の存在を強調していたと考えられる。これは明治期における「皇后の表象」<sup>11</sup>との関連において興味深い問題である。

次の巻三第一課「伊勢神宮」はタイトルどおり伊勢神宮について説明した教材である。最初に伊勢神宮の位置や神域と神殿の様子などに触れ、その祭神とご神体である鏡に関して簡潔に記す。続いてアマテラスがニギノミコトに鏡を授ける「天孫降臨」の一場面が書かれるが、これは『日本書紀』に拠るものだ。この教材に関する他の科目との連携を確認すれば、

国史教科書の冒頭、第一巻第一課にアマテラスが配置されているのがわかる。国史教科書では、国定化以前から「天照大神」を冒頭に置き伊勢神宮の絵を掲載するのが慣例になっていたので、この国語教科書において再度学習するという構成となっている。「伊勢神宮」は鏡の由来を説くことが中心となっていたためか、国史教科書に見られる神勅「天壤無窮」の言葉はない。「伊勢神宮」では三種の神器が尊く、なかでもアマテラスの神格そのものである鏡が尊崇すべき存在であることを述べ、代々の天皇がそれをいかに重視しているかを説く。最後に「毎年、伊勢参宮とて、各地より、参拝するもの、はなはだ、多し。」の言葉で締めくくる。これは児童たちに実在の伊勢神宮を認識させることで、アマテラスおよび三種の神器の存在も「真実」と思わせる効果をもたらしていよう。

### 三 第二期国定教科書にみえる皇統の由来

続いて、第二期国定国語教科書『尋常小学読本』について見てゆく。次に挙げる表に『古事記』関連教材の採録状況を示した。

巻	課	教材名	発行年
卷三	第五	ノミノスクネ	一九〇九（明治四十二）年発行
卷五	第一	あまのいはと	同年
同	第十三	小字部のすがる	同年
卷九	第二課	草薙剣（一）	一九一〇（明治四十三）年発行
		草薙剣（二）	

この第二期では新しく五種の話題が追加された。まず巻三第五課の「ノミノスクネ」から見てゆきたい。ノミノスクネ（野見宿禰）とは、『日本書紀』垂仁天皇七年に登場する人物である。当麻蹴速という腕力の強い者が自分に匹敵する者を求めており、このことを耳にした天皇の臣下が野見宿禰を見つけ出す。当麻蹴速と野見宿禰は相撲の勝負をし、野見宿禰が勝つ、

というものである。相撲の起源譚としても知られる話である。

当麻蹴速は『日本書紀』にのみ登場する人物で、「四方に求めむに、豈我が力に比ぶ者有らむや。何とかも強力者に遇ひて、死生を期はず、頓に争力すること得てむ」と、純粹に強者との勝負を望む人物であった。しかし、教材では「ジブノアヒテニナルモノハ一人モイナイ トイバツテキマシタ」と傲慢な人物に変更されている。教材の教授方法を記した『毎時配当 尋常小学国語教授細案』<sup>12</sup>を見ると、蹴速の描写は『日本書紀』が引用されつつも、「自負と傲慢」の持ち主とされている。一方で野見宿禰は「謙讓の徳」の持ち主とされている。したがって、これは「自負と傲慢」を持つ人が「謙讓の徳」を持つ人に負かされるという、児童向けの道徳ものとして誇張されていると考えられる。付言すれば、教材には原典と異なる点がさらにひとつ見られる。それは当麻蹴速が殺されないことである。原典ではあばら骨を蹴り折られ、腰を踏み砕かれ殺されるという場面だが、残酷な表現のために教材としては避けられたのだろう。

第二期国定教科書に関しては、高等師範学校及び府県師範学校の附属小学校における実際の教科書使用に関する意見報告がまとめられている。<sup>13</sup>中でも東京女子高等師範学校附属小学校と熊本県第一師範学校附属小学校では、児童に対して教材のアンケート調査を行っており、当時の児童の反応を知ることが出来る。東京女子では「最モ面白ク感ジタル課」「最モ好メル挿畫」「最モ困難ト感ジタル課」の三項目について、各学年ごとの結果をまとめている。<sup>14</sup>二年生児童数九〇人のうち二三人が、「ノミノスクネ」を巻三の中で「最モ面白ク感ジタル課」としてあげている。これは同事項第一位にあがった巻三第十七課「ほしとり」(二六人)に次いで多い数であり、好感をもたれていたことがわかる。<sup>15</sup>一方、熊本第一では「難ト感ゼシ課」「易ト感ゼシ課」「面白シト感ゼシ課」の三項目について、二年生以上の教材を調査している。「ノミノスクネ」は四人中一〇人が「難」、一六人が「易」、九人が「好」(面白シ)と回答している。この九人という人数は巻三のなかで第七位であり、他の教材に比べてそれほど好まれてはいなかったようだ。東京女子において人気の高かった「ほしとり」はこちらでは四人しか「面白い」と答えておらず、大きく異なっている。したがってこれらの調査結果は、授業方法や教師の取り組み方、児童の男女差など様々な要因による差異が現れていると考えられ、扱いには留意を要する。しかしながら、教室での受容の一端を知る上で興味深い資料である。

巻五第一課「あまのいはと」はいわゆる「天の岩戸」神話を扱った教材である。岩戸に籠もったアマテラスを神々が神事を行って呼び戻す話だが、教材の本文はきわめて簡略化されたものとなっている。原典にあるスサノヲの様々な乱暴な振る





図5 『尋常小学読本』「あまのいはと」

舞いは、教材では馬の皮を剥いで投げ入れた行為のみで、アマテラスが驚いた拍子に自身の体を傷つけたり、機織りの女が亡くなるという記述はない。またアマテラスを呼び出す神事で登場する長鳴鳥や榊や鏡などに関する記述はなく「おかぐら」と記されるのみである。しかし興味深いことに、本文に付けられた挿絵はこれらの省略部分を補う役割を果たしているのだ。鏡やそれを掛けた榊、長鳴鳥、アメノウズメの縋まで描き込まれており、『古事記』『日本書紀』の記述どおり神事が「再現」されている(図5)。これは、教師の裁量によって「天の岩戸」の神話を児童たちに詳述することが可能であることを示しているだろう。前述の東京女子高等師範学校附属小学校における調査では、この挿絵が巻五のうち「最モ好メル挿畫」の第一位(九〇人中二十八人)にあがっている。この結果には、教師による挿絵の解説の仕方が反映された可能性があるが、面白い教材としては名があがっていないことから、児童たちは内容よりも挿絵に興味を示していることが窺える。

この教材に関しては、教授上の「注意」として「神話の眞價を發揮することにとめ児童をして事實上疑問を挿ましめざる様にすべし」とする指導法が提案されていたことにも目を留めたい。児童からの「本当にあつたことなのか」といった質問自体を発問させまいとしていたのである。これは教科書発行翌年の指導案であることから、はじめて使用した際、実際に児童がこのような質問をし、教師を困惑させた経験を踏まえての「注意」と考えられる。これを避けるために神話への懐疑そのものをタブー化し、児童を「教化」せんとした一端が現れているよう。

教材の典拠については『古事記』『日本書紀』『日本書紀』のどちらに多く依拠しているのか判然としない。『毎時配当 尋常小学国語教授細案』は『古事記』『日本書紀』の両書に拠ったことを伝える。確かに、本文中の「大ぜいの神さまがたは手をたたいて、お笑ひになりました」という部分は『古事記』に依拠しており、アメノウズメに台詞がないこと、アマテラスが戸を少し開けた後すぐに「手力男のみこと」に引き出されていることは『日本書紀』本文の記述に拠っているが、全体としてどちらに比重があるのか判断しがたい。

第十三課「小子部のすぎる」は、すぎるが天皇の命令である「蚕」の収集を「児」と取り違え、大勢の子どもを連れてき

たという話である。『日本書紀』雄略天皇段に基づいた話であろう。教材はほぼ原典に沿っているが、すがるが子を集める箇所に変更がみられる。原典の「是に、螺贏、誤りて嬰兒を聚めて、天皇に奉獻る」に相当する部分は、教材では次のようになっている。

すがるはさうとは心づかず、あちらこちらをたづねまはつて、

「天子様のおほせだから、子を出すやうに。」

と、たくさんの子どもをもらつて、つれて来ました。

このように、典拠にはみられない具体的な台詞をとらなつて描写されている。天皇がすがるの勘違いを咎めず笑つて許す、というエピソードは、天皇の寛大さを示すのに恰好の教材といえるが、その一方で、この教材は天皇の命令とあらば子どもも差し出す、という絶対者としての天皇の位置をほめかすものとなっている。教材にみえる台詞への書き換えは「天子様のおほせ」には従うべきという思想を児童たちに印象づけるものとなつていよう。しかも読み手である児童たちは差し出される立場である。

この教材にも挿絵が付いているが、出典が確認できた。挿絵はすがるの傍に幼児が三人立っている絵である(図6)。この絵は菊池容斎『前賢故実』(一八六八年)<sup>18</sup>に描かれた絵とほぼ一致する(図7)。わずかに子供の位置がずれているが、



図6『尋常小学読本』



図7『前賢故実』

教科書の挿絵は『前賢故実』を傍らにおいて模写したと考えられる。教材ではもう一人いた子が省略されたこともわかる。この事例は、教科書がどのような絵画を資料として用いたのかを探る手がかりとなる。

この教材も前述のアンケート結果を参照すれば、東京女子高等師範学校附属小学校においては巻五のうち「最モ面白ク感ジタル課」の第一位(九〇人中

三三人)、熊本県第一師範学校附属小学校では巻五のうち「面白シト感ゼシ課」第四位(三九人中一五人)であり、比較的好まれた教材であったことがわかる。笑話として児童たちに受け入れられたと見てよいだろう。

最後の巻九第二課「草薙劍」は、「三種の神器」の一つである草薙劍にまつわる神話を二つの課に分けたものである。「草薙劍(一)」はスサノヲによるヤマタノヲロチの退治譚、「草薙劍(二)」はヤマタタケルの東征の話を取っている。

一つめの「草薙劍(一)」が扱う箇所は、原典に即せば、出雲に來たスサノヲが、大蛇ヤマタノヲロチの生贄にされるクシナダヒメとその父母が泣いているところに出会い、ヒメをもらうことを条件にヤマタノヲロチを退治するという話だ。戦いの後、ヤマタノヲロチの尾から靈劍が現れ、これが草薙の劍としてアマテラスに献上される。

この課の典拠であるが、草薙の劍の神話は『古事記』でも『日本書紀』でも見受けられるものの、教材は『日本書紀』に拠っている。なぜなら教材中の「天叢雲劍」という名称や「簸川」「素戔嗚尊」といった固有名詞の表記は『日本書紀』にのみ登場するからである。<sup>19)</sup>

この教材の特徴として指摘できるのは、先に教材巻五でスサノヲが登場していることから、スサノヲの後日談として読めること、原典でクシナダヒメを櫛に変えるという神話的な不思議が書かれた部分が「其のほとりに娘を坐せしめて待ち給ひしに」と変更され、現実的な描写となっていることである。また、冒頭と末尾で三種の神器の登場が見え、これが皇位継承に不可欠の神器である説明も繰り返される。いわば三種の神器は「皇統譜」となっているのだ。

なお、このヲロチ退治の話は巖谷小波のお伽噺として既に刊行されており、国定化以前の数種の検定教科書にも掲載されている。国定教科書以前からある程度児童たちに知られていた話であったと考えられる。<sup>20)</sup>

二つめの「草薙劍(二)」は、東国の蝦夷討伐の命を受けたヤマタタケルが、蝦夷の火攻めに遭うものの、伊勢にいる叔母から授かった「天叢雲劍」で逃れることができた、という話である。逃げる際に劍で草を薙ぎ払ったため、この劍を「草薙劍」と名付けたという。この箇所の典拠についても、地名から『日本書紀』であることがわかる。

この教材の特徴としては、ヤマタタケルが病にかかって伊勢で亡くなり、劍が熱田神宮にまつられている箇所まで記していることである。具体的に実在の神社まで記すのは、草薙劍の話が現実の話であると示すためと考えられる。また、「草薙劍」の教材は(一)(二)ともに、劍に加えて「アマテラス」の名とアマテラスが奉られている「伊勢」を出すことも忘れない。両課を通して見えてくるのは、扱っている内容はスサノヲとヤマタタケルという二人の英雄譚であるものの、「三種

の神器”と“アマテラス”という天皇の正統性および皇室の最高神を強調している教材ということである。

以上、第二期国定国語教科書について述べたが、この期において『古事記』『日本書紀』の話題が五種類も増え、その内容にアマテラス、三種の神器が繰り返されたのは、皇統の由来と正当性を強く示すためであるといえよう。これは、日露戦争後の社会情勢の変化、とりわけ帝国主義化からくる「国家主義・国粹主義そして絶対主義への兆し」<sup>22</sup>に対応する教材として『古事記』『日本書紀』が活用されたためと考えられる。

#### 四 黒表紙本に登場した本居宣長

次に、第三期国定国語教科書『尋常小学読本』（二期修正・黒表紙本）について考察する。この教科書では、次の表に示す二つの『古事記』関連教材が掲載された。

巻	課	教材名	発行年
巻九	十八	弟橘姫	一九二二（大正十一）年発行
巻十一	二十四	松阪の一夜	同年

まず、巻九第十八課「弟橘姫」から見てゆく。

現代でもオトタチバナヒメの犠牲死は美談として広く知られているが、国定教科書ではこの第三期に登場した。内容は、ヤマトタケルが東征の折、海が荒れ船が進まなくなったため、ヒメが海神の怒りを鎮めるために身代わりとなって入水すると、たちどころに波が静まり船は進むことができた、という話である。

この話は、『古事記』『日本書紀』ともにほぼ同一の物語として記されており、教材もこれらの原典に即している。教材の出典が明記されている教科書の編纂趣意書には「古事記・日本書紀ニ出ツ」とある。教科書本文を検証しても、どちらか一方に拠るという手がかりは見出せない。

編纂趣意書の「教授上ノ注意」では、「史実トシテ之ヲ授ケンヨリハ、日本婦人ノ美シキ行ヲ説ケル一伝説ト見ルヲ可ト

ス。」とあるのが目をひく。本論文第四章で後述するが、オトタチバナヒメの話は明治期の婦人雑誌『女鑑』において、数回にわたって犠牲死の美談、女子の鑑として感動的に綴られているからだ。<sup>24</sup>ヒメの名は検定教科書にも登場していた。<sup>25</sup>児童書については、この頃までに多くのヤマトタケルの伝記が発行され、オトタチバナヒメの挿絵がある書籍もあった。<sup>26</sup>しかしヤマトタケルの英雄譚が女兒よりも男児に好まれるジャンルであったことから、女兒がどの程度この話を知っていたかは不明である。しかし、この教科書によって女兒もオトタチバナヒメの話を知ることになったといえる。

卷十一第二十四課「松阪の一夜」は、『古事記』の注釈をした本居宣長を扱った教材である。一七六三（宝暦十三）年、宣長が松阪の旅館に賀茂真淵を訪ね師弟関係となり、これが後に宣長の『古事記伝』が生まれる契機となったという内容だ。教材化にあたっては、編纂趣意書に「玉かつま（本居宣長著）及び賀茂真淵と本居宣長（佐佐木信綱著）ニ抛ル。」とあるため、宣長の『玉勝間』（一八一二年刊行終了）と佐佐木信綱『賀茂真淵と本居宣長』（廣文堂 一九一七年四月）が用いられたことがわかる。佐佐木の文章と教材を比較すれば、再構成かつ短縮したことが見てとれる。

この「松阪の一夜」は「白表紙本」（『尋常小学国語読本』）にも掲載されており、白表紙本の編纂担当だった高木市之助は後に、この教材を歴史的・修身的・実業的・文学的としながら、次のように回顧している。「この種の教材でおそらく一番よくできているのは、白表紙本では、卷十一に載った「松阪の一夜」ではないかと思えます。真淵・宣長師弟の美しい出会いを描いたこの教材を懐しく思い出す人たちも多いはずだ」<sup>27</sup>。また国語教育者の芦田恵之助が全国の小学校を行脚した際、この教材を使って「読み方」の模範授業を行っていたという。<sup>28</sup>

この教材が主として伝えるのは、宣長の不断の努力、勤勉、学問への情熱である。「私も実は我が国の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとした」という真淵の言葉を受けて宣長が「三十五年」にわたって『古事記』研究に取り組むためだ。そしてさらに、宣長の努力とともに、『古事記』が「我が国の古代精神」を示す重要な書物であるという位置づけが改めて示されていることに目を留めたい。この教材によって児童たちは『古事記』の貴重性、重要性を認識することになるのだ。

ここでは、第三期国定国語教科書の『尋常小学国語読本』（白表紙本）について見てゆく。この教科書に『古事記』関連教材として新しく掲載されたのは次の「出雲大社」のみである。

巻	課	教材名	発行年
巻十二	二	出雲大社	一九二二（大正十二）年

「出雲大社」は紀行文の形式をとる教材である。旅行者が出雲大社と大社にまつわる神話を紹介する、というスタイルを用いている。汽車で出雲に向かい、出雲大社の拝殿の前に到着したところで、大社の起源として「国譲り」譚が短く語られている。また社殿や神事についても解説されている。

国譲りの話は『古事記』にも『日本書紀』にも登場する。出雲の国のオホクニヌシの元に、高天の原に居るアマテラスの使者が来る。使者はオホクニヌシに対し、この国はアマテラスの子（孫）の治める国なので、譲るかどうかと問う。オホクニヌシは最終的に国を献上する、という内容である。

編纂趣意書によれば「古事記・日本書紀・出雲大神（千家尊福著）等。」を典拠として示す。『古事記』を先にあげているが、教材の内容は『日本書紀』が主体と考えられる。その理由としては、タケミカヅチの名を「建御雷命」と表記するなど『古事記』に依拠した表記も確認されるものの、使者タケミカヅチが「大神の勅にいはいはく、『此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし。』と」と述べ「子」ではなく「皇孫」とされている点、オホクニヌシの子が一人しか登場しない点など設定自体の変更が『日本書紀』に依拠しているためだ。また、編纂趣意書があげる「出雲大神」とは、千家尊福著『出雲大神』（大社教東京分祠 一九一三年十二月）である。同書からは鳥居や本殿の高さ、神事について引用されている。

この教材が伝えるのは、国をアマテラスの子孫に捧げることが「真心」であり、アマテラスの子孫が国を統治することが当然である、という趣旨である。また、第一期の「伊勢神宮」、第二期の「草薙剣」を奉った熱田神宮と同様、アマテラスの存在や「国譲り」の神話を旅行者が目にする現実の神社と接続させ、実在の歴史として教え込んでいる。

1 即位するまでは「カムヤマトイワレヒコノミコト」が原典に即した名称だが、本研究では便宜上「神武天皇」で統一する。  
2 金港堂『尋常国語読本』（明治三十三年）には巻四第十六課「紀元節」があり「二月十一日ハ、紀元節トイツテ、大切ナ祝日デアリマス」と第一期の『尋常小学読本』と酷似している。内容からも、『尋常小学読本』が金港堂『尋常国語読本』を受け継いでいると考えられる。一方で坪内雄蔵『国語読本 尋常小学校用』（明治三十三年）には紀元節に関する教材がない。

3 『日本書紀』によれば神功皇后の夫・仲哀天皇は第十四代天皇であり「神武天皇より少し後」とは言い難い。しかし教材同士の連携を図り、且つ神武との関連を意識させるために加えられた文と考えられる。

4 「くまその強きは、三かんのあとおしある故なれば、先づ之をほろぼさんとて」今泉定介、須永和三郎同編『尋常小学読書教本』（普及舎 一八九四年十一月）巻六第十九課「神功皇后」。ただし翌月発行の訂正再版では、後押しという文は削除されている。ほかに一九〇〇（明治三十三年）年発行の坪内雄蔵『国語読本 尋常小学校用』巻八第一課「国史の大意（上）」では「海を渡りて、朝鮮を征服したまふ。熊襲も、また、平ぎぬ」とだけ書かれている。

5 松本謙堂『家庭教育 日本歴史はなし』（積善館 一八九一年六月）、元木貞雄編『家庭教育 日本歴史談』（榊原友吉 一八九三年三月）など。

6 神功皇后を主祭神とする京都・御香宮神社の由緒書には「皇后は武内宿禰と議し、熊襲よりも先づその後押しを断とうとせられ、御懐胎の御身を以て、親ら兵船を進められた。」とある。

7 杉田征吾「国定国語教科書における『古事記』『日本書紀』の教材化―因幡の白兔・熊襲征伐を中心に―」（『横浜国大語教育研究』第一〇号 一九九九年五月）

8 『尋常小学修身書』第四学年第一「大日本帝国」、『小学日本歴史』第一「天照大神」。国史は高等小学校から学んだ。  
9 国定期以前の国史教科書、師範学校編輯『日本略史』（文部省刊 一八七五年）上巻に雄略天皇の項目があり、その中に幡梭皇女の説話がある。これ以降の国史教科書には見られない。

10 第一期教科書発行後の雑誌記事では『婦人画報』第五十四号（一九一一年四月）に「名婦鑑 草香幡梭姫」が確認できる。

「従順にして果断の才に富める」皇后を讃えると同時に、姫を雄略天皇に娶せた安康天皇の先見の明に敬服すべきと説かれている。

11 若桑みどり『皇后の肖像―昭憲皇太后の表象と女性の国民化』（筑摩書房 二〇〇一年十二月）

12 普通教育研究会編『毎時配当 尋常小学国語教授細案 卷三』（松村三松堂 一九一〇年一月）「ノミノスクネ」の「教材理解」内容説明による。

13 文部省図書局『國定教科書意見報告彙纂』第一輯―五輯（一九一三年三月―一九一九年九月）（日本図書センター）『國定教科書意見報告彙纂』全五輯（一九八一年三月）

14 「一學年使用後直チニ當時の兒童ノ所感ヲ調査シタルモノニシテ同一事項ニ対シ一〇人以上ノ同感者ヲ有スルモノダケヲ採録シタルモノ」である。

15 「好メル挿画」と「困難ト感ジタル課」には名があがらず、したがって「一〇人以上」の同感者がいなかったことになる。

16 東京高等師範学校附属小学校「国語科教授細目」（初等教育研究会編輯『教育研究』第八十一号 一九一〇年十二月）。

もう一つの「注意」は「敬語の使用法を理解せしむ」であった。

17 『毎時配当 尋常小学国語教授細案 卷五』の「あまのいはと」の「教材解釈」の神代の説明には、「天地開闢の始めに当りて、造化の神、高天原に出現し給ひ、中に天御中主神といふ神様があつた（中略）二神は、三貴子をお生みになつた」と、記紀を混ぜたような解説がされている。系図が書かれ、ここでは素戔嗚命の子が大国主命となっている。

18 菊池容斎『前賢故実』全十卷（一八六八年）。一八四三年に初編二巻が発行された。有職故実を考証しながら描いた古来からの忠臣の絵と略伝を五百人分以上収録している。明治の歴史画の正本とされた。

19 三浦佑之「巖谷小波と古事記」（『大阪大学日本学報』二十三 二〇〇四年三月）に既に指摘がある。

20 日本昔噺第十三編 大江小波『八頭の大蛇』（博文館 一八九五年九月）。一八九七年の第四版まで確認できる。冒頭にはアマテラスの存在感を示し、スサノヲの乱暴ぶりなど天の岩戸説話が詳しく書かれる。最後は稲田姫を妻として出雲で暮らした、と締めくくられる。

21 学海指針社編『帝国読本 卷之八』一八九二年、金港堂『高等国語読本 卷一』一九〇〇年、坪内雄蔵『国語読本 高等小学校用 卷一』一九〇〇年など。



- 22 橋与志美「第二期国定教科書に関する研究(二)」(『大東文化大学紀要 社会科学』第三十二号 一九九四年三月)
- 23 第二十六回 I B B Y ニューデリー大会(一九九八年)において美智子皇后陛下が「子供の本を通しての平和―子供時代の読書の思い出し―」という基調講演を行った。その際に「忘れられない話」「感銘という以上に、強い衝撃」を受けた話としてオトタチバナヒメの入水譚を紹介している。なお、講演内容の本文は宮内庁ホームページ内「皇后陛下第26回 I B B Y ニューデリー大会基調講演」(<http://www.kunaicho.go.jp/okotoba/26ibby.html> 最終アクセス日二〇〇九年一月十八日)を参照した。
- 24 『女鑑』で合計五回確認できる。
- 25 「海ヲ渡リテ、上総ニ至ル舟中、難風ニ逢ヒ、弟橋媛、海ニ投ゼリ。」第十三課「日本武尊ノ東夷征伐」(文部相『高等小学読本 卷之一』一八八八年)
- 26 青葉山人編・笠井鳳齋画『日本武尊』(日本お伽噺四十四、島鮮堂 一九一〇年三月)、木村小舟著・巖谷小波関『日本武尊』(歴史お伽六、彰文館 一九一一年一月)など。
- 27 高木市之助述、深萱和男録『尋常小学国語読本』(中公新書 一九七六年二月)
- 28 授業の実践記録は芦田恵之助『松阪の一夜』教壇叢書第二冊(恵雨会 一九三四年十二月)として出版されている。
- 29 千家尊福(一八四五―一九一八年)は第八十代出雲国造、出雲大社大宮司であり一八八二(明治十五)年に出雲大社教を設立した。作詞した唱歌「一月一日」は一八九三(明治二十六年)年に文部省告示の「小学校祝日大祭日歌詞並楽譜」のひとつとして制定され、官報第三〇三七号附録に掲載されている。

第三節 第四期から第五期まで

一 『小学国語読本』と神話的教材の増大

ここでは第四期国定国語教科書『小学国語読本』をとりあげる。

この教科書は、単語から学ぶことになっていた従来の教科書の編成が改められ、巻一第一課に文章を掲載したこと、低学年の教科書にカラー印刷が施されたことなどから、画期的な読本とされている。この読本に新しく掲載された『古事記』関連の教材は、次の表に示したように合計七課分である。

巻	課	教材名	発行年
巻三	十一	国びき	一九三四（昭和九）年
巻四	二	早鳥	同
巻五	十三	少彦名のみこと	一九三五（昭和十）年
同	二十一	天孫	同
同	二十五	二つの玉	同
巻十一	十一	皇国の姿	一九三八（昭和十三）年
同	十二	古事記の話	同

この第四期では神話的教材が飛躍的に増えたことがわかる。教育学者の海後宗臣はこの教科書について「国民思想を教化する意図も盛られている」と述べる。しかし教科書発行当時の編纂趣意書ではそれが明確にされず、教材の選択に関しては「最も時勢に適合したものを選び、之を児童の精神発達の過程に応じて按排し、その表現は趣味深きものたらしめることとした」と記され、第三期までの趣意書と変わらない文章になっている。当時の編纂者、図書局員の一人であった井上超は戦後、わざと「趣意書は、何のへんてつもないように」記したと回想している。編集者同士の意見の対立が生じ、「編纂者四

人の意見の最大公約数」に過ぎない立場が編纂趣意書に記されたようだ。また井上は、神話教材について「選択排列に於て、略々我が日本神話の大系を展開表現しようとした」と述べているが、井上の眼目は、教材の配列を重視し「童話・伝説から、神話・史話・古典につながり」「素材・表現をのりこえて、低学年から、ほとんどすべて発展的な系列を」持たす点にあったようだ。さらに古典教材の増加については、古典を尊重する精神に基づいたとも述べている。

具体的に各教材を見てゆこう。

卷三第十一課「国びき」は『出雲国風土記』に基づく話である。『出雲国風土記』によれば、出雲の国の神が、他の国の余った土地四箇所を引つ張つてきて出雲に足し、国を大きくしたという内容である。

しかし教材においては、舞台は出雲とは記されない。また「東の方のとほい國」と「西の方のとほい國」の余った土地二箇所を引き寄せたとしている。末尾は「神さまは、かうして日本の國をひろくなさつたといふことです」と締めくくられる。教材の特徴として、出雲ではなく「日本の國」を広げたと変更されていることから、この教材が領土拡大を正当とする思想を刷り込むための意図があったと見る意見がある。確かに教材の編纂時期は、一九三一（昭和六年）九月の柳条湖事件を機に満州全土を占領した時期（一九三二年二月）のすぐ後と考えられ、この話を教材として採択した理由を領土拡大の正当化の伏線と分析することは可能であろう。しかし『出雲国風土記』に明確に新羅の岬を引き寄せたと記されていることから、領土拡大や侵略戦争を賛美といった意図を強く込めるのであれば、低学年であろうと「朝鮮を引き寄せた」と明記することもできたのではないだろうか。

現在においても「侵略戦争賛美の比喻としての伏線」との指摘があるこの教材について、詳しく検討してゆきたい。まず前半で東の国を引き寄せ、後半でもほぼ同じ文章で西の国を引き寄せると繰り返す。神さまのかけ声も「こっちへ来い、えんやらや。こっちへ来い、えんやらや。」と同じ台詞を二回つなげたもので、東と西で計四回、繰り返されている。このような繰り返し形式は、前述の井上尠が低学年の児童に与える教材として適すると考えた表現そのものであった。すなわち「夢や空想や、擬人的方法を適当に生かすこと、言語のリズムをいろいろに利用し、そのリズムにのせていく」表現であり「できるだけ反復的叙述を生かし」た教材の典型例と考えられる。井上は発音の練習、文字学習のためにも反復形式を重視していた。「国びき」教材は、一面では他のさまざまな国語教材と同様、表現や文字の学習のために採択されたといえる。また、説話教材の配列上必要な「童話・伝説から、神話・史話・古典に」という流れのうち、伝説あるいは神話に相当する

教材として選ばれたと考えられるが、他に「何らかの意図」が込められていたのだろうか。

編纂趣意書には、典拠と『出雲国風土記』の該当箇所の原文が掲載されているのみで解説がなく、詳細が不明である。趣意書はこのように「何のへんてつもないように」記されたが、井上は第四期国語教科書の各巻発行に合わせた座談会や講演で教材について発言しており、その記録から各課についての詳細を知ることが出来る。巻三については国語研究会編『国語教育』一九三四年四月号、つまり新学期に教科書が使用されはじめた月に座談会の記録が掲載された。三月三日に開催された座談会であり、最も早く「国びき」について言及されたものの一つである。出席者は佐野保太郎、井上赳ら文部省図書監修官四名、師範学校訓導ら教員が四名、『国語教育』主幹の保科孝一ら雑誌同人が五名の計十三名である。座談会において「挿画」をテーマにしていたとき、「国びき」について以下のように話された。

○白鳥 この引張りよせるのは何處です、シラギですか。

○井上 西は志羅（ママ）、北は佐伎の國、東は越の國ですね。北は二度繰返して居ります。原文では——併し此の教材は志羅とか出雲とかゆうことになしに、傳説の精神を捉えたものです。

○白鳥 此方は日本の國、向うは他所の國と云うことで宜い。

○井上 敢て外國と言わなくともいゝ。

○大岡 餘り外國と云うと、朝鮮との關係に困りはしないか。

○玉井 又此の話を見れば外國とはなつて居ない。

○竹内 餘つた遠い所から取られたわけである。

○井上 原文は西は志羅の國、北は佐伎の國である。

○玉井 矢張出雲の中に求められる。東の方はツツの國、能登のツツ崎だろうとゆうが、そうゆうように今の土地とくつつけて考える必要はない。

○倉田 餘りくつつければ、よく引張つて来た、よく沈まなかつたと云うようになる。

○井上 寧ろ出雲へ行くと、地形の關係上引張つて来たとゆう傳説が起り得る。

ここで話題は打ち切られている。この発言から井上はそもそも「外国」であることにこだわる必要はないと考えていることがわかる。一方で井上と同じ図書監修官の大岡がやや危惧している点が着目される。しかしこの危惧は「外国とはなつて居ない」「餘つた遠い所」だからとして、「朝鮮との関係」は困るものではないとして処理されている。

さらに初等教育研究会編纂『教育研究』<sup>12</sup>一九三四年四月号には井上による講演の講述記録が掲載されている。「国びき」に関してはず『出雲国風土記』の話であることを断り、以下のように解説している。

出雲の国は狭い國だといふので、あつちこつち見渡して第一に西の方の新羅を引張つて來た。さうしてまた北の方の國も引張つて來、東の方の國も引張つて來た。もう一つ引張つて來て全部で四回引張つて來るが、これは歴史家にいはせると、出雲と邊りの交通といふやうなことが考へられて面白い神話だといふが、それは理屈的に考へた解釋であります。大体出雲風土記にある國引きの中で、支那からもつて來たのは杵築の岬、北の方からもらつて來たのが佐田の岬、東の高麗の國がなにがし、だから地形から考へるとあゝいふ神話も出てくる。これは大きくしまして日本の國を觀たのである。今考へれば支那からもつて來、アメリカからもつて來るといふやうに、昔話として發展的な心持とを見せる。

(傍線田中、以下同)

『出雲国風土記』原文の該当箇所にはない「支那」や「高麗」を挙げていることが着目される。「高麗」については原文「高志」の誤謬という可能性もあるが、「支那からもつて來たのは杵築の岬」の箇所は原文の「栲念志羅紀の三埼を・・・」国來国來と引き来縫へる国は、去豆の折絶よりして、八穂尔支豆支の御埼なり」であり、明らかに新羅であつて「支那」は全く記されていない。この「誤り」は井上が「新羅」と「支那」の区別を強く意識していなかったことを窺わせる。さらに舞台を「大きくしまして日本の國を觀た」ことにも、とりたてて意識は払われていないようだ。注意したいのは、日本の國への土地の引き寄せを「今考へれば支那からもつて來、アメリカからもつて來るといふやうに」と例えている点である。これは教材の「東の方のとほい国」と「西の方のとほい国」を、実はそれぞれ「發展的」に「アメリカ」と「支那」として捉えていたとも受け取れる発言である。「新羅」と「支那」の誤り、さらに「支那」「アメリカ」の例などは、満州国建国などによつて特に日中間の緊張が高まつていた時期の発言としては不用意なものとしてうつる。前述の座談会での発言とあわ

せ、井上には「外國」に対して慎重に発言するという態度があまり見受けられないのだ。したがって井上自身はこの時点ではまだ、この教材のもつ「危うさ」を強く意識していなかったと考えられる。

しかし、この教材に対しすでに「ミリタリズム」を見る視点が存在していたのである。国語教育の実践家・友納友次郎は、上述の教育系雑誌が発行されたのと同じ一九三四（昭和九）年四月に『教法精説 新読本の指導精神 尋常科用卷三』<sup>13</sup>を上梓している。友納は「国びき」についてまず『出雲国風土記』の書き下し文を掲載し「剛健な我祖先の威風、上代我國民の雄大な氣宇、生活が窺はれて、尊さと、感激と、更に現下非常時に立つ我々に強い發奮とをもたらすものがある。いゝ教材である」と記している。教材の原拠と「現下非常時」が関連づけられていくことがわかる。そして「如何にも時代精神に適合した教材である。見方に由つては、ミリタリズム的な非難が出るかも知れないが、そんなことは問題ではない。たゞどこまでも神話的な香氣を味はすべきである」と、「非難」を予測しているのである。注目されるのは、この予測される「非難」に対しての釈明が早くも記載されている点である。「注目すべきは、『あまつた土地』である。侵略的でない意圖が、はつきりと示されてゐる」。ここで「侵略的でない」と記されるが、これは教材「国びき」に対する言説で「侵略的」という表現が使用された最も早いものと見られる。さらに友納は、同解説中の「指導精神」の項目において「これを色眼鏡で見たら、面倒な問題が起きるかも知れないが、どこの國でも、國初には大概こんな傳説がある。それを兎や角いふのも野暮だし、氣にするのも愚であらう」と解説し「面倒な問題」の発生を予測しながらも、問題にすること自体を切り捨てている。さらに「指導要項」の項目では「文中の『あまつた土地』の意味に注意し、むやみに侵略したのではない事に氣づかせ、正義日本の堂々たる國柄を傷つけぬやうに注意したい」と指導している。ここには「余っているのだからかまわない」という都合の良い解釈がなされ、「正義日本」の正当性が主張されていると見られる。そして、この「あまつた土地」と「（だから）侵略したのではない」という言葉の組み合わせは、以降の教材解説や批評に現れてゆくのである。たとえば『国語教育』（一九三四年五月）誌上では

これは明らかな平和主義である。決して侵略主義、兵力主義ではない。あまつた土地を有効に使ふことは、天の命に從ふのである。今日の國際關係上、必ずしも適當でないと心配する者があるが全く無用である。<sup>14</sup>（圈点ママ）

と説明された。さらに『教育研究』（一九三四年六月号）では、座談会形式の報告が掲載され、そこでは佐藤末吉と田中豊太郎、小林佐源治が次のように発言している。

佐藤末 餘つた土地の意味が出雲風土記にはつきり書いてある。やはり日本民族の・・・難しくいふと國民性國民思想といふこと、それが侵略主義でないといふところが自然に現はれたものであらう。

田中豊 生々發展の神だね。

佐藤末 風土記には剩つた土地と書いてあるが、さういふやうに考へるところが國民性の表れと見られる。

小林佐 何處からか奪つて來なくちやといふことではなく、寧ろ未開のところがあつたからとつてきた、またさういふことのあつた時代だから、本の通りがいいだらう。今でこそ土地が狭まく人が多いから地面をほしいなら奪つて來なくちやならぬだらうが。

佐藤末 併し剩つた土地を神様が引き寄せて、國土を擴張し、國權振長を計るといふことは中々面白い。<sup>15</sup>

ここでも「侵略主義でない」ことと、あくまで余つた土地を引き寄せることには何等問題のないことが語られている。編纂者の井上は当初、「侵略主義」や余つた土地という表現自体使用していなかつたが、教育現場にいる教師たちは早くも使用していたのである。無論そのすべては、教材を肯定的に受け止める文脈での使用であつた。そして教科書発行から二年後に刊行された教材研究書である『小学国語読本綜合研究』では、最初は「外国」に対して注意を払っていなかったと見られる井上自身が次のように主張している。

やゝもすれば、これを目して侵略主義といひたがる。しかし、この神話のどこに侵略主義的な覇者の精神が謳はれてゐるであらうか。「国之余有邪見者、国之余有詔而」と常にことわつてある。人の国を侵すのでは決してない。<sup>16</sup>

これまで示してきたように、侵略的という批判は戦後のものではなく、教科書発行間もない同時代に生じていたのである。そして二年後にもまだ、教材の担当者である井上自身が「火消し」を行わざるを得ないという状況であつたことが窺えるの

だ。

あらためて『出雲国風土記』の原文にあたれば、確かに井上の主張通り侵略という強い意図は見えてこない。しかし仮に井上自身にこのような意図がなかったとしても、当時の日本は「侵略主義的な覇者」たらんとして大陸に向かっていたのである。时期的に、この教材を掲載すること自体、侵略の正当化の伏線と受け止められる可能性があったことは否めないだろう。編纂趣意書と『小学国語読本総合研究』の両書に原典の該当箇所が全文掲載されていたことから、教師は朝鮮の岬を引き寄せたという知識を得ていたと考えられる<sup>17</sup>。この情報を児童に与えるかどうか、与える場合にはどのように伝達するかは教師の裁量に大きく左右されていたと考えられる。井上がこの神話に「夢や空想」を見出し児童に適した教材であると考えたとしても、その「夢や空想」は大陸進出への現実的なものにすり替えられる時代であった。

次の巻四第二課「早鳥」も「国びき」と同様「風土記」から採択されている。ただし『播磨国風土記』逸文であり、『日本紀』巻八に掲載された説話である。その内容は、仁徳天皇の時代、明石の御井のそばに巨大な楠があり、その楠で船を造ったところ非常に速く走るので速鳥と名付けた。朝夕この舟は、天皇の食事に供える御井の水を運んでいたが、ある朝、食事に間に合わなかった。そこで、歌を作り水を運ぶことを止めた――。このような話で原文は短いものだが、教材は楠が大きく成長する様子やその巨大さの説明、切り倒す場面や船に造って漕ぐ様子などを詳しく描写し、長い文章に変わっている。編纂趣意書は「速鳥」の伝説に拠って作つたもの」としており、ほかの神話教材や古典教材のような「出所、書名」という明記とは異なることから、新しく構成しなおされたことが明らかだ。教材は、巨大な楠のせいで日陰になって村の人たちが困っているため、これを解決するという筋立てとなっている。木を切る、船を造る箇所は人々が協力し合うことの大切さを、邪魔とした木を捨てずに船として活用する場面では知恵を使うことや資源活用の重要性を説くといった道徳的な教材として扱われたと考えられる。話の最後は、困っていた村が次第に豊かになっていったという円満解決で締めくくられている。原文では朝夕天皇の食事のために使われた船だが、教材では「たくさんのお米や麦や豆やくだものをつんで、みやこのほうへたびく通ひました」とされ、天皇のためとは記されていない。このように、天皇中心の原典を、あえてそうではないかたちに「作つた」教材もあつたのである。

巻五第十三課「少彦名のみこと」は、オホクニヌシの国づくり譚で登場する神である。

『古事記』に拠れば次のような話である。ある日海の向こうから小さな船に乗った小さな神がやってきた。オホクニヌシ



は神の名がわからずヒキガエルや案山子に尋ねると、スクナビコナであるという。スクナビコナとオホクニヌシは兄弟の契りを結び、協力して「国づくり」を行う。国づくりを終えたあと、スクナビコナは常世の国に去る。

編纂趣意書には、この教材は「出所、古事記及び日本書紀」とある。原典にあたると、スクナビコナが現れるくんだり、またその名を知る場面までの流れは『古事記』に拠っている。その後の「兄弟」による開墾や土木工事、病氣治療の説明、最後にスクナビコナが粟にはじかれ飛んでいく箇所は『日本書紀』に依拠していることがわかる。

その一方、教材独特の箇所もみえる。それはスクナビコナが去る前にオホクニヌシと会話をする場面であり、以下に引用する。

「私は、いつまでもここに居るわけにはいきません。これで、おいとまいたします。」

大國主のみことは、おどろいて、

「どうして。どこへお出でになるのですか。」

「遠い所へ行きます。」

「何しに行くのです。」

「新しい國を開きに。」

スクナビコナは、どこか遠くの場所へ新しい國を開きに行くのだと口にする。この場面に関して井上は、教科書発行直後の一九三五（昭和十）年四月には「發展的な意義を持たせた。國を開くために常世の郷へ行かれたといふのがそれであります」とのみ記している。<sup>18</sup>ところがこの解説から二年後には、やや論調を変更し詳しく述べている。「書紀には常世國とあるから一種の理想郷、又は遠い外國へ行かれたといふ解釋も起る。田道間守の行つた常世國は支那であると考へられる。本教材はこれを海外發展的に解釋して、「遠い所へ國をひらきに」行かれたといふ風に表した。史家中にはさういふ解釋もあるのであるから。」<sup>19</sup>

このように井上は、歴史家の解釈を援用してまで「海外發展的」と修正したのである。当時の対外情勢に目を向ければ、一九三五年までに「試験移民」として満州国へ第四次までの移民が行われていた。満州では治安が悪いため武装が必要であり、

開拓といえども自然条件が農業に好適ではないことから試験的な移民として行われたのであった。満蒙開拓は、一九三六（昭和十一）年に広田弘毅内閣が七大重要国策の一つとして、満州へ開拓移民を二十年間に一〇〇万戸五〇〇万人を送出するという計画を発表したことから本格化した。つまり井上の教材解説の変更時期は、満蒙開拓の国策化に照応したものである。『少彦名のみこと』の本文には、このような記述がある。

二人は、兄弟のやうに仲よくなさいました。心を合はせて、野や山を開いて田や畠にしたり、道をつけたり、川に橋をかけたなりなさいました。

井上は国土開発を記した箇所を「説話興味の外」とするが、教材における開墾、開発の風景を「海外發展的に解釈」すれば、満蒙開拓の姿が浮かんでくるのではないだろうか。

巻五第二十一課「天孫」は、アマテラスの孫である「にぎのみこと」が天降る場面の話であり、アメノウズメとサルタヒコのやりとりが中心となっている。

この教材も編纂趣意書によれば「古事記及び日本書紀」であり『古事記』が先にあげられている。しかし教材冒頭のアマテラスの言葉は以下の通りである。

「日本の國は、わが子孫が治むべき國である。汝、行つて治めよ。天皇の御位は、天地の続くかぎり、いつまでもさかえるぞ。」

これは『日本書紀』の一書にある「天壤無窮の神勅」を基にしている。また、サルタヒコの描写や、ウズメとサルタヒコの間答の展開なども『日本書紀』に従っており、『古事記』に拠った部分を見いだすことが難しい。

『日本書紀』に基づいたアマテラスの「神勅」は、高学年の国定国史教科書、<sup>21</sup> 国定修身教科書にも掲載されている。<sup>22</sup> したがって、まず三年生の国語科で当教材「天孫」を用いて「天壤無窮の神勅」を学び、後に五年生の国史と修身で同箇所を詳しく理解するという構成となっている。同教材は「天孫の御威光の偉大さが物語られてゐる」<sup>24</sup> ものであり、各科の教科書を

通じて繰り返し学ぶことによっても「明らかなる國家精神を植ゑつけようと意圖されてゐる」といふよう<sup>25</sup>。

同巻第二十五課「二つの玉」はいわゆる海幸彦・山幸彦の説話である。

この話は『古事記』に拠れば、次の通りである。兄神・ホ德里ノミコト（海幸彦）と弟神・ホヲリノミコト（山幸彦）はそれぞれ海と山で獲物を穫っていた。ある日ホヲリが道具の交換を持ちかけ、最初ホ德里は断るが交換に応じる。ホヲリは海でホ德里の釣針を無くしてしまふが、ホ德里はしつこく返却を要求する。ホヲリが海辺で困っていると神が現れ、海神の宮への道筋を助言する。海神の宮に着いたホヲリはそこで海神の娘と結婚し三年間を過ごす。ホヲリはある日釣針のことを思い出し、海神の助けを得て釣針を取り戻し地上に戻る。ホヲリはホ德里に釣針を返し、海神にもらった二つの玉を用い、かつてしつこく自分に返却をせまつたホ德里を懲らしめる――。

この教材も編纂趣意書は「古事記及び日本書紀」に拠ると記し、二人の名については『古事記』に依拠したという。教材本文で確認すれば、弟・ホヲリの方から道具の交換を持ちかけている点、「年とつた神」が弟に細かく指示する点など『古事記』に拠っていることがわかり、『日本書紀』に拠つた部分は見出せない。

教材では、いくつかの変更点が認められる。まず、海神の娘と結婚するくだりが省略されている。そもそも海神の娘が登場せず、召使いと思われる「女」が登場するのみなのだ。結婚の省略は、教材のテーマである「兄弟」の神という設定から話題をそらさないための工夫と考えられる。

二つめに、ホ德里がホヲリによつて懲らしめられる場面が削除されている。「海幸彦・山幸彦」の話は、巖谷小波の『玉之井』として明治期に登場<sup>26</sup>して以来、児童にとつて親しみのある昔話のひとつであった。そのため同時期の児童向け歴史読本等にもこの話は掲載され、内容を既に知っていた児童もいたと推測される。しかし、教材では末尾が次のように変更された。

命は、此の玉を持ち、大きなわにぎめに乗つて、もとの海へおかへりになりました。さうして、兄神に釣針をお返しになりました。兄神は、大そうお喜びになつて、

「どうもありがたう。ほんたうに、むりな事を言つてすまなかつたね。」とおつしやいました。

其の後、命は、二つの玉で悪者どもを平げ、よく国をお治めになりました。

この変更について、編纂趣意書は「原話によれば、最後に火照命が火遠理命に苦しめられる事になって居るが、此の文に於ては、兄弟仲よくせられた事に書改めた。」と解説する。『小学国語読本総合研究』では「兄弟不和の話は教育上面白くないから」変更したと説明する。<sup>27</sup> 同時期の修身教科書をみると「兄弟」という教材が掲載されており、仲良くすべきことが説かれていた。したがって、「兄弟の神様」の不和しかも年下の弟神が年上の兄神を懲らしめるという結末が好まれなかったのは当然だろう。そのため「二つの玉」は、悪者退治に使われている。



図1 『小学国語読本』「二つの玉」

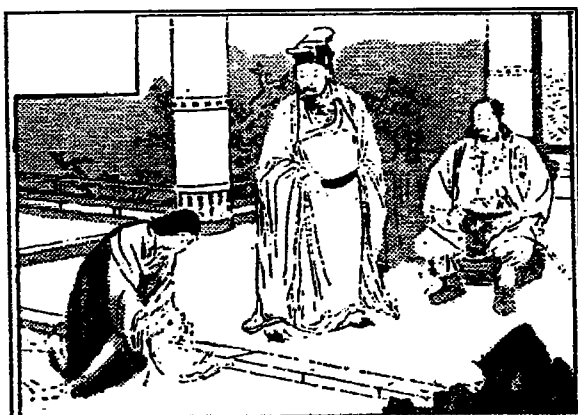


図2 『小学国語読本』「二つの玉」

会いの場面であり、洋画家の青木繁や日本画家の飛田周山等が画題として取りあげた場面でもある。<sup>28</sup> これらの絵画では異国の女性との運命的な出会いといったモチーフが描かれているが、教材においては前述の通り海神の娘としての女性は登場しないこともあり、挿絵は男女の出会いを表してはいない。この絵は井戸の水にホヨリの姿がうつり、水汲みの女が驚くという文章を補助するものとして機能しよう。図2は、右手奥にホヨリが椅子に腰掛け、画面中央に異国風の衣装をまとった海神が立っている。画面左に、鯛を押さえて腰をかがめている女がいる。この、右手奥にホヨリ、中央に海神、左手前に鯛という位置関係は、明治期の児童向け『古事記』や歴史本の挿絵によく見られるものである。早くは前述の一八九四（明治二十七年）発行の巖谷小波『玉乃井』に認められ、大和田建樹『日本開闢』（一八九六）、遊佐誠甫『神代の話』（一九〇〇）の挿絵も同様の配置で描かれている。<sup>29</sup> 特に『日本開闢』の挿絵（図3）とは、座るホヨリに対し立つ海神、画面右手前の岩、



図3 『日本開闢』の挿絵

後ろの珊瑚、奥の太い柱、一段上がった場所にいるホヲリと海神など、類似点を指摘できよう。

巻五の神話教材を通して考えると、「少彦名のみこと」で国を開き、「天孫」で国を治めに行くことを記し、「二つの玉」で「よく国をお治めになりました」と締めくくられていることになる。巻三の「国びき」も加えれば、国土拡張、開墾、経営、統治と体系づけられて構成されていることがわかる。

巻十一第十一課の「皇国の姿」は、三連で構成された詩である。

第一連で皇孫による日本の統治と皇位の永続を歌い、第二連で、神の子、代々の天皇が治める日本は「神と人和らぎむつび／天と地とはに幸あり」として平和と幸福を示す。第三連は、日々進歩する日本の人の世の力は「高皇産霊・神皇産霊の、／かしこしや、産霊のみわざ」と記す。

この詩の典拠を考えてゆくと、第一連前半のアマテラスの「神勅」は『古事記』『日本書紀』にあるが、後半の「御位はいやさかえまし／天壤ときはみなからん」という部分は『古事記』ではなく『日本書紀』に基づいたものである。第三連の「高皇産霊・神皇産霊」は『古事記』と『日本書紀』一書に登場する神であるが、漢字表記は『日本書紀』に即している。したがって、この教材は、『日本書紀』により多く依拠しているといえる。

「産霊」は、天地万物を産み成す霊妙な神霊の働きをあらわすとされ、神道において重要な観念とされる。したがって第三連はこの産霊のわざによって、日本人の力は進歩するのだという歌であり、編纂趣意書は次のように解説する。

我が古代思想に基づいて、神人の和を述べた詩である。神勅によって神人が永久に結ばれてゐる我が国には、西洋神話に見るやうな神人の不和鬭争といふものが絶対に存しない。従つて人類の進歩発展は、西洋神話の如く宿命的に罪惡と観ぜられた智慧に基づくのではなく、総べて「産霊」の御業と観ずる所に、我が独特無比な神人観があることに注意すべきである。

西洋には鬭争や罪惡が存在するのに対し、我が国には和があり産靈のわざが存在するためにそのような觀念はない、ということが語られている。

高皇産靈と神皇産靈の神の名は、国定化以前の検定教科書に見られたが、それ以降は姿を消していた。したがって、この教材で「高皇産靈・神皇産靈」が復活したといえる。この「産靈」の復活には、本教材の発行の前年にあたる一九三七（昭和十二）年に文部省から発行された『国体の本義』（内閣印刷局）からの影響が見受けられる。『国体の本義』第一の「四、和と「まこと」」では、西洋と日本における神と人との関係について以下のように記されている。

西洋の神話に現れた、神による追放、神による処罰、嚴酷なる制裁の如きは、我が国の御事とは大いに相違するのであつて、こゝに我が国の神と人との関係と、西洋諸国のそれとの間に大なる差異のあることを知る。（中略）我が国に於ては、神は恐しきものではなく、常に冥助を垂れ給ひ、敬愛感謝せられる神であつて、神と人との間は極めて親密である。

先に引用した編纂趣意書の前半部分には、この『国体の本義』の文言が反映されているよう。また「産靈」に関しては、『国体の本義』引用箇所直前に「和によつて我が国の創造発展は実現せられる。「むすび」とは創造であるが、それは即ち和の力の現れである。「ものが相和してそこにむすびがある。かくて君臣相和し、臣民互に親和して国家の創造発展がなされる。現下の問題たる国家諸般の刷新改善も、亦この和によるむすびでなければならぬ。」とある。編纂趣意書では「人類の進歩発展」が「産靈」によるものと変更されているが、日本独特の「産靈」の力が創造や発展を生み出すという主張は同じといえる。以上のように教材には『国体の本義』からの影響を指摘でき、それは国語科だけではなかつた。<sup>30</sup>

同巻第十二課の「古事記の話」は『古事記』の「序」の一部を簡潔にまとめたものである。具体的には『古事記』編纂の動機や、言葉を文字にあらわす当時の困難、『古事記』の内容や価値について述べている。

注目されるのは「天の岩屋、八岐のをろち、大国主命、天孫降臨、二つの玉等の神代の尊い物語を始め、神武天皇や日本武尊の御事蹟、其の他古代のすべての事が古事記にのせられて、今日に伝はつてゐる。」と記されていることである。なぜならこの文章によって国語教科書掲載の神話などの古代の話がすべて『古事記』に拠つたものと保証されるためだ。しかし

実際は、これらの教材には『日本書紀』を取り混ぜた作品も多く、また「国びき」「早鳥」のように「風土記」に拠った作品もあるのはこれまで考察してきた通りである。

この「古事記の話」がどのように『古事記』を位置づけているか考えてみたい。「我が国初以来の尊い歴史であり、文学」と語っている。ここでは、最初の正史である『日本書紀』は一顧だにされない。歴史であると同時に文学である、という点に『古事記』の貴重性が置かれている。また、教材本文は最後に「我々は今日古事記を読んで、国初以来の歴史を知ると共に、其の言葉を通して、古代日本人の精神をありくと読むことが出来るのである。」という言葉で締めくくる。『古事記』は児童達にとって、歴史と古代日本人の精神を知るための書として位置づけられている。

このような、正史『日本書紀』を殆ど顧みない『古事記』重視に対し、第四期の全十二巻発行後に「古事記びいき」を指摘し再考を促す声があった。国文学者の橋純一によるものである。しかしその声は例外的なものであり、多くの教育者たちは編纂趣意書を受け入れ『古事記』を「既習教材神話教材の数々の原據である」として児童に与えていたのである。<sup>32</sup>

「サクラ読本」の発行年に小学一年生となった教育研究者の福田隆義は、教科書に掲載されたこれらの『古事記』関連教材を物語としてではなく「御事蹟」であり「尊い歴史」として教えられた」と回想する。<sup>33</sup>井上赳が古典を尊重しよう、歴史を発展的に体系立てようという教育的な理想をもって「サクラ読本」を編纂したのだとしても、受け止める児童達にとってこの教科書は、天皇の威徳や皇室の尊い歴史を語るものとしてそこにあったのである。

## 二『初等科国語』と忠義

最後に、第五期国定国語教科書『初等科国語』について見てゆく。次の表に示したように巻二第一課「神の剣」と同第五課「田道間守」の二つの教材が掲載されている。

同	五	田道間守	同
二	一	神の剣	一九四二（昭和十七）年
巻	課	教材名	発行年

卷二第一課「神の剣」は、神武天皇の東征譚における「タカクラジの剣」の場面を取り上げている。

この話は『古事記』『日本書紀』の両方に記されるが、両書での展開はやや異なる。『古事記』の展開は次の通りである。熊野で、神武天皇軍の前に熊が出現する。この熊の毒気によって神武と兵士が気を失う。そこにタカクラジが剣を持って現れ神武に献上する。神武が目覚まし、悪神がひとりで切り倒される。寝ていた兵士が目をさます。タカクラジが夢の内容（剣の由来）を語る。一方『日本書紀』では、タカクラジが登場し夢の内容を説明する部分が剣の献上の前に置かれ『古事記』と順序が異なっている。

第五期で初めて発行された教師用の国語教科書によれば、「古事記及び日本書紀に原拠」があるとし、これらを素材として「単に原文の趣そのままを書き下したのではなく、天皇の御遭難、高倉下の霊夢、神劍の献上の三段に仕立てて劇的に構成したという。同書の教材についての解説の中では「古事記によれば」として四箇所を引用し、一方「日本書紀には」の部分は一箇所であるため、『古事記』により重点を置いた教材であることが窺われる。

教材の話の展開を見るかぎり『日本書紀』に沿ったものであるものの、冒頭部分の「大きな熊が山から出て来て、すぐ、またかくれてしまひました。」と末尾の「あの熊になって出て来たわる者たちは、この剣で、みんな殺されてしまひました。」が『古事記』に拠っていることがわかる。

付言すれば、第五期国定教科書の発行前後に出版された神武東征譚を含めた児童向け『古事記』や歴史読本は数多い。それは、この第五期の教科書の準備期間と考えられる一九四〇（昭和十五）年が皇紀二六〇〇年とされ、神武天皇関連の書籍が集中して発行された時期だからである。児童書だけではなく『古事記』『日本書紀』関連の注釈書類も多数発行された。一九四〇年は全国各地で提灯行列や音楽行進が行われた年であり、この影響もあって神武天皇の存在は広く知られていた。同巻第五課「田道間守」は、垂仁天皇の代にタジマモリが「遠い外国」へ橋を探しに行き、手に入れて戻ったものの天皇はすでに崩御しており、その陵の前で泣き叫び死んだという話である。

『古事記』『日本書紀』両書に記されている話であるが、展開が両書ともほぼ同じであり、どちらを主として教材に仕立てたのか判然としない。教師用教科書も両書の所伝に拠ったとする。具体的な依拠を教材本文中で指摘すれば、タジマモリが橋を探す期間を十年、天皇の崩御がタジマモリ帰還の前年と、具体的な年を記している点は『日本書紀』に拠っている。



一方、持ち帰った橋を半分に分ける部分と、御陵の前でのタジマモリの言葉の短さは『古事記』に依拠している。

『古事記』『日本書紀』にはない教材独特の箇所を指摘したい。まず、タジマモリという人物を説明した「田道間守は、昔、朝鮮から日本へ渡って来た人の子孫でした。しかし、だれにも負けない忠義の心を持ってゐました。」の部分である。この部分は、天皇への忠誠心を強調するために追加された文章と考えられる。ほかには、タジマモリが亡くなる場面である。『古事記』『日本書紀』では天皇陵のほとりで「泣き叫び死んだ」と記されるのみだが、教材では文学的な誇張が施され「泣いて泣いて、泣きとほした田道間守は、みささぎの前にひれふしたまま、いつのまにか、つめたくなつてゐました。」と記されている。

教師用教科書によれば「本教材の精神は、彼の無二の誠忠」にあり、「帰化人の子孫をして、全く真の日本人になりきらせてしまふ皇国のありがたき姿」を描き出す点にあるとする。第一課「神の剣」の話もタカクラジの忠臣ぶりを描いており、この第五期国定国語教科書にはじめて採録された『古事記』関連教材の特徴は「天皇への忠義」と見てよいだろう。戦時下において「天皇への忠義」の精神を教育するためにふさわしい素材として、これらの話が教材化されたと考えられる。



以上、国定国語教科書における『古事記』関連教材は、原典からどのように書き換えられているのか、そしてどの上代文献に依拠しているのかという問題を提起し、改めて各教材を検討してきた。その結果、『古事記』あるいは『日本書紀』に依拠したことがわかるもの、両書のどちらに拠ったのか判然としないもの、両書を取り混ぜ、その比重がどちらか一方に偏っているもの、「風土記」によるものなど、様々な型が認められた。『日本書紀』のみに依拠した教材（第一期「伊勢神宮」「草香幡梭姫皇后」、第二期「ノミノスクネ」「小子部のすがる」など）の数に比べると、『古事記』のみに依拠した教材（第四期「二つの玉」「古事記の話」など）の数は少ない。むしろ各期の編纂趣意書が典拠を「日本書紀及び古事記」など示したように、両書を取り混ぜたかたちの教材が多いことがわかった。そして原典にはない文章を追加する、結末を変更するなど、教科書独自の話として編集された教材も認められた。

このような、原典が教材化される際の変容はなぜ生じたのであろうか。

この疑問に答える前に、その変容の仕方について述べておきたい。教材化される際の変容の仕方は、大きく二つに分類できる。まずは、単語や文章を平易に書き換え簡潔にし、省略を施すことである。たとえばクマノを「ワルモノドモ」と記したり、「国びき」で引き寄せる土地を半分減らしたり、具体的地名を記さないなどが該当する。このような簡易化、省略の理由としては、児童の年齢や理解力に配慮していること、教材一課あたりの分量が短く設定されていることが考えられる。これらは教材化にあたっての必須の作業といえよう。<sup>34</sup>

もうひとつは、前述のように、原典にない部分の追加および内容の変更である。具体的には、特にアマテラスや「三種の神器」との関連を強調する文言、天皇の寛大さや威光を示す表現の追加、兄弟が仲直りするなど道徳的な行動への変更などが該当する。このような追加と変更が行われた理由は、皇祖神アマテラスおよび天皇を中心・頂点とした国家体制を構築し、忠節なる皇国民を育成するためであったと考えられる。これこそが国家の意図であり、「教育」であったといえよう。

このような教育方針・目的を第一としたために、『古事記』『日本書紀』を適度に取り混ぜ、さらに教科書独自の文章を追加し、変更することになったと考えられる。原典からの書き換え行為は、国家による強固な教育方針に基づくものといえるが、歴史書であり「神典」である『古事記』『日本書紀』を作りかえるという行為でもあるのだ。天皇家の由来と天皇家による日本国支配の正当性を語る『古事記』『日本書紀』といった文献を、国家が教育を名目に都合よく利用していたことになる。教材を作成し監修する体制側は『古事記』『日本書紀』に対して、両書を混ぜていることから、個別資料ではなく一括して「記紀」として扱う意識が見てとれる。また、教育を目的とした文章の追加や変更などの「加工」する行為は、「記紀」をあくまで教材作成用の一資料として受け止めていたことを示している。その受容態度は、たとえば鈴木三重吉が『古事記物語』の序文に記したように『古事記』や天皇を崇拜するといったものではなく、「教育のために「記紀」を利用する」という計算的なものであったと考えられる。そして、わかりやすく且つ天皇崇拜が強調された教材を、児童たちは受け入れていったのだ。

1 「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」から始まるため通称「サクラ読本」とされる。

2 「所収教科書解題」(海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第七巻 国語(四)』講談社 一九六三年十一月)

3 文部省編「小学国語読本尋常科用編纂趣意書」(仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫『近代日本教科書教授法資料集成第十一巻編纂趣意書一』東京書籍 一九八二年九月所収)

4 井上尠著 古田東朔編『国定教科書編集二十五年』(武蔵野書院 一九八四年五月)

5 井上尠「一 天の岩屋 要説」(『小学国語読本総合研究 巻五(第一冊)』岩波講座国語教育 岩波書店 一九三七年三月)。「小学国語読本総合研究」は第四期教科書の教師用指導書の役割を果たしていた。

6 井上は大正十四年から十五年の一年間、欧米に在留し各国の国語教育事情、国語教科書の調査を行った。その際イギリスで学んだ古典重視の初等教育に感心し、編修にいかした。井上前掲書に詳しい。

7 「神話の世界への入り口となった「国引き」はイザナギ・イザナミの「国生み」とともに、高学年における日本の領土拡大政策―侵略戦争賛美の比喩としての伏線であった。」入江曜子『日本が「神の国」だった時代―国民学校の教科書を読む―』(岩波新書 二〇〇一年十二月)

8 かつては事件発生地が「柳条溝」として教科書等にも「柳条溝事件」と掲載されたが、これは伝えられた際の誤りであり正しい地名は「柳条湖」であることが一九八〇年代に判明した。現在は「柳条湖事件」とされる。

9 入江前掲書による。

10 井上前掲書による。

11 国語研究会「新読本巻三研究会」(昭和九年三月三日開催)出席者は文部省図書監修官・佐野保太郎、井上尠、大岡保三、各務虎雄。東京高等師範学校訓導・高橋喜藤治、東京女子高等師範学校訓導・坂本豊、成蹊学園訓導・西原慶一、東京市岩淵第四小学校長・白鳥千代三。『国語教育』主幹・保科孝一、雑誌同人で東京高等師範学校教授の玉井幸助、同人の倉田八十八、下山患、雑誌編輯主任・竹内文路。『国語教育』は一九一七(大正六)年創刊。主幹の保科孝一は第一期国定教科書編纂に参加した。なお保科はこの巻三発行の同年(一九三四年)に設置された国語審議会に幹事として就任している。

12 『教育研究』は東京高等師範学校附属小学校(現在の筑波大学附属小学校)の初等教育研究会による機関誌。一九〇四(明治三十七)年四月創刊。

13 友納友次郎『教法精説 新読本の指導精神 尋常科用巻三』(明治図書 一九三四年四月)

14 国語研究会「新読本巻三合評」内、東京高等師範学校訓導・佐藤末吉による。『国語教育』一九一五(一九三四年五月)

- 15 国語研究部国語読本巻三の研究と指導」(『教育研究』四一九(一九三四年六月))
- 16 井上越「十一 国びき 要説」(『小学国語読本総合研究 巻三(第三册)』(一九三六年))
- 17 教師にとって、原文の研究は重要とする意見も出されていた。徳田進「巻三「国引き」の原拠性と教材性」(『児童教育』三十二―五 一九三八年五月)
- 18 井上越「小学国語読本巻五編纂精神と解説」(『教育研究』四三三号 一九三五年五月)
- 19 井上越「十三 少彦名のみこと 要説」(『小学国語読本総合研究 巻五(第三册)』一九三七年五月)
- 20 前掲井上「十三 少彦名のみこと 要説」による。
- 21 第一期から第四期の国史教科書すべてに掲載されている。第一期は高等小学一年(年齢は小学校五年に相当)、第二期からは尋常小学校五年の最初に学習した。
- 22 修身教科書については第一期から三期では忠君愛国・万世一系は説かれていたが「神勅」そのものの掲載はなかった。第四期の五年生用教科書『尋常小学修身書』巻五・第一課「我が國」で初めて「神勅」の書き下し文がそのまま掲載された。
- 23 国定化直前の検定国語教科書にも掲載されている。金港堂『尋常国語読本 巻六』第一課「我が國の昔話」、同『高等国語読本 巻一』第二課「三種の神器」など。
- 24 島津久基「二十一 天孫 解釈」(『小学国語読本総合研究 巻五(第五册)』(一九三七年七月))
- 25 前掲島津「二十一 天孫 解釈」による。
- 26 巖谷小波・小林永興画『玉乃井』日本昔噺二(博文館 一八九四年八月)
- 27 大岡保三「二十五 二つの玉 要説」(『小学国語読本総合研究 巻五(第五册)』(一九三七年七月))
- 28 青木繁「わだつみのいろこの宮」(一九〇七年)、飛田周山「わたつみの宮」(一九一五年)。
- 29 大和田建樹・山田敬中画『日本開闢』日本歴史譚一(博文館 一八九六年二月)、遊佐誠甫・柿山陽谷画『神代の話』少年書類第二編 歴史修身談第一巻(開発社 一九〇〇年十二月)
- 30 たとえば一九三八(昭和十三)年から使用された『尋常小学修身書』巻五に、『国体の本義』からの影響が指摘されている。橘与志美「第四期国定教科書時代における教育と思想に関する研究」(『大東文化大学紀要』四一 二〇〇三年三月)による。

31 橋純一「小学国語読本の古事記偏重」(『国語解釈』第三十三号 一九三八年十月)。「小学読本における神話教材は古事記一色で塗りつぶされている。これが果して適当な公平な態度であらうか」「日本書紀に対しては一言隻句をも費してをらぬのは、あまりに偏頗不見識の所行と言はねばならない」とする。

32 河野伊三郎・徳田進・原田直茂・竹内文路「新読本卷十一合評」内の徳田による発言(『国語教育』第二十三卷第六号 一九三八年六月)

33 福田隆義「『サクラ読本』一期生の弁」(『文学と教育』一九四号 二〇〇二年四月)

34 教材化に限らず児童向けに「再話」を行うときにもこのような簡易化、省略は行われる。第一章第一節、第二節の「児童向け」の項参照。

### 第三章 『古事記』を題材にした小説と戯曲

#### 第一節 神々を主人公とした小説の登場

本章では、近代における『古事記』の享受の状況を探るため、『古事記』や『日本書紀』を題材にして執筆された小説及び戯曲について取りあげる。

明治期までは、『古事記』や『日本書紀』に登場する神や人物の話は「史談」「史伝」として記されてきた。特に有名な神、偉大な天皇たちの話が「史実」のように書かれてきたのである。たとえば明治時代半ばに発表された史伝「神功皇后の征韓」には「斯るうちに、天皇俄然として崩れさせ玉ひ、皇后の御嘆き尽きがたしとは雖ども、御子尚ほ懐胎に居まして、遺志を嗣ぎ奉らんもの、皇后の外にあらざれば、皇后は則ち毅然として自から大ひに任じ玉ひける」という箇所がある。これは『日本書紀』の「時に皇后、天皇の、神の教に従はずして早く崩りましたことを傷みたまひて、以為さく、崇れる神を知りて、財宝国を求めむと欲す」「時に、適皇后の開胎に当れり」などの記述をもとに執筆されたと考えられる。このように「史談」類は口語訳ではないため原典そのままではなく、語順の入れ替えや人物描写の賞賛等の形容を誇張するレベルの書き換えが行われている。しかしストーリーや登場人物を変更するような、原典を大きく逸脱する改変は見受けられない。ところが大正期に入ると、「史談」「史伝」の範疇にとどまらない作品が生み出されている。それは『古事記』『日本書紀』に記された神や人物を主人公とし、その内面を多く書き込んだ「小説」である。

本章では、近代の作家たちが執筆した『古事記』『日本書紀』等を題材とした小説と戯曲について、作家たちによる上代文献の活用すなわち受容という観点を踏まえて考察を試みる。彼らが上代文献のどのような部分に着目し参照し創作したのか、作品及び他の記録等から探ってみよう。

これまで上代文学研究の場においては、『古事記』や『日本書紀』を素材とした近代の小説や戯曲といった「創作」は研究対象としてほとんど顧みられてこなかった。そのことは、近代に刊行された『古事記』のテキスト、注釈書、研究書類が

ほぼ網羅されている『古事記研究文献目録』に小説・戯曲等が掲載されていないことから明らかである。しかし『古事記』の享受という観点からは、注釈書や研究書という基本的に研究者を対象とした書籍類のみならず、それら以外の（一般人々）に読まれた「創作」にも着目すべきであろう。本章における「創作」作品の紹介及び考察によって、作家によって広い層の人々にもたらされた『古事記』の享受の一端を確認することが出来るよう。

本研究において『古事記』『日本書紀』を素材とした小説、戯曲を取りあげるにあたり、改めて近代に発表された作品の調査を行った。その結果、先行研究のうち最もまとまった成果である「古典に取材した近代文学目録」に新たな作品を追加し、修正を加えることが出来た。

明治時代から一九四五（昭和二十）年の終戦時までの『古事記』『日本書紀』を題材とした作品の発掘の方法として、『現代日本文芸総覧』『現代詩誌総覧』『近代婦人雑誌目次総覧』『戦前期四大婦人雑誌目次集成』『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』『書物関係雑誌細目集覧』『明治雑誌目次総覧』『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』『日本近代戯曲の世界』『近代日本戯曲史』『演劇年鑑』のほか、該当期間の読売新聞及び東京朝日新聞CD-ROM、また国立国会図書館蔵書検索等を活用した。ほかに先行研究等から辿った場合もある。

これらの発掘調査から得た『古事記』等を題材にした小説及び戯曲は、以下の一覧表の通りである。

『古事記』等を題材にした小説（発行年順）

※単行書のみ発行所を記載した。

タイトル	著者	雑誌名・巻号	発行所	発行年月
『日本神話 国びらき』	碧瑠璃園	『大阪毎日新聞』夕刊	大鑑閣	1913（大2）年10月
『素盞鳴尊』	芥川龍之介	『東京日日新聞』		1920（大9）年 3月30～6月6日
『夢殿』	中里介山	『日本及日本人』799		1921（大10）年1月
		『改造』9   6   9		1927（昭2）年6月～9月
		『祖国』2   1   6		1929（昭4）年1月～6月

「黒姫」	近藤栄一	『白樺』13   2		1922 (大11) 年2月
「神人東征」	中里介山	『日本及日本人』833		1922 (大11) 年4月
「兎と大國主の命」	近藤栄一	『東京朝日新聞』		1922 (大11) 年10月18   31日
「速須佐之男命」	近藤栄一	『新小説』27   12		1922 (大11) 年11月
「大國主の命と其兄弟達」	近藤栄一	『白樺』14   1		1923 (大12) 年1月
「根の堅洲国に於ける大國主命」	近藤栄一	『白樺』14   2   3		1923 (大12) 年2月   3月
『物語日本史』5卷	碧瑠璃園		大鑑閣	1923 (大12) 年5月   1926 (大15) 年10月
「輕の太子」	近藤栄一	『新小説』28   8		1923 (大12) 年8月
「大國主の神」	武者小路実篤	『女性改造』3   3	聚芳閣	1924 (大13) 年3月
『沙本姫』(新作家叢書 第4)	近藤栄一			1924 (大13) 年5月
「須佐之男の命と大國主の命」	武者小路実篤	『不二』1   3		1924 (大13) 年6月
「大雀命」	長与善郎	『不二』1   6		1924 (大13) 年10月
「上宮太子の散歩」	近藤栄一		高陽社	1924 (大13) 年12月
(三田文学会編『三田文学選』 (現代作品選集三)所収)				
「眉輪」	野溝七生子	(『映画時代』)		(1925 (大14) 年)
『創作 石長姫』	三浦関造		平凡社	1926 (大15) 年12月
「大化の改新」	倉田百三	『新日本』2   7   8		1939 (昭14) 年7月、8月
「中大兄皇子」	佐藤一英	『新若人』2   5   8		1941 (昭16) 年8月   11月
「手力男」(『紫匂ふ』所収)	深田久弥		改造社	1941 (昭16) 年11月

『古事記』等を題材にした戯曲 (発行年順)

※単行書のみ発行所を記載した。

タイトル	著者	雑誌名・巻号	発行所	発行年月
「大葉子」	長谷川時雨	『スバル』4   1		1912 (明45) 年1月
「日本武尊」	武者小路実篤	『中央公論』32   1		1917 (大6) 年1月



「神代の巻」	大村嘉代子	『女性日本人』 1   1		1920 (大9) 年9月
「一日の素盞鳴尊」	武者小路実篤	『改造』 3   1		1921 (大10) 年1月
「橘姫の最後」	武者小路実篤	『白樺』 12   2		1921 (大10) 年2月
「天岩屋戸」	佐竹守一郎	『劇と評論』 1   3		1922 (大11) 年8月
「大長谷王子」	近藤栄一	『白樺』 13   10		1922 (大11) 年10月
「大雀命」	倉田艶子		春陽堂	1922 (大11) 年11月
(芸楽道場叢書 第2編)				
「厩戸皇子」	永田衡吉	『中央公論』 38   8		1923 (大12) 年7月
「海彦山彦」	山本有三	『女性』 4   2	聚英閣	1923 (大12) 年8月
「大海人皇子」	大坪草二郎			1924 (大13) 年1月
(『大海人皇子』所収)				
「スサノヲの命」	山本有三	『婦女界』 30   3、30   4		1924 (大13) 年9、10月
「天の岩戸」	高田保	『新小説』 29   9		1924 (大13) 年9月
「彦火火出見尊」	永見徳太郎	『阿蘭陀の花』所収	四紅社	1925 (大14) 年3月
「須世理姫」	武者小路実篤	『週刊朝日』 10   15		1926 (大15) 年10月
「長編戯曲 星は殞つ」	菊池四郎		人文会	1926 (大15) 年11月
「日本武尊と熊襲」	伊藤恣	『演劇研究』 5   1		1929 (昭4) 年1月
「戯曲 厩戸皇子」	水戸愛川		仏教年鑑社	1934 (昭9) 年2月

この表からわかるように、『古事記』『日本書紀』を題材とした小説や戯曲は大正期に集中して生み出されている。昭和期の場合は「人代」を対象とした作品が多いという傾向が見られる。取りあげられている題材は、小説、戯曲ともにスサノヲとオホクニヌシの神話が多い。なぜこの二神の話題が多く取りあげられるのか、その理由を探るためにも、まず代表的な作家による作品を中心に考察をすすめることにする。小説では芥川龍之介「素盞鳴尊」と武者小路実篤「大国主の神」「須佐之男の命と大国主の命」について取りあげる。それは、この二人の作家がなぜ『古事記』に着目し題材に取り小説・戯曲化したのかという問いの答えにもなるう。

具体的な作品の考察に入る前に『古事記』に描かれているスサノヲとオホクニヌシの神話を確認しておく。

スサノヲは海原を治めるよう父・イザナキから命じられたものの、亡き母に会いたいと泣くばかりであった。父から追放されたスサノヲは、母の国へ向かう前に姉のアマテラスに暇乞いをするため高天原に向かう。アマテラスはスサノヲが良からぬ心で高天原に来たと疑い、厳しい態度でスサノヲと応対する。疑いを解くために、スサノヲはアマテラスと「誓約」を行う。「誓約」の勝負に勝ち、潔白が証明されたスサノヲだが、勝ちに乗じて乱暴な振る舞いをしたので、アマテラスは天の岩屋に隠れてしまう。神々の計らいでアマテラスは再び現れるが、スサノヲは高天原から追放の身となり、出雲に向かう途中でオホゲツヒメを殺す。出雲に降りたスサノヲはヤマタノヲロチを退治し、その国つ神の娘クシナダヒメを妻として出雲の須賀の地に留まる。この後、オホクニヌシの神話が始まる。オホクニヌシは『古事記』『日本書紀』中では複数の異名があるが、本研究では便宜上「オホクニヌシ」で統一しておく。オホクニヌシは、イナバノシロウサギを助けヤガミヒメを得るが、そのため兄弟から嫉妬を受け二度にわたり殺される。その都度母神によって蘇生するが、なおも兄弟から追われるのでスサノヲのいる根堅州国に逃げる。そこでスサノヲから蛇の室、蜂と蜈蚣の室、火攻めなどの試練を受けるが、いずれもスサノヲの娘スセリビメや鼠の協力を得て窮地を脱する。オホクニヌシはスセリビメと共にスサノヲの元から逃げ、もとの世界に帰還し、兄弟を追い払い「大国主」となる。そしてスクナヒコナと共に国作りを行う。さらに後に高天原への国譲りが行われる――。

スサノヲは、上代文学研究の場においては、その泣きわめく姿や粗暴な行動から、嵐の神、暴風雨の神だという通説がある。その反面、ヤマタノヲロチを退治する姿から知恵を持つ英雄神と解釈される。そのほかスサノヲが殺害した女神から五穀が発生することから農耕神として、また『日本書紀』の、子とともに木種を播くという記述から植林の神としての一面もあり、多面的な性格を持つ神として捉えられている。一方オホクニヌシは、スサノヲの六世の孫（『日本書紀』本文では子）であり、死と再生を繰り返して試練を乗り越えることよって「大国主」として成長する。スサノヲの力を受け継ぎ国を完成させる役割を持つ神とされる。シロウサギを治療することから医療の知恵を持つ神でもあり、国を作り治めることから英雄神でもあり、さらには農耕神としての側面をもつと解釈される。

このような研究上の解釈から二神の性格をある程度造形することが可能であろう。それでは、作家たちはどのように『古事記』を受け止め小説・戯曲化したのであろうか。まずはスサノヲを主人公とした芥川龍之介の小説「素盞鳴尊」から考察を進めてゆく。

1 井上次郎「神功皇后の征韓」(『女学雑誌』三八四 一八九四年六月)

2 『日本書紀』巻九 神功皇后 摂政前紀(仲哀天皇九年二月、同九月)

3 古事記学会編『古事記研究文献目録・雑誌論文篇』(国書刊行会 一九八六年八月)、古事記学会編『古事記研究文献目録・単行書篇』(国書刊行会 一九九二年五月)。若干の記載漏れも認められる。

4 例外的に鈴木三重吉『古事記物語 上下』(赤い鳥社 一九二〇年)のみ「口語訳」として記載されている。

5 志村有弘編「古典に取材した近代文学目録」(『国文学 解釈と鑑賞』五七―五 一九九二年五月)。「古事記」から十七点、『日本書紀』から六点の作品をあげている。今回の調査によりこの「目録」に重複作品があることや『古事記』『日本書紀』の混同が判明し、新たに十八点の作品の存在が認められた。

6 小田切進編『現代日本文芸総覧―文学・芸術・思想関係雑誌細目及び解題』上・中・下巻・補巻(明治文献 一九六八年一月―一九七三年八月)

現代詩誌総覧編集委員会編『現代詩誌総覧』第一巻―第七巻(日外アソシエーツ 一九九六年七月―一九九八年十二月)

近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌目次総覧』第一巻―第十五巻(大空社 一九八五年四月―一九八六年四月)

与那覇恵子・平野晶子監修『戦前期四大婦人雑誌目次集成』第一期―第四期(ゆまに書房 二〇〇二年三月―二〇〇六年三月)

『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 件名編』紀伊国屋書店 一九八五年八月

書誌研究懇話会編『書物関係雑誌細目集覧』第一巻・第二巻(日本古書通信社 一九七四年九月、一九七六年五月)

岡野他家夫監修『明治雑誌目次総覧』第一巻―第五巻(ゆまに書房 一九八五年十月)

石山洋ほか編『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』「人文科学篇」(皓星社 一九九五年七月～一九九七年十二月)

日本近代演劇史研究会編『20世紀の戯曲―日本近代戯曲の世界』(社会評論社 一九九八年二月)

大山功『近代日本戯曲史』第一～三卷(近代日本戯曲史刊行会 一九六八年十月～一九七一年五月)

日本年鑑協会編『演劇年鑑』一九二五年版(二松堂書店 一九二五年三月)

7 第三項で詳述するが、「眉輪」は執筆時期が一九二五(大正十四)年であり、発行が二〇〇〇(平成十二)年である。

第二節 芥川龍之介と武者小路実篤の小説

一 「素盞鳴尊」——「人間」スサノヲの一代記

芥川龍之介によつて執筆された「素盞鳴尊」(一九二〇年)は、『古事記』のうちスサノヲとオホクニヌシの神話部分を描いた小説である。当初、この小説は『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』の両紙に合計四十五回にわたつて連載された(図1)。後に第三十六、四十五回(大蛇退治後から最後まで)だけが独立かつ加筆・改訂されて「老いたる素盞鳴尊」という改題で『春服』(春陽堂 一九二三年五月)に所収された。前半三十五回分については、後の単行本としては収録されなかつた。



図1 『大阪毎日新聞』夕刊 1920. 3. 30  
「素盞鳴尊」第1回(部分)

芥川龍之介の「素盞鳴尊」は「作自体は失敗作」と否定的評価の多い小説である。『古事記』原典との比較の視点からは、「古事記にもとづいた翻案」といふよりも、多少の解釈を加へた古事記の現代化<sup>3)</sup>、「神話の内容に素材をもとめ、これを潤色、変容した一箇の作品」<sup>4)</sup>としてその獨創性に着眼されてきたものの、「芥川は、根之国の構造も、その話柄の意味も理解せず」「芥川には根堅洲国が見えてゐなかつた」<sup>5)</sup>と批判されている。また、芥川自身が前半の途中に「一日も早くやめたい一心だけだ」「新聞への糞の如き小説を書いてゐる」などと友人達に書き送つており、新聞連載でありながら十六回もの休載をするなどかなり執筆が難航したことが窺える作品である。ただし中盤に入ると書簡には「スサノヲも二十回位まではなぐつたがこの頃は大に身を入れて書いてゐる」<sup>6)</sup>とあり、特に第二十八回以降は休載もなく順調に書き進めたようだ。

ここで、まずは小説「素盞鳴尊」のおおまかなあらすじを確認しておく。

高天原の(容貌の醜い若者)(スサノヲ)は非凡な腕力の持ち主であり、そのためほかの若者たちから疎外されている。(牛飼ひの若者)はスサノヲが高天原の智者(思兼尊)の姪を恋慕しているのを見抜き、二人の仲介役を買つて出るが、後に裏切る。これが引

き金となりスサノヲは村の若者たちと争い、高天原を追放される（一〇―二十三）。とある洞穴にたどり着いたスサノヲは、そこに住む（大気都姫）たち十六人の女と放縦な生活を送る。やがて女達は黒犬を飼い始めるが、女達の犬への溺愛ぶりに怒りを覚えたスサノヲは犬を殺そうとして誤って（大気都姫）を殺し、洞穴から逃げ去る。七年の放浪の末に、出雲の簸の川のほとりで大蛇のいけにえになりかけている（櫛名田姫）と出会ったスサノヲは、大蛇に立ち向かうことを決心する（二十四―三十五）。（櫛名田姫）を娶り部落の長となつて出雲の国に宮を建てたスサノヲは、（櫛名田姫）が亡くなった後、娘の（須世理姫）と共に海の向こうの根堅州国に移り住む。そこに（葦原醜男）がやって来て（須世理姫）と愛し合うようになる。スサノヲは二人の仲を認めず何度も（醜男）を殺そうとするが、（醜男）はそのつど（須世理姫）の助力で危機を乗り越える。スサノヲが寝入ったすきに二人は船で逃げる。気づいて追いかけるスサノヲは二人に向かって祝福の言葉を投げかける（三十六―四十五）――。

以上のように、前節に記した『古事記』原典とはかなり異なる設定及び展開を見せる作品となっている。なかでもストーリー上の大きな相違点は「天岩戸神話」や「イナバノシロウサギ神話」が削除され、「ヤマタノヲロチ退治」はその退治場面が描かれていないことであろう。逆に大きく加わったのがスサノヲの恋愛、（大気都姫）たちとの洞穴生活、スサノヲの放浪場面である。さらに特筆すべき設定は、『古事記』のスサノヲとオホクニヌシの神話部分を描きながら、この小説の「主人公」をスサノヲ一人に統一している点である。なぜなら上代文学研究の場においては、後半の根堅州国の話はスサノヲの力を受け継ぐオホクニヌシの成長譚の一部とされるのが通説であり、スサノヲ主体の話として解釈されることがほとんどないためである。しかし芥川は小説家として、あくまでスサノヲの物語として創作したのである。

このように主人公をスサノヲ一人にしたのは、芥川によるそれなりの意図があったと考えられる。本節では、芥川が、小説の主人公としてスサノヲに着眼した理由について探ることを目的とし、そこから芥川にとって『古事記』がどのようなものとして捉えられていたのか、考察してみたい。

芥川が着想時に抱いた構想を知るために手がかりとなる資料がある。それは芥川の「手帳」に残されたメモである。メモには、上代文献を素材にして小説を執筆しようとした形跡が認められる。

日本武尊。――(1)運命の輕蔑。Pride. (熊襲)

(2)運命に祝さる。(燒津)

(3)運命に呪はれつつ免る。(姫)

(4)運命の勝利。(伊吹山)

このメモの記載は、近代文学研究者の村田秀明によれば大正七(一九一八)年四月頃と推定されている。新聞連載の約二年前である。

この「手帳」の記載から、芥川が「素盞鳴尊」の構成を三段にしていたことは明らかだろう。「1) Revolt」「2) Maturity」「3) Elder」から、芥川がスサノヲの青年期から老年期までを描く一代記のような物語を構想していたことが窺える。この芥川の構想と『古事記』原典、そして実際に執筆された「素盞鳴尊」を射程に入れながら三つの場面に相当する箇所を考えてゆきたい。原典に則して各場面を想定すれば、「1) Revolt」は反抗・反乱であるため、スサノヲが父の命令に背き、姉の支配する秩序ある世界を破壊するという場面と考えられ、その舞台は高天原が相当する。「2) Maturity」は成熟・完成であるため、クシナダヒメとの結婚や子孫の誕生の部分が中心と考えられる。従ってヒメとの結婚の契機となったヤマタノヲロチ退治を含む出雲での英雄譚が相当しよう。「3) Elder」は、年長者・老人であるため、娘を持つ父親であるスサノヲが娘への求婚者(オホクニヌシ)に対し試練を与える根堅州国の場面に相当すると考えられる<sup>10)</sup>。

芥川は『古事記』のスサノヲの登場場面における、高天原での乱暴と追放、出雲国でのヤマタノヲロチ退治、根堅州国でのオホクニヌシへの試練という三大山場を、小説の山場としても活用しようとしていたことがわかる。しかし、この構想メモと実際の小説との間には、ズレが見受けられる。したがってまずは芥川の構想メモが実際の小説にどの程度活かされたのかを確認する。そのうえで小説から芥川独自の設定や構想を読み解くことで、芥川が『古事記』をどのように受容していたのかを探ってゆきたい。手順としては「1) Revolt」「2) Maturity」「3) Elder」の各項目ごとに進めてゆく。

まず、着想時の三段構成のうち「1) Revolt」から推測されるのは、上述の通り父への反抗と姉・アマテラスの支配する世界の破壊という反乱である。しかし実際の小説ではスサノヲの反抗・反乱の対象である父や姉の登場が削除された<sup>11)</sup>。スサノヲは父や姉ではなく(牛飼ひの若者)や(美貌の若者)に個人的な怒りを覚え暴力をふるい、それを契機に村の若者たち

も暴れたことが結果的にスサノヲの「反乱」と見なされ追放されたのである。芥川がメモを記した着想段階からこのようなかたちの反乱を設定していたかについては不明である。この点について前述の村田は、メモから芥川が『古事記』原典どおりに「姉天照大御神に対する「Revolt.」として構想していた」と推断し、小説化されるまでの「二年の間に、芥川自身によって大幅に改編されて」しまったと見ている<sup>12</sup>。着想段階の「Revolt.」の具体的構想については推測に頼るしかないが、芥川がスサノヲの高天原時代の中心テーマとして「Revolt.」を据えたことは興味深い。上代文学研究者の視点においては高天原の話といえどもアマテラスとスサノヲによる「誓約」あるいはそれに連なるアマテラスの「天岩戸」が想起されるためである。しかし芥川は当初からあくまでもスサノヲを中心に据えた小説を構想していたのである。そして実際の小説では、アマテラスの存在は全く姿を消すこととなった。この理由については、村田の指摘するようにスサノヲ像の改変にも求められようが、アマテラスという皇祖神を登場させることを避ける意図もあつたと考えられる。明治四十二（一九〇九）年に公布された新聞紙法の第四十二条（皇室の尊厳を冒瀆する）<sup>13</sup>に抵触する可能性があつた<sup>14</sup>ためだ。実際に同法第四十一条（風俗を害する事項）<sup>15</sup>により伏字処分を受けた箇所が見られ<sup>16</sup>、厳しい検閲が行われていたことがわかる。小説ではアマテラスの存在は失われたが、逆に創作によって追加された人物がある。スサノヲを疎ましく思う村の若者たち、スサノヲが恋慕する娘などである。これらの登場人物の追加から芥川が何を描こうとしていたのかを考えると、スサノヲの「青春小説」を描こうと目論んでいたのではないかと思われるのだ。なぜなら、新たな人物の登場によって描かれることになったのは、村の若者との関係性や諍い、恋愛における葛藤であるからである。これに関して村田は、夏目漱石の『三四郎』（一九〇八年）を意識した結果とする興味深い指摘を行っている<sup>17</sup>。『三四郎』は、熊本の高等学校を卒業し上京してきた小川三四郎の学生生活を描いた夏目漱石の青春小説の傑作として知られているが、夏目漱石が芥川の師匠であり、一九一六（大正五）年に発表した「鼻」が夏目漱石に激賞を受けたことは広く知られている。しかし、芥川が「素盞鳴尊」で試みたのは、スサノヲの「青春」部分のみならず「2）Maturity.」「3）Elder.」に至る部分もあるため、青春時代の恋愛での苦悩や葛藤を含みつつ、それに留まらない「一代記」としての苦悩や孤独を描こうとしたのではないだろうか。

このスサノヲの苦悩や孤独について詳しく見てゆきたい。『古事記』原典にはスサノヲの孤独を示す明確な表現はなく、芥川独自のスサノヲ像となっているためだ。小説のスサノヲは（容貌の醜い若者）で、非常な腕力を持った特殊な人物であり、それゆえの孤独を抱えている。「孤独に苦しんでいる彼」は、若者たちの中にいるよりも一人自然の中にいることに「安



息と平和を見出し」ており、時には「何とも云いやうのない寂しさが突然彼を襲う事があった」(六)。このように芥川はスサノヲに大きな〈孤独〉を与えている。前述のように原典にはスサノヲの孤独という感情は明言されていない。しかし、スサノヲは亡き母に会いたくて父の命令を聞かず泣いてばかりいたために追放され、続いて姉の元に向かうものの、姉に邪心を疑われる。これらの場面からは、父にも姉にも理解されず孤独に陥るというスサノヲ像を見出すことが可能であろう。「誓約」後に暴れたもののかばってくれた姉も最後には「天岩戸」に隠れることで彼を見放し、スサノヲの味方は皆無となり、ついに高天原を追放される。この箇所にも、スサノヲの孤立、孤独を見ることができる。芥川は高天原の神話にスサノヲの凶暴性と同時に孤独を読み取ったと考えられるのだ。スサノヲに寄り添う視点で高天原神話を読むことで、スサノヲの抱える孤独を見出したといえる。

次に、「2) Maturity.」について見てゆきたい。ここは成熟・完成という言葉の意味からスサノヲの出雲における英雄譚と推測され、具体的には原典のヤマタノヲロチ退治、クシナダヒメとの結婚、子孫の誕生といった箇所が相当しよう。村田は「大蛇退治後、落ち着いた出雲での幸福な結婚生活をおくる素戔鳴尊の姿を中心に描こうとしていた」と推測している。しかし、実際に書かれた小説は『古事記』原典とは相当にかけ離れた設定と展開になっている。「Maturity.」という言葉にこだわれば、第二十四〜三十五節の後半でスサノヲが〈大気都姫〉の洞穴を飛び出してから大蛇と対決するまでが相応すると考えられる。湖で、洞穴生活によって染みついた「全身の穢れを洗い落し」た後に「三日三晩の間、死んだように眠り続けた」スサノヲが目覚めたとき、その目の下には「今までにない一筋の皺」が刻まれていた(三十二)ことが、スサノヲの成長を象徴しているようである。しかしながら、〈大気都姫〉たち十六人の女性との洞穴生活については「Maturity.」の言葉と直接的に結びつけることが難しく、成熟に至る前段階として置かれた話と考えられる。原典では、スサノヲは出雲に行く途中でオホゲツヒメに食物を請うが、ヒメが鼻や口、尻から様々な食物を取り出して用意したため、これを見ていたスサノヲに殺されるという短いエピソードである。芥川はこの箇所から着想を得たようだが、洞穴で女性達と「放縦な生活」(二十八)を始め、抜け出ようとするものの再び戻り「いつまでも醒めない酔のやうな、怪しい幸福に浸る」(二十九)生活を送るといふ場面はかなり創作されている。したがって芥川独自の見解があらわれていると考えられるが、この洞穴生活の場面に關しては、先行研究においてほとんど触れられていない。長野嘗一が「芥川が書いたやうな放蕩の話は記紀には全然見えていない。何となく死臭が漂い、腐敗の匂いが充満している国、とあるのより察すると、伊邪那美命が赴いた、黄泉の国

(死の国)を想わせる所もあるが、現実には遊女の巢食う遊郭を諷刺したものと見てよいだろう」と指摘するにとどまっている。この長野による「黄泉の国」という発想は上代文学研究の分野からは当然起こるものであり、洞穴場面はむしろ「黄泉の国」のイメージを強く喚起させる。(大気都姫)の顔は「不思議にも、眉目の形こそ変らないが、垂死の老婆と同じ事であつた」(二十八)ことから、(大気都姫)と老婆は同一人物とも見ることが可能である。これは生前の姿のままのイザナミと、黄泉の国におけるイザナミの腐敗した姿を想起させる。そして十六人の女達はイザナミの体に成る八種の雷神たちであり、且つヨモツシコメを連想させる。この洞穴に桃が登場することも、黄泉比良坂の場面を思わせる。この洞穴を脱出し自然の力に圧倒された後になるが、スサノヲが湖の水で「全身の穢れを洗い落」とす(三十二)場面は原典のイザナキによる禊の場面そのままを持ち込まれたと見なせる。このように、小説の洞穴場面はイザナキによる「黄泉の国訪問」譚のモチーフを取り入れたことを窺わせる。スサノヲは迷い込んだ死の国からの脱出を試み、それに成功し穢れを落とすことで「再生」し成熟へと踏み出したと考えられるのである。このように、芥川が『古事記』原典のオホゲツヒメの話とイザナキの「黄泉の国訪問」譚を取り混ぜていたとすれば、実に柔軟に「日本神話」を受け止め創作したといえよう。

洞穴からの脱出後、スサノヲは湖のほとりで「長い間大声に泣いていた。／その間に空模様が変わり、稲妻が飛び風雨が起こり、雷が鳴り始める。そして「瀑のような大雨が、沛然と彼を襲い、この後も激しい雷雨が暫く続く(三十)。スサノヲの涕泣の直後に天候の変化という状態が描かれるが、これは原典における「其の泣く状は、青山を枯山の如く泣き枯らし、河海は悉く泣き乾しき」という箇所に着想を得たと考えられる場面である。ただし、原典はスサノヲが泣くことによつて山が涸れ河海が乾く、という因果関係が示されるのに対し、小説はあくまでもスサノヲの涕泣と天候の変化は偶然を装われ、スサノヲが自然を動かす主体にはなっていない。原典のスサノヲは嵐の神とも解釈されるように、自然を揺り動かすほどの膨大なエネルギーを持つ「神」だが、小説におけるスサノヲは雷雨の中で「心身とも、まるで破れた船のやうに、空しく騒ぎ立つ波に臨んだまま、まつ白に落す豪雨を浴びて、黙然と坐つてゐるよりほかは」なく(三十一)、圧倒的な自然の力に耐えるしかない「人間」として描かれている。原典のように自然に影響を与えることはない。実はこれまでの節においてもスサノヲは、自然の中にある一人の「人間」として描写されていた。それは、高天原の若者たちを避けて自然の中で過ごすことに「安息と平和を見出し」ていた場面である。山間の自然の中には「愛想の差別はなかつた、すべて平等に日光と微風との幸福に浴していた。しかし——しかし彼は人間であつた」(六)。自然の内にあつて幸福を感じながらも「人

間”を自覚し寂しさを覚えるのである。スサノヲは自然と一体になることはなく、(風)という「自然の呼び声に誘われて放浪に旅」<sup>21</sup>立っていたのである。そして、洞穴生活から飛び出し激しい雷雨に打たれた彼は失神するのだが、起き上がったとき「茫然と眼を挙げて、この平和な自然を眺めた」。ここでスサノヲの耳には「今まで忘れていた自然の言葉」が轟き、彼は「その言葉の威力の前に圧倒」される(三十一)。原典に見られたスサノヲの、自然を揺るがす「神」あるいは自然そのものの化身としての威力はやはりない。ただ湖の輝きの前に「彼は――その汀にひれ伏している、小さな一人の人間は、代る代る泣いたり笑ったりしていた」(同)のである。この場面でスサノヲは自然によって打ちのめされ、さらに救済されている。小説のスサノヲは、自然の前にある「人間」として常に描かれていると見られる。芥川は、原典における嵐の神・暴風の神という要素を取り込みながらも自然の力に圧倒される「人間」スサノヲを造形したといえよう。

「2) Maturity.」の最終部分では、『古事記』原典におけるスサノヲ英雄譚の最大の山場ともいえるヤマタノヲロチ退治が削除されている。この点について、先行研究では「龍之介は大蛇とたたかう素戔嗚を――つまり、神々の謎を解くために、神と戦ふ人間をついに描かなかつた。あるいは、描けなかつた」(圈点ママ)<sup>22</sup>とし、作品の「欠落」<sup>23</sup>とする意見がみえる。一方で「緊迫した戦闘の空気を予表して擱筆するのは、さきの変化を読者の空想にゆだねて効果的な幕切れ」<sup>24</sup>との評価も存在する。ほかに削除された理由については、近代文学研究者である榎本敦史がスサノヲを英雄として祭り上げることが避けたためとみている<sup>25</sup>。芥川の構想メモを改めて眺めるとき、「2) Maturity.」段階ではまだ英雄的な活躍場面を描かずにおき、次の「3) Elder.」段階における最終場面でのスサノヲの姿を最も高揚するスサノヲ像として描きたかつたためと論じる榎本説は興味深い<sup>26</sup>。これらの先行論に加え、ヲロチ退治場面が削除された理由として、人口に膾炙していた場面ということがあげられるのではないか。明治期からお伽噺や児童書に幾度となく書かれ、小学校教材としても掲載されてきた<sup>27</sup>ため、その退治の手法を脚色したり創作することに困難や抵抗感が生じたとも推測されよう。

それでは最後に、「3) Elder.」に相当する小説該当箇所について見てゆきたい。この場面は第三十六〜四十五回とされる。本節冒頭でも述べたが、この範囲は後に芥川自身によって切り離され「老いたる素戔嗚」として改訂・加筆され短編となっている。本節では新聞紙上の初出版を対象に考察をすすめることとする。この箇所はこれまでの「1) Revolt.」「2) Maturity.」部分に比べれば原典に近いものとなっており、大まかなストーリー展開としてはほぼ変わらない。しかし舞台設定が異なっている。具体的には原典の「根堅州国」が喧騒を離れた無人島に変更され、「黄泉比良坂」が現れない。この点において上

代文学及び古代史研究者である川副武胤は「オホクニヌシの根堅州国訪問」神話が持つ世界観が失われているとし、痛烈に批判している<sup>28</sup>。しかしこの無人島という舞台設定は、スサノヲの住む場所を「神話的世界」や「異世界」とする必要がなかったためと考えられよう。むしろ、高天原の国からも出雲の須賀の宮からも離れて、老いたスサノヲが娘と二人きりで「安らかな余生」（三十七）を過ごすにはふさわしい設定となっている。

構想メモにある「(3) Elder」(老人)としてのスサノヲを主人公とする発想は、小説において変わることなく描かれたことがわかる。しかし前述の通り、スサノヲを主人公に置くこと自体が、上代文学研究者の立場からは容易に発想し得ない着眼点といえる。たとえば「(1) Revolt」の箇所では、通常はアマテラス神話があるだろうという先入観を持つように、「(3) Elder」の箇所は「オホクニヌシの根堅州国訪問」であり彼の成長譚として解釈することが一般的であるためだ。たとえば三浦佑之はオホクニヌシが登場し活躍する「古事記の出雲神話」を「オホクニヌシの一代記」や「オホナムチの冒険物語」と位置付けている<sup>29</sup>。この箇所を主人公スサノヲの物語として描き、父親としての心情を明確に打ち出したスサノヲの造形自体がそれまでの『古事記』の研究書や口語訳にはない視点であり、小説家である芥川ならではの着想といえよう。娘を持つ父親としての感情は『古事記』原典にも存在する<sup>30</sup>が、芥川は「老年のさびしさと、愛娘を奪われる父親のやるせなさ」<sup>31</sup>というスサノヲの心情を入念に描写したのである。この「(3) Elder」箇所の十回分は全く休載されなかったことから筆が順調に運んでいたことが窺え、芥川も自信を持っていたためか後に改訂し「老いたる素戔嗚」とされたが、その出来栄えについては研究者の評価も高い<sup>32</sup>。ここでは父親としてのスサノヲ像が着目されるが、見過ごせない点がもうひとつある。それは、スサノヲが己自身と決別していることである。スサノヲが「葦原醜男」に若き日の自分自身を見ていることは明らかである。たとえば、ある日突然無人島にやって来た若者が、スサノヲには「殆ど年少時代そのものが目前に現れたやうに見えた」(三十八)。さらに、夢の中で鏡を覗くと「それは彼の顔ではなく、彼が何度も殺そうとした、葦原醜男の顔であった」(四十五)。そしてスサノヲは「葦原醜男」と「須世理姫」が逃げる姿を見ながら「さつき夢の内に、怪しい鏡を覗いたときの如く、あの精悍な葦原醜男の中に、始めて年少な彼自身を見出すことが出来たのであった」(同)<sup>33</sup>。また「醜男」の名まで「容貌の醜い若者」であったスサノヲを彷彿させる。老年のスサノヲは、若き日の自分と対峙し決別することによって大きく成長したことが認められるのである。愛娘と「葦原醜男」が去ることはスサノヲが再び孤独になることである。しかしスサノヲはそのことを受け入れるまでに「偉大」(四十五)となり、孤独よりもむしろ孤高の存在として若い二人を見送る

姿が示されたところでスサノヲの物語は幕を閉じるのである。

本節の冒頭で「1) Revolt.」「2) Maturity.」「3) Elder.」のメモから芥川がスサノヲの一代記を構想していたと推測したが、実際の小説においてもやはりスサノヲを主人公に据えた一代記として描かれていた。『古事記』からアマテラスの話やヲロチ退治、イナバノシロウサギといった箇所を削ぎ落とし、孤独な青年スサノヲが人間的に成長、成熟し老年に至る物語として創作されたのである。芥川が『古事記』から読み取ったスサノヲは、英雄神としてではなく、時には挫折をする青年であったと考えられる。これらのことから芥川は、スサノヲを孤独を抱えた一人の人間として捉えその形成過程を描くこと、いわば教養小説を意識して「素盞鳴尊」を書いたのではないかと思われる。それは、作品末尾で「彼の言葉は風と共に、限りない海原の空へ揚つた。この時わが素盞鳴は、彼の多端な生涯を通じて、如何なる瞬間よりも偉大であつた。」（四十五。圏点は田中）と結び、成長の結果を記していることから根拠づけられよう<sup>34</sup>。

『古事記』においては、高天原で神々に逆らう「暴風神」であつたスサノヲは、出雲の国ではヲロチを退治し「英雄神」となる。さらに根堅州国では「支配者」そして「父」として娘婿に試練を与えるが、やがて二人を祝福しオホクニヌシに力を与える。このようなスサノヲの変化、つまりそれぞれの舞台と各時期において異なる行動や活躍をする姿が、さまざまな葛藤を経て成長し成熟する「人間らしさ」として芥川の目にうつつたのではないか。このような変化を通じた成長譚が、ほかでもない『古事記』のスサノヲに芥川が着目した理由として考えられるのである。



『古事記』研究の場においては、『古事記』に登場する神々はあくまでも「神」として捉えられる。スサノヲは本居宣長によれば「悪神」（『古事記伝』六之巻）などとされ、現在の諸注釈書においても「神」の範疇内で解釈され「人間」では無い。上代文学、神話学等の研究分野では、神は「神」としてそのままに研究対象とされている。無論『古事記』には人格を有する「人格神」が多く登場するが、やはり完全な「人間」ではなく、特に孤独感や深い悲しみに悩むといった「人間らしさ」を抱くことは無いといえる。したがって『古事記』研究者の視点においては『古事記』の神々を「人間」と捉える発想自体が希有なものとしてうつることを強調しておきたい。

小説「素戔嗚尊」について近代文学研究者の吉田精一は「神々の世界を、人間の社会に引き下し、原始時代の素材で赤裸々な人間性を『素戔嗚尊』に見出そうとした作品」<sup>35</sup>と述べている。神話の神々を「人間」として捉え、その「人間らしさ」を描くこと、小説という創作世界で当然ともいえるその発想と行為が、その立ち位置を異にする研究者からは実に新しい試みであり「発見」とも見なせることを、改めて指摘したい。

## 二 「大国主の神」―恋愛の成就と自己の完成

本項及び次項では、武者小路実篤の小説について見てゆく。武者小路が『古事記』を題材にした小説には「大国主の神」（一九二四年）と「須佐之男の命と大国主の命」（一九二四年）の二作がある。ともに雑誌に一回読み切りとして掲載された短編小説である。両作品ともにまとまった先行研究はなく、全集の解説に初出情報などの紹介記事が見られる程度であり、注目を浴びることのなかつた作品である。

最初に「大国主の神」を取りあげるが、本項では武者小路がオホクニヌシに着目した理由を探ることを目的とする。そのため、原典と小説の比較を行い、その相違点から武者小路がどのようなオホクニヌシ像を造形しているのか確認する作業から始めてゆく。

この小説は、『古事記』のイナバノシロウサギの場面に始まりオホクニヌシが兄弟（八十神）達から二度にわたって殺されるものの蘇生する箇所までが書かれている。あらすじは次の通りである。オホクニヌシは、ヤガミヒメのもとへ求婚に向かう兄たちの荷物持ちとして因幡に向かう。途中で兎を助けたオホクニヌシは、兎からヤガミヒメを得ると言われる。予言通り、ヤガミヒメはオホクニヌシを夫に選ぶ。しかしそのためにオホクニヌシは兄たちから嫉妬を受け、二度にわたって殺されかける。回復したオホクニヌシは、男らしく成長している。

この小説のストーリーの大きな展開は『古事記』に倣っている。上代文学研究の場においてこの箇所はオホクニヌシの物語のうち「イナバノシロウサギ」と「八十神の迫害」などと名づけられることが多い。前者では、ウサギを救うという知恵や医療技術を持つ「王となるべき者」<sup>36</sup>としてのオホクニヌシの姿が語られ、後者は、兄弟による迫害によって繰り返されるオホクニヌシの死と再生、それに伴うオホクニヌシの成長を物語るとされている。

小説「大国主の神」と『古事記』との相違点は、主に次の三点が指摘される。

一点目は、『古事記』原典においてウサギ自身が語る回想―ウサギとワニのエピソード―が、小説では削除されていることである。小説は「兎は鱧をだました罰で皮をむかれたことを話した。」という地の文ですませている。

二点目は、オホクニヌシのヤガミヒメに対する恋愛感情の追加と、それに伴うオホクニヌシの変化である。原典には、オホクニヌシの感情や内面が明記されていない。しかし小説では、オホクニヌシは最初「八上姫に逢ひたいと別に思はなかつた」と思う。それがウサギの予言を受けてからは「八上姫が自分のものになつたらどんなにうれしいだらう」と変化し、ヒメとの対面後は「この女を得るためには何にもかもよろこんですてる」とまで感情を高ぶらせる。このような内面描写の創作が最も大きな相違点として指摘できる。

三点目は、原典で二度死ぬオホクニヌシが、小説では明確な死として描かれないことである。原典では焼石に嫉かれて死ぬはずのオホクニヌシが、小説では「気が遠くなつた」あと「ふと気がつく」のである。従つて、死んで母神の活躍によつて蘇生するという神話的な展開（不思議）は起こらない。二度目の死についても「又殺されかけた」とだけ記され具体的な場面は省略されている。

これらの相違点のうち、オホクニヌシ像の変更に関わるのは二点目および三点目である。なかでも二点目のオホクニヌシの恋愛感情と心の変化については、前述の通り原典に記述されていないことから、すべて武者小路の創作である。したがつて、このヤガミヒメを得るまでのオホクニヌシの感情と、ヒメを得た後の心の変化を詳細に辿ることで、武者小路によるオホクニヌシ像を掘り下げてゆきたい。

上述のとおり、オホクニヌシは最初、ヤガミヒメに逢いたいとは思つていなかった。女に嫌われた経験が度々あったことから、「八上姫にあつても始まらない」と諦めているのだ。ところがヤガミヒメのいる因幡に行くことになると、考えないようになつても「どんな女だらうと一寸は思つて」いる。さらに、途中で助けたウサギからヒメが自分のものになるといふ予言を受けてからは、徐々にヒメに対する想像を膨らませてゆく。彼は「どんなに美しい人なのだらう。誰のものになるだらう」「自分のものになつたらどんなだらう。皆さぞおどろくだらう。羨ましがるだらう」などと妄想する。兄たちの重い荷物を背負い、彼はヒメの名を「くり返しくり返し一人言を云」いながら歩く。ヒメの家に到着したとき、兄たちと陽気に談笑するヒメの声を聞いたオホクニヌシは、ウサギの言葉を信じれば落胆するばかりなので「野心なんかは起こさないや

うに」する。その一方で「心の底に八上姫が自分のものになつたらどんなにうれしいだらう。そして兄弟達はどんなにおどろくだらう」と期待する。こうしてヤガミヒメと会つたオホクニヌシは、ヒメの美しさに見とれ、時々目が合うと、ヒメが「だんぐ彼の方計りを見、他の人のことは忘れてゐるやうに見え」そのことから「段々勝利の自覚を得て来た。そして兎の云つたことは本當だと思つた」という確信に至つてゆくのである。オホクニヌシはヤガミヒメに対して一方的な思いを募らせながら、同時にヤガミヒメを得ることで兄弟を見返したいという気持ちも抱いていることが窺える。

ヤガミヒメは、夫としてオホクニヌシを選ぶ。オホクニヌシは恋愛が成就することによつてどのように変化したのだろうか。オホクニヌシはもともと「馬鹿にされることを本職」としそれに自足しており、兄弟たちがヒメのもとに行つてしまえば「一人で呑気にしてゐられる」と考え喜んでゐる。「自分一人の世界に」住み孤独を好む性格で、兄弟たちが愉快そうにしていても輪に入る氣力が無い「無邪気ではない性質をはぢ」ていた。しかし恋愛が成就すると、「今まで知らなかつた自分のいゝ處をすつかり自覺した」のである。「自分の考へてゐることの方が正しいこと、又自分が皆に愛されなかつたり、理解されなかつたりするのは彼等と目指す所がちがうからで、そして彼の目指す道のまちがひないことを知り、自己の考への正しさを強く自覺する。このように悟ることができたのは「皆、八上姫のおかげ」であり、オホクニヌシはヒメによつて「自分の使命を信じ、自分の運命を信じ、自分の實力を信じる」ことが出来」るようになった。「彼はもう以前の彼ではなく、恋愛の成就によつて生まれ変わったのである」。

このような恋愛の成就を起因とするオホクニヌシの性格の変化は、原典には全く見受けられないものだ。それゆえに、武者小路が自己の力を確信するに至つたオホクニヌシの心情をくり返し記述することには、何らかの意味が込められていると考えられる。

注意すべきは、このような創作箇所によつて見出せる主人公の造形に、武者小路の代表作『お目出たき人』（一九一一年）において従来指摘されている「自己形成、自己建設への決意」<sup>37</sup>「自我の主張や発展」<sup>38</sup>といった側面が見出せることである。オホクニヌシが抱く、まだ見ぬヤガミヒメに対して募らせる数々の空想も、『お目出たき人』の主人公が女に寄せる思い込み<sup>39</sup>との共通点として見出せる。『お目出たき人』の主人公は、「女に餓えて女の力を知り、女の力を知つて、自我の力を自分を知る」ことが出来」（一）、「自分には鶴と一緒に始めて全人<sup>ホールのにんげん</sup>間たる事が出来るやうに思へた」（八）のである。主人公は女性の獲得、恋愛の成就、結婚が自我の主張や自己の完成をもたらす<sup>40</sup>と考へている。しかし『お目出たき人』の



主人公は失恋に終わり、自己形成は完遂されなかつた。一方オホクニヌシは恋愛を成就させることができ、自我を再認識し、自我を發展、形成させることに成功したといえる。

恋愛の成就、女性の獲得によって自己の形成を為したオホクニヌシは、さらに成長する。兄弟の策略に遭いこれ乗り越えることで「今迄よりもなほ勇氣のある、男らしい男として」生まれ変わったのである。この部分は、原典において兄弟から殺されて蘇生したときの「麗しき壯夫となりて、出て遊び行きき」の表現からとられた箇所であろう。

原典では、二度にわたる死と再生がオホクニヌシを「王となるべき者」に成長させる要因となっている。これに対し小説「大国主の神」では、恋愛の成就、さらに怪我の完治がオホクニヌシの自己の認識や自信の獲得という、自己形成のための装置として置かれている。したがって、『古事記』原典との相違点の三点目として挙げた、小説に明確な死が描かれない理由としては、恋愛の成就がオホクニヌシを成長させたために死と再生を描く必要がなかつたということが考えられる。さらにはオホクニヌシの肉體的な成長を語るために、死と再生という神話的な表現を避けたことも理由として挙げられるだろう。「彼は幸福であつた。そして段々自覚を得て来た。そしてますます男らしい神になつた」ところで、この小説は閉じられる。武者小路は『古事記』のオホクニヌシの成長譚の中に、孤独で誰からも理解されない人間から、恋愛の成就によって自己を再認識し、試練の克服を経てさらに男らしい人間としての完成へという物語を見出している。原典とテーマは重なるが、一人の青年の成長譚として『古事記』のオホクニヌシ神話を読み取つたといえるだろう。武者小路がオホクニヌシに着目した理由は、この点にあると考えられる。

最後に、『古事記』の享受という観点からはやや逸れるが、雑誌掲載版から単行本<sup>43</sup>に収録される際に改訂された箇所について補足しておきたい<sup>42</sup>。

雑誌版の最終段落は、兄たちに殺されかけて療養中と考えられるオホクニヌシが「不思議に死ななかつた」喜びを感じ、兄弟を信じ仲良くし、幸福を覚え「ますます男らしい神になつた。」ところで終わる。その先の展開は意識されていない。ところが単行本版最終段落では、それまで全く言及されたことのなかつたスサノヲのことが突然オホクニヌシの「頭の中に浮んだ」のである。オホクニヌシとスサノヲの関係は一切示されないまま、身の危険を感じたオホクニヌシがスサノヲに会うため旅に出る。このように些か強引にスサノヲが登場するかたちに改訂されたのだが、この唐突さは、単行本の作品収録の順序が「大国主の命」<sup>43</sup>の次に「須佐之男の命と大国主の命」になつてゐるため、次の話への導入もしくは予告として置

かれたためと考えられる。「八十神による迫害」から「根堅州国訪問」へという『古事記』本来の順序に配置されたのだが、この点からは、収録の際に作家によるメディア意識が強く働いたことが窺える。

### 三 「須佐之男の命と大国主の命」——娘への愛着

次に「須佐之男の命と大国主の命」について考察する。この小説が扱うのは『古事記』における「オホクニヌシの根堅州国訪問」譚である。ここではスサノヲの人物像に焦点を当てることで、武者小路による「オホクニヌシの根堅州国訪問」譚の享受の様相について考えてゆきたい。

小説のあらすじは次の通りである。スサノヲは、自分の跡継ぎ及び娘の夫としてふさわしい資格を持つ男の登場を待っている。しかし求婚に訪れる男たちに試練を与え、逃げるのを見ては娘を失わずにすんだことを喜んでいる。スサノヲは、ある日やってきたオホクニヌシにも試練を与え、野原で焼き殺そうとするが、彼が無事に戻ってくるので不思議に思う。スサノヲは、「馬鹿」でありながら「利口」なオホクニヌシに不思議な力を見る。スサノヲが眠っている間に、オホクニヌシとスセリビメは逃げ出す。スサノヲは二人を追いかけながら、自分が体力的に年老いたことを痛感する。そして娘の幸せを考え、祝福の言葉をかけ見送るが、その声が届いたかどうかはわからない。

このように、話の展開は『古事記』と同様である。しかし、原典と比較して明らかに異なる点がある。それは、「オホクニヌシが自分一人では何も出来ない、何の力もない男として造形されていること、そして「父親としてのスサノヲ像」が描き込まれていることである。原典においては、オホクニヌシは少なくとも医療という知恵を以って兔を助けている。しかし小説では逆に「白兔に助けられ」ており「助けられて許り居て、何一つ利口なことをしたことがないやう」だとスサノヲに言われ、オホクニヌシは否定せず「自分には少しの力もありませんし、知恵もありません」と答えている。すぐに他人を信用するような人の良さだけが取り柄で「他人の力許りで生きて居るやうな男」である。このオホクニヌシの性格はスサノヲと正反対であり、スサノヲとの対比を強調するために全く何も出来ない男として誇張されたと考えられる。

一方スサノヲは「他人の助けをかりる必要」などない自力の強い性格である。ただし「俺の娘を奪はれずすんだ。娘を失はずにすんだ。」と笑い、地の文では「須佐之男の命の最愛の娘、須世理姫」と記され、末尾では「彼は娘のために、よ

ろこんで自分が負けたことにしてもいゝと思つて」いる。「最愛の娘」のために考え、時には後悔し、行動する父親として描かれているのだ。原典におけるスサノヲは、オホクニヌシにひたすら試練を与え成長させる役割を担っている。しかし小説におけるスサノヲは娘を持つ父親として具体化されているといえよう。このような父親としてのスサノヲ像は、同時代で『古事記』を題材とするほかの小説の中では前項の芥川「素盞鳴尊」に認められた。しかし武者小路の描くスサノヲは、父親としての面がさらに強く押し出されているようだ。このスサノヲについてさらに掘り下げたい。スサノヲは、婚期の娘に相応しい男の登場を求めているが、思うような男が現れない。しかし心の底では現れないことを喜んでいた。だからこそオホクニヌシが現れ、娘と睦まじくしている姿をみると腹を立てた。そして彼を殺そうと様々な謀をする。しかし、最後には「娘ももう齢ごろだ。この男を殺したらどんなに悲しむだろう。」と思い、涙を浮かべる。それは「娘を失なふ悲しみの涙」と云ふよりは、娘の仕合せをのぞむよろこびの涙にちかゝつた」。そしてスサノヲは「もう逃げないでいゝ。(中略)俺が一人でやらうと思つてやれなかつたことを、萬人の力をかりてやりとげてくれ」と考えるに至る。その言葉が「二人にそれが聞へたかどうか彼は知らなかつた。」と説明されていることから、この台詞が娘とオホクニヌシのためではなく、スサノオの「自分自身」への言葉であることがわかる。つまりこの作品は、スサノヲのみに内的に焦点化し、そのことによって、スサノオの頑なな心が最終的に解放たれてゆくことに重点が置かれたものとなつている。

すでに述べてきたが、上代文学研究の場においてこの物語はオホクニヌシが「試練を受け、それを越えることによつてよる成長」<sup>4</sup>するといふ観点から論じられることが多く、スサノヲの物語として捉えられることはない。しかし武者小路はあえてスサノヲの視点で語り、娘を愛する父親としてスサノヲが徐々に考えを改めてゆく物語として書き換えた。「娘の仕合せをのぞむよろこびの涙」を浮かべるスサノヲには、原典がもつ偉大な英雄神としての姿、根堅州国の支配者としての姿は全く見受けられず、娘をもつ典型的な父親の姿でしかない。武者小路は『古事記』のこの物語にオホクニヌシの成長譚や英雄神スサノヲの偉大さではなく、スサノヲに人間的な父親としての心情を見出し、父親とその娘の物語、親子愛の物語を讀み取つたと考えられる。

最後に、執筆状況について補足しておきたい。武者小路の『古事記』に対する意識、すなわち享受の仕方に関わるためである。作品末に

(之はこの一月十六日に書きあげて新興と云ふ雑誌に出したがそれがやめになったので返つて来たので後<sup>り</sup>の三枚をかきなほして出すことにした。(二三、四、二一)

とある。記述通り「二三」年とすれば、掲載雑誌『不二』発行の一九二四(大正十三)年六月まで一年以上の開きとなり「この一月十六日」の文脈とも合わない。また雑誌『新興』は一九二四年二月十日創刊<sup>の</sup>ため、ここは「二四、四、二一」の誤りであろう。『古事記』原典では物語の順序が前項の「大国主の神」相当箇所から「須佐之男の命と大国主の命」へという流れである。しかし武者小路はまず一月十六日に「須佐之男の命と大国主の命」を書き終えてから「大国主の神」を一月二十九日に書き終えており、『古事記』の順序は意識しなかった可能性がある。執筆日からは、当初は二作品を連続ものとして構成していなかったと推測される。二つの作品は視点となる人物が異なる点(「大国主の神」はオホクニヌシ、「須佐之男」はスサノヲ)からも連続ものではない別個の作品と推測されるが、執筆日からも『古事記』原典の順序や構成を意識しない独立した作品であったことがわかる。武者小路は一連の「オホクニヌシの物語」という捉え方ではなく、さらに短いエピソードとして区切り小説化した。短編を書くうえで必要な箇所を選択したのであり、ここには『古事記』に対し連綿と続く皇統を語る神聖な物語、などという意識は見られない。自身の作品を紡ぎ出すための古典作品のひとつとして『古事記』を捉えていたと考えられるのである。

なお付言すれば、戦後の一九五六(昭和三十一)年七月十三日に、NHK第一ラジオでラジオドラマ「須佐之男の命と大国主の命」が放送されている<sup>46</sup>。



『古事記』の「根堅州国訪問」譚は、オホクニヌシが「大国主」となってゆく成長物語とされる。オホクニヌシはスサノヲの強大な力を受け継ぐのである。しかし芥川と武者小路の小説では、スサノヲが主人公となりオホクニヌシを迎える話となった。芥川の小説では、老年のスサノヲが若者を祝福し、人間的な成長を遂げる物語として描かれた。一方武者小路は、娘に対する愛着心の強い父親としてのスサノヲを描き出した。各々の作家は『古事記』のスサノヲ英雄譚の行間にそれぞれ

のスサノヲ像を見出していたといえるが、それらはともに「人間的」なスサノヲの姿であった。

1 『芥川龍之介全集』第三卷（岩波書店 一九三四年十二月）には前半三十五回分が「素戔嗚尊」として収録された。この「素戔嗚尊」の最後に「大正九年五月」とある。後半の第三十六〜四十五回分は、同全集に「老いたる素戔嗚尊」として掲載され「大正九年」とのみ明記されている。なお単行本『春服』収録の際に大きく加筆・改訂された箇所は岩波全集第四卷の「後記」および長野誉一『古典と近代作家―芥川龍之介』（有朋堂 一九六七年）の「素戔嗚尊」に詳しく記されているため、本論では割愛する。

2 三好行雄「地底に潜むもの―「南京の基督」前後―」（三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房 一九七六年九月所収。初出は「『南京の基督』に潜むもの」『国語と国文学』四八一―一九七一年一月）。長野誉一も「全体としては失敗作といわざるを得ない」とする。長野誉一「素戔嗚尊」（前掲長野『古典と近代作家―芥川龍之介』所収。初出は『素戔嗚尊』について）『国文学 解釈と鑑賞』三二―一九六七年二月）。

3 吉田精一『芥川龍之介』三省堂 昭和十七年十二月

4 川副武胤「日本神話と近代思想―鷗外『かのやうに』と芥川龍之介『老いたる素戔嗚尊』―」（『山形大学紀要』一〇―一九八二年一月）

5 前掲川副論文による。

6 「毎日糞を嘗めるやうな思ひをしながら素戔嗚尊を書いてゐる一日も早くやめたい一心だけだ」（佐藤春夫宛書簡 大正九年四月四日付）、「この頃は新聞への糞の如き小説を書いてゐるので忙しい」（松岡譲宛書簡 大正九年四月十一日付）等。

7 「スサノヲも二十回位まではなくつたがこの頃は大に身を入れて書いてゐる」（南部修太郎宛書簡 大正九年五月十八日付）

8 「手帳より」二（『芥川龍之介全集』第九卷 岩波書店 一九三五年七月）

9 村田秀明「芥川龍之介「素戔嗚尊」論―漱石文学からの離脱―」（『方位』第一三号 一九九〇年七月）による。『大阪毎



の叙述を「素戔嗚尊の放蕩」に書き改めた、とのみ記している。

21 前掲三好論文による。

22 前掲三好論文による。

23 海老井英治「老いたる素戔嗚尊」(『芥川龍之介必携』別冊国文学 学燈社 一九七九年二月)

24 前掲長野論文による。

25 榎本敦史「芥川龍之介―「素戔嗚尊」論―」(『解釈』四六一七・八号(通巻五四四・五四五号)二〇〇〇年八月)。

26 榎本はスサノヲをここで英雄化しない理由として、ほかに、次の場面つまり「老いたる素戔嗚尊」のスサノヲ像と齟齬を来すため、ともする。

27 新聞連載(一九二〇年)当時の小学校国定教科書は「第三期」の通称「黒表紙本」か「白表紙本」が使用されていた。前者であれば「天の岩屋」「天叢雲剣」(大蛇退治)「白うさぎ」、後者であれば「大蛇たいぢ」「白ウサギ」が掲載されていた。芥川の小説からはこれら教科書掲載の話がすべて省かれている。

28 前掲川副論文による。「芥川には、この二元世界の異質性といふ『記』の設定が充分にはのみ込めてゐなかつた」「古代人の空想をさへ追体験できない想像力の貧困を意味する」等。「二元世界」とは「根之国」という地中と「葦原中国」の地上の世界を指す。この批判は改訂された「老いたる素戔嗚尊」に向けられたものだが、初出版も舞台設定は同じである。

29 三浦佑之『古事記講義』(文芸春秋 二〇〇三年七月)

30 前掲川副論文においても同様の指摘がある。

31 前掲長野論文による。

32 「娘の父親が、その娘の夫となる若者に対して懐く、憎悪と愛情の矛盾した感情を見事に画がいてゐる」(前掲川副論文)、「話の骨格を古事記に仰ぎながらも、作者の持ち味を出して、かなりの成功を収めている」(前掲長野論文)、「抒情的に娘を求婚者に奪われる老いた父親の哀しさがよく描き出されている」(前掲村田論文)等による。

33 この一文は「老いたる素戔嗚」では削除された。

34 同箇所は改訂された際には「彼の言葉は風と共に、海原の上へ響き渡つた。この時わが素戔嗚は、大日貴と争つた時より、高天原の国を逐はれた時より、高志の大蛇を斬つた時より、ずっと天上の神々に近い、悠々たる威厳に充ち満ちてゐた」

(十)とされ、更なる人格形成が見受けられる。

35 吉田精一『芥川龍之介』新潮文庫 一九五八年

36 新編日本古典文学全集『古事記』頭注による。

37 松本武夫・福田清人『武者小路実篤 人と作品』清水書院 一九六九年五月

38 楊琇媚「武者小路実篤『お目出たき人』論―主人公における「自己確立」の様相―」『日本研究』一七(広島大学)二〇

〇四年二月

39 『お目出たき人』の主人公は「自分は鶴と結婚出来るかも知れない。こんなことを歩きながら考へた。」(六)、「鶴と夫婦になれたあとのことを考へた。」(十二)などと何度も考える。

40 山本健吉は「『全人間』になることが、彼の自己完成を意味する」と指摘している。(山本健吉「武者小路実篤の女性観―『お目出たき人』の自分―」『文芸』臨時増刊・武者小路実篤読本 河出書房 一九五六年五月)。ほかに結婚と自己完成との関連性も指摘されている。前掲楊論文による。

41 『真昼の人々』(新潮社 一九二四年七月)

42 初出雑誌である『女性改造』の作品末には「二四、一、二九」とある。単行本に収録される際に、特に最終段落である第七節が全面的に改訂された。単行本版では第六節末に「二四、一、二九」の日付が入り、第七節末に「五、二六、追加」と記載されていることから追加のように見えるが実際には追加ではなく、全面改訂である。

43 雑誌掲載時は「大国主の神」であったが全集収録時にタイトル・本文共に「大国主の命」と変更された。

44 神野志隆光『古事記―天皇の世界の物語』(NHKブックス 一九九五年九月)

45 新興社刊『新興』は、政治・経済・時代思潮などの論説および小説・随筆・詩歌などの文芸のページで構成された総合雑誌。婦人参政権問題のインタビュー記事も掲載された。しかし萩原朔太郎「情緒と想念―情緒哲学」の文章で発禁処分を受け、創刊号が終刊号となった。

46 一九五六(昭和三十一年)年七月十三日、NHK第一ラジオで夜九時十五分から一時間、放送劇「須佐之男の命と大国主の命」放送。声優は三島雅夫、大塚道子ほか。二人は俳優座に所属。三島雅夫は、声優として森鷗外『山椒大夫』を原作とする劇場用アニメーション『安寿と厨子王丸』(東映、一九六一年公開)に出演している。



### 第三節 『古事記』等を素材とした様々な小説

#### 一 葛藤する神々と天皇、皇子たち——『古事記』からの創作

本節では、これまで取りあげた小説以外の、上代文献を素材とした様々な小説について紹介したい。今回の調査により見できたほぼ無名といえる作家の作品、先行研究のない作品も取りあげ、今後の享受研究のために各作品の書誌情報、梗概とともに特徴や『古事記』原典との相違点を中心に私見を記しておく。まず本項では『古事記』の範囲内である神代から推古朝までの各話が素材として書かれた作品を取りあげる。次項では推古朝より後の代で『日本書紀』が素材とされたと判断できる作品を紹介する。本文からの引用箇所は、特に断りのない限り初出形態を記している。

最初に、近藤栄一が『古事記』を素材にした小説を取りあげる。

近藤栄一は、一九一七（大正六）年に詩集『サマリヤの女』を発表して認められた『白樺』と縁の深い詩人である。上代文献を素材とした小説はほかに「上宮太子の散歩」があり、『日本書紀』に拠った作品である。管見によれば近代において『古事記』を素材にした小説が最も多い作家だが、先行研究は皆無に等しい人物である。

ここで紹介する近藤栄一の小説は「黒姫」「兔と大国主の命」「速須佐之男命」「大国主の命と其兄弟達」「根の堅洲国に於ける大国主命」「軽の太子」「沙本姫」の七作である。

#### ●近藤栄一「黒姫」

【書誌情報】『白樺』十三—二二 一九二二（大正十一）年二月。

【梗概】（大雀の命）は、郷里の吉備に帰る（黒姫）が乗る船を見送る。（黒姫）は、后である（岩野姫）の嫉妬に耐えきれず宮殿を出たのだ。三ヶ月後、（大雀の命）は（黒姫）に逢いに吉備に向かう。吉備で二人は逢い、若菜を摘む。（大雀の命）は別れたくなかったが難波に戻ることを決意する。（黒姫）はその無情を責めるが、やがて許し、（大雀の命）は難波に向かう。

○「黒姫」は近藤栄一が『白樺』に発表した初めての短編小説である。末尾に（二一・九・一七）と執筆年月日が記されて

いることから、執筆から掲載まで数ヶ月を要していることがわかる。

『古事記』の仁徳天皇段に記された、天皇と黒姫との短い物語を題材としている。近藤の他の作品の特徴でもあるが、主要登場人物たちの心情や行動の描写が詳細である。たとえば〈大雀の命〉は意志が弱く内向的な性格であり、「有耶無耶に」押しつけられて「しまった皇后である」「岩野姫が嫌でたまらなかつた」。その反動のように〈黒姫〉に対し「私の生命、私の熱情なる黒姫よ」と渴望し、ついに吉備に向かう。この決意に至るまでも、長い内面描写が続く。これらは原典には一切記されていない創作箇所である。

また、ほかの作家の小説には見られない特徴として、この作品には歌謡が書き下し文で掲載されていることが挙げられる。それは〈大雀の命〉の歌二首、〈黒姫〉の歌二首（歌謡番号五三〜五六）である。これらの歌からは近藤が口語訳された『古事記』ではなく、訓読文か書き下されたものを確認して執筆されたことがわかる。

### ●近藤栄一「兎と大国主の命」

【書誌情報】『東京朝日新聞』一九二二年十月十八日〜同月三十一日まで計十一回連載。（図1）



図1 『東京朝日新聞』1922.10.18  
「兎と大国主の命」第1回（部分）

【梗概】『古事記』における「イナバノシロウサギ」譚に相当する。因幡の国、気多の海岸で瀕死の（兎）が海水に浸かろうとしている。ウサギは通りかかった（大國主の命）をなかなか信用しない。しかしオホクニヌシの説得により次第に心を開き、（鱈）を騙したことなどを詳細に語る。助言を受けて完治したウサギはオホクニヌシに、（八上姫）を得るといふ予言をする。その予言通りヤガミヒメはオホクニヌシを夫に選ぶ。ヤガミヒメから選ばれなかつた他の兄弟達四人はそれぞれに悪態をつき、饗宴を断りヒメの屋敷から立ち去る。

○『古事記』原典との差異を中心に記しておく。小説では「兎と大国主の命」のタイトルが示すように、ウサギを先に登場させ且つウサギの描写や独自の箇所が多い。このことから『古事記』原典と異なり、ウサギに比重を置いた構成となっていることがわかる。このウサギは「帰り度い一心で隠岐の島から帰つ

て」来ており、途中で出身が因幡ということが明らかになる。したがってウサギの出身については『古事記』ではなく『因幡国風土記』逸文の記述によつたものといえる。

原典と同様、小説においてもヤガミヒメはオホクニヌシの兄弟達ではなくオホクニヌシを選ぶのだが、小説ではオホクニヌシを選んだ理由のひとつにウサギへの対処の仕方を挙げてゐる。原典ではヤガミヒメはウサギの顛末を知り得ていないが、小説ではオホクニヌシがウサギに優しくしたことをヒメが知っており、そのことを夫に選んだ理由としてゐる。また、ヤガミヒメが結婚を一年後と宣言する点も『古事記』にはない点である。したがってこの小説ではオホクニヌシとヤガミヒメは婚約が成立するという話になっており、『古事記』のように子をもうけることはない。この婚約状態は、後述の「根の堅洲国に於ける大國主命」の伏線と見ることが出来る。伏線とすれば、近藤はオホクニヌシを主人公とした小説の全体構想を練つていたと考えられる。さらに特徴として、オホクニヌシは「幸と不幸」について深く模索し「生」の意味を問うており、「人間」としての葛藤が記されている点をあげることが出来る。

#### ●近藤栄一「速須佐之男命」

【書誌情報】『新小説』二七—二二 一九二二（大正十一）年十一月

【梗概】『古事記』の「ヤマタノヲロチ退治」譚を素材としてゐる。スサノヲが出雲の国・肥の河のほとりにある鳥髪という地から少し河上の小径を歩いている場面から始まる。乱暴によつて高天原を追放されたスサノヲが、山中で夕暮れが迫る中、アシナヅチ・テナヅチ・クシナダヒメの住む家を見つけ宿を請う。スサノヲを訝しみ警戒するアシナヅチたちだったが、スサノヲの名がわかるとヤマタノヲロチ退治を依頼する。スサノヲはこれを引き受け、皆で酒造りなどの準備を整えてゆく。数日の間に、スサノヲとクシナダヒメが次第に心を通わせてゆく。ヲロチがやってくる高志まで酒槽を運んだスサノヲは、最後に剣を携えてクシナダヒメと共にヲロチが現れる場所まで行く。酒に酔つたヲロチを退治し、無事にクシナダヒメを助け、二人は互いに愛し合っている気持ちを確認し幸福を覚える。しかし家に戻ると、アシナヅチとテナヅチは互いに胸を刺して死んでいた。スサノヲとクシナダヒメは須賀の地に移り、小屋を建て幸福になる。

○原典と最も異なる点は、スサノヲが落ち着ける場所、それにも増して愛することが出来る女を求めるといふ欲求、欲望を抱いていることである。もう一点は、アシナヅチとテナヅチの死である。スサノヲとクシナダヒメが助からないだろうと

いう絶望から刺しあつたものか、その死の意味や必要性は判然とせず、読者に一瞬の驚きを与えるしかけとして置かれたと考えられる。もしくは、幸福を得るためには犠牲を伴うという近藤のメッセージとも受け取れよう。原典ではアシナヅチがスサノヲとクシナダヒメの宮の長として仕え、スサノヲの子孫の系譜が記される。一方小説では、スサノヲとクシナダヒメが宮ではなく小屋を建て、スサノヲは「やさしい妻と二人で幸福に暮らす事が出来る自分」を祝福し、二人は「完全に幸福であつた」と締めくくられる。結末からも、男女が愛し合い幸福を得るというテーマであるとみられる。『古事記』を素材とした恋愛小説とみなせよう。恋愛や幸福の追求は、近藤のほかの小説においても主要なテーマとなっている。

### ●近藤栄一「大國主の命と其兄弟達」

【書誌情報】『白樺』一四一—一九二三（大正十二）年一月

【梗概】『古事記』におけるオホクニヌシの「八十神による迫害」箇所に対応する。オホクニヌシと其兄弟達は、猪狩りをするため山に行く。兄弟達は山の上から猪を追い落とし、オホクニヌシは下りてきた猪を捕らえることにする。猪はオホクニヌシに向かつて突進するが、ぶつかると寸前で彼の頭上を飛び越え谷底に落ちる。オホクニヌシはその衝撃で気絶するが、死んだと誤解した兄弟達は凱歌を挙げる。後に、兄弟達は船造りの仲間になるようオホクニヌシを誘う。オホクニヌシは父から貰った斧を大事にしており、兄弟達は木を切り出すためにその斧を無理に借りようとするが、オホクニヌシは譲らない。最初は皆交代で大木を切るが、兄弟達はオホクニヌシが斧を貸さないことを恨み、オホクニヌシ一人に木を切らせる。このとき兄弟達が謀り、オホクニヌシを騙して木から一端遠ざけさせ、オホクニヌシに向かつて大木を切り倒す。オホクニヌシは逃げられなかったが、無事であつた。

○冒頭に「東京朝日掲載「兔と大國主の命」の直ぐ後に續くものである。」の注意書きがある。

『古事記』原典では二度死ぬオホクニヌシだが、梗概の通り小説では一度も死ぬことはない。原典でオホクニヌシの兄弟達が猪に似た焼石を追い落とす場面は、小説では本物の猪に変更されている。猪とぶつからず「彼は死ななかつた」ので、原典のように心配した母が現れてオホクニヌシを探しに来て、怪我の治療をすることはない。また、兄弟達が仕掛けた楔の罠でオホクニヌシが木にはさまれ殺されるという場面でも、小説では倒れてきた大木の下に立ちつくしていなから「彼は傷ついてさへみなかつた」のである。小説では偶然によってオホクニヌシが生き延びており、強運の持ち主という設定とされ

ていることがわかる。

また、特に二度目の兄弟達による殺害計画場面はほぼすべて会話によって構成され、その内容は近藤の独創部分である。この創作場面には、兄弟達がオホクニヌシを虐め、それを我慢するオホクニヌシの姿が書き込まれている。

### ●近藤栄一「根の堅洲国に於ける大国主命」

【書誌情報】『白樺』一四一—一三 一九二二（大正十二）年二月、同三月

【梗概】『古事記』における「オホクニヌシの根堅洲国訪問」譚に相当する。オホクニヌシは（須佐能男命）がいる根堅洲国へ旅に出る。スサノヲの屋敷に向かったオホクニヌシは、そこで（須勢理姫）を見かけ好意を抱く。スセリビメもまたオホクニヌシを気に入り、手紙で告白をする。スサノヲはオホクニヌシに対し、娘との結婚は試練を乗り越えないと認めないと言う。さまざまな試練を乗り越えたオホクニヌシは、スサノヲが寝入ったすきにスセリビメと一緒に逃げ出す。二人が黄泉平良坂の途中まで逃げたとき、スサノヲが坂の麓まで追いつく。しかしスサノヲは坂を登れないという弱点を持っており、最後には二人を祝福し見送る。オホクニヌシの故郷では、オホクニヌシの両親が逃げてきた二人を迎え、兄弟達とも仲良くなり幸福になる。

○オホクニヌシとスセリビメの出会いや手紙による告白、二人が出かける場面など、原典にはほとんど記されない二人の恋愛に関する場面が多く長い。原典と小説との最大の相違点として、小説では恋愛の要素が強く打ち出されていることが挙げられる。

小説中の興味深い箇所として、オホクニヌシがヤガミヒメとスセリビメを比較している箇所をあげておく。ヤガミヒメは「貴族的精神を持つ姫」、スセリビメは「平民的精神を持つ姫」と喩えるのだが、これは作品執筆当時の華族制度に基づいた意識が反映された比喻と考えられる。スセリビメがスサノヲにオホクニヌシの家柄を尋ね「根の堅洲国に於ける私達の家柄と同じだ」と聞かされ、家柄が同じことに大いに喜んでいる場面もある。

小説の最後尾は、ヤガミヒメが婚約者オホクニヌシを待ち続ける場面である。ヤガミヒメはやがて、彼が別の女と結婚したという噂を耳にする。先述の「兔と大国主の命」でヤガミヒメは原典と異なり結婚せず婚約のみでとどめられていたため、オホクニヌシは重婚することなくスセリビメと結婚したのである。ヤガミヒメはこれを恨むことなく祝福し「彼の事を想ひ

生涯独身で暮したと云ふ事である。」と締めくくられている。

●近藤栄一「輕の太子」

【書誌情報】『新小説』二八―八 一九二三（大正十二）年八月

【梗概】（王）の嫡子（輕の太子）と、（王）の後妻（輕の大郎女）は不倫関係を結んだ。そのため人心は（輕の太子）から離れ、（王）の死後、次男（穴穂の王子）が次の天皇として推された。（輕の太子）は事の成り行きを恐れ（輕の大郎女）を連れて（大前、小前の宿禰）の屋敷に逃げ込む。（穴穂の王子）が（宿禰）の屋敷を囲み、やがて（宿禰）は太子たちを連れて（大前、小前の宿禰）の屋敷に逃げ込む。（輕の太子）は出発し、（輕の大郎女）は寂し話をつけると申し出る。（輕の太子）の罪は五年間、伊予に島流しと定まる。（輕の太子）は自殺する。さから床につく。一年後、（輕の大郎女）は（輕の太子）の後を追い二人は再会する。その地で二人は自殺する。

○『古事記』の允恭天皇段に記される話である。原典では（輕の大郎女）は天皇の子であり、（輕の太子）（穴穂の王子）と同じ母から生まれた同母兄妹である。通説では兄妹相姦が露見したために人々の心が太子から離れたとされる。しかし小説では太子と大郎女の間血のつながりはない。この点が原典と最も異なっており、他には（穴穂の王子）が宿禰の屋敷を取り囲んだとき「客人のやうに、鐵門を叩いて案内を乞ひ、談笑の内に事件を片付けるつもり」であったこと、太子の島流しの期間は五年で、「世間の騒ぎもさめるから、其後では一緒になつてもいゝと云う事は内々で許され」ていたことが挙げられる。原典に記された、同母兄妹による恋という禁忌を犯す罪や皇位継承などの問題に触れることが回避され、小説における二人の罪は比較的軽いものとして処理されている。しかし原典の結末「即ち共に自ら死にき」を迎えるよう、小説はやや強引に二人の恋愛を追い詰められた状況として描こうとしている。特に大郎女による愛別離苦の心情を詳細に綴ること、死を選ぶことの必然性を語ろうとしたことが窺える。

●近藤栄一『沙本姫』

【書誌情報】聚芳閣 一九二四（大正十三）年五月五日。同月十日再版、同月十五日に第三版発行。挿絵は無し。巻末の広告から「新作家叢書」の第四冊目であったことがわかる。

【梗概】垂仁天皇の皇后である（沙本姫）は、六歳年下のいとこ（沙本彦）と愛し合う。（沙本彦）は（沙本姫）と別れな

いようにするため、天皇の殺害を企てる。最初は二人の関係を疑っていなかった天皇だが、事の真相を知ると、將軍將いる軍隊を（沙本彦）の稲城に差し向け「戦争」となる。天皇の子を身籠もっていた（沙本姫）は、（沙本彦）のもとへ逃げる。（沙本姫）を愛するあまりに攻め入ることができなくなった天皇は、軍隊を配備したままにし、やがて生まれた子を引き取る。最後には稲城から火の手が上がり、（沙本彦）と（沙本姫）は自害したことが判明する。

○この話は『古事記』では垂仁天皇段に記されている。原典によれば、サホビメは同母兄であるサホビコから、夫（天皇）と、兄である自分のどちらが愛しいかと尋ねられる。サホビメは夫よりも兄を愛しいと答える。これを聞いたサホビコは、二人で天下を取ろうと謀反を企み、最後はサホビメとともに滅ぶ——という内容である。

梗概に記したように、『古事記』とは大きく異なる設定が二点置かれていた。一点は、サホビコが天皇の殺害を企てた理由である。原典のように天下を取ろうと考えたからではなく、サホビメと別れないために変更された。原典ではサホビコによる謀反という天皇家にとつての重大事が起こったが故に、天皇が謀反人サホビコを誅する、という展開である。しかし小説では、サホビコの天皇殺害計画は自身の恋愛を成就させるためという動機であり、これを知った天皇がサホビコを討つという行為は恋敵への報復というレベルになってしまっている。恋愛感情のもつれと不倫関係を起因として、王が將軍將いる軍隊をサホビコの稲城に差し向け「戦争」が起こっているのである。

二点目は、サホビコとサホビメの間柄である。二人は同母兄妹ではなくいとこであり、サホビコの方が六歳年下に設定された。原典のように同母兄妹のままでは恋愛関係に出来ない点を、男の方が年下であり親しいところ同士の間柄に置き換えたといえよう。サホビメの夫である天皇は「沙本彦が沙本姫の従弟であるばかりではなく六つも年下である事を知つて居たので何の疑をも持つて居なかつた」のである。

小説は、話の展開や場面、舞台などの要点をほぼすべて『古事記』に拠りながらも、サホビコ・サホビメ・垂仁天皇の間に繰り広げられる三角関係の恋愛の物語として描いている。『古事記』の主眼はサホビメの悲劇を語ることにあったのではなく、謀反人サホビコの討伐と天皇の子ホムチワケ出生を語ることにされる。しかし小説は、サホビコ・サホビメよりはむしろ天皇に主軸を据えた恋愛の悲劇を描いた物語となっている。

ここで、近藤の七つの作品を通して窺える傾向についてまとめておきたい。小説では主要登場人物の心情や行動が創作されていることは無論だが、その心理描写が詳細であり、長い会話によって心の内を語る手法も多用されている。そして登場

人物の心情、悩みは「幸と不幸」や人生に関することが多い。さらに人生や幸福への思索の源泉に「恋愛」が置かれているという傾向が見出せる。近藤は、男女の恋愛を作品のテーマの中心に据えていたと考えられる。また、一夫多妻や近親相姦を避け、近代的な道徳観に基づいた設定に置きかえている点も見逃せない。近藤は、『古事記』をもとに上代や神話世界を再現しようとしたのではなく、『古事記』の設定を借りて近代の恋愛物語を創作したといえるだろう。

以下、近藤栄一以外の作家たちによる小説について発行順に記す。

●碧瑠璃園（渡辺霞亭）『日本神話 国びらき』

【書誌情報】大鑑閣 一九一三（大正二）年十月。翌年二月に第五版発行。一九一八（大正七）年八月第十版、一九二二（大正十一）年二月に第十五版発行。この発行所とは別に霞亭会より一九一六（大正五）年七月十日発行され、同月二十日の再版が確認される。挿絵は無し。表紙は人物、勾玉、剣、兎などの模様を幾何学的にあしらったデザイン（図2）、内表紙は波の上をはねる兎の絵が描かれる。

【概要】『古事記』をはじめとした上代文献のうちオホクニヌシが登場する話が網羅されている。目次順を挙げると「八上比賣、素菟、戀争ひ、赤猪、蛇の室屋、蜈蚣の室屋、鼠、生太刀生弓矢、八十神の征服、沼河姫、國土經營、天使下降、國讓、三諸山」の十三章。

○管見によれば『古事記』や『日本書紀』をもとにした近代的小説のうち最も早い発行である。オホクニヌシについては『古事記』のみに記された話が多いため『古事記』に拠った記述が多いが、作家の意図はあくまでもオホクニヌシに関する話題をすべて記すことにあつたと考えられ、『古事記』のみに比重を置いてはいない。たとえば小説では（素菟）が洪水で隠岐に流されたこと、（大國主）の父母が（素盞鳴尊）と（奇稻田姫）であることが記されており、このことから『古事記』のみを参照したのではなく『日本書紀』『出雲国風土記』をも同程度の資料として扱い取り入れていることがわかる。

小説独自の設定としては、ヤガミヒメが「八上の里」の県主・安蔵の娘で

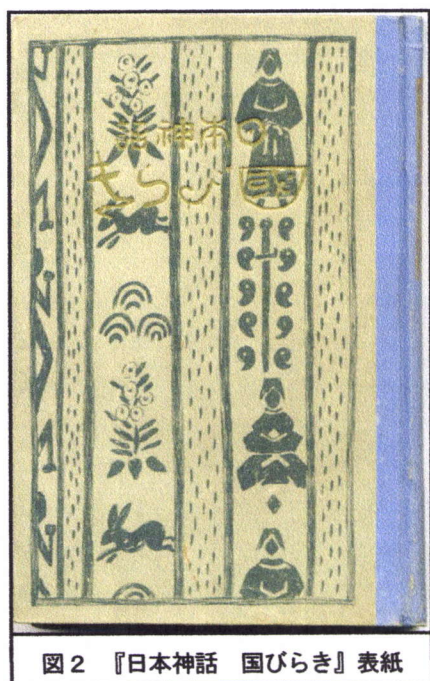


図2 『日本神話 国びらき』表紙



あること、スセリビメがスサノヲの実子ではなく猶子とされていることなどが挙げられる。最後にオホクニヌシは三諸山に移り天孫の守護者として国を鎮め、その息子（事代主）は三輪山にこもって父の事業を継ぐという展開も特徴的である。碧瑠璃園は多くの歴史小説を執筆しており、その一環として『古事記』『日本書紀』に題材を求めたものと思われる。多くの資料を参照し取り入れて記述をするのが碧瑠璃園作品の特徴で、これは他の作家には見受けられない点である。

### ●中里介山「神人東征」

【書誌情報】『日本及日本人』八三三 一九二二（大正十一）年四月。一九二五（大正十四）年一月、白揚社『隣人夜話』所収。

【概要】ヤマトタケルが東征に出発する日を「今」として書き起こし、亡くなるまでを記した「従軍通信」風の小説である。西征は過去の出来事として書かれる。

○「序」によれば「日本武尊東征を従軍通信のやうに書いたままで」で小説ではないとする。また「大體に於て家庭子女の讀物にふさはしいもの」とされており、本文が総ルビであることも「家庭子女」を意識した体裁といえよう。しかし難解な漢語が多く、中里のいう「家庭子女」はある程度高い教育課程まで受けた層を指す可能性がある。

本文における引用や固有名詞の表記から、『日本書紀』に拠っていることがわかる。タイトルの「神人」も『日本書紀』巻七において景行天皇がヤマトタケルに言った次の言葉「今し朕、汝の為人を察るに、身体長く大きく、容姿端正し。力能く鼎を扛げ、猛きこと雷電の如し。向ふ所前無く、攻むる所必ず勝つ。即ち知りぬ、形は則ち我が子にして、実は則ち神人にましますことを。」（圈点は田中）からとられたようである。全体として『日本書紀』に拠ってはいるが、所々で『古事記』のエピソード、たとえば（出雲建）の征伐などが挿入されている。

作者が「従軍通信のやうに書いた」としているように、語り手はヤマトタケルを「殿下」と表現し、語り手自身のことは「我々」あるいは「我等」としている。そして語り手は『古事記』『日本書紀』に登場する特定の人物ではなく、ヤマトタケルの間近にはいるが名も無き一軍人、という立場である。語り手が直接に知り得ないような箇所は、他の者が「殿下に申し上げた處によると」や「くになつたとの事である」と伝聞のかたちで記されている。「走水にて」「碓日坂にて」など一部には候文が用いられ、通信文らしさを醸している。

●碧瑠璃園『物語日本史』全五巻

【書誌情報】大鑑閣 第一巻「神代の巻」一九二二（大正十二）年五月二十日発行、同年七月十五日再版発行。第二巻「建国の巻」一九二五（大正十四）年七月一日発行。第三巻「海外発展の巻」一九二五（大正十四）年十一月十五日発行。第四巻「仏教伝来の巻」一九二六（大正十五）年十月二十五日発行。第五巻「文化革新の巻」一九二六（大正十五）年十月二十五日発行。一巻につき約三〇〇ページ前後あり、挿絵は無い。

【概要】第一巻「神代の巻」は、目次によれば「おのころ島」から「三諸山」まで、つまり神々の誕生からオホクニヌシが三諸山に鎮まるまでが記される。第二巻「建国の巻」は、目次によれば「天孫降臨」から神武天皇の誕生と東征を経て崩御とその後の「国勢進展」までが記される。第三巻「海外発展の巻」は、垂仁天皇、景行天皇とヤマトタケルの話、神功皇后の「三韓征伐」のほか、海外記事が記された天皇の代の話がまとめられている。第四巻「仏教伝来の巻」は応神天皇の時代から聖徳太子の時代、さらに上宮王家の滅亡までという広い範囲で、仏教関連の記事を中心にまとめられている。第五巻「文化革新の巻」は、目次によれば「蘇我氏の滅亡」から「律令選定の完成」という文武朝までの歴史、且つ美術、文学、思想、風俗といった記事も記されている。

○通史形式の歴史小説というスタイルをとる。史書的な記事の羅列ではなく、人物に台詞を与え心情を書き込み、情景を描きあくまでも「物語」として仕上げている。

『日本神話 国びらき』同様、『古事記』をはじめ『日本書紀』『風土記』など他の上代文献を参照していることが認められる。さらに各地の神社縁起や考古学的見解等をも取り入れて入れている。

第三巻「海外発展の巻」のオトタチバナヒメが入水を決意する場面は、昭和戦前期の高等女学校の国語教科書に採録されている。オトタチバナヒメの話題は当時の女子教育にとって相応しいものとされていた（第二章第二節第四項、第四章第四節第四項参照）。小説のこの場面は『古事記』原典に比べ、ヒメの強い意志や決意などの内面がはつきりと描き出されているため、女性の生き方の手本として女学校の教材に採用されたと考えられる。

●長与善郎「大雀命」

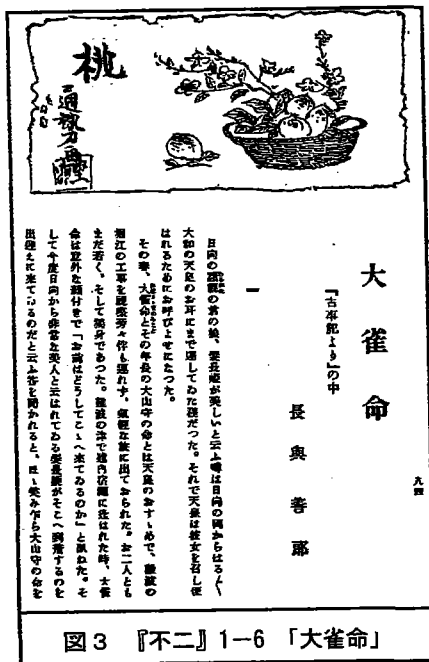
【書誌情報】『不二』一一六 一九二四（大正十三）年九月。一九二六（大正十五）年四月、岩波書店『菜種圃』所収

【梗概】『古事記』の応神天皇代後半、オホサザキノミコト（後の仁徳天皇）が皇位を継承するまでの話に相当する。弟（大雀命）は誠実で素直な性格であるが、兄（大山守の命）は幼い頃からひねくれており、皇太子になると噂のある（大雀命）に対して常にいやみを言うような人物である。（大雀命）には皇太子になろうという意志はなく、かえって父からの偏愛に悩んでいるほどであった。ところが下の弟である（稚郎子）が成長すると父の愛情はこの（稚郎子）に注がれ、今度は（稚郎子）が苦しむことになる。（稚郎子）は学問をよくし頭は良いが、父の偏愛ゆえに強い意志を持ってない。天皇は（大雀命）と（大山守）に「年長の子と年少の子では、どちらがかわいいか」と尋ねる。これに対し（大山守）は最年長の兄の名を、（大雀命）は（稚郎子）の名を挙げる。（稚郎子）が立太子した後には天皇は亡くなるが、（稚郎子）は即位せず固辞し続け、（大雀命）が説得を続ける。ようやく（稚郎子）の気持ちも動いたその時、（大山守）の謀反が起こる。（大山守）を殺すつもりはなかった（稚郎子）は、結果的に彼を殺した自責の念から断固として即位しない。（稚郎子）と（大雀命）は皇位を譲り合う。そして（大雀命）は「いつその事俺が立たう。そして稚郎子を再び皇太子に立てやう」と決意し（稚郎子）のもとへ馬を急がせる途中、（稚郎子）自殺の報を聞く。

○副題に「『古事記より』の中」とあり、『古事記』を題材としたことがわかる（図3）。『古事記より』に関しては、書籍の存在は確認できない。

『古事記』では応神天皇の皇子たちによる皇位継承争いとその解決という問題を扱う箇所である。小説では応神天皇の子である三人の皇子がそれぞれに父親からの偏愛と嫌悪という問題に悩んでおり、父への愛情と憎悪ゆえに、謀反や皇位の譲り合いという問題が生起する。（大雀命）が弟に皇位につくことを薦め、弟がそれを固辞するやりとりの場面では、互いに長い説明を繰り返したり、各々の心情が詳細に記され「思想性の勝った、ときには理屈っぽくすらある構成と描出」と指摘される長与の小説の特徴が表れている。

また時代情勢を鑑みた場合に興味深い点として、父である天皇が「凡そ天子の世継ぎを定める事は私情でなされてはならない。天子は皇室のものであるよりは国家のもの、国民全体のものだから」と語る部分がある。戦前は「現人神」として天皇が神格化されていたが、ここには天子（天皇）が国家及び国民



のものという見解が見て取れる。この小説が書かれた時期を考えあわすとき、「天皇は国家人民の為に統治されるのであって、天皇自身の為に統治するのではない」と唱えた、美濃部達吉の天皇機関説<sup>10</sup>を想起させるものとなっている。

### ●野溝七生子『眉輪』

【書誌情報】展望社 二〇〇〇（平成十二）年二月。執筆年は一九二五（大正十四）年とされる。野溝の没後になってはじめて刊行された。執筆については『野溝七生子作品集』（立風書房 一九八三年十二月）年譜の一九二五年の項に「この頃、懸賞募集応募のために小説「眉輪」を執筆。のち菊池寛・久米正雄の選で第一席に推されるも、題材が皇室に関するため、当時としては発表不可能とのことで受賞を見合わせられた。（推定）」と記載されている。単行本『眉輪』の解説（久世光彦「奇蹟の書「眉輪」」）によると、一九二五年に最初映画シナリオとして書かれ『映画時代』という雑誌の懸賞に応募されたという。図4は矢川澄子『野溝七生子というひと』（晶文社 一九九〇年一月）に掲載された「眉輪」の原稿写真。表紙に「小説 眉輪」とあるのが見てとれる。写真のキャプションには「未公刊の歴史小説「眉輪」。これを活字にしていなかったことが最後の心残りだった。」とある。本の大きさはA5版よりやや小さく、三三三ページ。

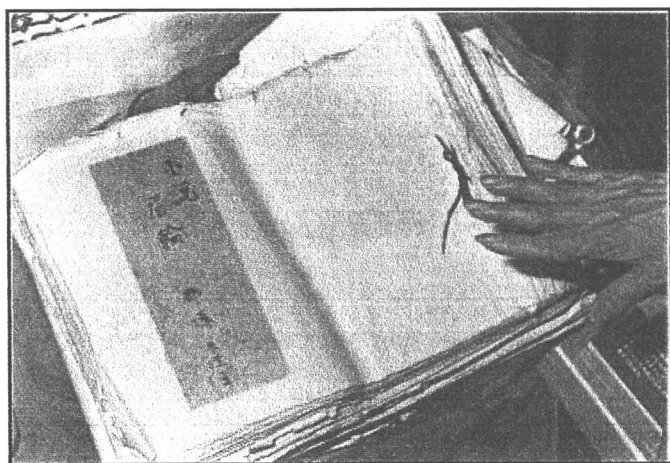


図4 野溝七生子の生前手元にあった「眉輪」原稿  
（『野溝七生子というひと』晶文社 1990.1より転載）

【梗概】（穴穂王）は皇后を立てないまま、弟（大長谷王子）の妃を求め、その妃として（大日下王）の妹（若草香王女）を迎えようとし（根臣）を（大日下王）のもとに遣わす。王は喜び、献上品として「押木之玉纒」を（根臣）に託すが、（根臣）は玉纒を奪い（穴穂王）に偽りの報告をする。これを信じた（穴穂王）は（大日下王）を討伐し、その（王妃）を宮殿に迎えて皇后とする。（若草香王女）は（大長谷王子）の妃となる。故（大日下王）と（王妃）の子（眉輪王）は、最愛の母と叔母である（若草香王女）、親しんでいる（朽木姫）から引き裂かれ、（穴穂王）と母（王妃）の戴冠式の翌日に（円臣）の屋敷に引き取られる。（眉輪王）は（円臣）の屋敷から二度抜け出し、一度目は（若草香王女）のもとへ行き、二度目は故郷の日下へ向かうが、そのまま行方をくらます。約一年後、（朽木姫）と隠れ住んでいた（眉輪王）は王宮へ向か

う。事の発端である玉纒を盗んだ（根臣）を訴え、捕らえるためであった。しかし（穴穂王）と（王妃）の会話を耳にした（眉輪王）は、愛する母が自分のことを考えておらず、（穴穂王）が父を殺したことを知った混乱から（穴穂王）を殺害し逃走、（円臣）の屋敷に戻る。（穴穂王）殺害に激怒した（大長谷王子）は、兄（黒日子王）と（白日子王）のもとに向かうが、互いの誤解から逆上し二人を殺害する。（眉輪王）と（円臣）は（大長谷王子）に滅ぼされる。（眉輪王）から（根臣）のことを聞いていた（円臣）の娘（韓姫）は、（王妃）と（若草香王女）にすべてを告げる。（朽木媼）がその（根臣）の居場所に（王妃）と（若草香王女）を案内するが、（根臣）は発狂していた。一方、（大長谷王子）の従兄弟である（押羽王）もまた狩場で（大長谷王子）によって殺害され、（押羽王）の二人の息子は逃げる。（大長谷王子）は狩場からの帰途に、（若草香王女）の住む日下に向かう。

○作家であり森鷗外の研究者であった野溝七生子<sup>11</sup>の長編小説である。

冒頭に「――生れ給ひし時宮の内なん光りたりし。大人になり給ひて後、御心猛くして多くの人を殺したまひき。世の人大悪天皇と申しき。『水鏡』と引用し、結末には雄略天皇（大長谷王子）が日下に向かったという『古事記』の記述を引用している。このことから、（眉輪王）による「復讐」<sup>12</sup>を中心に据えつつも（大長谷王子）の「云ひ難い苦惱」を描いた作品と見なすことができよう。

「小説 眉輪」であるが、当初は映画シナリオとして書かれたことを窺わせる箇所や人物設定が見られる。たとえば人物設定では、神出鬼没の（朽木媼）は事の発端となった（根臣）と彼が奪った玉纒の行方を追うのだが、すべてを見通して物語の進行に重要な役割をつとめる狂言回しの役どころを担っている。

前述の久世光彦はこの作品を「近代以降の文芸の中にあつて、他に類のない奇蹟の書」「私はこれに取り憑かれ、呼吸が苦しくなるくらいに感溺する幸福に巡り合った」と賞賛している。

### ●三浦閔造『創作 石長姫』

【書誌情報】平凡社 一九二六（大正十五）年十二月。挿絵は無し。

【梗概】富士山の見える地で、美しい（木花咲や姫）と姉である醜い（石長姫）が暮らしている。父は（大山津見神）、母は（チセコル・カムイ）である。（石長姫）は呪われた自分の容姿を嘆き、父はすべてを「高天原の秘儀」と諭すが、（石

長姫は家を出て富士山の洞窟に住み着く。洞窟でアイヌの（若者<sup>オツカイポ</sup>）が牢獄に閉じこめられている幻を見、さらに（オツカイポ）の魂と（咲や姫）の魂が夢の中で交信する場面を見る。（石長姫）は動物たちと交流する生活に幸福を覚えるが、ある日熊に襲われたアイヌ人を助けたことから神と崇められ、一時的にアイヌの祭司の長となる。（石長姫）が洞窟に戻ると神々が姫を迎えに来る。姫は里に戻り、死んだ巫女に代わり（大御神）に仕え「高天原の秘儀」を神々に伝える役に就く。（咲や姫）は（石長姫）に（オツカイポ）のことを相談し、彼を牢から連れ出してくる。（オツカイポ）は（咲や姫）への愛を語る。翌日「天津祝詞の太のりと事」のため神々が集い、（石長姫）の祝詞によつてすべてが清められた。この翌日、日向の高千穂から（天津日子の命）が来る。（日子の命）は（咲や姫）を見初め、（咲や姫）は心躍る一方で（オツカイポ）への思いに悲しむ。（咲や姫）と（日子の命）は「見合ひ」することになり、（石長姫）は神託と預言の巫女として（咲や姫）に同行する。見合いの時、（オツカイポ）の放った矢が柱に突き刺さり、捕らえられた（オツカイポ）は（咲や姫）への恋を打ち明ける。（日子の命）は（オツカイポ）を諭し釈放する。（石長姫）は不安から自ら帰宅する。その夜（石長姫）は異空間に飛び（高御産巢日神）と会い「エーテル體のやうに透明に」なつて（日子の命）と（咲や姫）の部屋に行く。そこで、二人が結ばれるもの（咲や姫）が寝言で（オツカイポ）の名を呼んだことから（日子の命）が怒るまでの場面を見る。「天界」からもどつた翌朝、（石長姫）は父から（咲や姫）が（日子の命）のもとから返されたと聞かされる。父神は（咲や姫）が（オツカイポ）と（日子の命）の両方を思っていることを知る。（咲や姫）は妊娠し（日子の命）に告げるが、命は自分の子ではないと怒る。やがて出産の日、富士山が噴火する。（石長姫）と（オツカイポ）らが燃える八尋殿から（咲や姫）と産まれた子を助け出し、（日子の命）が子の誕生と（咲や姫）との愛を祝福する。

○イハナガヒメを巫女として主人公に据えた小説は、管見によればこの小説のみである。『古事記』では「天孫降臨」したニニギノミコトが美しいコノハナノサクヤビメに出会い求婚する。ヒメの父は、ヒメと姉のイハナガヒメを差し出すが、ミコトは醜いイハナガヒメを返しサクヤビメだけをとどめて交わる。しかし姉は永遠を、妹は繁栄を約束する存在であつたため、ミコトの命は有限となる。サクヤビメは懐妊するが、ミコトは自分の子ではなく「国つ神」の子だろうと疑う。ヒメは疑いを晴らすため、戸のない産屋に入り火を放つて炎の中で無事に三神を産む——このような神話である。小説ではこの『古事記』の展開の骨子は失われていないが、タイトルどおりほぼ作者の「創作」といえることは梗概によつて明らかだろう。最も注目すべきは次の二点である。『古事記』の指す「国つ神」をアイヌの人々になぞらえている点と、「靈氣體」「心靈」

「靈の波動」といった言葉が頻出する点である。前者については、小説にアイヌの詩が掲載された場面があり、三浦が当時出版されて間もない『アイヌ神謡集』（一九二三年）を参照したことが伺える。また小説の世界では、富士の裾野一帯に（大山津見神）を長とする（八百神たち）の住む部族と、アイヌの一族（国つ神）が存在している。（八百神たち）は（大山津見神）がアイヌの女性を（家<sup>オホカムイ</sup>神）として愛し迎えたことは歓迎しているが、アイヌ人が（大山津見神）の娘に恋することとを「赦されぬけがれとして憤つた」という箇所がある。ここにはアイヌ人に対する同化政策<sup>13</sup>や偏見、軽視が描かれているよう。もう一点については、明治後期から大正期にかけて流行した心靈学、心靈研究に関わる記述である。当時は心靈関係の書物が活発に出版され、一九二三（大正十二）年には心靈科学研究会<sup>14</sup>が発足していた。三浦は大正期における新教育運動の思想的先駆者として教育界に影響を与えた人物であり、戦後には総合ヨガを提唱し、神智学<sup>15</sup>の啓蒙活動を行ったことで知られるが、すでに大正末期の時点で心靈学、神智学の思想を小説であらわしていたことがわかる。この小説は「高天原の秘儀」というキーワードを用い、この心靈学という思想を中心軸として物語が展開しているのである。アイヌの人々、心靈学の二つは大正期の「新しい知識」として摂取されたと考えられる。

● 深田久弥「手力男」

【書誌情報】『紫匂ふ』改造社 一九四一（昭和十六）年十一月所収

【梗概】「天の岩戸」神話を素材にした作品である。しばらく活気のない（手力男）が（須佐之男命）の暴れぶりについて羨ましいと考えていると、突然あたりが真っ暗になる。その（須佐之男命）の乱暴で（天照大御神）が天岩戸に隠つたのだ。（手力男）は跳梁しだした禍神に気をつけるよう、神々の住む岩穴を廻り注意を促す。襲ってきた禍神を退治した（手力男）は（宇受賣）と共に、神々に安之河原に集まるよう促す。そこで（天照大御神）を呼び出す手はずを整え、（宇受賣）が舞を始めると（天照大御神）がわずかに岩戸を開ける。（手力男）は力をこめて岩戸に手をかける。

○管見によれば、近代に創作された小説及び戯曲のうちタヂカラヲが主人公（主役）とされた唯一の作品である。天の岩戸神話を素材にした戯曲はある<sup>16</sup>が、タヂカラヲは登場するものの、岩戸を開けることに失敗したりウズメと共に踊ったりし、主役扱いではなかった。しかしこの小説「手力男」はタヂカラヲの活躍を描いた英雄譚といえる。アマテラスが岩戸に隠れた暗闇の状態、神々はまずどうしたのか、何が起こったのか。この点について『古事記』に記された「是に、万の神の声

は、狭蠅なす満ち、万の妖は、悉く殄りき」の一文から着想を得て創作されたと考えられる。タチカラヲがその力で禍神を退治するという、作家の着眼点と想像力は独特のものといえよう。

## 二 『日本書紀』からの創作

本項では、推古朝より後の代の『日本書紀』を素材として書かれた小説について、前項と同様の形式で解説する。

### ●中里介山「夢殿」

【書誌情報】『日本及日本人』七九九 一九二一（大正十）年一月。『改造』九一六〜九 一九二七（昭和二）年六月〜九月。『祖国』二一〜六 一九二九（昭和四）年一月〜六月。一九二九（昭和四）年十二月、春秋社より『夢殿』発行、同月重版。一九三九（昭和十四）年、大菩薩峠刊行会より刊行。春秋社版の本文巻末に「未完稿」とある。

【梗概】推古天皇と摂政・聖徳太子の時代。〈秦の河勝〉は〈鳥佛師〉の描く天人の絵が〈河上の嬪〉をモデルにしていると気づき、彼女がまだ生きていないかと疑う。太子の舎人である〈調使麿〉は、太子の愛馬を橘寺から斑鳩に牽いてゆく。太子は夢殿に「入定」しており、この間に〈高向の學生〉が来て随が滅び唐が起こったと法隆寺にいる〈鳥佛師〉に知らせる。このとき〈高向の學生〉は〈鳥佛師〉の描いた天人に魅せられる。〈調使麿〉は太子の声に起こされ、太子は乗馬し〈調使麿〉は共をする。「山を越え、海を越え」彼らは磐余の里まで飛翔する。〈調使麿〉はそこで崇峻天皇暗殺に關する秘密を幻視する。〈秦の河勝〉は新羅からの間者として捕らえられた人物に会うが、冤罪と知り役人に助命を願い出る。斑鳩の〈鳥佛師〉の製作所では、〈高向の學生〉と〈鳥佛師〉の弟子が、〈鳥佛師〉の描いた絵から女が出てきて〈鳥佛師〉と話していた、などと噂する。一方、〈調使麿〉は目を覚まし、法隆寺にいた。太子は彼に、飛鳥にいる〈物部の大連〉を呼ぶよう命ずる。〈物部の大連〉はすでに亡いはずで不審に思いながらも〈調使麿〉は飛鳥に行く。そこで〈物部の大連〉らが戦に敗れる様子を見る。「十七條の憲法」を唱えながら走る童子を追いかけた〈調使麿〉は、法隆寺まで来たとき目が覚める。そこは橘寺で、法隆寺で目覚めたところから後はすべて夢であった。飛鳥の豊浦宮で太子が維摩経を講ずる日。貧しい老人とその孫が講義を聞きに来るが、〈蘇我蝦夷〉の従者が二人を池に突き落とす。二人は池の中で見つけた木



の塊を蘇我氏に献上しようとするが、追い返され姿を消す。この木の塊は日本最初の仏像であった。同日、畝火の埴安池にある牧場に、絵師と（高向の學生）がやって来た。牧場の番人は、かつて（秦の河勝）に助命された新羅人であった。新羅人と（高向の學生）は二人の女性を見かける。（高向の學生）は女性の一人を（鳥佛師）が描いた天人の本体だと言う。絵師と（高向の學生）は飛鳥に向かい、蝦夷の屋敷で（蘇我入鹿）と（山背の王子）が諍う様子を見た。（蘇我馬子）は蘇我家の将来を不安に思い、（山背）の存在を恐れる。一方（山背）は父・太子のもとを訪れ、守り刀として（守屋）を討った太刀を求めるが、太子は拒否する。太子は（山背）を伴い夢殿に向かい「東方粟散の邊土」の世界を見せる。（山背）は燃えさかる未来を見る。

○この小説が各雑誌に掲載された経緯について、大村治代による先行研究<sup>17</sup>と中里自身の言を参照しつつ記しておく。中里によれば聖徳太子研究は「明治四十五年に始まり、最初の小説は一九二二（大正十）年に『日本及日本人』に発表された。この小説を大きく改変、再構成して発表されたのが一九二七（昭和二）年六月からの『改造』連載版である。連載前の四月号に「創作「夢殿」について」が掲載された。しかし連載四回目の九月号は内務省の検閲によって「皇室の尊厳を冒瀆する恐れあり」<sup>18</sup>として掲載禁止処分を受け全文削除となり、以降は休載された。十月号には筆者の希望により掲載中断との告知が掲載された。この後、一九二九（昭和四）年に『祖国』誌上に続きを連載。単行本は削除や修正をして刊行することとなり、中里は「もと、諸々の雑誌に載せた未完稿に筆を入れて一冊とする―削し去り添し来つて、いよく事の至難にして筆の短劣をなげくのみである。」と記している。

小説の素材は『日本書紀』や『聖徳太子伝暦』<sup>19</sup>である。小説の現在時間は、具体的には六一八（推古二十六）年が基準となつている。ただし登場人物の回想や夢、あるいは幻視により過去や未来へと時間が移動して語られることが多い。（秦の河勝）（鳥佛師）（調使鷹）（高向の學生）という、太子の周辺人物によつて物語が展開してゆき、太子自身はほとんど登場しない。太子の存在感は非常に大きいが具体性を伴わず、生ある人間としてではなく、時間も空間も超越した存在として描かれている。「未完稿」であり、読者にとつては（河上の嬪）の行方や蘇我一族の行く末などが未消化のままに残され不満が残る。しかし、『日本書紀』等をもとに整然とした歴史小説を書こうとしたのではなく、「作家は聖徳太子を描けば満足だった」とすれば、「介山にとつては目的を果たした作品」<sup>20</sup>と解することもできよう。事実中里の「創作「夢殿」について」によれば、聖徳太子の研究は「歴史研究の爲にやったのではなく、創作の感興に驅られて渉り歩いたといふのでもな

く、實は本心にやみ難き追及があつて、物心共に惱みきつて、道を求め歩いた結果が聖徳太子のお膝元まで計らず導かれて行つたといふ次第である」と記してあり、出発点がその思想や宗教心に根ざしていることがわかる。まず聖徳太子の存在があり、追及してゆく過程で必要不可欠な資料として『日本書紀』等を研究する、というかたちで享受したといえる。

#### ●近藤栄一「上宮太子の散歩」

【書誌情報】三田文学会編『三田文学選』（現代作品選集三）高陽社 一九二四（大正十三）年十二月所収

【梗概】聖徳太子の片岡山飢人説話を素材として書かれた短編小説。太子は隋から天竺に行きたいと願っているが、この日は気力の衰えを感じ政務を休んでいる。急に思い立って散歩に出かける。途中、喜捨を願って道ばたに膝をつく老人を見て、貴人ではないかと思う。哀れな老人に自分の外套を着せてやりその場を後にする。太子は食べるために苦しまねばならないことについて考え、宮に戻ったら老人に食物を届けるよう従者に命じる。この散歩から三、四日の間、太子はこの出来事を忘れていたが、従者から老人が亡くなったことを聞かされる。太子は老人を埋葬するよう命じた。後に、老人について菩薩達磨の化身だ、死骸は消えて太子の衣服が畳まれていたなどの噂が流れるが、太子は噂をひとつも信じられなかった。○散歩における景色の描写が詳細で、近藤らしさが窺える。『日本書紀』に記された非現実的な尸解譚の部分―墓を開けたら死骸はなく、太子の衣服が置かれていた―や、達磨の化身とされた箇所は、小説では太子自身が「これらの話を一つも信じる事が出来なかつた」と否定している。これは近藤が近代人として現実的に解釈し処理をした結果であろうが、そんな不思議なことは信じられないと考え否定することで、逆に聖徳太子が生身の人間であることを読者に感じさせる効果もたらしているよう。小説の太子は、自分が旅に出たら日本はどうなるだろうと考えを廻らせてみたり、老人に会ったことを忘れていたり、半ば神話化され聖人と崇められた太子像よりも遥かに人間的で体温を感じさせる人物として描かれている。

#### ●倉田百三「大化の改新」

【書誌情報】『新日本』（新日本文化の会）二一七、八 一九三九（昭和十四）年七、八月。単行本出版に臨み続稿されたが病没。死後の一九四四（昭和十九）年五月、紀元社より『大化の改新』発行。

【梗概】（中大兄皇子）は十九歳。蘇我氏は漢人の一族の力を背景に勢力を伸ばしていた。すでに（山背大兄王）の一族は

（蘇我入鹿）と（蝦夷）によつて葬られてゐる。この恨みを晴らす意味でも（中大兄皇子）は蘇我氏を討つ氣でいた。皇子は（南淵招安）を介して（中臣鎌子）（蘇我石川麿）らという同志がいることを知る。法興寺での蹴鞠の催しで皇子と（中臣鎌子）は出会い、彼ら反蘇我派は徐々に計画を練つていく。（入鹿）は三韓の使節を饗応し、その際に、新羅は唐と共に百濟を攻める計画を立てており、日本が百濟に味方する場合は日本にも水軍を差し向ける準備であることを知る。（入鹿）は唐との交易を目論んでいるため、唐・新羅方につき百濟を見捨てることを新羅の使節に伝える。その動きを察した（中大兄皇子）ら反蘇我派は百濟寄りであり、蘇我氏討伐の具体策を立て、三韓の使節が貢ぎ物を献じる日に決行すると決める。（中臣鎌子）は当日に（入鹿）の太刀を奪うため、同志である（安見子）にある計画をもちかける。それは、百濟の俳優（月青）が（安見子）を慕う心を利用して、この俳優に（入鹿）の太刀を取り去らせるといったものだった。（月青）は計画の全貌を知るが引き受ける。

○話は途中だが、編輯者による「後記に代へて」によれば病床の倉田は「いよいよ入鹿誅伐までをあと二十枚で完結するの醫師が執筆を許してくれない」と言い、そのまま絶筆となつたと記している。単行本出版にあたっては「多少の削除や用語の訂正は避け得なかつた。しかし、検閲當局並に日本出版會が示された尤も良き理解によつて、それとても決して原作の主意や作者の筆意を甚だしく害ふ程度のものではなかつた。」という。

小説の特徴としては、外来の思想の流入と感化を危惧している場面、三韓及び唐の情勢や外交問題の場面に多くの頁を費やしていることがあげられる。前者については蘇我氏が「異邦人」である漢人の一族の思想を取り入れたため「我が國體の神聖も權威がなくなつて」しまい、「漢人風の風俗に染み過ぎたる結果、その精神までも日本人のたましひを失ひつつあることは寒心の至り」と、（中臣鎌子）に語らせている。後者については梗概において先述したが、（入鹿）による三韓の使節の饗応とその後の新羅との密約場面などが詳細に描写されている。また（中大兄皇子）は「百濟は日本の保護國だ」「東海の神國日本はその稜威のためにいづれは大陸の唐と覇を争はねばならぬ」と、一九四〇年前後の対外関係をも彷彿させる表現を繰り返している。当時の倉田は「日本主義文化同盟」<sup>21</sup>に加盟しており、天皇親政、閥族の打破などいわゆる昭和維新運動の思想をこの小説に体现したとされる。「後記に代へて」では「大化の改新を主として日本精神美の雄渾優美天真等の側面より捉へ、日本精神の高揚と歴史的使命の自覺とを作為に盛らうとした」小説であつたと記されている。倉田の目指す理想の日本、そして皇室のあり方を示すために大化の改新というテーマが選ばれ、蘇我氏の専横や対外情勢を詳細に描い

たのであろう。『日本書紀』に記された史実によって、「現在」を語り訴える作品といえる。

●佐藤一英「中大兄皇子」

【書誌情報】『新若人』二―五―八 一九四一（昭和十六）年八月―十一月。一九四二（昭和十七）年三月、鶴書房より『中大兄皇子』発行。

【梗概】皇極天皇元年冬十月九日、地震があつた日からの記述で始まる。中大兄皇子は十七歳。皇子は蘇我氏による専横が民の暮らしに弊害をもたらしていると知り、やがて学問だけではなく腕を磨き剣を鍛えたいと思うようになる。翌年、皇子は葛城山で狩りをした際に部下を亡くし、命を奪つた猪に対し仇をとると思い、猪に蘇我氏を重ねる。同時に政治の世界を極め、その正しさを求める決意をする。その後、蘇我入鹿が山背大兄皇子を襲う事件が起こる。さらに翌年、皇子と藤原鎌足が出会う。鎌足は以前から臣下としての道を外れている蘇我氏を退けたいと思ひ、皇子に近づいたのだった。計画を着々と進め、いよいよ蘇我入鹿を倒す日を取り決め、決行の日となる。入鹿は皇子らに討たれる。これ以後は「大化の改新そのもの」については、直接に何も書かなかつた」とあるように『日本書紀』の記述が簡潔に記され、皇子の行った数々の「改新」については熱心な読者諸君が原典にあたるようにとすすめている。

○一九四一（昭和十六）年晩秋に書かれた「後記」（『中大兄皇子』）によれば「今年春から夏へかけての作」。小説執筆の目的は「憎むべき入鹿滅亡の顛末」を語ることにあつた。さらに佐藤は、「この物語を書いたのもともと、皇子のこの御歌の高く美しい調べに感激したからに外ならぬ」と執筆動機を記している。「この御歌」とは、中大兄皇子の作とされる『万葉集』中の「わたつみの豊旗雲に入日さし、今宵の月夜あきらけくこそ」（巻一―一五）である。佐藤は詩人であり、この小説の前には『古事記』のヤマトタケルの物語と歌に触発され、一九三三（昭和八）年に長編詩「大和し美し」<sup>22</sup>を發表したことで知られる。ヤマトタケルを讃えたのは長編詩というかたちであったが、中大兄皇子の場合は小説でその功績と歌を讃えたのである。佐藤はこの小説によって皇子の歌が「一人でも多くの日本青年の聲に發せられれば、私のよろこびは更に大きい」とする。そして、大化の改新が行われた理由や「精神」について信ずるところを小説に述べ、それを通して「現代青年に一つの呼びかけ」を行ったと「後記」を結んでいる。

この小説の特徴は、『万葉集』の天皇御製歌が所々に散見され、天皇の功績を讃える文言が見られることである。佐藤個

人による上代文献の享受という観点からは、まず詩人として『万葉集』を読み中大兄皇子の歌に触発され、『日本書紀』を主な資料として皇子を中心とした物語を描いたことが窺える。また、一九四一（昭和十六）年という当時の時代情勢も佐藤による享受のあり方に強い影響を与えている。皇族を滅ぼし天皇に成り代わろうとする入鹿を討つ、というテーマは「この歴史にかつてない多難な時代に、ただひとすぢに、「大君の邊にこそ死なぬ」の覺悟を固め決意を強めつつある」佐藤にとっては、小説化し子に読ませるべきものとして積極的に受け入れられたと考えられる。



以上、『古事記』『日本書紀』等上代文献を題材とした小説について、原典との比較を中心に紹介及び考察をすすめてきた。改めて発掘調査から得られた傾向を整理すると次のようになる。『古事記』を素材とした作品の多くは主にスサノヲとオホクニヌシの話をもとにしたものであり、それらは大正期に執筆されていた。また『日本書紀』を素材とした場合は神代ではなく人代を扱った作品が多かった。これらの傾向から、近代の小説家たちが着目した題材がスサノヲやオホクニヌシの神話であったことは明らかだが、なぜこの話題が取りあげられたのだろうか。

その理由の一つは、分量的な多さに見出すことができる。『古事記』の中でも神話に題材をとろうとした場合、このスサノヲとオホクニヌシの活躍する「出雲神話」が神話部分の三分の一以上を占めているという事実がある。『古事記』の上巻（神代）を手にすれば、その多くがスサノヲやオホクニヌシの話なのである。さらに、彼らの話には、ある程度のまとまりと連続性があることから、長めの小説の素材として適していたと推測される。実際に、芥川は新聞への連載、近藤は新聞連載の後に雑誌への連続掲載、武者小路は短編だが内容としては続き物であり、いずれも一回の読み切りにとどまっていなかった。このような物理的・実的な面が執筆活動に影響を与えた可能性があるだろう。

そして、何よりも『古事記』におけるスサノヲという登場人物とその物語自体が、近代の小説家たちを惹きつけたのではないだろうか。スサノヲは「粗暴」「英雄」「試練を課す者」といった、一面にとどまらない様々な性格（キャラクター）に加え、活躍する舞台が時間の経過と共に高天原へ出雲へ根堅州国とダイナミックに移動し、冒険的に物語が進行してゆく。これらの要素が創作意欲を刺激したと考えられるのだ。たとえば芥川の描くスサノヲは、最初は「野蛮」で「純粹」、クシ

ナダヒメと会ったときは「優しく慰める」人物、そして最後は「偉大」な人物となり、舞台は高天原く大きな洞穴く各地の放浪く出雲く根堅洲国（島）と大きく移動している。また、武者小路の書くスサノヲは、オホクニヌシを殺そうとする残酷な面と娘を愛する父親の面を併せもつ。小説におけるスサノヲの変化や複雑な心情は、原典のスサノヲが持つ性格の多様性が作家による様々な読みを可能にした結果と考えられる。

『古事記』に題材をとった小説が生み出された時期に目を向けると、大正期に集中的に現れているが、その理由としては、大正デモクラシー思想の高まりとその影響という時代思潮が大いに関与している。どの作家も『古事記』や『日本書紀』には記されていない創作部分を自由に書き込み、登場人物を増やす。また、構成や設定上不要と判断すれば削除し、話の順序を入れ替える。明治期には、このような『古事記』『日本書紀』の自由な脚色はほとんど見受けられなかった。大正期デモクラシーという時代そのものがもたらした自由さもまた、『古事記』の様々な解釈や想像を可能にさせ、作家たち独自の思想や創造性と相俟って、数々の小説を生み出したといえよう。

しかし昭和に入ると、『古事記』を素材にした小説はほぼ姿を消す。アマテラスやスサノヲ、天皇をテーマにした作品が無い理由として、一九二五（大正十四）年に制定された治安維持法の影響があることは否めないだろう。例外的に「手力男」が認められるが、タチカラヲによる妖怪退治といった趣であり、「皇室の尊厳」に触れることのない差し障りのない話と見なせよう。戦後に至るまで『古事記』は口語訳という形で原文を損なわないように書かれ、作家が新たな登場人物や舞台、展開などを盛り込んだ創作は見られなくなる。大正デモクラシー時の自由な雰囲気は急速に失速したことが伝わってこよう。

1 本章では、執筆時点までに確認できた調査結果を報告するという目的も持ったため、すべての小説および戯曲について言及している。今後も発掘作業は継続する予定である。

2 『サマリヤの女』（無我山房 一九一七年九月）。『日本近代文学大事典』等によれば、同詩集は近藤栄一が慶大在学中に発表した作品。近藤は一九一七年から一九一九年にかけて『白樺』の衛星誌『愛の本』で活躍し、後期の『白樺』に詩、短編小説、戯曲を発表した。詩集は他に『微風の歌』（精神社 一九二六年六月）がある。

- 3 「上宮太子の散歩」(三田文学会編『三田文学選』(現代作品選集三)高陽社 一九二四年十二月)。次項で紹介する。
- 4 『古事記』(小学館『新編日本古典文学全集』) 頭注による。
- 5 大正時代中期、古い道徳にとらわれず自由な恋愛に走った事件が続いて起き、大正一一年には「恋愛の自由」という言葉が流行した(岩崎爾郎・清水勲『明治大正 風刺漫画と世相風俗年表』自由国民社、一九八二年六月による)。恋愛を重視する傾向が世相からも窺える。
- 6 日本における一夫一婦制は、一八九八(明治三十一)年に民法で定められた。
- 7 碧瑠璃園(一八六四〜一九二六)は、本名渡辺勝。名古屋出身。上代をとりあげた作品はほかに『日本武尊』(偉人の幼年時代七)(霞亭会出版部 一九二二年三月)があるが、児童向け作品のため本節では扱わない。
- 8 棚田真由美「昭和戦前期における『古事記』の教材化についての研究―高等女学校の場合」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』五〇 二〇〇二年二月)が同様の指摘を行っている。
- 9 田中榮一「長与善郎の思想と文学―その出発前夜を中心に―」(日本文学研究資料刊行会編『大正の文学』有精堂 一九八一年十月)
- 10 天皇機関説は、大正時代半ばから昭和時代の初期の憲法学説として国家的に公認されていた。
- 11 野溝七生子(一八九七〜一九八七)は、兵庫県姫路市出身。一九二四(大正十三)年に長編小説「山樞」が新聞懸賞小説に入選しデビュー、同作品が代表作でもある。ほかに『女獣心理』など。一九五一(昭和二十六)年から東洋大学で教鞭をとる。森鷗外および比較文学の研究者。
- 12 『古事記』(小学館『新編日本古典文学全集』)の章節タイトル「目弱王の復讐と大長谷王子」による。
- 13 明治政府はアイヌの人々を日本の戸籍に編入し、アイヌ人は日本国民とされ、それまでのアイヌ民族としての生活習慣を禁止され日本人としての生活習慣を強制された。同化政策の代表的な法律として、一八九九(明治三十二)年に制定された「北海道旧土人保護法」がある。「保護」を名目に土地を奪い、狩猟・漁労を制限して農業に従事させようとするなど法制的にも差別した。
- 14 心霊研究者・浅野和三郎による設立。『心霊研究』『心霊界』などの機関誌を発行。
- 15 神智学は、『広辞苑』(第六版)によれば「人間に神秘的靈智があつて、これによつて直接に神を見ると説く信仰・思想。

接神術」とされる。現在のスピリチュアリズムに連なる思想と考えられる。

16 佐竹守一郎「天岩屋戸」(『劇と評論』一一三 一九二二年八月)、高田保「天の岩戸」(『新小説』二九—九 一九二四年九月)。本章第五節参照。

17 大村治代「中里介山『夢殿』試論—(宗教小説)の試みに関する考察—」(『国文学研究ノート』三八 二〇〇四年一月)

18 中里介山「『夢殿』掲載禁止」(『隣人之友』一二二 一九二七年九月)

19 平安時代初期成立。著者未詳。聖徳太子の一生の事蹟や関連する事件を記した伝記。太子の父母の成婚から蘇我氏の滅亡までを記す。

20 前掲大村論文による。

21 日本主義文化同盟(後に文化維新同盟)は右翼活動家である影山正治によって一九三七(昭和十二)年九月に結成された。倉田はその機関誌『怒濤』に寄稿している。長沢雅春「日本浪漫派と影山正治—大東塾グループ」の昭和維新文学運動—(『国文学 解釈と鑑賞』六七—五 二〇〇二年五月)による。

22 『新詩論』二(一九三三年二月)。この長編詩「大和し美し」に触発された版画家、棟方志功は一九三六(昭和十一)年、国画会に「大和し美し版画巻」を出品して日本民芸館に買上げられ、大さな転機となった。この版画は二十枚に及び、絵よりも文字つまり佐藤一英の詩で埋め尽くされた特殊な構成をとる。

23 本来詩人である佐藤が小説を執筆した理由については、佐藤自身が「子の親として子に讀ませる物語のいくつかを書いておくことは子に對しての義務であると感じて」いたためと「後記」で明かしている。



#### 第四節 演じられる神話—武者小路実篤と山本有三の戯曲をめぐって

##### 一 武者小路実篤の新解釈—「日本武尊」

本節では、『古事記』を素材にした戯曲について考察する。取りあげるのは、武者小路実篤と山本有三の戯曲作品である。ここでの主眼は、作家たちによる『古事記』の話の受容の様態を探ることである。その考察のための手法として、『古事記』と戯曲作品との比較を行い、原典との相違点を検証する方法を用いる。相違点には作家たちによる『古事記』の受容態度が強くあらわれるためである。また、作品自体からの考察とは位相は異なるが、作家たちがこれらの戯曲を書く契機を記した文章から『古事記』を受容した状況を確認し、同時期の『古事記』の流布状況についても言及する。

最初に、武者小路実篤の戯曲を取りあげる。

武者小路実篤は『古事記』を素材にして「日本武尊」（一九一七年）、「一日の素盞鳴尊」（一九二一年）、「橘姫の最後」（一九二一年）、「須世理姫」（一九二六年）の四作品を発表している。ただし「橘姫の最後」は「日本武尊」の一場面を訂正したものであるため、本節の考察対象から除く。

以下、発表順に見てゆく。

戯曲「日本武尊」（図1）は、ヤマトタケルがクマソタケル兄弟の館に行く場面開幕を開け、ヤマトタケルの死で幕を閉じる四幕各三場の長編作品である。ヤマトタケルの話は『古事記』『日本書紀』両書に記されており、明治期から小学校国定教科書に掲載され、巖谷小波のお伽噺をはじめとした児童書が刊行されていることから、多くの人々の知るところであったと考えられる。さらに、熱田神宮（名古屋市）をはじめヤマトタケルが祀られた神社が各地にあることから、ヤマトタケルの名は広範囲の人々に知られていたと推測される。

『古事記』によるヤマトタケルの話のあらすじは以下の通りである。景行天皇の皇子・小碓命（後のヤマトタケル）は天皇の命令でクマソのタケル兄弟を征伐に行く。彼は

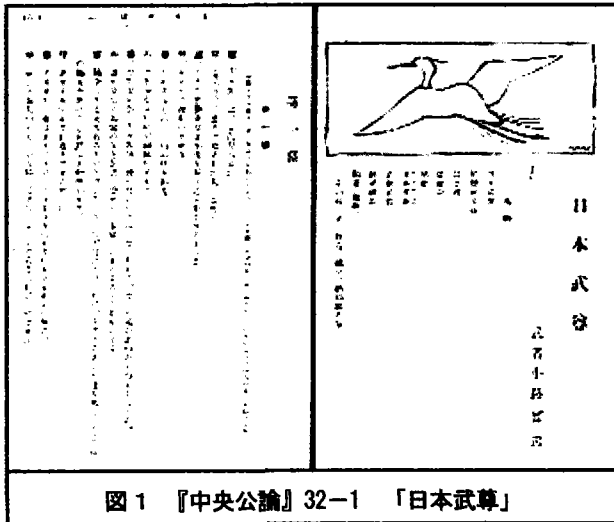


図1 『中央公論』32-1 「日本武尊」

おぼのヤマトヒメから授かった衣装で女装し、タケル兄弟の屋敷に潜入して二人を討ち取る。この征伐の際にクマソタケルの名をもらい、以来「ヤマトタケル」と名乗る。ヤマトタケルは大和に戻る途中に出雲に立ち寄り、賊のイヅモタケルを征伐する。帰還し天皇に復命した後、すぐに東方の賊の征伐を命じられ出発する。遠征の途中の伊勢でヤマトヒメに会い、彼女から草薙の剣と火打ち石を授かる。尾張国に入り、そこでミヤズヒメと婚約する。相模国の野中で国造の策略にはまり火攻めに遭うが、草薙の剣と火打ち石で難を逃れる。走水の海を船で渡る際には海が荒れ、既に后であったオトタチバナヒメが海神の怒りを解くため入水すると波が静まる。ヤマトタケルは東国を平定し尾張国に戻り、ミヤズヒメと結婚する。その後、草薙剣を置いて伊吹山の神を討ち取りに向かうが、神に惑わされ病となり、弱った体で大和を目指すものの、能煩野の地で亡くなる――。

戯曲「日本武尊」は、『日本書紀』ではなく主に『古事記』を素材としていたと考えられる。クマソタケルが兄弟であるという設定やイヅモタケルの話の存在は、『古事記』特有の記述であるためである。実は武者小路自身が『古事記』に拠って書いたことを明言しているのだが、この点については後に詳述する。

『古事記』に拠っているため全体としては原典とほぼ同じ展開で物語が進むが、戯曲独自の設定や創作場面も多い。この創作部分には『古事記』に対する武者小路独自の「解釈」があらわれていると考えられる。なかでも大きな特徴を二点指摘したい。

第一はヤマトタケルと女性達との会話場面の創作である。東征に向かう「旅の宿」でのオトタチバナヒメとの会話（第二幕第二場）、ミヤズヒメの館での、オトタチバナヒメ及びミヤズヒメとの会話（第二幕第三場）などである。特に後者はヤマトタケルを交えて三人で会話をしているのだ。原典ではこの三人が同時に登場する記述はない。原典のオトタチバナヒメは、走水の海の船上で初めて登場し、入水の際に相模での火攻めについて歌う。このことからヒメは東征に同行していたと考えられるが、武者小路はさらにヒメの登場を早め、ミヤズヒメの館ではヤマトタケルを「一悶着」を創作したのである。すなわちヤマトタケルの浮気をなじるオトタチバナヒメ、戦について行きたいと我が儘を言うミヤズヒメ、さらにヤマトタケルが二人の女性それぞれに手を焼いているところに、当事者の三人が顔を合わせる、という場面である。『古事記』研究者の立場からは想像もつかない場面だが、オトタチバナヒメが大和から同行したと想像した、作家ならではの創作場面といえよう。ヤマトタケルは二人のヒメにはさまれ「あゝゝ。俺はこんなによわったことはない」「女と云ふ奴本當に

しまつによわる奴だ」「女にはもうこりぐくした」などと述べるのだ。英雄であるはずのヤマトタケルが女性に手を焼き困っている姿は人間的で、滑稽でさえある。このようなヤマトタケルの滑稽な面は原典には見受けられない。上代文学研究における解釈としては、複数の女性をうまくおさめることが英雄や大王の徳の一つとされる。しかし研究者による解釈を離れ、武者小路は自由にヤマトタケルを描いている。この場面は物語の展開上必要な台詞もなく会話内容は痴話喧嘩であり、俗な会話だけに、読者や観客にとつてヤマトタケルがもつとも身近に感じられる場面となっている。この「難局」をヤマトタケルがどう対処するのか、そして二人の女性がどのようなように対決するのかと笑いながら期待したと想像される。主人公を身近な存在に感じさせることで感情移入を促す手法といえ、その意味では観客を意識した箇所といえよう。

第二は、ヤマトタケルの死の原因の変更である。あらすじで記したように、『古事記』原典におけるヤマトタケルは伊吹山の神に打ち惑わされことを契機として最期の時を迎える。しかしこの戯曲では、(獵師)に扮した都から来た「間者」によつて毒殺される。この間者は正体を明かさないが、ヤマトタケルに対して父の謀ではないことだけは伝える。それを聞いたヤマトタケルは安心し、(獵師)に伝言を残した後に歌を詠み、力尽きる。この死の場面には、武者小路独自の解釈が込められているようだ。神ではなく人間の手によつて倒されるという変更からは、神よりも人間の世界を重視するという思考が窺える。原典において伊吹山の神は白猪となつて姿を現すが、戯曲では(獵師)が猪のことを「山の神様」と言うもののこの猪はヤマトタケルに蹴り落とされるばかりで神ではないようである。これ以前、走水の海の場面においても戯曲では神は具体的に現れていない。オトタチバナヒメや「船頭」たちが「海神の怒りだ」と騒ぐばかりである。戯曲では、神が現れたり主体的に行動することはない。ヤマトタケルは、姿を現さない神を恐れはいなかった。走水の海では「俺は海神を恐れはしない。たゞ俺の恐れるのは海神を恐れすぎるものだ」として、神自身ではなく神に対する人間の側の過剰な思い込みを恐れていた。そして伊吹山の神をも恐れない。神にとつて人間は小さく恐るに足りず、「神は人間のことは氣にしない」ためだ。だが「俺の恐れるのは人間だ。人間の嫉だ」と述べる。ヤマトタケルは、あくまでも神ではなく人間を凝視していたといえよう。そしてヤマトタケルの恐れる人間の嫉妬―おそらくは彼を嫉む兄弟達の誰かの―によつて殺される。最期に(獵師)に向かつて「俺はこの山の神の怒りにふれて死んだことにしてくれ」と言い残すが、山の神の怒りにふれたという伝承がここから始まるのだと示唆していよう。武者小路は後に『白樺』にこの戯曲の雑感を寄せ、「大概古事記によつた。少し解釈をちがへた処はあるが、見かけはなるべくかへなかつた」と述べたが、これは武者小路による「ヤマトタケル毒殺

説”とも呼べる新解釈といえるだろう。この解釈に至った背景にはやはり、神という不可思議な力が現れない、人間の世  
界での出来事としてヤマトタケル譚を捉えようとした現実的な思考法が垣間見える。

また付言すれば、芝居の演出という観点においてラストシーンは最も重要な場面といえる。ヤマトタケルの英雄譚はお伽  
噺をはじめとして広く人口に膾炙していたと推測されることから、大和に向かつて杖をつきながら歩くものの途中で倒れる  
という、原典に即した結末を知っている読者や観客もいたと考えられる。このような観客の予想を裏切り、伊吹山で健康な  
ままに毒を盛られて一気に死を迎える展開は、結末のどんでん返しとして相応しい幕切れといえるのではないだろうか。

最後に、武者小路が「日本武尊」を執筆する契機を記した「あとがき」に目を向けたい。約五ヶ月後に書かれた「あと  
がき」だが、武者小路自身が参照した『古事記』について言及しているからだ。

武者小路は「或夜、ふと第一幕の第一場が頭に浮んだ」のでこの作品を書き始め、翌朝第二場（クマソタケル征伐）を書  
き上げたあとで「日本武尊」のことを書いた本を買って求めたという。その本は神田の古書店で見つけた渋川玄耳『日本神典  
古事記噺』（一九一〇年）であった。この『古事記噺』によってクマソタケルを兄弟だと知った武者小路は、一人であ  
った登場人物から、兄弟へと書き直す。

当初クマソタケルが一人だったという設定は『日本書紀』に拠るものである。この設定に基づいたヤマトタケルの話を載  
せた書物は多い。たとえば、一八八五（明治十八）年生まれの武者小路は検定教科書で学んだ世代であるが、当時の検定読  
本教科書（国語）の多くがヤマトタケルの話を掲載しており、そのほとんどがクマソタケルを一人と設定していた。

さらに「あとがき」によれば、武者小路は『古事記噺』の購入後、第二幕第二場（東征途中の旅の宿でオトタチバナヒメ  
と会話する場面）まで書き上げたあと、志賀直哉に「本文の通りかいてある」「古事記」の本」を借りたという。その前には、  
長与善郎からも「通俗に日本の歴史のことがかいてある本を一冊かりた」と述べている。白樺派の同人たちの間で本を貸し  
借りしている様子がわかる。志賀直哉が持っている「本文の通りかいてある」「古事記」とは、原文（訓読文）あるいは書  
き下し文と推測される。原文（訓読文）であれば、当時『古事記』の訓読本の主流であった本居宣長の『古訓古事記』の可  
能性が高い。ほかに再版を重ね比較的入手しやすいと考えられる『古事記』訓読本兼注釈書には、井上頼文『標註古事記』、  
池辺義象『古事記通釈』などもあった。また長与善郎が持っていた「通俗に日本の歴史のことがかいてある本」とは『古  
事記』の名がついていない歴史書の類と考えられる。戯曲には『古事記』以外を確認したことが明らかな箇所がある。ミヤ

ズヒメがヤマトタケルに対し、「陛下はあなたのお立ちの時、なんとおつしやつたのか妾ちやんと覚えてゐますわ。「天下は我位なるも汝の位なり」とおつしやつたのでしょ」と述べる。これは『日本書紀』（巻七 景行天皇四十年七月）の「亦是の天下は則ち汝の天下なり。是の位は則ち汝の位なり」という、景行天皇がヤマトタケルに向けた言葉をういたものである。このことから、武者小路は『古事記』にほぼ拠りながら『日本書紀』も参照し、創作したことがわかる。次項では、神代の話を素材とした武者小路の戯曲について考察する。

## 二 武者小路実篤「一日の素盞鳴尊」「須世理姫」

まず、武者小路の「一日の素盞鳴尊」<sup>10</sup>について見てゆきたい。

この作品は、『古事記』あるいは『日本書紀』におけるスサノヲの話のうち、ヤマタノヲロチ退治の場面をもとにした戯曲である。この作品の特徴として、登場人物の設定が大きく変更されたことが指摘できる。これらの変更点及び戯曲独自の設定に着目し、「一日の素盞鳴尊」におけるスサノヲ像、さらに武者小路の執筆意図について考察してゆきたい。

最初に、この戯曲の梗概を述べる。毎年村に来ては一人ずつ村の女をさらう（恐ろしい男）のもとへ（娘）が行こうとしている。悲しんでいる（娘）とその両親のところに突然（素盞鳴尊）が現れ、その（恐ろしい男）を殺してやろうと言う。やってきた（恐ろしい男）と（素盞鳴尊）が対決し、（素盞鳴尊）が勝つ。（恐ろしい男）は命乞いをするが、村の男女から責められると開き直り悪態をつく。（素盞鳴尊）はこの（恐ろしい男）を殺し、村に平和が訪れ大団円となる――。

原典と戯曲を比較したとき、最も大きな設定変更は、大蛇ヤマタノヲロチが人間に置き換えられたことである<sup>11</sup>。『古事記』によれば、ヲロチはホホズキ（酸漿）のような真っ赤な目、八つの頭と八つの尾、背中に木々が生え、腹は血でただれているという巨大な怪物で、年に一度来ては娘を一人ずつ喰うという存在である。一方戯曲では（恐ろしい男）が毎年一度やってきて村の女を一人ずつさらうが、一年経つと女を猟奇的に殺害し、新たな女を求めて村にやって来るという設定である。（恐ろしい男）が連れ去った女を殺すのは「面白いから」だ。この（恐ろしい男）を殺そうとすれば「村中のものは手を切られ、足を切られ、目をぬきとられ、家はやかれ、子供は池にたゞきこまれ」「村中すつかり焼かれ、半分からの人は殺されてしまひ」「生き残つた人間も大概片輪にされ」る有様である。原典では大蛇であるヤマタノヲロチは、戯曲におい

ては異常な人物として擬人化されている。当時、ヤマタノヲロチを舞台上で表現するには、役者が仮面を被ったり衣装を着たりする方法<sup>12</sup>も存在したが、武者小路は擬人化を選んだ。殺戮を行う異常者で怪力の持ち主ではあるが、「恐ろしい男」という人間として設定されているのだ。この設定によつて、ヲロチ退治譚にどのような変容が見られるのだろうか。

上代文学研究の観点からは、ヲロチの人間への変更は、原典の持つ「恐ろしさ」の質を根底から変更するという結果をもたらしている。なぜなら、毎年やってくるヲロチの正体を、原典の舞台である「斐伊川」の氾濫の象徴とする通説に従えば、その恐ろしさとは、自然の驚異への畏怖であるためだ。また、毎年一人喰われる娘とは、自然災害というかたちで現れる神の怒りを鎮めるための供物と考えられる。これらの神話的な意味が戯曲では姿を消すことになった。「恐ろしい男」という猟奇的殺人者によつて、女とその家族は無意味にさらわれ惨殺されるという「恐ろしさ」を感じ、ほかの村人も、逆らえば殺されるという死や暴力に対する「恐ろしさ」だけを感じる。その意味では、武者小路はヤマタノヲロチ退治譚に神話を見ず、人間界の話として物語を構築している。また、「恐ろしい男」は人間であるが故に知恵を持っており、出された酒は娘に毒味をさせた上で口にするため、ヤマタノヲロチのように強く醸した酒に酔いつぶれてしまうことはない。スサノヲの策略にはまらないのだ。したがつて原典で示される、知恵を持つ英雄神としてのスサノヲの姿が強調されることはない。

このスサノヲもまた、その人物像が変更されている。原典のスサノヲはヤマタノヲロチを退治し娘を救う英雄神だが、戯曲作品では、力が非常に強く、特に前半ではその力を過信する態度が見受けられるものの、同時に正義感も強い人間となっている<sup>13</sup>。さらに後半では腕力に頼ることの愚かさを学び、最後は道徳的な人間として働くことを宣言するのである。

戯曲では、「恐ろしい男」もスサノヲも怪力の持ち主だが人間である。そしてこの二者は、大岩を持ち上げたり取り組みあったりと、あくまでも素手での力比べを行うのである。酒（策略）も剣（道具）も用いずに、人間のもつ本来の力だけの対等な勝負をする。そして強いはずだった「恐ろしい男」はスサノヲの前にあつて破れるが、この場面は人間の力の脆さと強さを表現してしよう。さらにいえば、「恐ろしい男」自身がスサノヲの一面であつたとも読み取れる箇所がある。スサノヲは「恐ろしい男」を倒す直前に「俺はなんだかへんな気がして来た。腕力だけをたよる人間のいかにあはれであるかをまのあたりに知つた。「中略」俺はお前を他人だと思はないぞ。やすらかに往生せよ。」という台詞を言う。この後、暴れた「恐ろしい男」を絞め殺す。スサノヲは「恐ろしい男」に対して自分自身を見、「腕力だけをたよる人間」であつた自分の一面と決別したのではないか。この後の場面で、娘に促されたスサノヲが村人達に向かつて誓う次の台詞がそのこと

を物語ってしよう。

俺はお前達の平和は奪はない。罪のないものを殺したり、ひどい目にあはしたりはしない。俺は旅人だが、こゝにゐる限りお前達の為に恐ろしい人間にはならず、役に立つ、なくてはならない人間になるやうに骨を折る。

スサノヲは改めて「恐ろしい人間」にはならないことを宣言するのである。演劇評論家の大山功は、この戯曲を「人間の力強さを描いたもの」とし、「その力を悪用せず、平和に生きるものゝ味方をし、人類のために役立つ人間になるやうに努力する――それが人間のなすべき責務だと作者はいつている」<sup>14</sup>と解説する。確かに武者小路はこのやうなメッセージを込めていよう。しかしそれだけではなく、武者小路はほかのメッセージも届けようとしているやうだ。

原典における英雄神スサノヲによるヤマタノヲロチ退治譚は、上代文学研究の立場からは、農耕儀礼の反映と、産鉄集団の争いという二説が依然有力とされている<sup>15</sup>。しかし武者小路はこのやうな解釈から離れ、異なるテーマでスサノヲの話を捉えている。そのテーマは、スサノヲが救うのが、娘だけではなく最終的に村という共同体になつていく点に見出せる。スサノヲが〈恐ろしい男〉を締め上げたとき、村の男女が来て〈恐ろしい男〉の罪を曝き責める。そして村の人々の目前で公開処刑しながらにスサノヲが絞め殺すのだが、村の人々の登場は戯曲独自の設定であり原典にはないものである。村と村人の存在が強調されていることが見て取れよう。助かった娘は最後に村人に向かって言う。「皆さんの誓はほろびたのです。もう怖いものではありません。村も之からは榮へるでせう。之からは安心して働けます」。このやうに村の繁栄と労働できる喜びを述べるのである。また、先に引用したスサノヲの台詞は村の平和や秩序を守れることを誓うものであった。これらの台詞は、武者小路が理想郷を目指して建設した「新しき村」<sup>16</sup>を彷彿させる。戯曲執筆時（一九二〇年十一月）は「新しき村」の設立から二年を過ぎた時期であった。後に、村の出版物にもこの戯曲が「村の本」に再録されてゆく<sup>17</sup>。

武者小路は、ヤマタノヲロチ退治という神話をもとに、村の平和を人間の力だけで取り戻すという筋書きの戯曲に仕立てた。ここではスサノヲという名の英雄神は求められていない。このことは、最後の場面で娘が名を問う場面にも現れていよう。

娘。ありがたう。それからあなたの御名前は。

素盞鳴尊。素盞鳴尊！

娘。素盞鳴尊、いゝお名前ですこと。

素盞鳴尊。名なんかどうだつていゝ。

『古事記』では、スサノヲはヲロチ退治の前に翁から名を知らないと言われたとき「吾は、天照大御神のいろせぞ。故、今天より降り坐しぬ」と答え、天照大御神との関係性を述べるが、戯曲ではこれを裁ち切り、自身の名を顧みていない。彼はこの村に立ち寄った名も無き旅人であり、〈素盞鳴尊〉という名を負う神ではないことが示唆されている。

「一日の素盞鳴尊」でスサノヲが村の平和と秩序を乱す者を倒し、村人が喜ぶという筋立てには「新しき村」の繁栄を祈る武者小路の理想が重ねられている<sup>18</sup>。そして村を守り作りあげるのは、人間の力である、というメッセージがこの戯曲に込められていよう。



最後に、武者小路の戯曲「須世理姫」<sup>19</sup>について言及する。これは『古事記』におけるオホクニヌシの「根堅州国訪問」譚の後半部分だけを素材にした戯曲である。オホクニヌシが野原で火攻めにあうところから、スセリビメを連れて逃げるところまでのごく短い範囲で、登場人物は『古事記』と同じくスサノヲ、スセリビメ、オホクニヌシの三人である。

まず、この戯曲の場面構成や台詞数を確認しておきたい。武者小路がタイトルを「須世理姫」とした理由に関わるためである。この戯曲は武者小路が記したように「一幕」だが、四つの場面で構成されていることがわかる。最初はスサノヲとスセリビメの二人が会話する場面、次はオホクニヌシとスサノヲだけが話す場面、その次にはスサノヲが寝てしまいオホクニヌシとスセリビメだけが話す場面、最後は三人全員で会話する場面である。つまり登場人物全員がそれぞれ相手をかえて一対一で対話し、最終的に全員で会話を行うという構成をとる。登場人物それぞれが同程度出演しているようだが、厳密に言えば、最初の場面でスセリビメは芝居の開始時点から舞台上にあがっており、開始後にスサノヲが、次の場面でオホクニヌ



シが登場することになっている。そして最後の場面は幕が下りる寸前まで三人が舞台上にいる。つまりスセリビメは最初から最後まで最も長く舞台上にいるのだ。また、台詞の数においてもスセリビメが最も多い<sup>20</sup>。最も長時間出演し台詞の数も多いという点において、スセリビメが芝居の主要な人物として位置づけられていることがわかる。さらに、ヒメの台詞をたどると、特に後半でオホクニヌシに逃げる段取りを指示し、スサノヲを挑発するなど勝ち気で積極的な性格に造形され、物語を牽引していく立場にあることが読み取れる。これらの点からタイトルが「須世理姫」とされたと考えられる。

次に、『古事記』原典と戯曲「須世理姫」とを比較した場合、異なる箇所について述べる。最も大きな異同は、スサノヲが寝入ったあとの展開である。原典では、オホクニヌシとスセリビメの二人が逃げ出し、その途中でスサノヲが起きて二人を追いかける。一方「須世理姫」では、二人が逃げる準備をしているときに寝ているふりをしていたスサノヲが起き、その場で三人が会話をするのである。その会話でスサノヲはすべてを見通していたことを明かし、二人を逃がしてやるのだ。この三人での会話場面と、スサノヲがすべてを見通しているという点が戯曲独自の設定である。なぜこのような場面となったのだろうか。

三人が交わした会話の主な内容は、オオクニヌシとスセリビメがスサノヲに結婚の承諾を請い、スサノヲは娘の結婚と二人の出発を許す、というものだ。そしてスサノヲは、オホクニヌシが兄弟たちと戦う際には手助けをしようと考えていることも述べる。原典にはないこの最終場面には、スサノヲの父親としての懐の深さ、偉大さが表されているようである。

末尾にみえるスセリビメ（姫）とスサノヲ（命）の台詞は、以下のようである。

姫 お父さんそれではいつてまゐります。

命 お前も元氣にしろ。そしてこの馬鹿男をうまく生かしてやれ。

このやりとりから、原典に比べ父親と娘の關係に焦点があてられた話へと書き換えられていることがわかる。そして「父親としてのスサノヲ像」を描くのは、武者小路にとって二度目であった。この戯曲を発表する二年前、小説「須佐之男の命」と大國主の命」を執筆している（本章第二節第三項参照）。戯曲は小説の後半と重なっており、武者小路は同じ箇所を異なる手法で描いたことになる。しかし「父親としてのスサノヲ像」が強調されている点は両作品に共通している。スサノヲに

父親らしさという性質を加えるのは、武者小路の特徴といえる。

さらに言及すれば、このような嫁に行く娘とその父親との別れは、スサノヲたちが「存在」した神代や『古事記』が書かれた上代であるよりは、武者小路が戯曲を執筆した同時代に起こりうる場面であろう。武者小路はこの戯曲を演劇専門誌ではなく、より広範な読者層を獲得している大衆雑誌『週刊朝日』<sup>21</sup>に発表した。読者にとってスサノヲ、オホクニヌシといった聞き覚えのある、あるいは馴染みのある名前が登場すること、そして現実にあるような身近な話題であることから、読者や観客が共感を得やすい内容であったと考えられる。

このように神話に素材を採りながらも「現在」を彷彿させる箇所が他にも見受けられる。たとえばこの戯曲においてオホクニヌシは、楽観的でどこか脳天気な性格に造形されている。スサノヲはオホクニヌシを何度も「お前は馬鹿だ」と罵るが、一向に応えない。一方でスサノヲはオホクニヌシの正反対、疑い深く孤独で激しい気性の持ち主とされる。このスサノヲがやがてオホクニヌシを認め「今の世の中は少し馬鹿の方がよささうだ」と述べるのだ。この「今の世の中」を仮に武者小路の同時代とすれば、どのようなメッセージが込められているのだろうか。賢いよりも「少し馬鹿」のほうが「天下は泰平」になると読み取れる箇所もある。一九二六（大正一五）年、治安維持法が施行された翌年であり、大正デモクラシーの時代は終焉を迎えつつあった。民衆の様々な運動に対し規制がかけられてゆくなかで、「今の世の中は少し馬鹿の方が」よいと、武者小路は述べているのかもしれない。



以上、武者小路の戯曲作品について考察をすすめてきた。『古事記』において英雄として活躍するヤマトタケルとスサノヲは、戯曲では腕力などあるものの読者や観客にとって身近な面を見せる人間として描かれていた。神々の世界や、神が現れて人間に働きかける世界ではなく、あくまでも人間が中心となり、人間の行為や力で構成される世界が戯曲の舞台とされていた。このことは読者や観客の感情移入を誘う上で有用な手法といえるが、演出を重視したとするよりは武者小路の作風と考えられる。人間としての活動を重視するという、まさに人間賛歌、人間肯定を指向した白樺派の中心的思想があらわれよう。

### 三 山本有三「海彦山彦」「スサノヲの命」

ここでは、山本有三の戯曲作品をとりあげる。山本が『古事記』を素材にした戯曲は、「海彦山彦」(一九二三年)<sup>22</sup>と「スサノヲの命」(一九二四年)の二本である。

「海彦山彦」(図2)の登場人物はタイトルの二人のみで、『古事記』にある海幸彦と山幸彦の説話に素材を得た一幕の短い作品である。冒頭のト書きには「土人の兄弟」とあることから、二人は『古事記』原典のような天孫の血を引くといった存在ではない。舞台が「極めて素樸な小屋の内部」で「真ん中は土間」であることから、彼らは貴人からかけ離れていることが明らかであり、人物設定、舞台設定ともに原典からは遠のいている。

ここでは、山本が『古事記』の海幸彦と山幸彦の話のどこに着目したのかを確認し、その着眼点を中心に考察する。『古事記』原典における弟・山幸彦は、兄から借りた釣り針を無くし、返せと言われたために他の釣り針で弁償しようとするが拒否され、どうしても元の針を返せと無理難題を言われて海辺で泣く。そこに「塩椎神」があらわれ、この神から助

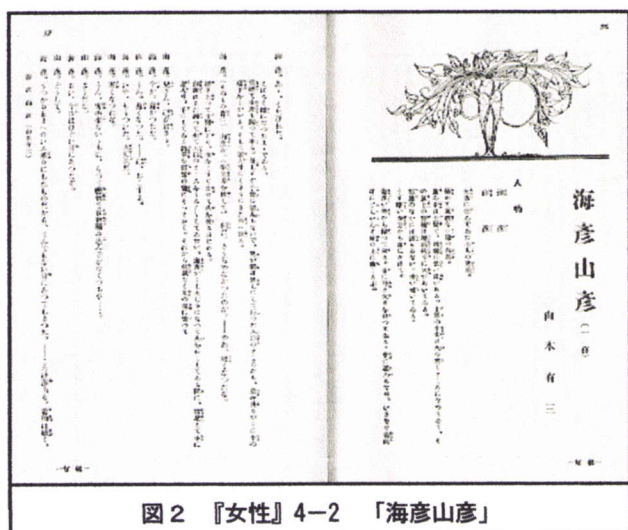


図2 『女性』4-2 「海彦山彦」

言を受けた山幸彦は海神の宮へ行く——これが「海神の宮訪問」譚の序盤だが、山本はここから兄弟の遣り取りを用いて戯曲化した。戯曲の梗概は次のとおりである。弟は兄に借りた釣り針を失くし、そのことを言い出せない。弟はごまかすが、兄に追求されて白状する。しかし弟が素直に謝らず意地を張るので、兄が怒って殴りつける。兄は弟の態度を責めるが、途中で追及をやめて二人は寝ることにする。夜が更け、目が覚めたと

き兄弟の気持ちは和んでいる。もう一度眠りにつく——。

この話は一見、意地悪な兄と哀れな弟のように見受けられる<sup>23</sup>。しかし『古事記』を精読すれば、そもそも弟は嫌がる兄に対して互いの道具の交換を何度も要求したうえで承諾させており、釣り針を無くした際には謝罪の言葉を明言していないことがわかる。代わりの釣り針を差し出して償おうとしているのだ。この弟の行動に山本は着目した。

山本は、この戯曲を創作した事情や契機について『ウミヒコ・ヤマヒコ』について「<sup>24</sup>という文章を書いている。これによると山本は、弟の行動に「いやに返そう、返そう

とする「気持」を読み取り、「なくしたのは悪いが、返せばいいじゃないか」という考え——これが妙にごつんと来た」ので「今までのもの語りとは少しちがった形で書いてみたら、どうだろう」と考えたという。おそらく「今までのもの語り」は、許しを請う弟に対して無理を言って困らせる兄、という構図で書き継がれてきたと考えられる。たとえば鈴木三重吉『古事記物語』（一九二〇年）では、弟が「どうぞこれでかんべんしてくださいまし」と頼んでも、どうしても元の針でないと嫌だと言ひ張る兄の頑固さが強調されている。ここには山本の描く弟の性格「すなほな心になれない」「ひねくれてゐる」といった面は見出せない。しかし山本は弟の行動に、返せばいいという「考え」や「気持」を読み取っている。無論、弟の「気持」や「考え」は原典に記されたものではなく、山本による解釈である。

このような、弟を批判的に捉える視点は、上代文学研究者における従来の解釈にはほぼ見られない<sup>25</sup>。なぜなら、この弟は天孫ニギノミコトの後継者であり、最終的には神武天皇へとその皇統を受け渡してゆく物語の主役とされているためである。兄弟の諍いの場面は、弟が海神の宮に行つて戻つてくる「海神の宮訪問」譚の導入として置かれた契機に過ぎないため、兄弟の言い分の妥当性などには注目されることはなかった。『古事記』のストーリー展開においては、弟による何らかの反抗が必要で、そのために兄が弟を懲らしめるきっかけそのものが重要だったのである。兄が悪役となること自体が、結果として弟が皇位継承者となるための「お膳立て」に過ぎない。そのため弟の言動は、『古事記』の文脈の中においてはとりたてて注目されてこなかったのである。しかし山本は原典に、謝罪の言葉を述べずに代用品を返そうとする弟を発見し、批判的に捉えた。戯曲では「鉤さへ返しやいゝのだらう」という弟の言葉を機に兄が怒り出し、「おまへは何でも償ひさへすれば済むと思つてゐるのか。世の中には返さうつたつて、返せないものがあるんだぞ。」と責める。この「世の中」は、舞台設定である「太古」ではなく山本の生きる「現在の世の中」と見なせよう。山本は『古事記』の神話に、山本自身が常日頃反発していた「物重視、弁償重視の考え方とその蔭にある人間軽視の考え方」<sup>26</sup>を発見し、その箇所「妙にごつんと来」たことがこの戯曲を書く契機となつたと考えられる。

ここで作品に対する評価および先行論における戯曲のテーマを紹介しておきたい。この戯曲——実際に演じられた芝居——は大山功によつて「叙情的、詩的」であり、「深い兄弟愛を浮彫してうるおいのある温い和やかさ、叙情味あふれるペーソス、ふくいくたる芸術的香気がいっぱいに流露して完璧の出来ばえ」と絶讃されている<sup>27</sup>。演劇のジャンルとしては、自分の内面を深くみつめる「性格劇」に部類され、なかでも「自分の中で相反し葛藤する二つの性格を二人の人物にわけて書くとい

う手法」による作品のひとつに数えられる<sup>28</sup>。片岡懋は、この戯曲の意図を「海彦の事をわけた言葉と、愛情を含んだ強い行為に、山彦の頑な姿勢も崩れて、極めて素直な心を示すようになったことを書くこうとしたもの<sup>29</sup>」とする。前述の大山もまたテーマを「深い兄弟愛」と捉えている。

このような兄弟愛を象徴する演出として、「火」が用いられていることを指摘したい。戯曲の冒頭で、兄は土間に下りて火をおこす。火を焚くところは二人が住む小屋の中央にある。この火は兄弟が言い争いをする間ずっと燃え続けている。しかし火は最後の場面で一度消えかかる。そして弟が再び火をおこすのだが、この場面の火は弟の心理状態を表しているようである。消えかかった火―弟のそれまでのわだかまりの炎―の様子を弟が見ていると、兄は「火が消えたのか」と尋ねる。弟は「うむ」と答えてその火が消えたことを認めるのだ。そして弟は新しい火をおこし「もう大丈夫だ」と言う。この後のト書きは「美しい火花が飛んで、火がまた盛に燃えさかる」であり、弟の心が浄化されて「兄弟愛」を象徴するかのような炎となっていることが見てとれる。この後、弟は自分から「兄さん」と呼びかける。弟は最後まで具体的な謝罪の言葉を発しないが、この「兄さん」と呼びかける箇所がある<sup>30</sup>。ことから弟は素直に改心しているとされる。最終場面は、この兄への呼びかけだけではなく、火の状態によっても弟の心の変化が窺える演出となっているよう。さらにこの「火」について付言しておきたい。この戯曲は山本自身が原典とは「テーマから性格から、すべてちがつている」と記しているように、『古事記』からは兄弟という登場人物と、道具を交換したものの弟が釣り針を無くして返せない、という状況を借りたに過ぎない。しかし原典における兄弟の名は、兄・海幸彦が「火照命」、弟・山幸彦が「火遠理命」であり共に「火」を冠しているのだ。兄弟は火を媒介として結ばれており、戯曲においても火は二人の住む小屋の中央に置かれ、兄弟を暖めるのである。原典での兄弟は再び争うことになり、最終的に兄が弟に服従するという結末で閉じられる。これは、弟が天孫ニギノミコトの後継者であるがゆえの結末に他ならない。しかし山本は、『古事記』を皇統を語る物語としては意識せず、人間の兄弟愛とその葛藤を読み取ったと考えられる。

山本による『古事記』の受容態度を知る上で見逃せないのは、前述した『ウミヒコ・ヤマヒコ』についてである。ここには山本が『古事記』を素材に戯曲を書くこうした経緯が具体的に記されている。

山本は最初、コノハナノサクヤビメの話を書くつもりで『古事記』を繙いたという。ふと頭にサクヤビメの話が浮かび、「ぼんやり覚えていた」ので『古事記』を確認したという。武者小路も戯曲「日本武尊」を書く際、まず途中まで書いてか

ら『日本神典 古事記噺』を確認していた。彼らは既にある程度までは『古事記』の話を知っていたのである。一八八七（明治二十）年生まれの山本は武者小路と同じく検定教科書で学んだ世代であるが、サクヤビメの話は教科書に掲載されていないため、別の書籍で知ったことになる。「海彦山彦」の執筆時までには『古事記』の口語訳や訓読本は十冊以上出版されているが、山本は参照した書名を記録していないため、山本がどの書籍を参照したのかは特定できない。

山本は思いついたサクヤビメの話を用いて「美しいが永遠ではない。永遠ではあるが醜い」というテーマで姉妹の話を戯曲化できると期待したのだが、実際に『古事記』で確認したサクヤビメの話は「ちつともおもしろくない」ので落胆したという。そして何気なく『古事記』でサクヤビメの次の話、海幸彦と山幸彦の箇所を読んだときに「とつぜん引っぱられて」これを題材にする。山本が引きつけられた何か、それが「返せばいい」という弟の態度であった。戯曲を創作する上での素材選びには、おもしろいか、そうではないかという作家の嗜好が強く作用していることが窺える。また山本は「この話は、だれもがすでに知っている通りである」という。この話が国定国語教科書に掲載されるのは第四期、昭和に入ってからであることから、誰もが既に知っているならばこれも教科書以外の媒体によっていたことになる。

この「だれもがすでに知っている」話を「在来の話とはだいぶちがっている」ように、登場人物である兄弟の性格も変え「今の人」に近く描いたので、山本は原典の「海幸彦」「山幸彦」の名を避けて「ウミヒコ・ヤマヒコ」としたとする。そして次のように述べている。

この間のラジオの放送で―聞きはしなかったが―おとぎ劇の標題を見ると、「海彦、山彦」となっていたが、ああいうのはよくないと思う。ぼくのはテーマから性格から、すべてちがっているから、わざと変えたのであるが、子どもに聞かせるラジオ劇のようなものでは、―おそらく在来のを脚色したものと思われるから、これは昔からある海サチヒコ・山サチヒコをどこまでも守ってもらいたいと思う。ウミヒコ・ヤマヒコなぞという新しい呼び方は、ぼくの作ひとつだけでたくさんである。

ここには、この戯曲が『古事記』を全く作りかえたものであり、原典を脚色したものではないということが表明されている。「ウミヒコ・ヤマヒコ」は『古事記』とは異なる作品であり、新しくそして独創的であることへの自負が込められている。

よう。

なお上記のラジオ放送については、山本のいう「この間」と推測される時期（一九三四年後期〜一九三五年二月）に新聞等で確認は取れないものの、一九三五（昭和十）年七月にラジオ番組で「童話劇 海幸・山幸」の放送があったことが確認できる。ほかに、ほぼ同時期に「ラジオドラマ 日本武尊」、教養番組として「建国史話」「神典講義 古事記」という番組もあった<sup>32</sup>。

この戯曲は一九二四（大正十三）年四月に四谷で初演され、翌年三月には大阪浪花座、一九三二（昭和七）年九月には新宿、昭和十八（一九四三）年一月に築地での上演記録が認められる。一九二六（大正十五）年八月三十日には、ラジオ劇として放送された<sup>33</sup>。



次に、山本のもう一方の戯曲「スサノヲの命」をとりあげる。『婦女界』誌上に二回にわたって連載されたが、途中から大きく改訂された作品である。この改訂部分を中心に、テーマを考えたい。

戯曲のあらすじをやや詳述する。スサノヲが大勢の人々に組み伏せられている。スサノヲは田の畦を壊すなどの乱暴を働いたために捕まり、ヘタデカラヲの命から拷問を受け高天の原から追放される。場面が替わり（オホゲツ姫）と傷ついたスサノヲの会話となる。水を要求したスサノヲは、（オホゲツ姫）が汲んだ水が汚いと言いがかりをつけて「擲り殺す」。場面は第三場「イヅモノ国トリカミ」に移る。スサノヲと（クシナダ姫）の家が舞台となっている。スサノヲは高天の原で受けた屈辱を忘れられず、自分の力と正義を信じている。力で人を屈服させることや、女を殺したことがあることを（クシナダ姫）に話す。そこにヒメの父（アシナツチ）が来て、部落の人々がスサノヲを討とうとしているので逃げろと言う。ヒメと父はスサノヲを説得するが、スサノヲはあくまでも戦おうとする。人々が近づいてくる。

——第一回ではここで（幕）となり、「第二幕は次号に掲載いたします」の注が入る。しかし後述するように、次号の第二回では、すでに第一回で掲載された第三場が全面的に改訂されて掲載し直された。ここでは第二回で新たに掲載された第一幕第三場から記す——

舞台は「イツモノ国、スガ」になっている。(スサノヲ)と(ヘクシナダ姫)が二人の家を建てる準備をしている。スサノヲは自身の力のために人々から疎まれていて、それゆえに孤独を好み、さらにいまだに姉を許していないのだとヒメに語る。次の場で、舞台は数ヶ月後のスサノヲとヒメの家に移る。この家に人間不信の(ある男)が訪れ、スサノヲと語り合う。スサノヲは(ある男)に同情しながらも論すうちに逆に自分の心が晴れ、やがて姉を許す心境になり、歌を詠む——。作品前半の展開は『古事記』に拠っているものの、スサノヲとクシナダヒメの家が舞台となっていて後半は全くの創作である。書き直されて掲載された第一幕第三場について、第二回の末尾に次のような「お詫び」が載せられた。

#### お詫び

先月号に、スサノヲの命の第一幕を発表いたしました。あの内の第三場はそっくり抹殺したいと思ひます。一度誌上に発表しながらかういふことをいふのは自分の不明であるばかりでなく、読者諸氏にも編集者諸氏にも大変ご迷惑をかけることですが、前のまゝでは如何にも困りますので、私の我儘をゆるしていただきたいと思ひます。それで今度第一幕第三場を書き変へて改めて掲載させて頂き、第二幕を書き足して、完結させましたから、改めてお読み直し下されば幸いです。猶第一幕第二場の最後のト書き(女を擲り殺す)は(女を擲りつける)と訂正。(作者)

該当部分がどのように改訂されたのか、見てゆきたい。書き直された第三幕は短くなっており、スサノヲとヒメの、力や正義などについての会話が改訂前に比べると穏やかな調子になっている。たとえば改訂前のスサノヲは、自分の正義だけを主張し、思い出したいくもない高天の原のことを考えると世の中までもが呪わしくなると吐き捨てる。ヒメが世の中は正義だけでは片がつかないと言うとスサノヲは感情を高ぶらせ、そうかと思うと急に気弱になったり、また女を殺したことは正当だったと打ち明けたり、混乱して「こんな話は止めよう。気が滅入ってしまう」と話を打ち切る。改訂後のスサノヲは、高天の原を呪っている気持ちは改訂前と変わらないが、そのことをヒメから強がっているだけだ、依怙地になっているだけだからかわれる。スサノヲもヒメに対してお前の方が依怙地だと言うとヒメが笑い、和やかに会話が終了する。そしてスサノヲは改訂後の最後の場で(ある男)に対して具体的に「世の中のこととはどうも正義だけで押して行かうとしては方がつかないものがある」「理屈や何かを越えた、もつと深いものがあるやうに思へてならなくなってきた」と、(ある男)の人間



不信を解きほぐそうと説得するのである。これらのスサノヲの言葉は、改訂前ではヒメがスサノヲに向かつて言った言葉であった。このヒメの言葉にスサノヲは反発を繰り返していたのである。ところが改訂後のスサノヲは、〈ある男〉を論すほどに変化しているのである。

改訂前のスサノヲは怒りにまかせて女を殺し、自分の力や自分の信じる正義だけを頼みにして、さらに自分を排除しようとする人々と戦おうとする人物であったが、改訂後は理性の方が勝った人物として設定し直されたといえよう。そもそも女を殺すほど凶暴な人物ではなかったことに訂正している点も、スサノヲの性格をやや大人しく変更したものであろう。

この作品は、スサノヲの人間の成長がテーマと考えられる。そのことは、乱暴且つ自己中心的で「人間らしい気もち」を持たず高天の原を呪い姉を恨んでいたスサノヲが、追放と放浪、クシナダヒメとの生活を経ることで穏やかで心の広い「前」からすると、まるで別な人のやう「な人間となり、最終的に姉との和解を決意する」という、改訂後のストーリーに表れている。この戯曲もまた、「海彦山彦」と同様自分を深く見つめる「性格劇」と捉えてよいだろう。そして、「海彦山彦」と同じく兄弟の確執と和解という展開が盛られた作品に仕上がっている。

なおこの戯曲は表題ページの山本の名の横に「田中良 舞台装置」と記載され、表題ページ上欄と作品中程に舞台背景を模した挿画が描かれている（図3、図4）。これは本論で扱うほかの戯曲作品に見られない特徴である。

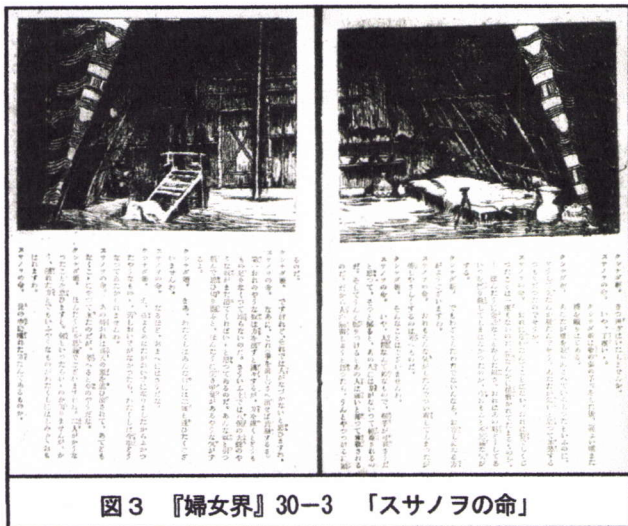


図3 『婦女界』30-3 「スサノヲの命」



図4 『婦女界』30-4 「スサノヲの命」

以上、山本が『古事記』を題材にした戯曲を二本考察してきたが、いずれも『古事記』から人物設定や場面を借り、そこから自由に自らのテーマを打ち出した作品を創作したことがわかる。山本が『古事記』の話に見出したのは、神々の系譜や尊い話ではなく、兄弟愛や人間の成長の物語であったといえよう。

1 第一期国定国語教科書『高等小学読本』一九〇三（明治三十六）年発行に「日本武尊の川上梟帥征伐」が掲載。

2 巖谷小波『草薙剣』（日本お伽噺一七、博文館 一八九八年六月）、杉谷代水『日本武尊』（家庭歴史文庫、久遠堂 一九〇八年八月）、青葉山人『日本武尊』（日本お伽噺第四四編、島鮮堂 一九一〇年三月）など。

3 『古事記』（新編日本文学全集）の頭注による。

4 『白樺』八一（一九一七年六月）掲載。執筆は一九一六年十二月十七日。

5 「あとがき」は我孫子刊行会本『日本武尊』（一九一七年四月）に掲載された。小学館『武者小路実篤全集 第三巻』（一九八八年四月）所収。

6 渋川玄耳『日本神典 古事記噺』（精美堂 一九一〇年十月）は児童向けの書籍。厳密な口語訳ではなく著者による脚色や書き足しが多く『日本書紀』『風土記』からも話を取り入れている。第一章で考察したように鈴木三重吉は渋川玄耳の『三體古事記』（一九一一年）を参照したと考えられ、武者小路もまた渋川の『古事記』関連書を手にしたことになる。

7 明治二十年発行『尋常小学読本』、明治二十五年発行『帝国読本・尋常科用』、明治二十七年発行『尋常小学読書教本』など。ヤマトタケルは人気の教材であった。

8 井上頼文『標註古事記』（小川尚栄堂 一八九九年一月）は書き下し文にルビ、上欄に注釈。一九一八年に十二版が確認される。池辺義象『古事記通釈』（啓成社 一九一一年二月）は訓読文にルビ、語釈あり。一九一四年に第五版が確認される。

- 9 前節で述べたように、長興は後の一九二四（大正十三）年に『古事記』をもとに小説「大雀命」を発表している。
- 10 この戯曲は、一九二二（大正十一）年二月、帝國劇場において初演された。この時の配役は、素盞鳴尊が市川猿之助、娘が森律子、父が十三世守田勘弥、「恐ろしい男」が沢村長十郎であった。戦前ではこのほか一九二四（大正十三）年八月・渋谷聚楽座、一九二七（昭和二）年一月・宝塚中劇場、一九三六（昭和十一）年二月・東京劇場の三回の上演を確認できる。
- 大山功『近代日本戯曲史 第二卷』（近代日本戯曲史刊行会 一九六九年四月）、『武者小路実篤全集』第六卷（小学館 一九八八年十月）、大笹吉雄『日本現代演劇史 大正・昭和初期篇』（白水社 一九八六年七月）を参照。
- 11 「恐ろしい男」が人間であることは、娘が「あの男だつて人間だ」と繰り返すことによってもわかる。『近代戯曲集』（角川書店 一九七四年八月）所収「一日の素盞鳴尊」の頭注（秋葉直樹注釈）も「人間であると強調されている」と指摘している。
- 12 坪内逍遙が書いた児童劇用の戯曲に「をろち退治」（一九二二年）がある。ヤマタノヲロチの頭部の仮面を作るよう、雛形図面を載せている。ヲロチ役の八人がそれぞれこの仮面を被り、連なって登場するという演出であった。坪内逍遙『家庭用児童劇』第一集（早稻田大學出版部 一九二二年十一月）所収。
- 13 秋葉直樹は「神であるスサノオ」がしだいに「人間化」することを示唆している。（『近代戯曲集』角川書店 一九七四年八月）
- 14 前掲『近代日本戯曲史 第二卷』による。
- 15 山田永『「作品」として読む古事記講義』（藤原書店 二〇〇五年二月）。山田はこの二説に対し、ヤマタノヲロチ退治譚を「皇祖神が統治してゆく一連の神話」を構成する主題のひとつである「国作り」の準備段階として捉える。この「国作り」の下準備」という見解は長野一雄「神代記の出雲―その象徴性」（太田善磨先生追悼論文集刊行会編『古事記・日本書紀論叢 太田善磨先生追悼論文集』（有）群書 一九九九年七月）によっている。
- 16 一九一八年（大正七年）十一月十四日、宮崎県児湯郡木城町に創設された。
- 17 「村の本」第十三編『一日の素盞鳴尊他三篇』（日向新しき村出版部 一九二七年九月）
- 18 新しき村の資金集めの爲に、三十三人の作家の作品が集録され出版されたのが『現代三十三人集』（新潮社 一九二二年二月）である。ここに「一日の素盞鳴尊」が収録されていることも、村と戯曲の関連が窺える。

19 この戯曲は一九二八（昭和三）年四月、東京市有楽町の村の会場で、新しき村劇研究会によって初演された。

20 台詞数はスセリビメ八〇、スサノヲ七九、オホクニヌシ六七である。

21 一九二二（大正十一）年二月創刊。創刊当初は旬刊で誌名も『旬刊朝日』だったが、間もなく週刊誌『サンデー毎日』が創刊されたことから、四月から週刊化され誌名も『週刊朝日』となった。

22 一九二四（大正十三）年四月に四谷の大国座で初演され、配役は海彦役が十三世守田勘弥、山彦役が初世沢村宗之助であった（前掲『近代日本戯曲史 第二巻』参照）。戦後にはソノシート（レコード）盤としても発売された。「ソノラマ劇場 団子と染五郎の「海彦・山彦」」（『朝日ソノラマ』二七号 一九六二年三月）。演出は千谷道雄。配役は、海彦が市川団子、山彦が市川染五郎であった。

23 子ども向けの絵本などでも、兄の意地悪さが強調されたものが多い。阿久根治子『うみさちひこやまさちひこ』（盛光社 一九七二年）では、兄が弟の弓矢と獲物を羨ましがり、だまし取っている。

24 山本有三『ウミヒコ・ヤマヒコ』について（『現代』一九三五年二月号）。山本がしぶしぶ語った談話とされる。『山本有三全集』第十一巻（新潮社 一九七七年四月）所収。

25 三浦佑之は「別の見方をすれば、身勝手な弟に振り回されるかわいそうな兄の物語というふうにも読める」とする（三浦佑之『口語訳 古事記』脚注 文藝春秋 二〇〇二年六月）。兄は決して意地悪ではないという見解は、三浦のほか山田永も示しているが、弟の性格を批判的には捉えていない（山田永『「作品」として読む古事記講義』藤原書店 二〇〇五年二月）。

26 片岡懋「山本有三の「海彦山彦」について」（『駒沢短大國文』九 一九七九年三月）。この戯曲に、山本の「幼い時から商売を嫌い、長じて資本主義の物質偏重の風潮に反撥している人らしさ」が示されているとする。

27 前掲『近代日本戯曲史 第二巻』による。

28 西村博子「日本の近代戯曲 一八七九〜一九四五」（日本近代演劇史研究会編『20世紀の戯曲―日本近代戯曲の世界』社会評論社 一九九八年二月）

29 前掲片岡論文による。

30 この「兄さん」の呼びかけは初出では一度だけだが、『同志の人々』（新潮社 一九二四年十一月）に収録された際には

二度になっている。

31 第四期国定国語教科書『小学国語読本』巻五第二十五課「二つの玉」として掲載された。教材では兄弟は仲良くなるという結末である。

32 一九三五（昭和十）年七月十二日付『朝日新聞』に「ラジオ學藝大會」の記事があり、七放送局によるイベントを伝えている。このうちの一つが「東京より「童話劇 海彦・山彦」（中川元次作）碑コドモ會」の番組である。ほかに『読売新聞』ラジオ番組欄によれば、一九三五（昭和十）年二月十一日「ラジオドラマ 日本武尊」（東宝劇団）、同年二月二日、九日、文学博士・河野省三「建国史話」（全七回）、一九三四年十一月一日、十日、文学博士・植木直一郎「神典講義 古事記」（全八回、テキストは植木直一郎『神典 古事記講話』（章華社 一九三四年十二月）に所収された）などがあつた。

33 日本におけるラジオ放送は一九二五（大正十四）年三月二十二日に東京放送局から開始された。萩原朔太郎は蓄音器型ラジオのひどい音声に閉口したことを記した（「ラヂオ漫談」『中央公論』一九二五年四月号）が、聴取契約者数は、放送開始当初の三五〇〇人から翌一九二六（大正十五）年七月には二〇万人を超えた。松本安生「日本の放送開始と後藤新平」（『都市問題』二〇〇七年八月号）を参照。

## 第五節 『古事記』等を素材とした様々な戯曲

### 一 「神生み」から人代まで―『古事記』からの創作

大正時代には、これまで解説した戯曲の他にも『古事記』等を素材とした様々な戯曲が創作されている。本節ではそれらの戯曲について書誌情報、梗概を示し、原典との相違点を中心とした私見を今後の研究のために記しておく。本項では『古事記』の範囲内の各話を素材とした戯曲について取りあげ、次項では『古事記』より後の代の『日本書紀』を素材として創作されたと見なせる戯曲について言及する。発行年順に取りあげ、本文からの引用については特に断りのない限り初出形態を用いる。

#### ●長谷川時雨「大葉子」

【書誌情報】『スバル』四―一九一二年（明治四十五年）一月。

【梗概】欽明天皇の時代。新羅の国、秋七月の末。新羅征討軍副将の（河邊の臣瓊缶）がある古城から外に出てくる。妻（甘美媛）を敵将に売り一人で去るところであり、（甘美媛）は外壁の上から呼びかけるが（瓊缶）は気付かず行ってしまう。（甘美媛）と、同じく囚われている（大葉子）が語り合う。（大葉子）は（瓊缶）の行動と、生き恥をさらす（甘美媛）を責める。二人は捕らえられ連れ去られる。同じく捕虜にされていた（大葉子）の夫である（調の吉士、伊企儼）とその子（舅子）が岩の上に引き出される。（伊企儼）と（舅子）は新羅の王を罵り殺され、（大葉子）も殺される。

○『古事記』にこの話は無く、『日本書紀』（欽明天皇二十三年）に拠った戯曲である。『日本書紀』では（甘美媛）は敵将から辱めを受けた後に帰され、（瓊缶）が近づくが（甘美媛）は売られたことを恥じ恨み（瓊缶）と親しもうとしなかった。戯曲での（甘美媛）は夫を恨みながらも自分の命を惜しむ故に陵辱に耐えたが、そのことを（大葉子）に責められる。そして会話の末に（甘美媛）は夫に罪は無いと許し信じ、自死することもできないままである。このような（甘美媛）と、日本のために潔く死を選ぶ（大葉子）との会話を中心にした構成である。原典には女性二人が会う場面はないため、この二人の会話場面に作者のテーマが置かれているようである。そのテーマは（大葉子）の「御身はいざとある折の、覺悟をなされて

お出でなさるか」という台詞にあるのではないだろうか。作者は女性の「覺悟」を問うていると考えられるのである。戯曲発表前年は『青鞥』が創刊され、「新しい女」たちが開花した時期でもあった。

### ●大村嘉代子「神代の巻」

【書誌情報】『女性日本人』——一九二〇（大正九）年九月。これは同誌創刊号であり「初刊の辭」に「奇稻田姫が八岐の大蛇に吞まれる許りになり、素戔鳴尊に救はれましたのは希臘の神話にアンドロメダ姫がペルセウスに救はれたのと同趣を同くします。（中略）女性が男性の助けるのを待ち、自ら助けるのを怠るのは、女性の位置を低くし、延いて男性活動の効力を薄くし、民族及び人類の進歩を遅くします。（改行）今ならば奇稻田姫も徒らに老父老母と共に泣かず、何等の大蛇の禍を禦ぐに努められますまいか」と記される。婦人参政権を特集しており、女性の自立、解放を目指し政教社より創刊された雑誌である。

【梗概】舞台は「自凝島<sup>おのころしま</sup>」である。昔、天地をつなぐ天の浮橋は七つあったが今では一つしかない。（伊弉諾尊）と（伊弉冉命）の子である（埴安彦）は天の浮橋をもとに戻そうと土台を築いている。突然イザナミが亡くなり、それまで「死」がなかった神の世界に死が訪れることとなる。（埴安彦）とその兄弟である（埴安姫）、（金山姫）の三人は死を恐れ悩む。一方、（火の神迦具土）にとつて死は単なる穢れであり恐れる対象ではない。（火の神）は、彼らの父イザナギはじめ他の者との死に対する感覚の違いから不和となり、（埴安彦）によつて斬られる。（埴安彦）達三人は死と魂の世界について話す。イザナミの亡骸を土に葬つて戻ってきたイザナギは、穢れ払いで得た（素戔鳴尊）を連れて戻ってくる。このスサノヲが泣きやまないため、山川草木に被害が及び大洪水となる。スサノヲは高天原に去るが洪水はやまず、このせいで最後の天の浮橋が倒れ、高天原に行く道が途絶える。やがて洪水がすべてを飲み込む。

○（伊弉諾尊）（埴安彦）（埴安姫）（金山姫）（火の神迦具土）（素戔鳴尊）が登場し、イザナギ・イザナミによる数々の「神生み」場面を素材にしているが、内容も展開も異なる。登場人物達は初めてあらわれた死を契機として、死を前提として生きるという人間の運命や「靈<sup>たましい</sup>」の救い、体の消滅と靈魂の不滅について盛んに論じ合う。このことから、神話の世界を借りて死と「靈<sup>たましい</sup>」について作者なりの思想を示そうと試みた作品と考えられる。なお作品内に「天の浮橋」が登場するが、この「天の浮橋」は「与謝の海」（宮津湾）に倒れる。このことは大村が「天の浮橋」を現実の天橋立と捉えていたことを示

している。天橋立の由来を記す『丹後国風土記』逸文に拠れば、イザナギが天に通おうと梯子を立てたが寝ている間に倒れた、これが天橋立である、という記述がある。この梯子は、戯曲が描く「天の浮橋」の垂直イメージと重なっている。

●佐竹守一郎「天岩屋戸」

【書誌情報】『劇と評論』一—三 一九二二（大正十一）年八月。

【梗概】塞がれた天岩屋戸の前で神々は途方に暮れている。その他大勢の神々は眠っている。時折彼らの間から「あゝ、光が見たいな・・・」という声が聞こえてくる。皆祈ることに疲れ眠ってゆく。主要な神々も次第に脱落してゆく。〈天手力男神〉が戸を開けることに失敗して倒れたあとにもなお、岩に穴を開けようとする〈天抜戸神〉と〈天羽槌雄神〉だが、〈天抜戸神〉が倒れ最後に残った〈天羽槌雄神〉もまた倒れる。岩戸の外のすべての神が眠ってしまったあと、岩戸が徐々に開き鶏が鳴く。完全に開いた後に、まだ誰も目を覚まさない状態で幕となる。

○いわゆる「天の岩戸」神話の場面を描いた戯曲である。登場人物は〈天児屋神〉〈天抜戸神〉〈天手力男神〉〈天目一箇神〉〈天羽槌雄神〉〈天棚機姫神〉その他で、『古語拾遺』にのみ記載される〈天羽槌雄神〉〈天棚機姫神〉が含まれている。これはほかの戯曲だけでなく、岩戸神話が掲載された同時期発行の歴史書や児童書に見られない特殊な例である。佐竹は『古語拾遺』を資料として用いた可能性がある。戯曲が発表された一九二二（大正十一）年八月までに発行されていた『古語拾遺』は『古事記』のように多くはなく、注釈書として一八八八（明治二十一）年発行の大久保初雄『古語拾遺講義』、一八九六（明治二十九）年発行の栗田寛『古語拾遺講義（稜威男健）』が主だったものとして挙げられ、戯曲発表年により近い書籍としては日本国粹全書刊行会『古事記・古語拾遺・祝詞正訓』（一九一七年七月）が挙げられる。戯曲の内容からは、『古事記』と『古語拾遺』のどちらに依拠したかは判然としない。岩戸を開けるために原典で登場する賢木や鏡、玉、祝詞、長鳴鳥などは、戯曲では用いられない。「岩戸神話」は神を引き出す神事とされることから、神楽の演目としても多い。そのため、戯曲の素材としても発想の得やすさがあつたと考えられる。

●近藤栄一「大長谷王子」

【書誌情報】『白樺』一三一—一〇 一九二二（大正十一）年十月。



【梗概】第一幕…(大日下)の家に(都夫良意美)(若日下)(長田大郎女)(目弱)がいる。(都夫良意美)は、(長田大郎女)の妹(若日下)を慕っている。そこに(根の臣)が来て、(大長谷王子)が(若日下)を望んでいることを伝える。(大日下)は即答せず猶予期間を求め、(根の臣)は(大長谷王子)の短気を理由に翌日の返答を求める。場面は(王)の御殿。王は弟の(大長谷王子)と(若日下)を結婚させれば、(若日下)の姉(長田大郎女)に近づくことができると考えている。王のもとに(根の臣)が来て、(大日下)が話を断つたと讒言する。これを聞いた(大長谷)は軍勢を向かわそうとするが王は諫める。(大長谷)は怒りにまかせて出て行く。第二幕…四ヶ月後。(長田大郎女)は王の妃になっている。(長田大郎女)の子(目弱)は死んだように生きているが、ついに決意し王を刺し殺す。第三幕…(黒日子)(白日子)のもと(大長谷)が来て、王を殺した(目弱)のことを話す。しかし二人は(大長谷)を信じず、怒った(大長谷)は二人を殺す。(目弱)は(都夫良意美)のもとへ逃げ込むが(大長谷)が追ってくる。(都夫良意美)と(大長谷)が対決する間に(目弱)は自分の胸を刺す。しかし死にきれず(若日下)が喉を刺してやり、(若日下)も自害する。(都夫良意美)は(大長谷)に殺されている。

○管見によれば、近藤栄一による唯一の戯曲作品である。ト書きに登場人物の年齢や風貌、性格までもが書き込まれており、理解しやすい。『古事記』では七歳のマヨワが戯曲では十九歳の設定で、神経質、感情家、虚弱体質、陰鬱という性格になっている。原典と比較すると戯曲は特に最後の場面の変更が著しく、戯曲の方がかなり残酷な場面になっている。『古事記』では、オホハツセの軍に勝てないと悟ったマヨワの依頼により、ツブラオミがマヨワを刺し殺し、ツブラオミは自害して終わる。これに対して戯曲では、(大長谷)と(都夫良意美)が直接対決する場面が置かれる。その後、(目弱)が自分で自分の胸を刺す。死にきれず(目弱)が苦しむので(若日下)が喉を刺してやる。そこに、(都夫良意美)の頸を掲げた(大長谷)が現れる。これを見た(若日下)は自分の胸を刺し息絶える。(目弱)の遺体を見つけた(大長谷)は首を取り、(都夫良意美)の頸を放り出して(目弱)の首を持ち「目弱を打取った」と叫び、幕となる。戯曲ではこのように凄惨な結末になっている。さらにいえば、最初(大日下)を殺したのも(大長谷)の仕業と読める箇所があるため、戯曲における殺害のすべてが(大長谷)によって行われたことになる。原典における、オホハツセによって多くの登場人物が殺される話が誇張されたものとなっている。しかしこのオホハツセは後の雄略天皇であり、あえてこの話をとりあげ、さらに原典よりも残酷な人物として描くのは近藤による「天皇への批判」と受け取られる危険性がある。この批判が近藤のメ

ツセージであつた可能性があるが、同時期の近藤の小説と全く趣が異なることから単純に推断はできない。稿を改めて比較を交えた考察を試みたい。

●倉田艶子『大雀命』（芸楽道場叢書 第二編）

【書誌情報】春陽堂 一九二二（大正十一）年十一月。短編戯曲「かねごと」同時収録。作品末に「一九一九・夏—一九二〇・夏」と執筆期間が記されている。

【梗概】第一幕…応神天皇の時代、天皇は末子（和紀郎子）を溺愛している。同じ天皇の子（大山守命）はそれが気に食わず天皇を恨んでいる。一方で、同じく天皇の子である（大雀命）は皇位のことと父と不和になることを恐れている。（和紀郎子）は、大臣たちがすすめても太子に立つことを固辞する。第二幕…（大雀命）は、病床についている天皇に仕える（髪長媛）と惹かれあう。天皇は（大雀命）に対し（和紀郎子）に太子を譲るように言い、（大雀命）はその場で承諾する。ある日（大雀命）と（髪長媛）は宮の外で遭遇し、愛情を確かめ合う。そこに天皇の訃報が入る。第三幕…前幕から三年後。（大雀命）と（和紀郎子）は難波と宇治に別れて住み、（大山守命）は既に世を去っている。天皇不在のために政治は混乱し、人民、百姓、漁夫は困惑しているが、（大雀命）と（和紀郎子）は皇位を譲り合っている。悩んだ（和紀郎子）は自殺する。第四幕…（和紀郎子）の墓所の前で、（大雀命）が即位を決意する。

○倉田艶子の第一作作品である。倉田艶子は小説家・倉田百三の実妹であり、倉田百三が本書に祝いの序文を寄せている。他の作家の戯曲に比べ登場人物が多い。固有名があるのは十八人で、さらに「その他」として大臣やその息子、侍従、小姓、門衛、百姓、漁夫などが登場する。王子達の母親が登場する場面が多い。

『古事記』と比較して異なる点としては、次のいくつかあげられる。第一に、原典では天皇がオホサザキとオホヤマモリに「年長の子と年少の子では、どちらがかわいいか」と直接尋ね、その場ですぐに返答するという部分が、戯曲では手紙のやりとりで行われたことになっている点。第二に、原典では、皇位をワキイラツコが継ぐことをオホサザキは素直に受け入れるが、戯曲でのオホサザキは内心では皇位につくことを望んでいるため複雑な思いを抱いている点。第三に、天皇がカミナガヒメをオホサザキにすんなりと与えない点。天皇は、不器量で名高い（石之姫）を本妻とすることを条件に、カミナガヒメをオホサザキの妾にすることを認める遺言を残すのだ。第四として、戯曲ではオホヤマモリの反乱と死が回想として語

られる点である。したがって『古事記』のような戦の臨場感は見られない。

以上のことからわかるのは、まず、原典においては天皇とオホサザキが調和のとれた関係となっていて、戯曲では、正反対の解釈がなされていることである。天皇との不和によってオホサザキの苦しみが描かれ、心の葛藤が詳細に語られているのだ。またオホヤマモリの死を過去のものとして回想する場面では、オホサザキをはじめオホヤマモリの母や姉妹など他の登場人物が語り合いながら、心の整理をしてゆく過程が細かく書き込まれている。戯曲全体を通し、人間の内面が丁寧に描かれた作品となっている。

#### ●高田保「天の岩戸」

【書誌情報】『新小説』二九一九 一九二四（大正十三）年九月。

【梗概】天の岩戸の前で神々は困惑している。（手力雄命）がやってきて岩戸を開こうと試みるが失敗する。その後、（思兼命）が「笑ふ」という作戦を立てる。皆で笑ってみるが、うわべの笑いだけであるため三度繰り返しても岩戸は動かない。明らかに笑うのは（鈿女命）だけである。「鈿女の命のやうに笑へといふのは、鈿女の命のやうに馬鹿になれといふ事」であり、理性ある他の神々にはできない。落胆するその時、（鈿女命）が突然に衣服を脱ぎ「極めて欲情的な踊りを踊り始める」。神々はとまどいながらもしだいに明るい表情となり、（手力雄命）が躍り出る。彼と（鈿女命）が二人で乱舞する。やがて神々一同の乱舞となり、笑いの爆発が起こる。すると岩戸が開く。（手力雄命）は「一体これはどうしたといふのだらう」と言い、（思兼命）も「俺にも判らない」と口にして、幕となる。

○登場人物の表記は『日本書紀』の記述に従っている。しかし神々が困惑し、作戦を立てて行動することで最終的に成功を導くという大筋は『古事記』に拠り、笑いの力が岩戸開きを導くという点も『古事記』に即している。先述した佐竹守一郎「天岩屋戸」と同じ場面を素材とした戯曲で、すでに閉ざされた岩戸の前で神々が困惑しているという場面から始まり、岩戸が開くところまでが描かれており、佐竹作品と同じ範囲になっている。両作品とも、アマテラスを失った神々の対話によって戯曲が構成されている。この高田作品はアメノウズメが踊る場面で、注意書きとして（本来ならば、此処は女優が全裸になつて欲しい所であるが）と入る。タヂカラヲが踊り出す場面にも（本来はこれもこの場で全裸になつて欲しいのだが）と入る。『古事記』に記されているウズメの「神懸り為て、胸乳を掛き出だし、裳の緒をほとに忍し垂れき」という描写が

誇張された演出となつてゐるようだ。そして戯曲の「笑ふ」という作戦は、『古事記』の「爾くして、高天原動みて、八百萬の神共に咲ひき」から得たものである。アマテラスによる光が再び現れたことは描かれているが、明るくなつたという場面で幕が閉じられ、原典のようにアマテラスが呼び戻されたことによつて世界の秩序が回復されたという点は示されない。これは佐竹作品も同様であり、両作品共に『古事記』神話とは全く異なる世界を紡ぎ出している。

この高田作品は上演が確認され、演劇評論家の大山功は「一種の寓意劇」とみている。(手力雄命)は力の象徴、(思兼命)は智の象徴だがこれら力と知恵では岩戸は開かない。しかし情の象徴である(鈿女命)によつて岩戸が開く。「情はまた芸術の象徴である。その意味に於てこれは芸術の力の偉大さ、芸術の勝利を描いた作品」と評している。原典における「天の岩戸」神話は、神話学的には日蝕あるいは冬至をあらわしたものと解釈されることが多い。一方、高田や佐竹といった作家は、アマテラス不在の混沌とした世界における絶望や葛藤を中心に据える戯曲を創作した。研究者たちと戯曲作家たちによる神話の解釈は全く次元を異にしているといえよう。

#### ●永見徳太郎「彦火火出見尊」

【書誌情報】『阿蘭陀の花』四紅社 一九二五(大正十四)年三月所収。本の題名は芥川龍之介、装幀は山村耕花、口絵は南薫造による。

【梗概】舞台は「日向国軻茂豆句島(今の青島)」。(彦火火出見尊)が恋人の(豊玉姫)の来訪を待っているとき、突然(三俣速総)という人物が現れる。(彦火火出見尊)はこの無礼な人物と争おうとする。しかし(三俣速総)は(彦火火出見尊)の正体を知ると平伏し、非礼を詫びる。(三俣速総)は(彦火火出見尊)に仕えることになり、(豊玉姫)も現れて、高千穂の峰への出発準備が整う。

○いわゆる海幸彦・山幸彦の話をもとに、山幸彦(ヒコホホデミノミコト)を主人公に据えて創作された戯曲である。海幸彦・山幸彦の話は『古事記』にもあるが、この戯曲は『日本書紀』を引用し、典拠としている。それはヒコホホデミの台詞に「飢企都鄧利軻茂豆句志磨爾和我謂禰志伊茂播和素邏珥譽能據鄧馭障母」という歌があり、この引用から『日本書紀』(一書の第三)を用いていることがわかるためである。さらにヒコホホデミの漢字表記が『日本書紀』に依拠していること、ヒコホホデミの回想部分の多くに『日本書紀』に記された「海神の宮訪問」譚が含まれていることから、『日本書紀』に

素材を得たことがわかる。また、登場人物の（三俣速総）だが、『古事記』にも『日本書紀』にも「三俣」の姓はない。「速総」の名から『古事記』における仁徳天皇の異母弟・速総別王を想起させるが、（三俣速総）は「火の国に生まれました豪族の一人」と名乗っていることから別人と考えられる。

舞台の背景として、場所を「日向国軻茂豆句島（今の青島）」と指定しているのは、ヒコホデミの歌からの発想である。熱帯植物が茂り、ピロウやシュロの大木、その間に「ひぎり、くまたけらん、はまうど」があり根本には「みさし」のあぶみ、くわすいも、おにくぶそてつ、はまをもと」等の植物が生えている。この設定は、青島の気候と植生を理解した上で、の描写と考えられる。永見は日向と同じ九州の長崎の素封家であり、長崎を訪れる文人たちを歓待したことでも知られている。

戯曲のほとんどが完全な創作場面であり、「海神の宮訪問」は回想として語られるのみである。創作された（三俣速総）なる人物と（彦火火出見尊）の争いの場面は、地方の権力者と中央から来た英雄という関係において、ヤマトタケルによるクマソタケル征伐や東征に似通った構成である。異なるのは、（三俣速総）を許し部下とする点である。クマソタケルとは異なり征伐されず生き残った九州地方の権力者がいたことを示すかのようなストーリーである。また（彦火火出見尊）の名を聞いただけで降参してしまう（三俣速総）の姿は、天皇家の血筋に対して絶対服従する—せざるを得ない—地方をはじめとした人々の代表とも受け取れよう。

### ●伊藤恣「日本武尊と熊襲」

【書誌情報】『演劇研究』五——一九二九（昭和四）年一月。編輯後記に「日本の神代に應はしい力のある、快活な行進のリズムを持つて居ます」と紹介されている。

【梗概】軍隊を編成し（熊襲）軍を討伐に来ている（小碓命）（ヤマトタケル）軍は、何度か（熊襲）軍と衝突するものの戦果を上げることができない。（小碓命）自身は戦争に興味が無く部下にまかせただけで、部下達が諫めても気に入った女を呼び寄せ戯れているのみである。しかしある時、（小碓命）の気に入りの女が（熊襲）軍にさらわれる。（川上梟帥）の新築祝いを催すため、（熊襲）軍は女性達を集めていたのだ。（小碓命）はそのことを知り、女を取り戻すためによくやく敵を討つことを決心する。（川上梟帥）の家では女が虐待を受けている。そこに（小碓命）が女装して現れ、（川上梟帥）

との斬り合いとなる。(小碓命)が勝ち、大団円となる。

○「ヤマトタケル西征」の場面を戯曲化した作品である。敵クマソの大將が(川上梟帥)一人であることから主として『日本書紀』を素材にしていることがわかる。しかしヤマトタケルの人物造形は、『古事記』『日本書紀』の持つ英雄像とはかけ離れている。

原典と戯曲が大きく異なる点は、二つある。一つめは、前述のようにヤマトタケルが英雄の位置から墮ち、だらしない人物として造形されている点である。ヤマトタケルは、クマソを討伐せよとの王の命令に従う気が全くない。ようやく(川上梟帥)のもとに向かうのも女を奪われたという個人的な怒りからであり、天皇の命令とは無関係である。

二つめは、時局を反映した表現が追加されている点である。ヤマトタケルたちは「大きな軍隊」と設定されている。クマソ側も三軍を構える大軍団であり、彼らの衝突は「戦争」である。ヤマトタケルは「大將軍」という地位にあり、(川上梟帥)を倒すとき「さあ、日本の劍に倒れてしまへ！」と言う。川上梟帥もまた「かうも日本の御方は御強くいらせられますか！」と感嘆の声を上げる。ここでいう「日本」は都を指す「ヤマト」ではなく日本という国家を意識した言葉と考えられる。なぜなら、都の「ヤマト」の場合は「大和から御使者が御見えになりました」(第一场)という台詞に見られるように「大和」の漢字が当てられているからである。また、最後に(川上梟帥)を討ち取った後に兵士達は「皇国万歳！ 万々歳！」と叫ぶ。戦争、日本、皇国という言葉からは執筆当時の社会情勢が垣間見えてくる。この戯曲が発表される数年前から日本は中国に派兵し(山東出兵)、一九二八(昭和三)年六月には張作霖爆殺事件が起き、日中の衝突が始まっていた。大正デモクラシーの自由な雰囲気はすでに終焉を迎えていたのである。

天皇の命令を無視し続け「戦争など御免を蒙る」と繰り返すヤマトタケルであるが、(川上梟帥)を討つときには一転し、次のように一喝する。

普天の下、卒土の中、いづれ王地にあらざるなきに、王意に背くとは不屈千万だ！ 王朝を軽じ、人民を虐げるとは奇怪千万だ、辺境たりとも侵すとは不埒千万だ！ この大八島神国は、帝の統治し給ふべきは理の当然である。勝手に兵を動かすは無礼であるぞ。この身のほど知らぬ馬鹿者め！

そして（川上梟帥）を見事に討ち「天下泰平、国土安穩」となって兵士が「皇国万歳！ 万々歳！」と歓声を上げ戯曲は幕を閉じる。皇国史観に基づいた話となつて終幕しているのである。

## 二 『日本書紀』からの創作戯曲

本項では『古事記』の範囲外となる、推古朝よりも後の『日本書紀』を素材として創作されたと見られる戯曲について、前項と同様の形式で言及する。

### ●永田衡吉「厩戸皇子」

【書誌情報】『中央公論』三八―八 一九二三（大正十二）年七月。一九二五（大正十四）年五月、四紅社『厩戸皇子』所収。

【梗概】厩戸皇子の父である用明天皇二（五八七）年四月、大和では天然痘が流行し村は疲弊している。厩戸は十五、六歳である。やがて天皇は亡くなり蘇我馬子と物部守屋の対立が表面化する。馬子方の東漢駒は、馬子の娘・河上娘を得たいがために馬子に付き従っている。厩戸は馬子のもう一人の娘・負古郎女と想いを通わせる。守屋は馬子の軍勢に敗れ討たれる。厩戸の叔父にあたる泊瀬皇子は、馬子の専横を憎む。五年後、泊瀬は天皇となつている。泊瀬は無礼な馬子のことを猪のように首を斬りたいと発言する。東漢駒は河上娘を連れ去り山中に潜んでいるが、馬子の部下に見つかり殺され、河上娘も自殺する。馬子の「忌はしい」行動は民衆の知るところとなり、馬子は民衆に捕らえられ糾弾される。厩戸は広い慈悲の心から馬子をかばい、民衆から投げられた石に当たる。民衆を落ち着かせ、厩戸は「民草の中へ歩んで行く」ことを望む。

○用明天皇が亡くなる直前から、次の崇峻天皇が馬子に暗殺されるまでの期間を戯曲化したものである。『日本書紀』を素材としたことは明らかだが、戯曲と原典がもつとも異なるのは次の二点である。まず、原典のように馬子の軍勢が厩戸を含む諸皇子の軍と共に物部守屋を討伐したとはされていないこと。厩戸は戦に参加しないため、戦場で四天王に誓願を立てた逸話が省かれている。そもそも戦自体が描かれていない。次に、馬子による崇峻天皇暗殺に関する具体的な表現が避けられていることである。これらは定期刊行雑誌にも適用されていた新聞紙法（一九〇九年五月公布）によって取締りの対象とな

る「皇室の尊厳を冒瀆」という項目を回避するための措置であろう。この戯曲は、後述の水戸愛川による作品とは異なり、厩戸を過剰に崇拜し神格化することはない。若き聖徳太子が恋をし、病と飢えに苦しむ民衆を見ては悩み、時には失敗し後悔する人間的な姿として描かれている。

#### ●大坪草二郎「大海人皇子」

【書誌情報】『大海人皇子』聚英閣 一九二四（大正十三）年一月所収。本文末尾に「一九二三、八」の日付がある。一九二六（大正十五）年二月『戯曲 愛は闘ふ』とタイトルを変更して聚英閣より出版。さらに一九七九（昭和五十四）年五月、葦真文社より『戯曲 大海人皇子』として出版された。

【梗概】時は天智七（六六八）年五月五日、場所は近江郡蒲生野。葉狩の場である。大海人皇子の部下達が帝とその息子大友皇子に対する不満を口にする。大海人皇子と額田女王が人目をばばかりながら逢う。後日、近江の宮殿で帝の側近達が大海人を討つ計画をたてるが、事前にそれを知った大海人は剃髪し僧形になって、吉野に退くことにする。吉野で穏やかに過ごす大海人だが、一方近江では帝の側近と大友が密かに兵を集める計画を企てる。それを知った大海人と額田の娘・十市皇女は額田に知らせる。壬申元（六七二）年三月中旬、吉野において大海人の部下が、近江側が美濃と尾張から山稜を造るためと称して兵を集めていることを報告する。そこに近江の宮殿から、十市と額田の使いが来て身の危険を知らせる。逡巡する大海人だったが、やがて戦うことを決意する。

○『日本書紀』の記述を中心としているが、近江側が兵を集めている時期を五月から三月にするなど正確さに固執してはいない。蒲生野での大海人と額田の密会は『万葉集』の相聞歌をもとに創作したものである。また十市皇女が大海人に情報流したくぐりは『宇治拾遺物語』などに拠っている。戯曲における大海人の吉野への隠遁とそこでの生活は計画的なものではなく、近江を撃つ機会を待つ意図もなく、ただ穏やかに過ごすためであった。だが大海人は額田女王を変わらず強く想っており、最後の決意も額田が自分を案じていることを知ったことを契機としている。そもそも大海人と兄である帝の不和は額田をめぐる争いを発端としており、大海人は額田を兄に奪われた不幸を嘆いていたのである。このように大海人と額田の愛情がひとつのテーマとなっているため、戯曲には大海人の正妃である鸕野讚良皇女はいっさい登場しない。この戯曲はむしろ『万葉集』の相聞歌に着想を得て『日本書紀』などの資料をもとに創作した可能性がある。



●菊池四郎『長編戯曲 星は殞つ』

【書誌情報】人文会 一九二六（大正十五）年十一月。巻末に「略年表（書紀ニヨル）」掲載。

【梗概】朱鳥元年九月五日、天武天皇の容態が悪化している場面で幕を開ける。まもなく天武は亡くなり、持統が皇位につくが皇太子の座をめぐり持統の息子草壁と大津皇子との間に緊張が生まれる。やがて大津皇子は謀反の意有りとして捕らえられ、翌日十月三日に死を賜る。皇子の妃、山辺皇女が後を追って去ろうとする。

○大津皇子の謀反事件を題材にした戯曲である。主役は大津皇子であり、序に執筆の経緯などが詳細に記されている。それによると、菊池は早大の予科に入るか入らないかの頃から大津皇子を題材に書きたいと思っていた。その後七、八年が過ぎてようやく筆をとったという。大津皇子に着目した理由は次のように記されている。「この境遇の犠牲となつて死んだ、不平児、反抗児の上に、私は、似かよつた宿命を有つ自身の心の姿を、まざく／＼と見せつけられる。そして、この薄運な皇子の上に、云ひ知らぬ同情と、追慕とが湧く。これが私をして、この作をなさしめた理由である」。政争に巻き込まれた皇子への思い入れが強く、それは菊池自身が似た体験をしたためという。「主人公大津皇子の心理の過程は、すべて會て私自身（カ）が親しく一度は辿つたその記録である。それだけ、この作品に對する私の愛着は深い」。記録に残された皇子の悲運が菊池自身の人生に重ねられていることがわかる。このようなかたちでの『日本書紀』の受容もあったのである。また、執筆する上で参考とした資料は『日本書紀』と『万葉集』であることを明記しており、皇子の辞世の漢詩が残されている『懷風藻』に関しては「これはもとより信憑するに足らぬ」と切り捨てている。主観によつて資料を選択していたことが窺える。

●水戸愛川『戯曲 聖徳太子』

【書誌情報】仏教年鑑社 一九三四（昭和九）年二月。高橋常雄による「序文」が一九三五（昭和十）年二月二十五日、「自序」が一九三四（昭和九）年十二月十二日と記されていることから、奥付の発行日は疑わしい。

【梗概】聖徳太子が二歳の「幼少時代の巻」で幕を開ける。侍女達によつて太子が生まれたときの逸話が語られる。次の「馬子弒逆の巻」では蘇我馬子による崇峻天皇暗殺にまつわる話を、以後「法隆寺造営の巻」「小野妹子の巻」「片岡山の巻」「夢殿の巻」「太子往生の巻」「斑鳩宮炎上の巻」と太子の死後まで、聖徳太子に関する『日本書紀』等の記述及び各種の伝説を、創作も交えて紹介する。

○自序によれば、「本書に描ける太子は史実にのみ依つたのではない。史実に依つては到底現はし得ぬ太子を顕はすために、史実を無視した処も多々ある」。荒唐無稽ともいえるような太子の伝説は、戯曲では登場人物によつて伝聞の形で処理されている。戯曲の太子は政治家としてまた仏教者として完全無欠な人格者のように描かれており、すべての人々から尊敬を受けあまりに立派すぎる人物—もはや神や仏のよう—として造型されている。太子は争いを好まず、たとえば従者が新羅をはじめとした外敵の討伐や防備の役に当たりたいと願ひ出ると、それよりは都を守れと諭す（「馬子弑逆の巻」第一幕）。水戸は「和を以つて貴となす」を基調とした太子の精神、「飽くまで悲らぬ、争はぬ平和の魂を愛せられた」太子の姿を描こうとしたようだ。戯曲は太子を顕彰する目的で書かれたとみてよいだろう。水戸はさらに「戦ひに戦ひを以つてすれば、永久に戦の世界を脱することが出来ぬ」と明言している。また自序には、一九三二（昭和七）年に高橋常雄からの依頼を受けて太子の劇を創作することにしたと記されている。その高橋は序文で「この戯曲を通して、非常時日本、国歩艱難の秋に當り、國民の師表とも仰ぐべき太子照鑑の下に、上下一致盡忠報國の至誠を擢じられる一助にもと、篤く三宝に祈念すると共に、切に讀者に希望する次第であります」と記している。高橋の文は、国家に忠誠を尽くす愛國心の涵養を謳っているように読める。ところが戯曲の内容は、太子の高潔な人格や「和を以つて貴となす」精神が貫かれており、このような太子のもとで日本の難事に尽忠報國の精神であたれというのは矛盾をはらんでいよう。太子の偉業を尊敬していると記す高橋は、当時の社会情勢を鑑みてこのような序文を書いたという可能性はないだろうか。一九二八（昭和三）年にさらに厳しく改正された治安維持法により、一九三三（昭和八）年二月、小林多喜二が治安維持法違反容疑で逮捕され拷問死している。一九三四（昭和九）年五月には出版法が改正され皇室の尊嚴冒瀆、安寧秩序妨害への取締が強化された。



前節及び本節で『古事記』や『日本書紀』を素材とした戯曲の諸作品について言及してきた。これらを概観していえることは、まずヤマトタケルをはじめとした「人代」を扱う戯曲はいずれも天皇ではなくその皇子たちを主人公に据え、その親子の葛藤や反抗といった場面が描かれたものが多いことである。ただし厩戸皇子に関しては親子関係が着目され強調されることはない。皇子たちの多くが親子関係あるいは恋愛に関する問題を抱え、その悩みを軸とした作品となっている。またス

サノヲの話など「神代」を舞台とする戯曲の場合は、神話に素材をとりながらも神々としての活躍は描かれていないことが挙げられる。武者小路の描くサノヲ、山本有三の描く兄弟は本来神話に登場する神だが、戯曲では人間として造形されていることは明らかだろう。そして人代、神代の話題いずれも『古事記』のもつ「天皇の世界の物語」<sup>12</sup>といった側面は遠のいていることが指摘できる。『日本書紀』という「正史」を題材にした戯曲も、歴史の一部としてその史実性を強く意識することはほぼ無かったと推察される。しかし、それ故に「神」や「皇子」を役者という人間が演じることが可能だったと考えられる。



本章では、近代における『古事記』『日本書紀』等を題材とした小説と戯曲を取りあげ、それらの作品を紹介し、一部については詳細な考察を加えた。作家たちは上代文献のどこに着目し何を読み取り、そして創作したのだろうか。

作家たちの執筆動機は様々であり、原典の同じ箇所を素材としてもその表現やテーマは各々異なっていた。ただ、各作家に共通しているのは、素材の選定には彼らの主観や嗜好、主張したいテーマの存在が強く作用していることであろう。各作品からは、作家たちが『古事記』や『日本書紀』という書物に対し、万世一系の皇統を語る聖典として敬うといった意識は殆ど見られなかった。したがって彼らは『古事記』や『日本書紀』を、個々のエピソードを抽出することが可能な古典作品のひとつとして受容したと考えられる。創作のための素材の源泉として自由に鑑賞し解釈したからこそ、同話題であっても数種の個性的な小説や戯曲が生まれたといえよう。

先に、本章第三節第二項において、大正期に『古事記』を題材にした小説が集中して生まれ、昭和期にはいると姿を消す理由として、大正デモクラシー思想の高まりとその終焉を挙げた。この点について今一度検討したい。

古典作品の利用という観点から「古典に取材した近代文学目録」<sup>13</sup>を細見すれば、『竹取物語』『源氏物語』『和泉式部日記』『更級日記』等の中古文学、『平家物語』『太平記』『宇治拾遺物語』等の中世文学、『好色一代男』『好色五人女』『曽根崎心中』等近世の文学など各時代の様々なジャンルの古典作品が小説や戯曲の素材とされていることがわかる。ただし掲載されていない近代文学作品も多い<sup>14</sup>ため、この「目録」のみでは明治・大正・昭和のどの時代に集中して創作が生み出さ

れたかは一概には言えない。しかし『古事記』『日本書紀』の場合、「目録」では大正期の作品が最も多く、筆者による調査においても同様の結果を得ている<sup>1)</sup>。このことから「目録」は正確さに欠けるものの、時代別件数の傾向を大まかに把握する資料としては有効であろう。「目録」によれば、たとえば『源氏物語』の場合六作品があがっており、明治期が一、大正二、昭和三である。『伊勢物語』は昭和期のみ六作品、『今昔物語集』は大正期十四、昭和期が三である。『今昔物語集』は大正期が多いが、そのうち十作が芥川作品で占められている。また、『平家物語』は明治十二、大正十一、昭和十四である。一部作品を取りあげたが、「目録」からは昭和期に入って古典文学が全般にわたり作家たちから敬遠され、素材として利用されなくなったという傾向は見出せないのである。しかし、ここで着目したのは『太平記』である。『太平記』を素材とした近代文学作品は明治五、大正十一、昭和十九と増えている。この『太平記』に関しては、アジア太平洋戦時下の皇国史観に基づいた思想教育の徹底のために活用されたという当時の状況を鑑みれば、昭和期の増加が理解できよう。そして見逃せないのは、『古事記』もまた戦時下において忠君愛国の精神を強化するために用いられたとされるものの、昭和期には深田久弥以外の作品が無いことである。このことは、『古事記』が昭和期の厳しい統制下においては、創作の素材としては容易に扱えない存在へと変貌したことを物語っている。創作を重ねられた『太平記』とはまた異なる『古事記』の受容のあり方が垣間見える。この時期の『古事記』は小説や戯曲としては創作されず、訓読本や口語訳、国定教科書、児童向けの書籍として流布されたと考えられるのである。一方の『日本書紀』に目を転じれば、昭和期の小説、戯曲は四作品を数える。「大化の改新」を扱う小説が二つ、ヤマトタケルの戯曲が一本、聖徳太子の戯曲が一本である。「大化の改新」という、中大兄皇子が国家を傾けんとする逆賊・蘇我馬子を討つテーマは時流に歓迎されるものであったことは論を待たないだろう。また、「日本武尊と熊襲」は明らかに皇国史観に基づいた話となっていた。そして聖徳太子を顕彰する目的で書かれた『戯曲 厩戸皇子』においても「非常時日本」が意識されていた。いずれも戦時という大きな時代の下で生み出された作品である。作家たちは、それぞれの時代情勢に応じて『古事記』や『日本書紀』を受容し、そして創作を試み、あるいは創作を避けたといえよう。

2 宮崎県高千穂町の岩戸夜神楽では三十三番のうち「柴引」から「扉開き」までの六番が岩戸神話をもとにした組神楽となつている。九州以外にも岡山県の備中神楽の「岩戸開き」、岩手県宮古市に伝わる黒森神楽の「岩戸開き」など各地に伝わる神楽では多くが演目に取り入れている。

3 一九二六（大正十五）年一月丸の内の邦楽座で初演。配役は手力命役は沢田正二郎、思兼命役は中井哲、第一の神役は野村清一郎、鈿女命役は山路千枝子であつた。大山功『近代日本戯曲史 第二卷』（近代日本戯曲史刊行会 一九六九年四月）による。

4 前掲『近代日本戯曲史 第二卷』による。

5 戯曲では「飢企都鄧利軻茂豆句志磨爾和我謂禰志伊茂播和素邏珥譽能據鄧馭障母」のルビがふられている。傍線部のルビは鄧利、波線部の漢字は障ではなく鄧の誤りであろう。

6 作品の舞台である日向には建武年間に築城された三俣城（宮崎県都城市）がある。この城の周辺には「三俣」の地名があり、平部嶮南『日向地誌』（一八八四年）によればその土地は肥沃な土であつたという。

7 竹久夢二や吉井勇、斎藤茂吉、芥川龍之介、谷崎潤一郎らとも交流があつた。

8 一九二七（昭和二）年と一九二八（昭和三）年に、中華民国山東省へ三度にわたって派兵された。

9 成務天皇紀四年、景行天皇を讃えて「普天率土、王臣にあらざといふこと莫し」とある。『毛詩』小雅「北山」の「溥天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王臣」による。ヤマトタケルの台詞にしているのは、ほかにテキストがあつたか。

10 ほかに十市皇女が大海人に知らせたことを窺わせる文献として『愚管抄』『水鏡』『大鏡』『扶桑略記』がある。

11 仏教系雑誌『慈悲の国』（四恩協会 一九二一年創刊、一九三七年まで確認できる）を編輯。他にも仏教関係の著書を記した。

12 神野志隆光『古事記―天皇の世界の物語』（NHKブックス 一九九五年九月）

13 志村有弘編「古典に取材した近代文学目録」（『国文学 解釈と鑑賞』五七―五 一九九二年五月）

14 志村によれば紙数の関係で「多数の作品を収載することができなかつた」。

15 「古典に取材した近代文学目録」では明治期一、大正期十七、昭和期五。筆者の調査では明治期無し、大正期三十二点、昭和期五点であり、ともに大正期が最も多かつた。なお「目録」が明治期の作品としてあげた木村小舟『日本神話 愛と

『剣』（博文館 明治四十四年十二月）は、筆者は「児童向け」作品と判断したことから本章では省いた。

## 第四章 視覚化される『古事記』

### 第一節 神々の視覚描写―絵画解釈の試み

『古事記』や『日本書紀』の一場面を題材にした絵画が多く描かれるようになったのは、近代に入ってからである。ここでいう絵画とは、日本画、西洋画、書籍や雑誌の表紙・口絵・挿絵を指す。絵画は小説、戯曲などとは表現が異なるが、『古事記』等を享受し異なった媒体へとつくりかえられた“作品”という観点から、絵画を考察の対象とする。これらの作品を描いた画家たちは、『古事記』や『日本書紀』を実際に読み、視覚化したのだろうか。また、作品を見る者は、どのように受け止めたのだろうか。本章では、近代において『古事記』や『日本書紀』を題材にして描かれた絵画について考察する。絵画を分析するという手法を用いることで、『古事記』享受の具体的な様相を探ることが出来るためである。

近代における『古事記』の享受研究のためには、近世末期を含め明治・大正・昭和戦前期に発行された『古事記』の研究書、訓読本、口語訳、そして児童書といった書籍類―読み物―を中心とした調査が必須だが、一方で絵画―見る物―の存在を忘れてはならない。視覚表現は、明確なイメージを人々の心に強く印象づけるという点、たとえ文字が読めなくとも主題や内容が伝わるがゆえに、女性や子どもを含めた広範囲の層の人々にも受け入れられるという点において、『古事記』享受の観点から重要な意味をもつと考えられる。さらには新聞への掲載や、雑誌、絵葉書という媒体によって、各地への伝達が可能であったことを鑑みれば、絵画は『古事記』の享受研究にとって欠かせない資料といえる。

しかしながら、これまでの章で考察対象としてきた一般に広く受け入れられる類の『古事記』関連の書籍について以上に、絵画という媒体に関してはその受容研究が進められていない。上述のように、視覚化された絵画という媒体は重要な資料の一つといえるが、これらは上代文学研究者による研究の対象からは漏れてきたといえる。しかし絵画を調査・分析対象に加えることにより、先に述べたような広範囲の層および地域の人々への『古事記』のイメージの伝播など、享受の具体的な諸相が浮き彫りとなるだろう。それでは、『古事記』関連絵画を分析する際には、どのような手法、研究方法が必要なのだら

うか。

絵画の分析や解釈に関しては、美術及び美術史の研究者による図像学および図像解剖学と呼ばれる研究があり、この研究方法を用いることが有効である。しかし、その方法論は必ずしも確立されてはいないといえる。たとえば、ある特定の時代に有効な方法論が、その他の時代には有効ではないことも多く、文献学的資料の収集や分析、伝統様式、図像体系の調査などの研究を重ねても解釈が困難という作品も認めらる。特に近代、現代では画家自身が独自に非伝統的な図像を創造することが増えそれが一般的ともなっているため、作品の理解には心理学や精神分析学までも含めた、あらゆる局面についての多面的なアプローチと洞察力が必要とされる。絵画の解釈は、その研究対象によつて方法論がさまざまに変化するのである<sup>1</sup>。このように絵画の解釈には常に困難がつきまとう状況ではあるが、『古事記』等に登場する神、人物、場面を描いた絵画の場合は、美術史における「歴史画」というジャンルにおいてすでに数点の作品について考察がなされている<sup>2</sup>。ただしこれらは、時代的に広範囲にわたる「歴史画」という絵画群を構成する一部として取りあげられ解説されるといふ側面が強く、『古事記』関連絵画として纏められたものではない。

近代において、画家たちは原典である『古事記』や『日本書紀』の記述を忠実に描いていたのか、原典をどこまで読んでいたのか、あるいはどの場面を描く必要があったのか。彼らは絵画をとおしてどのようなメッセージを伝えようとしたのか。そして絵画は見る者にどのような影響を与えたのか。これらについて探ることは、『古事記』の享受について研究するとき欠かせない視点のひとつとなる。作品を描いた画家と、その作品を見た鑑賞者がもつ『古事記』への意識および知識を探ることができるとある。また絵画の典拠として『古事記』『日本書紀』等のいずれが用いられているのか、という問題も『古事記』享受研究において重要な課題のひとつであることから、画家がどの文献を参照したのかも意識すべきである。本章では、このような観点から各々の絵画を取り扱う。もちろん、それらの絵画の数は枚挙にいとまがないため、絵画のなかでも時代の様相を反映したものや注目すべき作品を選択し見てゆく。

本章の手順としては、次節で近代に至るまでの『古事記』関連絵画について概観し、該当する絵画の調査方法を示し、着目すべき数点の日本画について考察する。第三節では一般向け雑誌の口絵、挿絵の調査結果について示し、最も頻出する明治期の各種婦人雑誌における神功皇后像を中心に取りあげる。第四節ではオトタチバナヒメの図像に着目し、その図像の誕生から現在までの各時代における受容の様相について概説する。



- 1 若桑みどり『絵画を読む―イコノロジー入門―』（NHKブックス 一九九三年三月）を参照。
- 2 山梨俊夫『描かれた歴史 日本近代と「歴史画」の磁場』（ブリュッケ 二〇〇五年七月）、河北倫明「歴史画あれこれ」（山種美術館『描かれた歴史―近代日本画にみる―』図録 一九七二年三月）など。

## 第二節 美術誌掲載の『古事記』関連絵画

### 一 近代以前の概観および絵画の調査方法

まず、近代に至るまで『古事記』等の場面や神々はどのように描かれてきたのかについて概観しておく。近世よりも前、神々の姿や神を象徴するものは畏れ多いものとされ、神の姿が直接描かれることは稀であった。たとえば平安末期の作とされるスサノヲとクシナダヒメを描いた八重垣神社の板絵などは、容易に人が入り得ない神社本殿の障壁画であり、社殿を荘厳する目的で描かれており、人々に見せること、見られることを意識した絵画ではなかった。神の姿はあからさまに見てはならぬものであった。しかし近世に入ると、逆に神々の姿が積極的に描かれるようになる。その理由として歌舞伎の影響が大きく、『義経千本桜』や『菅原伝授手習鑑』といった「時代物」は人気の演目であり、歌舞伎を演じる役者が浮世絵（役者絵）として描かれたのである。この「時代物」のなかには『日本振袖始』<sup>2</sup>など日本神話を題材にした「神代物」という演目もあつたことから「神」を演じる役者の姿も描かれた。特にスサノヲやヤマトタケルといった英雄の姿は、役者絵として庶民に広く親しまれることになった。すなわち役者絵の存在をとおし、神々の姿を描くことに抵抗がなくなったのである。明治、大正期になると、神話の一場面は画題として取りあげられ「歴史」の名場面として描かれるようになった。そして戦時下においては、「岩戸神話」におけるアマテラス出現の場面や「神武東征」に関連した場面などの「国史絵画」がまともに制作されたのである。

次に、本節で取りあげる『古事記』関連絵画の調査方法を示す。本節では、美術関係の雑誌に掲載された『古事記』関連の絵画について考察する。近代の美術関係を専門とする雑誌の細目を紹介したものは『美術関係雑誌目次総覧 明治・大正・昭和戦前篇』上・中・下巻がある。これを手がかりにして関連記事を網羅的に調査した結果、雑誌『アトリエ』『絵画叢誌』『研精画誌』『研精美術』『国画』『中央美術』『塔影』『日本美術』『美術写真画報』『美術新報』『美術新論』『美之国』『風俗画報』『みづゑ』に『古事記』関連の絵画が、日本画および西洋画を併せて合計四十九作品掲載されていることが明らかとなった（本節巻末の資料1を参照）。

美術誌掲載の絵画に対象を絞って調査した理由は、まず、美術関係の雑誌に掲載される場合、紹介記事および専門家など



図1 菊池容齋「彦火々出見尊」

による批評が同時に掲載されることが多いためである。当時は現在の『月刊美術』『芸術新潮』といった美術鑑賞に便利な情報を網羅的に掲載した雑誌が無く、絵画展の情報は限られた媒体に頼らざるを得なかったという状況を考えるとき、美術雑誌の紹介記事からは、どのような展覧会に出品されたかの情報や絵画作品についての同時代評を知ることができ、絵画の享受状況を知ることができる。また、描いた画家自身のみならず評者の『古事記』等に関する意識や知識も窺うことが可能なことから、当時の『古事記』享受の一端についても知ることができる。二つめの理由としては、『古事記』『日本書紀』という画題の特殊性を考えた場合、神社などに奉納されたケースも少なくないためである。一般には観覧禁止、あるいはその所在を公にしない作品の存在が考えられるため、ここでは、媒体を限定して分析する方法をとる。

雑誌の調査から、最も多い画題は神武天皇の「東征」をテーマとしたものであることが確認された。このテーマが多い理由を探れば、『塔影』が皇紀二六〇〇年とされる一九四〇（昭和十五）年に合わせて特集を組んだことが大きな影響を与えていることが窺える。たとえば第十五巻六号（一九三九年六月）の口絵写真真版「肇国創業絵巻」では横山大観「日輪」をはじめ十二人の絵画が掲載され、そのうち七人による八作品が神武東征に関連した絵である。（資料1の16、18、24参照）。雑誌の特集における神武天皇関連を除いた場合の画題では「天の岩戸」に関連した場面が最も多く、次いでヤマトタケル、ヒコホデミ（海神の宮）、天孫降臨、神功皇后、国譲り（タケミカヅチ）、スサノヲなどが挙げられる。

以下、画題ごとに考察してゆく。

## 二 菊池容齋「彦火々出見尊」

まず最初に、調査した雑誌のなかで最も早くに掲載された一八八八（明治二十一）年五月『絵画叢誌』誌上の菊池容齋「彦火々出見尊」を取りあげる（図1）。菊池容齋は『前賢故実』の作者として知られ、その絵が多く、画家に影響を与えたことから、この作品について見てゆきたい。雑誌の紹介記事には画題の下に「菊池容齋筆書家」（松本楓湖縮図）とあり、菊池容齋が土佐光信、雪舟などと並ぶ

「画家十傑」の一人として扱われていることがわかる。一八七五（明治八）年に明治天皇から「日本画士」の称号を受け、一八七七（明治十）年の内国勸業博覧会に出品された『前賢故実』が龍門賞を授与された功績などが、菊池容斎の価値を高めたものといえよう。「縮図」とあることから、この「彦火々出見尊」は松本楓湖によつて模写されたものとわかる。松本楓湖は菊池容斎の門下である。なお、現在この原画の所在は詳らかではない。

「彦火々出見尊」という画題の漢字表記は『日本書紀』に拠る。一方で、雑誌の紹介記事中には「豊玉比売」「天津日高の御子虚空津日高」と『古事記』の表記法が用いられている。これは、菊池容斎が『日本書紀』の表記を重視したにも関わらず、記事の執筆者は『古事記』を参照したという証左となる。記事の内容はヒコホホデミの海神宮訪問譚を簡潔に記したもので、海神宮に到着して三年後に無くした釣針を得たという展開、「鰐」達が体の長さを比べる際の「身の尋長」の表現等からもやはり『古事記』に拠ったことがわかる。記事の最後に「此図は則ち尊の海神の宮より還り玉ふ状を画きしなり」と説明される。菊池容斎は歴史・神話上の人物を描く際、綿密な考証を行い、たとえば前出の『前賢故実』では二百数十の書物を参照している。「彦火々出見尊」でも『前賢故実』に参考書として挙げられている『古事記』『日本書紀』の両書を確認したと考えられる。この両文献の記述に基づき描き出された絵が、「鰐」の背に立つヒコホホデミの姿である。やや荒れた波と、その波がヒコホホデミの背後で雲と連なり、海と空の切れ目が判然としない光景という描写は文献に記されているものではなく、菊池容斎が独自に表現したものである。海神宮から戻るときに「鰐」に乗るといふ記述は『古事記』及び『日本書紀』第一の一書に見える<sup>10</sup>。現在ではこの「鰐」は四つ足の爬虫類ではなく、鮫の類（ワニザメ）とする説がほぼ定着している。しかしこの絵は、近世、明治時代に主流であった爬虫類説で描かれ、当時の学説が反映されていると考えられる。

ヒコホホデミの容姿について詳しく見ると、まず、顔はすっきりとした容貌で、髪をまとめ流したままであり、女性的である。菊池容斎の描く人物について考えると、『前賢故実』の図像全般に見られるように、たとえ髭のある老人であつてもすっきりとした顔貌をもっている<sup>11</sup>。しかし『前賢故実』において髪を長くおろした男性の絵は、女装をしたことが『古事記』からも明らかかなヤマトタケル像のみであり、ヒコホホデミの女性的な姿はやや特殊なものを受け止められる。この容姿は『古事記』の「麗しき壮夫」「麗しき人」、『日本書紀』第一の一書「実には是妙美し」「麗しき神」、第二の一書「顔色甚だ美しく、容貌且閑なり」等の記述から想起されたものと考えられる。あるいはヒコホホデミは人ではなく神であること、戦

いに關する話がないことから、髭や結髪、武具を持つといった成人男性の姿よりもむしろ、女性的に描くことで「常の人に非」ざる姿を表現したのではないか。次に、体の方は、ゆつたりとした衣装を身に纏い、身分の高さを示す物なのか、曲玉を多く使った首飾りをつけている。手は長い袖に隠れて見えないが、足は裸足である。海神宮で取り戻した釣針と、海神から受け取った「満潮干潮の二の珠」は描かれていない。つまり、手に何も持たずに帰還するのだ。少なくとも、見せないように描かれている。

『古事記』によれば、ヒコホホデミは帰還後に兄に釣針を返し、兄を「満潮干潮の二の珠」で懲らしめる。しかし、この絵には兄との関わりを示す物が省かれており、兄とは断絶しているのである。「彦火々出見尊」という画題と、海・鰐といった構成要素から、日本の神話をすぐさま想起させるという点において、この絵はわかりやすい。しかし、この場面の前後、つまり海神宮訪問譚とその後に続く展開をあまり想像させない絵となっている。菊池容斎の描く歴史人物画は、『前賢故実』全般に共通した特色として「ひとつひとつの人物像にまといつく物語が曖昧なままに放置される」と指摘されているが、この「彦火々出見尊」においてもそれは当てはまる。菊池容斎は『古事記』や『日本書紀』という連綿とした「歴史」の一場面を描くのではなく、歴史上の人物、ここではヒコホホデミを絵画として表すことをまず念頭に置き、それにふさわしい場面を切り取ったといえよう。何も持たず、視線を漂わせどこを見ているのかもわからないヒコホホデミは、物語性をも持たないのである。菊池容斎の目的は、海神宮訪問譚を描くことではなく、ヒコホホデミとわかる図像を打ち出すことにあると考えられる。

### 三 町田曲江「天岩戸」

次に、描かれた時代の様相が反映されているという点において、町田曲江「天岩戸」<sup>13</sup>を取りあげたい。画題として多い「天の岩戸」は、画家達の創作意欲を駆り立てる素材であったようだ。天の岩戸神話に記される八百万の神々による会議やアマテラスを呼び出すための準備、アメノウズメによる舞など、『古事記』『日本書紀』には細かい描写がある。たとえば『古事記』はアメノウズメの舞の場面を次のように記している。



図2 町田曲江「天岩戸」

天宇受売命、手次に天の香山の天の日影を繋けて、天の真拆を纏と為て、手草に天の香山の小竹の葉を結びて、天の石屋の戸にうけを伏せて、蹈みとどろこし、神懸り為て、胸乳を掛き出だし、裳の緒をほとに忍し垂れき。

々が鏡や玉を作る場面が描かれている。この作品の後に描いたのが、ここにとりあげる「天岩戸」である(図2)。「古事記」などの展開に沿えば、「天安河原」に続く場面である。これは以下で述べるように一九三八(昭和十三)年という当時の時代状況を実在的に示した構図であり、注目に値する。まず雑誌『塔影』の解説記事を引用しよう。

町田氏の作は岩戸開きに新解釈を加へたもので、空中に手力男が浮んでゐる。天岩戸からさす旭光に日本地図が浮んでゐる。町田老は事変下の日本画家として此の作を示したのであらう。それにしても少し力が足りないやうだ。

解説者のいう「事変」とは一九三一(昭和六)年に始まった満州事変、あるいは一九三八(昭和十三)年という発表時期を考えると、この前年の盧溝橋事件や以降の「支那事変」を指すと考えられる。<sup>15</sup> いずれにせよ日本が大陸へ進出していた時期である。

まず、解説者が述べる「旭光」を見てゆきたい。光が画面の右、フレーム外から差し込んでいる。この光は、画題からもアマテラスが発しているものと理解される。したがって、画題である「天岩戸」そのものは描かれないが、この絵の右端となる垂直線及びこの線から右の何も無い空間が「天岩戸」と考えられる。つまり中心に描かれた人物の視線の先が「天岩戸」であり、光源であるアマテラスがそこにいることを示している。この絵の鑑賞者は、アマテラスの存在を何も無い空間に想

像し感じるようになる。また、背景を地図と見立てれば、右側から光が差し込んでいることは東からの太陽光、つまり太陽神アマテラスが東から現れる夜明けを示している。ゆえに解説者は「旭光」と表現している。

次に、背景について見てゆく。確かに「日本地図」だが、現在一般的に見かける日本地図とは異なることに気づかされる。それは、日本が中心に据えられておらずや画面右に寄っており、中国大陸と朝鮮半島を含むように配置されていること、さらに、地形・距離を無視した過度の歪みが明確に見てとれるからだ。配置に関しては、北海道の東側が寸断されていることから、画家の目的は日本列島のみを描くことではなく、日本、中国、朝鮮半島などをすべて描き込むことにあつたと思われる。雑誌への掲載当時、朝鮮半島はすでに「大日本」であり、満州国が成立していた。<sup>16</sup>そして中国大陸でも南京、徐州、広東など各地が攻略、占領されていた。この絵には、日本が支配すべき国すべてを描こうという意図が見てとれよう。また、日本列島の歪みは、中央の人物の頭部付近に魚眼レンズを置いて見たような形である。これは球形すなわち地球をイメージしているとも考えられる。ただし、実際の地球儀ではこれほどの歪みを生じることはない。日本列島の球形的な歪み方に対し、中国大陸の歪み方は異なっている。海岸線は画面に対してほぼ垂直になり、日本の下関や長崎と異様に接近している。人物が伸ばした右手はちょうど中国大陸の海岸線にかけられた位置にある。実際の地図では、手が重なる部分は絵のように突き出た形ではないことから、町田曲江は手がかかるように意図的に地形を歪めたと考えられる。これは、大陸に手をかけるぞ、という意思の表れと考えられ、示唆的である。

さらに、この絵に描かれた人物とその位置について触れておきたい。解説者が「空中に手力男が浮んでゐる」としているように、この男性は『古事記』『日本書紀』の記述からもタヂカラヲと見てまず間違いないだろう。タヂカラヲが雲に乗っている。「天の岩戸」は、『古事記』『日本書紀』ともに高天原にあるものとしてしていることから、タヂカラヲのいる場所＝空中が高天原として捉えられていることになる。『古事記』の「天孫降臨」の場面で天孫・ニギノミコト一行が「天の八重のたな雲を押し分けて」降臨するという記述からも、高天原が雲の上にあることが具体的なイメージとして立ち現れてくる。町田曲江は、タヂカラヲを雲の上に立たせることで高天原を表現したのである。

「天の岩戸」関連の画題としては、岩戸の前で舞を舞うアメノウズメを描いた作品が多く、<sup>17</sup>タヂカラヲが単体で描かれたものは、管見によればこの絵画のみである。ここに「事変下」という時勢が強く表れていよう。タヂカラヲは力の強い男神であり、武力そのものである。そのタヂカラヲが、天皇の祖先であるアマテラスの光に威光を受けつつ中国大陸に手をかけ

ているのだ。雑誌記事の解説者が「少し力が足りないやうだ」と判断したのは筆致の問題をさすのか、タヂカラヲの立ち姿を意味するのかは不明である。しかしながら、この作品に描かれた「日本」の範囲と武力を象徴するタヂカラヲという人物を組み合わせたとき、「事変下の日本画家として」町田曲江が描いた神話は、見事に時勢に照応したものとなっている。

#### 四 平福百穂「武尊誅梟師図」

ここでは、多くの児童に与えた影響という理由から、ヤマトタケルを描いた作品を見てゆきたい。一八九四（明治二十七）年の平福百穂「武尊誅梟師図」<sup>18</sup>は、背景が描かれていない絵である（図3）。ヤマトタケルを「武尊」、敵であるタケルを「梟師」とするのは、平福百穂が『日本書紀』の表記に従っていることを示している。以下に引用する雑誌の解説でも『日本書紀』を重視していることがわかる。

日本武尊とし称へ奉れは。をしく勇しき状は。説かずとも人皆之を知らむ。故に此図に就ては。別に説明考証は要せざるか如くなれとも上古の事にしあれば。或は其事実を誤り居るものなしともいひ難し。因て聊か正史に拠り之を説くへし。

ここでは、ヤマトタケルの話は誰もが知るところで絵についても説明不要だが、念のために正史である『日本書紀』に拠って解説をすることが述べられ、ヤマトタケルの話が世間一般の人々の共通認識と示されているのである。当時のヤマトタケル英雄譚の受容状況についての一端が窺えよう。そして引用部分に続く文章には、割注で「古事記に熊曾建二人とあり今姑く紀説に従て記せり」とある。しかし、割注のように『日本書紀』に従うとする一方で「やがて熟菰の如く振り拆きて殺し給ひき」と『古事記』にしか記されていない表現も追加されている。注目すべきは、次に引用する、解説文の最後の部分である。



図3 平福百穂「武尊誅梟師図」



其御武勇実無比ふべき者なし。今の少年諸子。此図に鑑みて奮ふ所あれ。碧眼紅毛の徒何の畏るゝ所かあらん

ヤマトタケルに組み伏せられている「鼻師」は、熊襲であつて「碧眼紅毛」ではない。しかし彫りの深い顔、黒い腕、濃い髭は「日本」を代表する「日本武尊」とは似ても似つかず、異国人を想起させるものとなっている。確かに『古事記』『日本書紀』が編纂された上代には、熊襲は中央に従わぬ異国人も同様であつた。解説記事はこの絵を明治時代に移行させ「鼻師」に「碧眼紅毛」を見るのである。当時、日本はアメリカ、イギリスをはじめ各国と不平等条約を結んでいた。このような欧米列強に対する脅威から、ヤマトタケルを見習い、恐れてはならぬと少年達を戒めているのである。『日本書紀』に基づくヤマトタケルの忠孝、勇敢は少年達の手本となるべき存在として受容されていた一端が窺える。

この、少年達の手本としての「武尊誅鼻師図」には重要な側面がある。この絵の構図が明治、大正時代の教科書の挿絵に影響を与えた可能性が認められるためである。

国史教科書のうち、ヤマトタケルが鼻師を押し伏せて刺そうとする姿は一八九八（明治三十一）年発行の『新撰帝国史談』



図4 『新撰帝国史談』「日本武の尊」



図5 第三期国定国語教科書「熊襲征伐」

前編巻一第五課「日本武の尊」が早い例である（図4）。参考のために一九一九（大正八）年発行の第三期国定国語教科書の同じ場面「熊襲征伐」もあげる（図5）。いずれもヤマトタケルは左手で鼻師の胸元をつかみ押さえつけ、右手で剣を持ち、今にも胸を突こうとしている。鼻師は右手でヤマトタケルの左腕をつかみ抵抗し、左手を上にも上げている。鼻師の片方の足がヤマトタケルの後ろに見えているのも共通している。衣装の裾が大きくはためくか否か、背景の有無の違いはあるが、構図自体が酷似している。平福百穂の絵は、ヤマトタケルが鼻師を討つ場面の参考図として利用された可能性がある<sup>19</sup>。参照事項として、明治期のヤマトタケルに関する児童書の挿絵に目を向ければ、同じ場面で同様の構図が折山子「金

港堂豪傑ばなし 日本武尊』(一九〇二年八月)、杉谷代水『家庭歴史文庫 日本武尊』(一九〇八年八月)、巖谷小波『歴史お伽 日本武尊』(一九一一年一月)などにあり、いずれも平福百穂の絵画が発表された後に描かれている。ただし、絵画制作当時に十代であった平福百穂がまったくの独創によりこの構図を描いたとは断言できない。手本をもとに描いたとすれば、この構図がすでに存在していたことになる。しかしながら、この絵画が発表された後に、教科書やお伽噺に類似した絵が描かれたことは事実として存在する。教科書という媒体及び巖谷小波のお伽噺の人氣などを鑑みれば、この絵のイメージが定着してゆき、多くの少年達に受容されたと考えられる。この図像の流布により、異形・異国の者、<sup>やまと</sup>「日本」に従わぬ者を組み伏し倒す英雄としてのヤマトタケル像は強く印象づけられたようだ。国文学者の吉井巖は、小学校三年生のときに第三期国定国語教科書でヤマトタケルについて学んだはずだが、「どのように学んだか、ということなど一切おぼえていない。教科書も家が焼けたためにない」という。しかし復刻版の教科書でこの挿絵(図5)を見たとき、古い記憶が呼び覚まされ、次のように述べている。

私同様、これらのさし絵から、少年時代の学習の一コマを思いおこされる人があるにちがいない。(中略)大学で国文学を学び、『古事記』を購読した私も、長い間、この教科書にみえるような、りりしい勇ましい皇子のヤマトタケルを核としたヤマトタケルを心のなかにもちつづけてきた。<sup>20</sup>

この述懐からは、教材の挿絵が児童にいかに強く印象づけられるものが窺えよう。この教科書の発行年である一九一九年の就学率は、約九十八・九パーセントであった。<sup>21</sup>吉井だけではなく、教科書の挿絵の記憶と共に「りりしい勇ましい皇子のヤマトタケル」のイメージが多くの人々に植えつけられたといえるだろう。



以上、近代に描かれた『古事記』関連絵画のうち数点について考察してきた。明治期の菊池容齋と平福百穂の絵画には、その人物あるいはその場面を描き表わすという画家の意図が見てとれるものとなっているが、昭和期の町田曲江の絵画には、

歴史上の英雄や名場面というよりは「事変下」という時代が描かれていた。制作年代で単純に比較することには留保を付さねばならないが、歴史的な主題を描くということに対する意識の差異が見てとれよう。また、平福百穂の描いたヤマトタケルの姿は、後の教科書や児童書の挿絵などへの影響、これらの書籍の児童たちへの流布を鑑みたととき、重要な位置を占めるといえる。正史である『日本書紀』のヤマトタケル像として定着してゆくためである。この天皇に忠実な姿は、戦時下において忠君愛国、皇国精神の源として利用されてゆくのだ。<sup>22</sup>

ほかに、実見により確認することのできた日本画について言及すれば、画題としては『美術関係雑誌目次総覧 明治・大正・昭和戦前篇』の調査結果と同様、天の岩戸、天孫降臨、神武天皇、ヤマトタケル、神功皇后、スサノヲが多く、画題によつては構図の定型化が認められた。たとえば神武天皇の場合は金瑠が弓先にとまり光を放つ場面や山中で祭祀を執り行う場面、ヤマトタケルであれば、熊襲のタケルを討つ場面か、剣で火の付いた草を薙ぎ払う場面、神功皇后であれば、三韓の使者が平伏している場面などである。あまりにも定型化した絵画からは、画家たちの想像力の限界と同時に時代の制約という側面も考えられる。天皇家の先祖、皇室に関わる英雄達は、さまざまエピソードを持つにもかかわらず「英雄としてあるべき姿」が歴史の一場面・名場面として描かれたのである。『古事記』や『日本書紀』に記された神々・英雄は、絵画によつて既にそれとわかるイメージとして人々に定着していったと考えられる。

資料 1 『美術関係雑誌目次総覧』掲載雑誌の『古事記』関連絵画一覧表（雑誌名五十音順）

	タイトル	画家名	雑誌名	巻・号	発行年月
1	「古事記天の岩戸」（別刷写真版）	小杉未醒	アトリエ	第6巻第6号	1929（昭4）年6月
2	「第四図 彦火々出見尊」（挿画）	菊池容斎	絵画叢誌	第14巻	1888（明21）年5月
3	「第八図 武尊誅梟師図」（挿画）	平福百穂	絵画叢誌	第88巻	1894（明27）年6月
4	「天安河原」 六曲屏風一雙	町田曲江	絵画叢誌	第12回文展号	1918（大7）年11月
5	「日本武尊」（作品）	庄田耕峯	研精画誌	第11号	1903（明36）年7月
6	「天孫降臨」（作品…第十八図のうち1）	小林永興	研精画誌	第49号	1911（明44）年5月

26	同	「伊那佐の浜」	町田曲江	塔影	〃	〃	〃
25	術展	「肇国の宮居」	池田遙邨	塔影	第16卷12号	1940	(昭15)年12月
24		「檀原宮御即位」	吉村忠夫	塔影	〃	〃	〃
23		「饒速日命の帰順」	中村岳陵	塔影	〃	〃	〃
22		「金鶏の瑞」	服部有恒	塔影	〃	〃	〃
21		「布都御魂の剣」	吉村忠夫	塔影	〃	〃	〃
20		「熊野御難航」	前田青邨	塔影	〃	〃	〃
19		「五瀬命の御奮戦」	長野草風	塔影	〃	〃	〃
18		「日向御進発」	岩田正巳	塔影	〃	〃	〃
17		「天孫降臨」	安田靱彦	塔影	〃	〃	〃
16		「国土奉獻」	菊池契月	塔影	〃	〃	〃
15		「豊饒の国土」	中村岳陵	塔影	〃	〃	〃
14		口絵写真真版 肇国創業絵巻「日輪」	横山大観	塔影	第15卷6号	1939	(昭14)年6月
13		展覧会出品写真真版 第2回文展「天岩戸」	町田曲江	塔影	第14卷11号	1938	(昭13)年11月
12		革丙会第16回展「日本武尊」	小堀安雄	塔影	第13卷4号	1937	(昭12)年4月
11		「天宇受売命」(刷込写真真版)	香田右一郎	中央美術	〃	〃	〃
(4)		「天安河原」(刷込写真真版)	町田曲江	中央美術	〃	〃	〃
10		「健雷神」(刷込写真真版)	尾竹竹坡	中央美術	第4卷第11号	1918	(大7)年11月
9		「わたつみの宮」院	大智勝観	研精美術	第122号	1917	(大6)年12月
8		「わたつみの宮」(画苑其一)	飛田周山	研精美術	第112号(特別号)	1916	(大5)年11月
7		「神功皇后」(作品・第二十図のうち1)	山中神風	研精画誌	第60号	1912	(明45)年4月

44	43	42	41	40	39	(38)	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
「建国勲業」(写真版)	「わだつみのいろこの宮」	写真版「神功皇后武内宿禰」	画苑(口絵アートタイプ)「天窟」	第13回絵画共進会出品「冊諾二尊」	第12回絵画共進会出品「天岩屋戸」	「天孫降臨」	写真銅版「天孫降臨」	写真銅版「日本武尊」	写真銅版目録「素盞雄尊」	写真銅版卅二頁「素盞雄尊」	写真銅版三十二頁「天の岩戸」	佐の山 展覧会出品写真版 尚綱会第1回展「伊奈	同「血沼海」	同「紀国男之水門」	同「日向襲之高千穂峯」	同「忍坂邑大室」	中村大三郎画塾献納画「八紘一字」	日本美術協会第111回展「東征絵伝」
中村不折	故青木繁	勝川春草	尾竹竹坡	菱田春草	田代古崖	高橋広湖	高橋広湖	深見洗鱗	松本楓湖	横山大観	—	安田靉彦	会津勝巳	松井大浩	加藤美代三	小野踏青	中村大三郎	伊藤龍厓
美術新論	美術新報	報	美術写真画	日本美術	日本美術	日本美術	日本美術	日本美術	日本美術	日本美術	日本美術	塔影	塔影	塔影	塔影	塔影	塔影	塔影
第8巻第9号	213号 第11巻8号(第	第1巻第4号	第47号	第46号	第38号	第34号	第28号	第18号	第13号	第12号	第7号	第17巻5号	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1933(昭8)年9月	1912(明45)年6月	1920(大9)年4月	1902(明35)年12月	1902(明35)年11月	1902(明35)年4月	1901(明34)年12月	1901(明34)年6月	1900(明33)年4月	1899(明32)年11月	1899(明32)年10月	1899(明32)年4月	1941(昭16)年5月	〃	〃	〃	〃	〃	〃

49	「日本武尊」油絵（原色版） 口絵	青木繁	みづゑ	第425号	1940（昭15）年4月
48	「八咫鳥図及画題」	野口勝一題 松本楓湖画	風俗画報	第1号	1889（明22）年2月
47	文展「天安川原の一部」（一色版口絵）	内藤伸	美之國	第12卷12号	1936（昭11）年12月
46	「神功皇后」（一色版口絵）	岩田正巳	美之國	第7卷11号	1931（昭6）年11月
45	「古事記（泉津平坂）」（一色版口絵）	小杉未醒	美之國	第5卷6号	1929（昭4）年6月
(43)	「わだつみのいろこのみや」（写真版）	青木繁	美術新論	〃	〃

※（ ）付数字の絵画は、その数字の絵画と同作品であることを示す。

1 一方で、神々の姿に関しては神事や神楽の舞を通して「再現」されてもいた。たとえば備中神楽の「天の岩戸開き」「大  
国主命の国ゆずり」「素戔嗚命の大蛇退治」の三編は、国学者の西林国橋によって一八〇九（文化六）年に芸能性を重視し  
て創案された演目である。ほかに江戸の里神楽は江戸の庶民たちに好まれたようであり、神話を題材にとった演目の多い神  
楽である。

2 近松門左衛門作。ヤマタノヲロチ退治を題材にしている。

3 歌舞伎から浮世絵、英雄図への経緯については二〇〇六年十一月二日〜二〇〇七年一月三十日に大阪府立国際児童文学館  
で開催された「英雄豪傑図」展パンフレットを参照。

4 「国史絵画」制作の契機は、一九三三（昭和八）年、昭和天皇の長男誕生という慶事を機に、健全な少国民の育成を目的  
とした修養道場「養正館」の建設が東京府で企画され、そこに一連の国史を表す絵画を展示する計画が立てられたことにあ  
る。当代一流の画家たち五十五人が七十八点の歴史主題を扱った絵画を制作した。しかし養正館の展示施設が完成しないま  
ま終戦を迎え、「国史絵画」は展示されなかった。「国史絵画」のうち、最初の十点が『古事記』関連絵画である。

5 小林忠編『美術関係雑誌目次総覧 明治・大正・昭和戦前篇』（国書刊行会 二〇〇〇年五月）は、美術関係雑誌につい

て、巻号別目次を収録したものの。一八六八（明治元）年から一九四五（昭和二十）年八月までに発行された主要五十三誌を取りあげている。

6 『塔影』第十六卷第十二号（昭和十五年十二月）でも神武天皇関連の絵画が「中村大三郎画塾奉祝献納画」として多数紹介されている。

7 『絵画叢誌』第十四卷（一八八八年五月）。『絵画叢誌』は一八八七年二月創刊。発行元は東洋絵画会。

8 菊池容齋は江戸出身の画家。一七八八（天明八）〜一八七八（明治十一）年。『前賢故実』は、神武天皇の時代から後龜山朝に至る先聖賢臣五百七十一名の絵と略伝を収録した書籍。版本、全十巻。一八三六年完成、一八六八年刊行。刊行後、画家・美術家の間で流行し、歴史人物画の手法として利用された。有職故実の研究家関保之助は、「当時の歴史画家で前賢古実を学ばぬ者は、恐らく一人もないと云つても差支へない程であつた」（『塔影』第一二巻第五号 一九三六年五月）と回想している。

9 松本楓湖は第十二回文展（一九一八年）に「彦火々出見命」という作品を出品している。画題、構図など菊池容齋の絵画に酷似しており模倣したことは明らかである。

10 『日本書紀』第三の一書にも「鰐」がヒコホホデミを送る役目として登場するが、ヒコホホデミを乗せるという記述はない。

11 山梨俊夫『描かれた歴史 日本近代と「歴史画」の磁場』（ブリュッケ 二〇〇五年七月）でも同様の指摘がある。

12 前掲『描かれた歴史 日本近代と「歴史画」の磁場』。

13 『塔影』第十四卷十一号（一九三八年十一月）。絵の説明に「展覧会出品写真版 第二回文展「天岩戸」とあるが、第二回文展（一九〇八年）ではなく第二回新文展（一九三八年）のことである。町田曲江は長野出身の日本画家。一八七九（明治十二）〜一九六七（昭和四十二）年。黒田清輝に洋画を学んでもいる。神話を題材とした歴史画作品が多い。

14 『絵画叢誌』第十二回文展号（一九一八年十一月）、『中央美術』第四卷第十一号（一九一八年十一月）に掲載された。

15 盧溝橋事件は一九三七（昭和十二）年七月七日に起こったことから、中国では「七七事変」と呼ばれる。日中戦争は当初「支那事変」と称しており、新聞などでは「日華事変」と表現されることもあった。

16 韓国併合条約は一九一〇（明治四十三）年に調印され、満州国は一九三二（昭和七）年建国。一九三三（昭和八）年発行

の「アジア州政治区画図」によれば、「大日本」と韓国、北朝鮮、樺太の南半分、台湾は同じ赤色、「満州」は薄い赤色で塗られている。

17 田代古崖「天岩屋戸」は、アメノウズメが上半身をさらけ出して踊る場面を描く。『日本美術』第三十八号（一九〇二年四月）掲載。小杉未醒（放庵・放菴）の「古事記天の岩戸」も上半身裸で領巾を持って舞う姿である。『アトリエ』第六卷六号（一九二九年六月）掲載。小杉は戦後「天のうづめの命」として同じテーマを描いている（一九五一年）。いずれも『古事記』の「神懸かり為て、胸乳を掛き出だし」という部分を具体的に描き出したものであり、原典をふまえている。

18 『絵画叢誌』第八十八卷（一八九四年六月）掲載。絵画の題名は「武尊誅梟師図」だが、解説の題は「日本武尊刺川上梟師図解」となっている。平福百穂は秋田出身の日本画家。一八七七（明治十）～一九三三（昭和八）年。「武尊誅梟師図」を発表したときは十七歳、ヤマトタケルとほぼ同じ年であった。

19 一九三五（昭和十）年発行の第四期国定国語教科書『小学国語読本』巻六の「六 日本武尊（一）川上たける」の挿絵は、平福百穂の絵や図5に挙げた第三期教科書の挿絵とは構図が全く異なっている。しかし、第四期教材の研究書である『小学国語読本総合研究 卷六（第二冊）』（岩波講座国語教育 岩波書店 一九三六年十一月）には、挿絵に関する解説文がないものの平福百穂の絵が掲載されており、教材との関連を指摘できる。

20 吉井巖『ヤマトタケル』（学生社 一九七七年九月）

21 文部省『学制百年史』（ぎょうせい 一九七二年十月）資料編四「教育統計」I 明治六年以降教育累年統計、第1表「学齢児童数および就学児童数」による。

22 中田千畝『日本建国物語』（丁未出版社 一九三一年三月）、平林治徳『古事記』（至文堂 一九四三年二月）などは『古事記』に依拠する児童書だが、ヤマトタケルに関しては『日本書紀』の描く天皇に忠義を尽くす姿が強調されている。



### 第三節 女性向け雑誌における挿画、口絵

#### 一 婦人雑誌と娯楽性

本節では、女性向け雑誌の表紙や口絵、挿絵用として描かれた絵画を考察の対象とする。調査にあたっては『古事記研究 文献目録 雑誌論文篇』に無い一般向けの雑誌を対象とした。その理由としては、まず本研究の目的を一般レベルにおける享受に置いているためである。次に、専門性の高い学術雑誌に関しては『古事記』に関するまとまった資料が目録として存在するが、一般向け雑誌の場合は、その対象外に置かれているためである。

一般向け雑誌の調査にあたって活用した目録類は、『現代日本文芸総覧』『現代詩誌総覧』『近代婦人雑誌目次総覧』『戦前期四大婦人雑誌目次集成』『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』『書物関係雑誌細目集覧』『明治雑誌目次総覧』『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』『教育関係雑誌目次集成』である。これらの細目から『古事記』や『日本書紀』などに関連のある記事を調査した結果<sup>2</sup>、口絵や挿絵は成年向け雑誌のなかでも婦人雑誌に掲載された史談・史伝に多いという特徴が見られた。

雑誌類における史談・史伝以外の記事のジャンルとしては評論、随筆、詩、紀行文などがあげられるが、それらに挿絵はほとんど添えられていない。たとえば『文藝世紀』には「日本武尊の構想」「神功皇后の伝説」といった評論が掲載されるが、いずれも挿絵はない。評論等に比べれば、史談・史伝には娯楽読み物としての色彩が濃いため絵が添えられることが多いと考えられる。また、挿絵が婦人雑誌に掲載されることが多い理由としては、成年男性向け雑誌（女性を対象として限定しない雑誌）には、史談・史伝という項目自体がほとんど見えないことがあげられよう。管見によれば史談・史伝類は、婦人雑誌と青少年少女雑誌に多い。それらに挿絵が含まれる理由として、「女・子ども」に対しては偉人達の活躍を文字だけでなく「視覚イメージによるわかりやすさ」によって伝達することを編集者側が意識していたことにあると考えられる。挿絵は文章の理解を補助し、その文章の場面や主人公の姿を具体的イメージとして印象づけるのに大きな作用をもたらすためである。

調査した雑誌のうち、婦人雑誌においてもっとも多くとりあげられている史伝は、神功皇后の「三韓征伐」である。次い

で引田部の赤猪子、置目、オトタチバナヒメ、コノハナノサクヤヒメなどが挙げられるが、圧倒的に神功皇后伝が多い。このことから、本節では婦人雑誌における神功皇后の図像を中心に考察する。神功皇后が異なる婦人雑誌においてどのような図像化されているのかを見てゆく。

## 二 『女学雑誌』創刊号と神功皇后像

神功皇后に関しては十数誌にわたって記事と挿絵が見られた。最初に『女学雑誌』創刊号（一八八五年七月）の巻頭に掲載された「神功皇后」（図1）について考察する。この絵は、調査したほかの雑誌に比べて最も早い時期の『古事記』『日本書紀』に関する挿絵であること、また『女学雑誌』に上代文献関連の絵が掲載されたのはこの一枚のみであったという特殊性から取りあげる。同雑誌は「我が国において最も早い時期に現れた婦人解放運動の機関誌的性格を持つ雑誌」とされる。「吾等の母吾等の姉吾等の妻の何故にかく世に軽ろしめらるべきものなるやを憂い先に女学新誌を発売して専ら婦女改良の事に勉め希ふ所ハ欧米の女権と吾国従来の女徳とを合せて完全の模範を作り為さんとするに在りき」という「発行の主旨」の意図を視覚的に表現するために適合する女性像として象徴となったのが、この神功皇后だったといえよう。



図1 「神功皇后」

子を抱いている。隣に座るのは武内宿禰であり、後に応神天皇となる皇后の面目立たず、神功皇后と「降参」する人物二人に自然と目がゆくような構図である。しかし、皇子が絵の中心に配置されていることに注意すべきだろう。美術史家の若桑みどり氏は、この「乳児を抱く武内宿禰」が含まれた口絵に注目し、女性の啓蒙雑誌とされてきたこの雑誌の創刊号に乳児である天皇を描いたことは、「国家母性と、皇子の誕生を称揚する思想」が創刊当初からこめられていたと分析する。

さらに原典の『古事記』『日本書紀』の記述と、この口絵および史伝との差異として注意したいのは、手前の神功皇后に拝謁している人物

二人についてである。絵の上には「高麗をしたがへ玉へば新羅百済の王も俱に出来りて日本にしたがひ貢物を奉るべしと降参仕りたり」という文章が付く。したがって二人は新羅と百済それぞれの王に相当しよう。しかしこの文のように、高麗のあとで新羅と百済が同時に従う、という記述は『古事記』『日本書紀』両書ともに存在しない。『古事記』では新羅の後に百済が、『日本書紀』では新羅の後に高麗・百済が従うのである。したがって『女学雑誌』の記事執筆者は、原典を確認せずに記したと推測される。そして画家はこの史伝の記述をもとに新羅と百済の王として描いたか、『日本書紀』の記述を念頭に高麗と百済の王として描いたものと考えられる。さらにいえば、原典に従うならば応神天皇は新羅の王たちが拝謁した段階ではまだ生まれていない。王たちの拝謁は朝鮮半島で行われたものであり、応神天皇は筑紫への凱旋後に生まれているのだ。したがってこの絵は原典の展開を無視した「あり得ない場面」となっている。

無論、絵の主題はどの国の王が従ったのかではなく、雑誌が掲げる理想像である「欧米の女権と吾国従来の女徳」を併せた神功皇后像を示すことにある。夫である仲哀天皇の仇を討ち、朝鮮半島を従えるという武勇を前面に押し立てるこの絵は、『女学雑誌』における新しい婦女の模範像として機能していよう。

この『女学雑誌』の前身は『女学新誌』（一八八四年六月創刊）とされる。『女学新誌』最終号（第二十五号 一八八五年八月）の表紙にも神功皇后が描かれている。したがって「姉妹雑誌」の最終号と創刊号両方に神功皇后が図像とともに掲載されたことになる。

### 三 『女鑑』の「良妻賢母」像

雑誌『女鑑』（一八九一年八月創刊）は、その名が示すとおり「良妻賢母」を女性の手本としてかかげた婦人雑誌であり、明治期の代表的な婦人総合雑誌の一つとされる。創刊号から一回読み切りの史談が連載され、基本的に目次の次のページ（口絵）に史談の一場面が描かれた。見開きの左側ページというレイアウトの関係上、縦長の図像がほとんどであるが、例外的に横長の絵を折り込みで載せることもあった。このような横長の絵のなかに第三十号（一八九三年一月）の神功皇后図がある（図2）。日本画家の松本楓湖が描いており、画題はつけられていない。「三韓征伐」後に神功皇后が筑紫で応神天皇を生んだ後の一場面であり、画面左手の武内宿禰が応神天皇を抱いているのがはっきりとわかる。弓を持ち矢を負い、狩衣様



図2 『女鑑』第30号 神功皇后の口絵



図3 菊池容齋「御神像—神功皇后像・胎中天皇御影」(部分)

の衣装を纏う神功皇后、その左に跪いて応神天皇を抱く武内宿禰という構図は、菊池容齋が描いた「御神像—神功皇后像・胎中天皇御影」(図3)と共通している。松本楓湖が師の菊池容齋から影響を受けたものと考えられる。

神功皇后の挿絵には、先の図1や後にあげる図4のように、武装した皇后に新羅の王が拜謁するという絵が多いが、松本楓湖の絵では皇后が弓矢は持つものの鎧はつけず、子の応神天皇との静かな対面として描かれている。これは、『女鑑』が「良妻賢母」を称揚する立場の雑誌であることに理由を求めることができよう。武装した勇猛な女性としてではなく、母としての皇后を描いているのだ。同雑誌は創刊号の巻頭論文の

なかで「近来二つの謬見僻説」として「男女同権」「女子独立」をあげ、これらが「大に女徳を壊敗」するとしている。同雑誌における神功皇后の史談では、夫の仇討ちや新羅に攻め入ることよりも、熊襲征伐という夫の遺志を継ぐこと、幼い応神天皇を補佐することなど「良妻賢母」としての神功皇后が特に強調されており、「外は群臣を統括りて、天下を治めしめ給ひ、内は撫育の誠を盡して、皇室を安泰ならしめ給ひたる」功績が褒め称えられている。この皇后像は『女鑑』という雑誌の主旨に沿った史談とその口絵として示されていよう。

付言すれば、このほかの『女鑑』の口絵には「弟橘姫命投海図」「引田部赤猪子」「大草香幡梭姫皇女」「天鈿女命」などがあり、『女鑑』における史談の『古事記』『日本書紀』関連の挿絵は合計十五枚にのぼる(本節巻末の資料1を参照)。「女鑑」の史談は百五十号以上続き、日本史に登場する女性を網羅した感があるが、そのうちの約一割を上代文献に登場する女性が占めていたことになる。女性の理想の姿を絵と共に読ませ見せることで、教育的効果を高めたと思像される。



図4「神功皇后新羅征服の図」



図5「神功皇后親征」

一八九一（明治二十四）年に創刊された『婦女雑誌』にも神功皇后の口絵がある（図4、図5）（第二巻一号（一八九二年一月）と第四巻十四号（一八九四年七月））。良妻賢母の育成という流れに沿う同雑誌は「女子に必要な教養と徳育を高めることを目的」としていた。図4、図5の二つの口絵の構図は全く異なっているが、武装した神功皇后像という点では共通している。皇后の武装については『日本書紀』の「然はあれども暫く男の貌を仮りて」に依拠している。それぞれの口絵を詳しく見てゆく。図4は「神功皇后新羅征服の図」（富岡永洗面）で目次の次ページに掲載されている。史伝自体の掲載はない。新羅の国王が拝謁する図は、前にあげた図1のような屋外を舞台としたものが多く見られるが、この絵は建物の中と考えられる。ただし左上に木があることから、外にも面した場所であろうか。床の模様によって遠近感が表現されているが、この床の線と後方にある手すり様の仕切りの水平線が合っておらず歪みが生じており、正確な遠近法が用いられていない。また、床の格子模様、手すりのスタンドグラス状の様、皇后が座る椅子の足の形や右後方のカーテンからは、上代という時代設定が窺えない。この絵は上代を想像して描いた光景ではないと考えられる。床や手すりの模様はむしろ「現代」を思わせる。場所は挿絵の題通り新羅と見てよいだろう。したがって「現代」の新羅の館にいる神功皇后に、新羅の王が降参するという絵となっているのだ。口絵の描かれた一八九二（明治二十五）年当時の国際情勢に目を向けると、日本は鎖国状態にあった朝鮮に対し、江華島事件をきっかけに不平等条約である日朝修好条規を締結（一八七六年）していた。一八九二年頃は、朝鮮をめぐる日本と清国との間に緊張感が生じている時期である。この口絵には「現代」の朝鮮を従わせようとする国家の意思が投影されて

いよう。

図5は「神功皇后親征」で、史談本文に対馬の港から新羅へ出立する際の絵との説明がある。この説明がなければ具体的に史談のどの場面を表しているのかわからず、ゆえに絵が描かれた後で本文に説明を加えたと考えられる。これまでに例をあげた、新羅王が拝謁する図、応神天皇を抱く武内宿禰と対面する図など、神功皇后伝の一場面とすぐにわかる「名場面」とは言い難いこの場面が描かれた理由として、一八九四（明治二十七）年に朝鮮で起こった甲午農民戦争鎮圧のための軍の派遣が考えられる。新羅に向かう船に乗り込もうとする神功皇后の後ろには武器を携えた兵士達が並んでおり、進軍を強く意識した絵となっているからだ。この雑誌が発行された約二週間後、日清戦争が始まった。史談ではその「現在」の情勢には触れず『日本書紀』をもとにした伝記が詳細に書かれており、最後は神功皇后の「かゝる大御勲の一端をだに知らでいらむ幼女子達に、愛国忠君のいかで止むべからざるよしを知らしめんとてのすさびにこそ」という文章で締めくくられている。史談の目的は、神功皇后を見習い忠君愛国の精神を養うというものであった。

また同雑誌では、記事だけが第二巻十号（一八九二年五月）にも神功皇后の史伝（「名媛伝（一）」）が短く紹介されている。『婦女雑誌』は神功皇后を三度もとりあげているのだ。ほかに上代文献に登場する女性では、サホヒメや、神武天皇と七人の乙女といった図像がある。なかでも神功皇后は歴史上の名媛として繰り返し取りあげられ、同時代情勢とからませ描かれたのである。<sup>14</sup>



以上、一般向け雑誌のなかでも婦人雑誌に描かれた神功皇后像の口絵、挿絵について数点の絵を見てきた。<sup>15</sup> 女性の啓蒙教育を掲げる『女学雑誌』と、それに対し良妻賢母を掲げる『女鑑』。革新的、保守的といえる両者が神功皇后という同じ人物を掲げているのは、一見矛盾した状態のように見える。しかし、神功皇后自身が持つ二面性を鑑みれば、なんら矛盾のない現象である。その二面性とは、戦士としての皇后と、母としての皇后である。それは、戦士としては天皇に代わる最高位の立場であると同時に、次の天皇を生む国母という最高の位置にある母の姿でもある。最高の武勇と母性を併せ持つ神功皇后は、主義主張の異なる両種の雑誌であっても抵抗なく受け入れられたと考えられる。各雑誌の主旨は異なるものの、それ

それぞれの方面の模範として神功皇后は描かれ、婦女子の教育に用いられたのである。

また、『女鑑』と同様の路線といえる『婦女雑誌』が、母子像ではなく鑑を纏う武勇の神功皇后像を前面に押し立てたのは、時代情勢に大きく左右された結果といえよう。ほかに知・徳・情をあわせ持つ家庭婦人の育成をめざした『女学世界』（一九〇一年一月創刊）に掲載された神功皇后伝（大町桂月「摂政太后征韓の威烈」、四巻八号、一九〇四年六月）の挿絵にも、同時代情勢が具体的に見て取れる。神功皇后伝でありながら挿絵はすべて「日露戦争未来の夢」と題した四枚の日露戦争（一九〇四〜一九〇五）関連の絵なのだ。読者は雑誌記事によって「古代」の伝説を読みながら、「現在」のニュースを絵で見ていることになる。このことから、伝説の神功皇后の「三韓征伐」と現在の「日露戦争」の情勢が同一視されていたと考えられる。明治期における雑誌の史伝類のなかでも神功皇后伝がとりわけ数多く掲載された理由として、ほかの時期や人物伝にはない「現実感」が、神功皇后伝に託されていたといえる。

資料1 『女鑑』に掲載された『古事記』『日本書紀』登場人物の口絵

※木華咲夜姫命、神功皇后は口絵タイトルなし。本文掲載記事をもとに名付けた。

口絵タイトル	画家名	号数	発行年月
※木華咲夜姫命	松本楓湖	1	1891（明24）年8月
「弟橘姫命投海図」	富岡永洗	2	1891（明24）年9月
「引田部赤猪子」	富岡永洗	5	1891（明24）年12月
「美濃の弟媛」	富岡永洗	6	1892（明25）年1月
「忍坂大中媛命」	富岡永洗	7	1892（明25）年1月
「大草香幡梭姫皇女」	松本楓湖	10	1892（明25）年3月
※神功皇后	松本楓湖	30	1893（明26）年1月
「国依媛」	佐藤静湖	44	1893（明26）年8月
「物部麤鹿火妻」	高橋松亭	46	1893（明26）年9月

「吉備の兄媛」	高橋松亭	50	1893	(明治26)	年11月
「置目」	高橋松亭	52	1893	(明治26)	年12月
「天鈿女命」	永峯秀湖	86	1895	(明治28)	年5月
「宮簀媛」	下惠	128	1897	(明治30)	年3月
「髮長媛」	下惠	130	1897	(明治30)	年4月
「衣通姫」	下惠	131	1897	(明治30)	年4月

1 小田切進編『現代日本文芸総覧—文学・芸術・思想関係雑誌細目及び解題』上・中・下巻・補巻(明治文献 一九六八年

一月〜一九七三年八月)

現代詩誌総覧編集委員会編『現代詩誌総覧』第一巻〜第七巻(日外アソシエーツ 一九九六年七月〜一九九八年十二月)

近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌目次総覧』第一巻〜第十五巻(大空社 一九八五年四月〜一九八六年四月)

与那覇恵子・平野晶子監修『戦前期四大婦人雑誌目次集成』第一期〜第四期(ゆまに書房 二〇〇二年三月〜二〇〇六年三月)

『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 件名編』紀伊国屋書店 一九八五年八月

書誌研究懇話会編『書物関係雑誌細目集覧』第一巻・第二巻(日本古書通信社 一九七四年九月、一九七六年五月)

岡野他家夫監修『明治雑誌目次総覧』第一巻〜第五巻(ゆまに書房 一九八五年十月)

石山洋ほか編『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』「人文科学篇」(皓星社 一九九五年七月〜一九九七年十二月)

教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』第I期〜第IV期・全一〇一卷(日本図書センター 一九八六年十一月〜一九九四年二月)

『教育関係雑誌目次集成』は教育関係者を対象とした専門的な雑誌が多いが、第III期配本・人間形成と教育編には『家庭の



友』『児童』『女学世界』など一般女性向け、『少年倶楽部』『青年』など一般の少年・成年向けの雑誌も収録されているため、調査対象とした。

2 目録類による調査の結果、『古事記』『日本書紀』関連の記事等を掲載した雑誌は五十種類で、記事・口絵類の総数は二五四件。このうち女性向け雑誌は二十九種類で、記事・口絵数は一八七件である。執筆時点までに確認できた調査結果であり、今後も調査は継続する予定である。

3 池田勉「日本武尊の構想」(『文藝世紀』第三巻第一号 一九四〇年十二月)、岡崎義恵「神功皇后の伝説」(『文藝世紀』第四巻第八号 一九四二年八月)、『文藝世紀』は一九三九(昭和十四)年八月〜一九四六(昭和二十一年)一月、文藝世紀社発行、中河与一主宰。

4 戦前、神功皇后の存在は史実とされ、『日本書紀』の三韓征伐の記事から「朝鮮三国は日本の属国となった」と解釈されていた。ゆえに三韓征伐は征韓論や韓国併合、日鮮同祖論の思想的背景ともなった。

5 目次、本文ともに画家の名は記されないが、絵のサインから尾形月耕(一八五九〜一九二〇)と判断できる。

6 野辺地清江『女性解放思想の源流―巖本善治と「女学雑誌」』校倉書房 一九八四年十月

7 若桑みどり『皇后の肖像―昭憲皇太后の表象と女性の国民化』(筑摩書房 二〇〇一年十二月)。第六章「皇后像の神話化」において、神功皇后像の歴史的意味と昭憲皇太后との密接な関係性を詳細に分析している。

8 松本楓湖は茨城県出身の日本画家。一八四〇(天保十一)〜一九二三(大正十二)年。菊池容斎に学ぶ。一八八二(明治十五)年宮内庁刊行の修身教科書『幼学綱要』の挿絵画家として知られる。

9 『日本書紀』には、忍熊王の反逆を聞いた神功皇后が、武内宿禰に対し応神天皇を抱いて迂廻することを命じる場面がある。なお、武内宿禰ではなく、神功皇后が直接子を抱いた姿が江戸時代末期の錦絵に見られる。歌川豊国(一七六九〜一八二五)、歌川国芳(一七九八〜一八六一)などの絵である。

10 菊池容斎「御神像―神功皇后像・胎中天皇御影」(一八六〇年)。双幅で、向かって右が神功皇后、左が応神天皇を抱く武内宿禰の絵。背景はなく、皇后と天皇という「神像」を描いたものであり、菊池容斎の絵には「三韓征伐」という物語性を見出せない。

11 『近代婦人雑誌目次総覧』解題による。

12 ほかにも神功皇后伝とわかる「名場面」には、鮎を釣る占いや、髪を洗う占いの場面などがある。月岡芳年『大日本名将鑑』の「神功皇后・武内宿禰」（一八七八年）は鮎釣りを描いたものである。

13 甲午農民戦争は一八九四（明治二十七年）年春に朝鮮半島で起こった農民の反乱。朝鮮政府は清国に援軍を求め、清の進軍後に日本も一万人規模で軍を派遣した。六月に停戦したが、日清両国は軍を引かず、七月末に日清戦争が始まった。

14 同雑誌は一八九三（明治二十六年）年までは歴史上の名媛を取りあげることが多く、一八九四（明治二十七年）年以降は明治の同時代の賢婦の姿を掲載するようになり、古典から現代へという路線変更が見られる。

15 ほかにも一九一八（大正七）年五月発行の『子宝』（第二巻第五号）「日本賢母伝（七）神功皇后」に、菊池容齋による絵と見られる挿絵があり、神功皇后が弓を持って立ち、武内宿禰が側に跪いて子を抱いている。

#### 第四節 オトタチバナヒメの折り―“入水の図”の誕生と変容―

##### 一 描かれ続ける“入水の図”

『古事記』『日本書紀』で英雄とされるヤマトタケルの后、弟橘比売／弟橘媛（オトタチバナヒメ）は、ヤマトタケル東征の折、海神の怒りを鎮めるために荒れる海に身を投じ夫を救ったことで知られる。ここでは、このオトタチバナヒメの“入水の図”の受容と変容について考察する。明治期には、オトタチバナヒメの入水の行動が“賢婦”として着目され、数種類の婦人雑誌に史伝が掲載された。大正期からは小学校国定国語教科書の教材としても採録された。これらの史伝及び教材の多くは挿絵を伴っており、それはオトタチバナヒメがまさに海に飛び込む瞬間をとらえた絵である。近代に発行された婦人雑誌、少年少女雑誌、児童書、教科書等に掲載された入水の図の多くは構図がほぼ同じで固定化しているといつてよい。

現代においては絵本等で描かれ続け、図像が登場しはじめた時期には無かった合掌する“祈りの姿”が定着している。現代になつて登場したオトタチバナヒメの表象が祈る対象は何であろうか。それは『古事記』に記述されているように、夫である皇子ヤマトタケルが無事に任務を果たし復命するために、荒れた海が静まることと考えられる。しかし後述するように、これら入水の図に描かれるようなオトタチバナヒメの祈る姿自体は、原典である『古事記』『日本書紀』に記されていないのである。それでは、なぜ原典から読み取れないオトタチバナヒメの姿が描かれ、さらに“祈りの姿”が追加されることになったのだろうか。

オトタチバナヒメに関する各分野における先行研究のうち、その入水伝承に関してはさまざまな視点から論じられてきた。上代文学研究の立場からは、吉井巖、守屋俊彦、上田正昭らが『古事記』『日本書紀』の比較、オトタチバナヒメの出自の検証、霊果・聖樹としての「橘」からの考察、中国の伝承との比較などを行った。吉井と守屋は、オトタチバナヒメが櫛を身につけていること、入水し海神を鎮めること、常世の橘を名に負うことなどからオトタチバナヒメの巫女的な性格を指摘している。

一方、民俗学の立場からは、平野馨や今井福治郎が、女性が海に投じるといふ“舟玉”の信仰とオトタチバナヒメの入水伝承を関連づけている。入江英弥は、オトタチバナヒメ伝承の各地域への伝播及び定着について、漂着神信仰や、海上安全

を祈願する人々の信仰及び修験者の布教活動を要因としてあげる。遺物発見の報告や入水説話成立の背景に関する考察は、考古学や古代史学の領域においてもすすめられている。

先行研究の問題点として着目されるのは、国文学者である吉井と守屋に代表されるオトタチバナヒメ像の美化、感傷的な論調である。後述するように、この点に「祈りの姿」との関連が窺える。

本節は、オトタチバナヒメの図像について、その誕生から現代に至るまでの様相を概観する。オトタチバナヒメの伝承は、特に明治期以降、入水の図を伴って語り継がれてきたにも関わらず、図像に関しては各分野の先行研究においてもこれまで考察されてこなかった。従ってまずはこれらの図像の流れを把握する作業が要請される。

本節の手順としては、オトタチバナヒメの入水譚を原典によって確認し、オトタチバナヒメ入水の図の嚆矢と考えられる図像を指摘する。そのうえで、この図像が継承され変容してゆく様相を終戦時まで辿り、多くの児童が入水の図を目にする機会となった戦前の国定国語教科書を取りあげる。最後に、戦後になって入水の図に新たな意味づけがなされた点について触れる。

## 二 「入水の図」の誕生と模倣

オトタチバナヒメ入水の説話を確認するため、『古事記』及び『日本書紀』の該当部分を以下に引用する。

### 『古事記』中巻

其より入り幸して、走水海を渡りし時に、其の渡の神、浪を興し、船を廻らせば、進み渡ること得ず。爾くして、其の后、名は弟橘比売命、白ししく、「妾、御子に易りて、海の中に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とまをしき。海に入らむとする時に、菅疊八重・皮疊八重・絹疊八重を以て、波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に、其の暴浪、自ら伏ぎて、御船、進むこと得たり。爾くして、其の後の歌ひて曰はく、

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも

故、七日の後に、其の後の御櫛、海辺に依りき。乃ち其の櫛を取り、御陵を作りて、治め置きき。

〈中略〉故、其の（足柄の…田中注）坂に登り立ちて、三たび歎きて、詔ひて云ひしく、「あづまはや」といひき。故、

其の国を号けて阿豆麻と謂ふ。

『日本書紀』卷第七 景行天皇四十年是歳

亦相模に進して、上総に往かむと欲ひ、海を望みて高言して曰はく、「是小海のみ。立跳にも渡りつべし」とのたまふ。乃ち海中に至り、暴風忽に起り、王船漂蕩ひて渡るべくもあらず。時に、王に従ひまつる妾有り。弟橘媛と曰ふ。穂積氏忍山宿禰が女なり。王に啓して曰さく、「今し風起り浪溢くして、王船没まむとす。是、必ず海神の心なり。願はくは賤しき妾が身を以ちて、王の命に贖へて海に入らむ」とまをす。言訖りて、乃ち瀾を披けて入る。暴風即ち止み、船岸に著くこと得たり。故、時人、其の海を号けて馳水と曰ふ。〔中略〕則ち甲斐より北武蔵・上野を転歴て、西碓日坂に速りま

す。時に、日本武尊、毎に弟橘媛を顧ひたまふ情有り。故、碓日嶺に登りまして、東南を望みて三歎かして曰はく、「吾孀はや」とのたまふ。孀、此には菟摩と云ふ。故、因りて山の東の諸国を号けて吾孀国と曰ふ。

両書の記述から読み取れるのは、オトタチバナヒメが「后」であること、暴風と荒波で舟が進まないこと、その海にヒメが舟から入っていくことである。『古事記』からは、櫛を身につけていたこと、波の上に数種類の敷物を重ねて敷いていることがわかる。ヒメが海に入る前に、ヤマトタケルに対して身代わりになることを告げているのは両書に共通している。ヒメの容貌や装飾品を表す記述はない。

この場面は江戸時代から描かれていたことが確認できる。一八三四（天保五）年に刊行された『江戸名所圖會』（斎藤長秋編輯、長谷川雪且画）巻之七の一枚に、荒れる海に飛び込むオトタチバナヒメの姿がある（図1）。吾妻権現社の縁起を記した箇所で、『日本書紀』を引用し解説している。ヤマトタケルが船上に見え、オトタチバナヒメは両手を交差させるかたちで飛び込んでいる。絵は荒れる波を誌面全体に描いた臨場感あふれる迫力ある構図となっている。『日本書紀』に記された

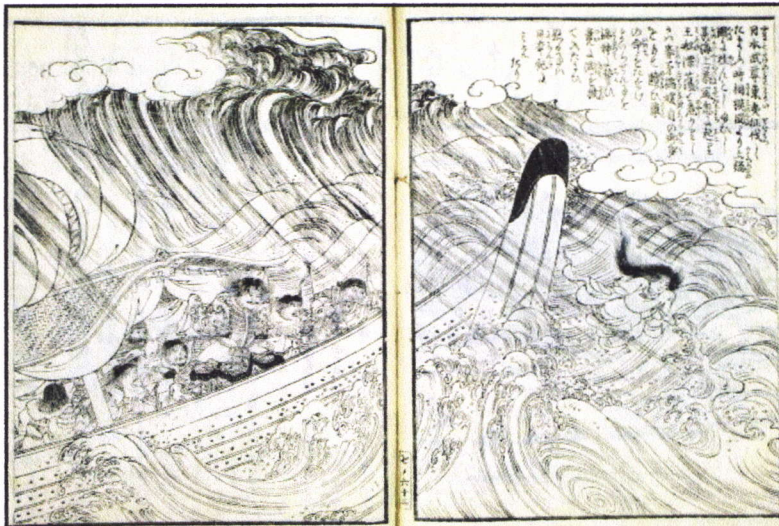


図1 『江戸名所圖會』 「日本武尊東夷征伐したまふ時」

場面状況を捉え、その全景を描いている。景色などの全景を誌面におさめるのは「名所図会」を描く場合によく用いられる手法である。したがってここでのオトタチバナヒメは景物のひとつであり、大きく目立ってはいない。

ところがこの場面において、オトタチバナヒメだけに焦点を絞った絵が間もなく登場した。菊池容齋『前賢故実』に掲載された「弟橘媛」である(図2)。一八三六(天保七)年に完成、一八六八(明治元)年に刊行された『前賢故実』は、神武天皇以後の忠臣五百人以上の図像と評伝が記された書籍である。刊行後、画家・美術家の間で流行し、歴史人物画の手法として利用されたことで知られる。有職故実の研究家関保之助は、「私共の幼少の時には此の本が非常に行はれ、当時の歴史画家で前賢古実を学ばぬ者は、恐らく一人もないと云つても差支へない程であつた」(『塔影』第一二巻第五号 一九三六年五月)と回想している。『前賢故実』巻末には菊池容齋が参照した「引用書目」の一覧が掲載されており、二〇〇点以上を数える書目名の筆頭に『古事記』と『日本書紀』の名があげられている。菊池容齋はこれらの書籍類の調査に加え、実際に関西の古社寺に足を運んで見聞し、「彼なりの実証精神をもって」歴史人物を描き出したのである。

この『前賢故実』の「弟橘媛」が、以後のオトタチバナヒメの図像に多大な影響を与えたことは間違いない。なぜなら、明治期の雑誌や児童書の挿絵の多くがよく似た構図を用い、大正期に発行された第三期国定国語教科書はヒメの表着の模様までが模写したかのように似通っているためである。

ここで、図2を詳しく見てゆきたい。まずヒメの顔は、菊池容齋の描く歴史人物画によく見られる傾向をもち無表情に近い。手は、右手の指だけがわずかに胸元からのぞいている。左腕は曲げられ、左手は見えない。腰を曲げてかんだ恰好で波に向かい、右足先はすでに波に浸かり、左足には後ろからの波がかぶってきている。髪の毛はびき方からは、かなりの勢いで舟から飛び降りていることがわかる。装飾品は首飾りらしきものがわずかに見える。衣装は、模様のついた丈の短い表着、その下に裾の長い着物(裳)を着ており、これが大きく後ろになびいているのだろう。帯と思われる細長い布も見える。さらにズボン様の袴<sup>11</sup>を穿き、足には襪<sup>12</sup>を穿いている。波の様子からは水面が荒れていることが見てとれる。絵はこのように描かれているが、先にも述べたとおり『古事記』『日本書紀』には



図2 『前賢故実』「弟橘媛」



ら一話完結の史談を連載しており、この号では考証学者・佐伯有義による「弟橋姫の伝」が掲載され、史談の後に感想が記されている。

今の女子の好き模範と、なりなんと思ふまゝに、その伝記のあらましを、かくものせるなり。へ中略へ走水の海にて、皇子の御為に潔く一身を犠牲にさゝげられたるが如きは、誠に貞操とや云はん、活発とは申し侍らん。史を讀みてこゝに至る毎に常に衣の袖の濡ふを知らざるなり。

『女鑑』はその名が示すとおり「良妻賢母」を女性の手本としてかかげた婦人雑誌であり、明治期の代表的な婦人総合雑誌の一つとされる。オトタチバナヒメが「女の鑑」として採択された理由は、「日本武尊の軍行の旅に随ひ奉りて、常に内事を助け」たこと、「皇子の御為に潔く一身を犠牲にさゝげ」たことにある。後者は『古事記』『日本書紀』に記されるが、前者の「常に内事を助け」たことは佐伯有義による挿入であり「女子の好き模範」として求められた姿でもある。そしてこのようなオトタチバナヒメの姿が、後述するように格好の教材として用いられてゆくことになる。

図3を確認すると、菊池容斎の絵とはヒメの表情が異なっており、眉間にしわを寄せ、口を引き締めた硬い表情が描かれている。他には、右手が胸元ではなく下に下ろされている点、首飾りが長く大きくなり豪華に描かれている点、足先が見えない点などが異なっている。<sup>15</sup>



図4「能褒野の露」挿絵

オトタチバナヒメ以外の人物や物を描き込んだ絵もある。それは一八九一（明治二十四）年二月発行の児童向け読本、小中村義象・落合直文『家庭教育歴史読本』第一編所収「能褒野の露」（博文館）の挿絵である。この書籍は『古事記』『日本書紀』を題材とした児童書の嚆矢と考えられる。「能褒野の露」はヤマトタケルの伝記で、「古事記、日本紀、熱田縁起によれり」とあり、画家の名は不明<sup>16</sup>。挿絵は四枚あり、そのうち二枚目の挿絵が（図4）のオトタチバナヒメが海に入る場面である。後述するが、この絵は『古事記』の享受の一例と見なせるものである。『家庭教育歴史読本』は、先に述べた『女鑑』よりも半年余り発行が早い書籍であるため、管見によれば『前賢故実』「弟橘媛」の次に描かれたオトタチバナヒメの図像である。この挿絵にはいくつの特徴がある。まずは、舟と二人の人物が描き込まれていることだ。これらを描き込むことにより画面上部の空白がほぼなくなり、波も画面いっぱいに表示されているために、やや雑然とした印象を受ける。舟の形は舟形埴輪を参照するなど時代考証を踏まえたものとはいえない。注意したいのは、舟とオトタチバナヒメの距離感である。非常に近いことが見てとれ、舟からまさに飛び降りる光景に現実味と臨場感を与えている。また、舟の上では一人が縁に手をかけてヒメを見つめ、もう一人が目を覆い、ヒメが波に入るのを見ないようにしている。舟とこの人物たちを描き込むことによる効果は、オトタチバナヒメの行動に現実感が増し、同時に哀れといった感情が起ることにあろう。

この挿絵のもうひとつの特徴は『古事記』の記述に従った部分である。波の上に筵のような敷物が描き込まれており、これが『古事記』の「菅畳八重、皮畳八重、繩畳八重を以て、波の上に敷きて、其の上に下り坐しき」を表している。この挿絵の画家は仮に『前賢故実』の絵を参照したのだとしても、敷物があることから『古事記』の該当箇所も確認したことになろう。明治期のほかの児童書には、この敷物が描き込まれた絵は確認できない。

オトタチバナヒメ自身に注目すれば、髪や衣装は『前賢故実』の「弟橘媛」と似通っている。しかし表情は、眉を寄せ口元も歪めており、苦痛あるいは恐怖の感情を読み取ることができる。また、両手をそれぞれ胸元で握りしめて、体全体を丸めしやがんだ格好をしており、高所から飛び降りる体勢がよく描き表されている。また、敷物の上という目標地点に狙いを定めた姿勢ともいえるだろう。



注意したいのは、この書籍が『家庭教育歴史読本』叢書ということである。表紙見返しには教育勅語が朱書きで掲載されている。<sup>17</sup>「緒言」には「忠孝節義の風をかねて養はしめむ」とあり、歴史の「事実の感覚を、深く読者に與へしめむとなり。畫を挿みたるも、またおなじ」として、歴史をそのままの事実として児童に与えようとする書籍といえる。「事実の感覚」を讀者に与えるために、舟や人物の描き込み、オトタチバナヒメの姿態などが細かく描写されたといえよう。

一八九八（明治三十一）年発行の「日本お伽噺」第十七編『草薙劍』<sup>18</sup>の挿絵は『前賢故実』とよく似た構図だが、一九〇二（明治三十五）年発行の『金港堂豪傑ばなし 日本武尊』<sup>19</sup>の挿絵（図5）では変化が見られ、頭部から飛び込みむ構図となっている。挿絵画家名は不明だが、ここには『前賢故実』の「弟橘媛」から離れた画家の視点が見てとれる。また、この書籍本文には「菅壘を八重に、皮壘を八重に、きぬ壘を八重にを以て、其れを波の上に、敷き重ねて、其の上に、お坐りのまゝ、荒波の中に、飛び込みました。」と記されているが、この記述は絵に表されていない。手や足の様子は、波に隠れるなど曖昧にされている。

さらに、明治末期の児童書では、『前賢故実』の「弟橘媛」を受け継ぎつつも、左右対称の挿絵が登場する。一九一〇（明

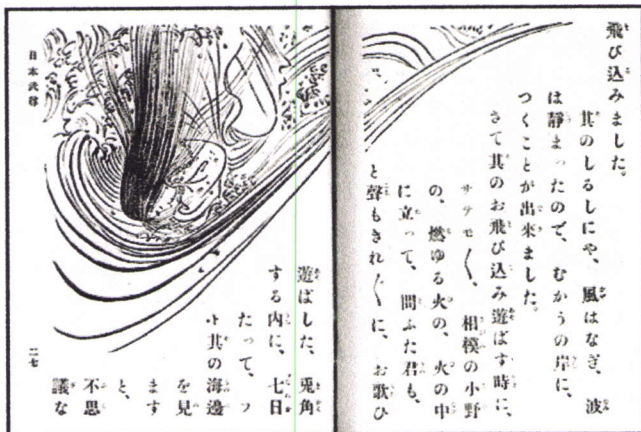


図5『金港堂豪傑ばなし 日本武尊』挿絵

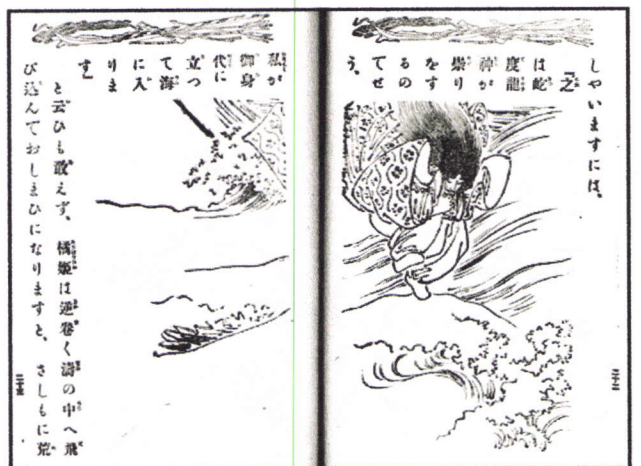


図6「歴史お伽」第六編『日本武尊』挿絵

治四十三）年発行の「日本お伽噺」第四十四編『日本武尊』<sup>20</sup>、一九一一（明治四十四）年発行の「歴史お伽」第六編『日本武尊』<sup>21</sup>である。後者の挿絵（図6）を見てみると、袖口の広い表着（唐衣か）と袴を身につけていることから、時代考証が行われていないことは明らかである。

ここで注目したいのは、オトタチバナヒメの手だ。ここで注目したいのは、オトタチバナヒメの手だ。両手の指を組合せ、祈るような姿となっている。この手の形が「折り」を表すかどうかは留保しなければならぬが、少なくとも何かを念じているといえる。このように両手を合わせていることが明確にわかる図像は、これまでの入水の図には見られなかった。『前賢

故実』「弟橘媛」や『女鑑』「弟橘姫命」では、手は右手だけが自然な位置で描き表わされ、オトタチバナヒメの何らかの心情を表現してはいなかった。『家庭教育歴史読本』では両手をそれぞれ固く握りしめ、恐怖や苦痛、もしくは決意を感じさせるものとなっていた。また「日本お伽噺」第十七編『草薙剣』の挿絵では、手は体の前で交差させて両肩を抱きしめるように描かれており、眉間には皺が刻まれ、歯を食いしばり両目をきつく閉じ、苦痛や恐怖に耐える表情となっている。そして、この「歴史お伽」第六編『日本武尊』では、指を組み合わせた「祈りの姿」をし、やや眉を寄せ目を伏せた静かな表情で海に入るオトタチバナヒメが登場したのである。

### 三 大正期、昭和戦前・戦中期のオトタチバナヒメ像

次に、大正期の挿絵を見てゆく。まずは一九一九（大正八）年八月発行の雑誌『少年世界』<sup>23</sup>に「祈りの姿」をしたオトタチバナヒメを確認できた（図7）。ここでは、両手を顔の前で合わせた合掌の姿で海に飛び込んでいる。ほかにオトタチバナヒメが描かれた大正期の児童書は三冊あり、そのうち一九二三（大正十二）年発行の模範児童文庫『日本武尊』<sup>24</sup>では、絵



図7 『少年世界』25-8「日本武尊」挿絵

は口絵と挿絵がそれぞれ一枚のみしかなく、その挿絵がオトタチバナヒメの入水の図である。また、一九二四（大正十三）年発行、少年歴史物語『草薙の剣』<sup>25</sup>では、二枚の挿絵のうち一枚がオトタチバナヒメである。両書とも挿絵の全体数が少ないにも関わらず、ヤマトタケルの物語の中からオトタチバナヒメの場面が選択され描かれたことは留意すべきであろう。模範児童文庫『日本武尊』は学校教科書を補完する目的で編まれており、少年歴史物語『草薙の剣』も教育関連団体による編集である。ともに児童の教育という点で共通しており、両書はオトタチバナヒメの場面を視覚的に表現することに重きを置いていたと見られる。後述するが、一九二二（大正十一）年発行の第三期国定国語教科書『尋常小学国語読本』に、オトタチバナヒメが挿絵入りで登場したばかりであった。教材が短い文語体であったため、これら児童書における口語体による詳しい記述及び教材とは異なる挿絵は、児童たちの理解を補助したと考えられる。

続いて、昭和前期のオトタチバナヒメ像を見てゆきたい。昭和に入ってから挿絵の特徴として、

いわゆる日本画の様式から解放された、漫画的な絵が増えるという点があげられる。まず一九二九（昭和四）年七月発行『少年倶楽部』に、濱田廣介の詩「おとたちばな媛」があり、川上四郎による絵が確認できる。構図は『前賢故実』『弟橘媛』と同じで、ヒメからやや離れた後方に舟と数人の人物が描き入れられている。

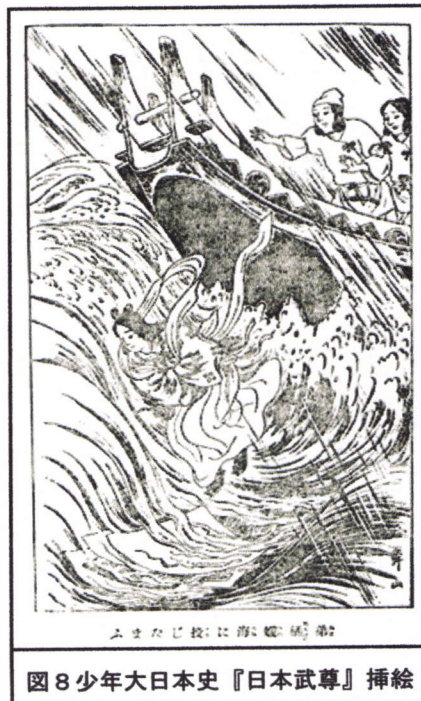


図8 少年大日本史『日本武尊』挿絵

一九三五（昭和十）年発行の「少年大日本史」第三卷『日本武尊』<sup>26</sup>（図8）では、オトタチバナヒメの姿勢や角度に『前賢故実』の「弟橘媛」以来引き継がれてきた視点が見られる。一方で舟の形、男性の衣装、ヒメの衣装と杓、髪型などは時代考証を踏まえたうえで描き表したことが見てとれる。この書籍に掲載された他の挿絵の中には埴輪の写生図や古墳の想像図などがあり、遺物の調査、遺跡の発掘など考古学進展の成果が現われている。しかし、衣装・杓・髪型などすべて『古事記』『日本書紀』原典には

記されていないことから、挿絵は考古学上発見された細かい「史実」が描き加えられたものだ。オトタチバナヒメが言う「海の神様が皇子に崇りをするのでござりましょう。御大切な御身、私が御身代りに、人身御供となりまして、海中に入りませう」という言葉と「たふとい媛」の行為は、挿絵の臨場感と古代の史実によって、より現実感を持ったものとして児童たちに印象づけられたと考えられる。

また、一九四〇（昭和十五）年発行『日本肇国物語』<sup>27</sup>は、指を組み合わせる「祈りの姿」で海に入る挿絵である（図9）。オトタチバナヒメは「悪者の征伐にも（中略）けはしい山をのぼるときも、はげしい坂を下るときも、尊のおそばをはなれずにお供してきた」。そして「海神をなだめたい」「よるこんでお身代わりをさせていただきます」と海に沈む。その「忠義な弟橘媛の心」が通じたのか、海は鎮まる。強調されるのは、オトタチバナヒメの忠節心である。

ほかに一九四〇（昭和十五）年発行『日本国史美談』第一卷<sup>28</sup>、一九四三（昭和十八）年

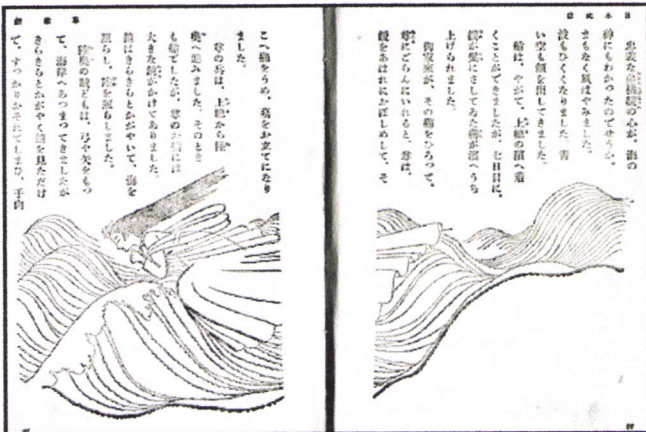


図9 『日本肇国物語』挿絵

発行『童話日本国史』<sup>29</sup>にオトタチバナヒメの挿絵が確認できた。まず後者は、図9と同じく見開きの挿絵で、同じ位置にヒメが描かれている。漫画的な簡素化された線が用いられており、ヒメは手を組まずに両手を下に差し出している。前者の『日本国史美談』の挿絵は『前賢故実』『弟橘媛』に似た日本画風の絵で、背景に舟の舳先が描かれている。本文には、『古事記』『日本書紀』にはない、以下の文章が挿入されている。

弟橘媛のたふとい犠牲が尊の御身と皇軍をすくつたのであつた。媛こそ日本女子の鑑である。(中略)

その神々しい美しい御姿とその男まさりの御ふるまひを拝した皇軍の将士はどんなに感激し、発奮したことであらう。尊もどれほど媛のおやさしいなぐさめをお喜びになつたことであらう。媛の御姿を拝めば、将士は旅の苦しさも忘れた。そのやさしい微笑は戦ひつかれた将士に、はげしい気力をよみがへらせた。

媛の御手あついお世話に涙を流し、皇室の御栄をいのりながら死んで行つた戦傷者もあつたことであらう。

媛の慈愛の御言葉に感激して病気を忘れて、剣をとつて立つた勇士も多かつたことであらう。

また、行くさきぐの賊も、媛のおいつくしみが身にしみて、悪い心をあらためたことであらう。

良民たちは媛を女神のやうにありがたく拜んだことであらう。

あゝ、その媛はつひにたふとい犠牲となられたのである。

このような感激をもって語られるこの書籍でのオトタチバナヒメは、美しく、慈悲の心を持ち、強く優しく、また傷病兵の見舞いなどもし、それは戦時下における女子、さらにいえば皇后としての役割を果たしている。そしてこの姿は「日本女子の鑑」として挿絵とともに児童に植えつけられたと考えられる。

最後に、雑誌や児童書の挿絵ではなく日本画をとりあげたい。一九三四(昭和九)年以降一九四二(昭和十七)年までに描かれた「国史絵画」のうちの一作、伊東深水『弟橘媛』である(図10)。このオトタチバナヒメ像は、指を組合せ静かに目をとじる「祈りの姿」に他ならない。荒海の中に飛び込む美しい姿が、一五一×一八一cmという大画面で迫る。この絵画の鑑賞者は、児童の予定であった。「国史絵画」制作の契機は、一九三三(昭和八)年、昭和天皇の長男誕生という慶事を機に、東京府で修養道場「養正館」の建設が企画され、そこに一連の国史を表す絵画を展示する計画が立てられたことにあ



図10 伊東深水『弟橘媛』

る。合計七十八点の国史を主題とする絵画が、五十五人の画家によって制作された。しかし一九四二年四月に制作が完了したものの、養正館の展示施設が完成せず、東京都の管理下におかれたまま終戦を迎えたのである。<sup>30</sup> 修養道場は心身共に健全な少国民の育成を目的とした場であり、連作の「国史絵画」は、道場における教養面での教育的効果をねらったものであった。<sup>31</sup> その教育とは「国史を通じて雄大なる肇國精神を體得し、日本精神を錬成せんとする」<sup>32</sup> ものだ。このように少国民の精神修養、教育のため描かれたオトタチバナヒメは、特に女子の模範像として児童に鑑賞される予定であったが、それは実現されなかった。

以上、第二項、第三項をとおして、オトタチバナヒメ入水の図の嚆矢といえる『前賢故実』『弟橘媛』以降の、婦人雑誌、児童雑誌、児童書及び日本画におけるオトタチバナヒメ像について概説してきた。それらの多くは、女子の鑑、模範像の描写といった教育的効果との関わりを示していた。それでは、実際に小学校ではオトタチバナヒメ像がどのように描かれ、教育に用いられていたのだろうか。

#### 四 戦前の小学校教科書におけるオトタチバナヒメ像

本項では、戦前の小学校の国定国語教科書に掲載された、オトタチバナヒメ教材の挿絵を中心にとりあげる。教科書は、これまで述べてきた児童書や雑誌と比べ「読者」の数が圧倒的に多い媒体である。また、同年齢の児童が同時期に一斉に同教材を学ぶことから、教材に対してほぼ共通の認識をすると考えられる。したがって教科書が児童に与える影響は非常に大きいものとなる。さらに、教科書の挿絵が児童にもたらす効果として、国文学者の吉井巖による回想は示唆を与えてくれる。吉井は「どのように学んだか、ということなど一切おぼえていない」<sup>33</sup> が、復刻版の教科書でヤマトタケルの挿絵を見た瞬間、古い記憶が呼び覚まされたという。「私同様、これらのさし絵から、少年時代の学習の一こまを思いおこされる人があるにちがいない」と、教科書の挿絵の印象強さを述べている。

吉井が学んだ教科書は、一九一八（大正七）年発行の第三期国定国語教科書である。後述するが、この教科書には「弟橘媛」の独立した課があり、オトタチバナヒメの挿絵も掲載されていた。この教材の考察に入る前に、それまでの教科書に掲載されたオトタチバナヒメの記述について纏めておこう。

オトタチバナヒメの名は、一九〇三（明治三十六）年に発行される国定教科書よりも前の、自由採択期及び検定期の歴史（国史）及び国語（読本）教科書に現われていた。しかしオトタチバナヒメの挿絵はない。まず歴史では、『教科書大系』<sup>35</sup>記載の検定期以前の教科書だけでも七種類<sup>36</sup>にオトタチバナヒメの名を確認できた。たとえば、自由採択期である一八八一（明治十四）年発行の『新編日本畧史』では「初メ皇子ノ海ヲ渡ル颯ニ相模海ニ遇フ、船殆ト覆没セントス、時ニ寵姫橘媛従ヘリ、媛曰ク是海神崇ヲ為ス、願クハ妾之ニ当ラント、自カラ海ニ投ス」と記される。また、一八八八（明治二十一）年発行の検定教科書『小学校用日本歴史』巻之上では、「颯風俄ニ起リ、船將ニ覆ラントス。妃弟橘媛軍ニ従ヘリ。尊ノ命ニ代ラシテ、身ヲ躍ラシテ海ニ投ズ」と記される。ほかの教科書も簡潔な記述であり、挿絵はない。

検定期の国語教科書では一八八八（明治二十一）年『高等小学読本』巻之一に確認でき、「海ヲ渡リテ、上総ニ至ル舟中、難風ニ逢ヒ、弟橘媛、海ニ投ゼリ」という記述が見られたが、挿絵はない。以上のように国定期より前の記述はいずれも簡潔であり、それは景行天皇あるいはヤマトタケルの話の一部という扱いから生じているためと考えられる。

それでは、国定教科書を見てゆく。歴史教科書では第一期から第五期に、第三課「日本武尊」が掲載されるが、これはもっぱらヤマトタケルの活躍を中心に述べたものであり、オトタチバナヒメの名はない。また、国定期の最終にあたる第六期では「日本武尊」の独立した課がなく、ヤマトタケルは景行天皇の代としてわずかに記され、ヒメは掲載されていない。オトタチバナヒメは国定歴史教科書から姿を消したのである。

一方、国語教科書ではオトタチバナヒメはひとつの課としてとりあげられた。ただしそれは、一九二二（大正十一）年発行の、第三期からである。少なくとも一九〇三（明治三十六）年に国定制度になってからの約二十年間は掲載されていないため、この間オトタチバナヒメは児童書や雑誌によって児童たちに伝えられていたと考えられる。しかし、教科書の普及率に比べれば少人数への伝達に留まっていたと推測される。

第三期国定国語教科書には、二種類が存在する。ひとつは第二期教科書を修正した『尋常小学読本』（黒表紙本）、もう一方は新たに編纂した『尋常小学国語読本』（白表紙本）である。<sup>38</sup>オトタチバナヒメは「黒表紙本」「白表紙本」両方に採



図11『尋常小学国語読本』挿絵

録されていることから、まず「黒表紙本」について言及する。「黒表紙本」巻九第  
十八課「弟橘媛」は、文語体の短い教材で、挿絵はない。この教科書の編纂趣意  
書の「教授上ノ注意」に、「史実トシテ之ヲ授ケンヨリハ、日本婦人ノ美シキ行ヲ  
説ケル一伝説ト見ルヲ可トス。」とあるのには着目すべきだろう。歴史教科書に掲  
載されない理由がここに含まれているためである。史実ではなく、道徳的な教え  
を論ずるのによい伝説という位置づけとなっている。また、女子教育の一環として  
認識されていることも明らかだろう。

一方、「白表紙本」は巻九の三に「弟橘媛」を掲載する。「黒表紙本」と同じ一  
九二二（大正十一）年発行で、内容も文体も、漢字・かなの用い方が部分的に異  
なるだけで「黒表紙本」と同じである。編纂趣意書に注意事項はなく、出典を「弟橘媛」ハ古事記及ビ日本書紀。」と記  
すのみである。この「白表紙本」には挿絵がある（図11）。第二項ですでに述べたが、構図が『前賢故実』『弟橘媛』とほ  
ぼ同じで、表着の様子が酷似している。表着の袖丈が異なるなど細かい差異はあるが、『前賢故実』をもとに描いたと見ら  
れる。合掌など「祈りの姿」ではないが、衣服の皺から両手を胸の前に置いていることがわかる。「御身代りとなりて海に  
入り神の御心をなだむべし」という決意とともに海に入っていく姿が描き出されている。

児童書では、この頃までに多くのヤマトタケルの伝記が発行されていた。ヤマトタケルの英雄譚は女兒よりも男児が好む  
ジャンルであったことから、女兒がどの程度この話を知っていたかは不明である。しかし、この国定国語教科書によって女  
児もオトタチバナヒメの話を読むことになった。また、第三項で述べたように、文語体で書かれたこの教材の発行の直後、  
教育関連団体から数点のヤマトタケルの児童書が出版され、とりわけオトタチバナヒメの挿絵が描かれた。このことはオト  
タチバナヒメの話に対する理解をより一層深めたと考えられる。なお、「黒表紙本」「白表紙本」巻九の発行年である一九  
二二年の就学児童数は九、一六八、八九一人。その就学率は、九十九・三パーセントを超していた。<sup>40</sup>このことから相当数の  
児童が教科書という媒体によってオトタチバナヒメの話を読んだと考えられる。この挿絵は第四期発行まで十四年間使用さ  
れているため、『前賢故実』『弟橘媛』に基づいた絵が、多人数の児童に、長期にわたって影響を与え続けたといえる。

次に、第四期国定国語教科書『小学国語読本 尋常科用』、俗称「サクラ読本」を見てゆきたい。一九三六（昭和十一）



図12『小学国語読本』挿絵

で『前賢故実』に倣わない構図となり、筆致も異なる絵となった。右手は上に伸ばし、左手は肘を曲げ下に出し、海に飛び込むには不自然な体勢だ。当時の第四期国定国語教科書の研究書である『小学国語読本総合研究』<sup>42</sup>では、この挿絵に関して国文学者の武田祐吉が次のように述べている。

弟橘媛の海にお入りになる図は、菊池容齋の前賢故実に出て居り、読本の図は、これに基いているやうである。上の方に撥ね上げられてゐるのは、御裳であらう。

『前賢故実』との共通点を見いだすににくいこの挿絵でも『前賢故実』に基づいたと感じたのであろうか、興味深い発言である。『前賢故実』が昭和に入ってもなお影響力を保っていたことを窺わせる。

第四期と第三期の教材が異なる点は、挿絵だけではない。文語体から口語体に改められ、さらに教材独自の文章が追加されていることもあげられる。たとえばヤマトタケル一行が乗った船が沖にさしかかったときに、嵐が起る。その描写は次のようだ。

風は忽ち大波を巻起し、波は船を木の葉のやうにゆり動かした。もう進むことも退くことも出来なかつた。お供の者は、皆まつさになつて船底にひれふした。



傍線部は『古事記』『日本書紀』には無い部分であり、海上での嵐の様子を臨場感を込めて記述している。比喩を用いるなど児童の理解を深め緊張感を引き出す効果を狙ったと考えられる。オトタチバナヒメの様子は以下のようなものである。

弟橘媛は、「これは海神のたゞりであらう。此のまゝでは尊の御命が危ない。」とお考へになつた。媛のやさしいお顔には、きつと御決心の色が浮んだ。

オトタチバナヒメの前半の言葉は『日本書紀』の「是、必ず海神の心なり」に基づいているが、その後の言葉からヒメの表情までは、教材独自の文である。また、ヒメが海に入る様子は「荒狂ふ波間に、ざんぶとお飛び込みになつた」と擬態語が用いられている。編纂趣意書によれば、この教材の目的が「弟橘媛の貞烈なる御最期」を記し「日本婦人の一美談として授くべき」ことにあるため、ヒメの言葉や表情を書き加えたと考えられる。この教材に関して、国文学者の岡崎義恵は「編者はこの教材を重大視し、媛の犠牲的行為に感動的効果を与へようとするやうになつたのでは無からうか。」と指摘している。さらに「弟橘媛の自ら進んで決意される犠牲的精神は、国家的なもの、道徳的なもの、美的なものが渾然一体となつてゐるもので、日本精神の清華ともいふべく、殊に女性に対する教材としてはこの上のものではないと思はれる。」と高く評価し、オトタチバナヒメは女子教育において最適な存在とみなされていたといえる。

この第四期の巻七発行は一九三六年で、同年の就学児童数は一一、四三四、九八三人。就学率は実に九十九・五パーセントを超していた。<sup>44</sup>この就学児童たちに対し、教材の印象をアンケート調査した当時の資料がある。<sup>45</sup>東京の二校で行われ、「弟橘媛」を学習する四年生の男児数は三四四人、女児数は三五四人、合計六九八人である。この調査結果の、課に対する関心度、興味の強さの順位を表した表によると、巻七の全二十六課のうち「弟橘媛」は、男児では七位、女児では八位、総合で八位となっている。男女ともに関心度が高い教材であったことがわかる。また、具体的な人数を示せば「すき」「よかつた」は男児六〇人、女児九九人、「つまらない」「二度と読む気がしない」は男児一三人、女児一四人であった。女児のほうがやや教材に対して好感をもった人数が多いといえるが、ジェンダー的に大きな差が見られないことを考えると、後述するヤマトタケルの英雄化が大きな影響を与えていたと考えられる。これらの調査結果は、当時の受容に関する重要な報告資料である。

最後に、第五期国定国語教科書『初等科国語』を見てゆく。「弟橘媛」は、一九四二（昭和十七）年に発行された巻五の二に採録されている。文体は口語体から文語体へと変更され、古典教材となつてゐる。挿絵は第四期と同じものが使用されていることから、この絵は一九三六年から一九四五年まで九年間使用されたことになる。オトタチバナヒメが海に入る様子は、第四期のように「ざんぶとお飛び込みになつた」ではなく、「すがだたみ八重、皮だたみ八重、きぬだたみ八重を波の上に敷きて、その上におりたまへり」と『古事記』に基づいた記述がなされている。第四期に見られた教材独自の文章は、ほぼ姿を消している。そして文語体で記されたことにより、文章全体の分量が短くなつた。この第五期国定教科書には教師用教科書が用意されており（一九四三（昭和十八）年発行）、それによると、この話は「日本婦道の鏡とも讀へ奉るべき御物語」であることから「特に女子教材としての意義を多分に持つてゐる」とする。実際に、オトタチバナヒメの話は高等女学校でさらに詳細に学習されていた<sup>46</sup>。また、教師用教科書が示す教材取扱の要点のひとつに「弟橘媛の貞節と日本武尊の優しいお心が描いてあることをわからせる」という項目がある。同じ第五期の巻三ですでに学習済みのヤマトタケルは武勇に優れた皇子であつたが、この「弟橘媛」ではヒメの墓を作り「あづまはや」とヒメを偲ぶような優しさを持つ人物として描出される。英雄ヤマトタケルの理想化がここに認められよう。オトタチバナヒメの教材は、ヤマトタケルを補うためのものでもあつた。

以上、戦前の小学校教科書におけるオトタチバナヒメ教材について、挿絵を中心に考察してきた。この教材は一九二二年から終戦までの二十三年間、挿絵を伴つて使用された。吉井巖は「戦前の教科書には、熊襲たける討伐の話と弟橘媛入水の話がずっと入つていて、戦前に教育を受けた人々は、これらの話からヤマトタケルの人物像を、それぞれに造つてゐる人が多いと思う」と述べている<sup>47</sup>。オトタチバナヒメに関しても、国定教科書による教育という「洗礼」を受けた児童たちはそれぞれにヒメをイメージしたと考えられる。そのイメージは、荒れる海に飛び込むという挿絵によつて、より強固に忠節や献身の女性として刻み込まれたといえる。次項では、このような洗礼を受けた彼らによつて、オトタチバナヒメ像が美化される様相について触れる。



図13 盛光社版『やまとたける』表紙（部分）

前項でもとりあげた吉井巖が、第三期国定国語教科書で学んだことはすでに述べた。その吉井は、オトタチバナヒメについて「悲しみの美しさを感じる」という。そして次のように述べている。

その行動には、別離の悲しみと限りない愛と厳しいあきらめの人間的な感情が一度にふきあがって、媛を真直ぐに死へとむかわせていたのである。(中略)弟橘媛は、乗り越えがたい皇命の壁と、争いがたい海神の怒りが支配する世界で生きていた、まだ薄暗い世の時代の女であった。しかし、愛に生きるために死を選んだ、そのような死をはっきりと自覚したおそらく最初の女性像として、『古事記』のなかに輝く位置を占めているように思う。<sup>48</sup>

このようにオトタチバナヒメを賞賛するような論調は、同じ第三期で学んだ守屋俊彦も同様である。前述の吉井論を引用し、この物語には「献身の美しさ」「無比の美しさ」があるとする。「哀切の情に満ちているのであるが、こうした愛の共鳴に支えられているために、甘美なものにもなっている」物語ゆえに「とりわけこの部分にはきらりと光るものがあって、読む者をして感動せしめるものがある」とする。<sup>49</sup>戦前とは異なり「見習うべき姿」「女性の鑑」とは謳われないが、代わりに強調されるのが「愛」である。第四期国定国語教科書世代の国文学者・中西進もまた、オトタチバナヒメの歌に触れ「彼女はこの歌を歌うことによって、愛を回想し、その愛の回想の中で死んでいった」と論じている。<sup>50</sup>オトタチバナヒメの行動と歌はヤマトタケルへの愛情ゆえに発するものという点が強調され、「東征物語のもっとも美しい場面の一つを構成する」とされる。<sup>51</sup>これらのような感傷的ともいえる論説は、美しいオトタチバナヒメというイメージを保証し、具体的な図像を作成する際の有効な参照資料となると考えられる。

それでは、現在のオトタチバナヒメの図像は、どのような姿で描かれているだろうか。ヤマトタケルについての児童書及び絵本に描かれているオトタチバナヒメの絵の多くは、指を組み合わせた合掌したりする「祈りの姿」で海に飛び込む入水の図である。たとえば一九七二（昭和四十七）年発行の阿久根治子文・朝倉摂画『やまとた

ける』(盛光社)では、表紙が合掌するオトタチバナヒメで、主人公のヤマトタケルが描かれていない(図13)。本文でも「この いのちは あなたのもの。わたしの みを なげて うみの かみの おいかりを しずめましよう」と言って「しろい はなびらのように とぶ」オトタチバナヒメが、合掌して海に飛び込む姿で描かれる。また、一九七七(昭和五十二)

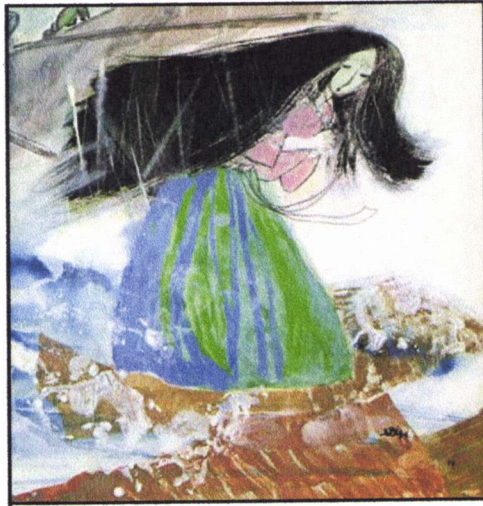


図14 小学館版『やまとたける』(部分)

年に発行された、おのちゆうこう文・鈴木たくま画『やまとたける』(小学館)では、指を組み合わせた形で海に入る姿が描かれている(図14)。これら二作品の絵本画家は、いずれも戦前の国定国語教科書で「弟橘媛」を学習していることに留意したい。ほかの児童書、絵本においても、国定教科書で学んだ世代の画家が描く絵には「祈りの姿」や悲しむ表情のものが多く、彼らはオトタチバナヒメに対して、忠節と献身の美というイメージを印象づけられており、戦後には、主に国文学者によって論じられる悲劇の英雄ヤマトタケルとの愛と別れ、犠牲死という美しい物語の主人公としてオトタチバナヒメ像を結んでいる。そして、彼らの描く美しいヒメの姿は、現在の子どもたちが図書館などで容易に見ることができるのである。

◇

以上、オトタチバナヒメの入水の図について、その誕生から現在に至るまでを概説してきた。菊池容斎が『前賢故実』で描いた「弟橘媛」が、長く継承され変容してゆく様相を雑誌や児童書の挿絵で辿り、原典である『古事記』『日本書紀』に無い「祈りの姿」の付加が明治末期に生じたことを述べた。さらに、戦前の小学校教科書におけるオトタチバナヒメ像の受容について考察した。一九二二(大正十一)年、オトタチバナヒメは図像を伴って多くの児童たちの知るところとなった。その教育の目的は、主として女子としてのあり方を学ばせることにあった。戦前においては、オトタチバナヒメの物語と図像は、児童書、教科書ともに、女子教育のための良き材料として利用されていた。そして戦後、この教科書で学んだ人々が、新たなオトタチバナヒメ像を生み出していったのである。新たな、愛と犠牲の象徴ともいえる「祈りの姿」を、現在私たちは目にしている。それは絵画という媒体のみではない。オトタチバナヒメ伝承が残る各地に銅像やレリーフがあり、ヒメの

海に飛び込む姿が再現され「祈りの姿」で立っている。

今後の課題として、個々の図像についての詳細な分析と解釈という作業が要請される。「祈りの姿」のより詳細な解釈は、オトタチバナヒメの個々の表象を分析することで可能となり、そこでは各時代の女性に担わされたさまざまな役割も浮き彫りになるだろう。

1 『古事記』では「弟橘比売」、『日本書紀』では「弟橘媛」と表記される。以下、オトタチバナヒメとする。

2 吉井巖『ヤマトタケル』（学生社 一九七七年九月）、守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』（和泉書院 一九八八年六月）、上田正昭『上田正昭著作集 歴史と人物』第七卷（角川書店 一九九九年九月）

3 平野馨「弟橘媛の走水入水―舟玉信仰と袖もぎ信仰―」（『日本民俗学会報』一六 一九六一年二月）、今井福治郎「橘神社考―橘・橘比売―」（『房総文化』四 一九六一年十一月）

4 入江英弥「オトタチバナヒメ伝承の民俗学的考察」（『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』第二十二輯 一九九一年三月）

5 大場磐雄「海神投供考」（国学院大学編『古典の新研究』第二集 角川書店 一九五四年十月）、前川明久「ヤマトタケル東征伝説の一考察―弟橘媛入水説話の成立をめぐって―」（『日本歴史』三三七 一九七六年六月）、和田萃「チマタと橘―オトタチバナヒメ入水伝承を手掛りに―」（『檀原考古学研究論集』七 一九八四年十二月）など。

6 『日本書紀』該当箇所では「妾」とされるが、同書五十一年八月条に「妃」とある。

7 『江戸名所圖會』は祭神を弟橘媛命とする。かつては箱崎半島の吾妻山の頂上にあつたが、明治期に海軍用地として接收されたため横須賀市長浦町に移設、現在に至る。

8 菊池容齋は江戸出身の画家。一七八八（天明八）〜一八七八（明治十一）年。『前賢故実』は、神武天皇の時代から後龜山朝に至る先聖賢臣五百七十一名の絵と略伝を収録した書籍。版本、全十巻。一八三六（天保七）年完成、一八六八（明治元）年刊行。

9 ほかに日本画家の前田青邨も「容齋の「前賢故実」などから学んだ」と述べている。前田青邨「梶田先生の事ども」

(『美之国』第一一巻第二号 一九三五年三月)

10 山梨俊夫「描かれた歴史―明治のなかの「歴史画」の位置」(兵庫県立近代美術館・神奈川県立近代美術館編『描かれた歴史 近代日本美術にみる伝説と神話』展図録 一九九三年九月)

11 『時代別国語大辞典 上代編』によれば、男性用の袴は股が分かれているが「女性は股が開かず、脇の開いた、ひだのある裳をはくのが常であった」とする。女性が袴を着用するのは平安期に入ってからである。

12 襪は『古事記』応神天皇段にみえる。「即ち其の母、ふぢ葛を取りて、一宿の間に、衣・禪と襪・沓とを織り縫ひき」

13 山梨俊夫『描かれた歴史 日本近代と「歴史画」の磁場』(ブリュッケ 二〇〇五年七月)

14 信濃出身の日本画家。一八六四(元治元)年〜一九〇五(明治三十八)年。小林永濯の門下。菊池容斎との師弟関係は不明だが、容斎の門下・松本楓湖とは交流があり、一八九七(明治三十)年には共に日本画会を創立している。画業の傍ら雑誌の挿絵も手がけ、美人画で評判を得た。

15 なお、富岡永洗はこの絵を発表してから五年後の一八九六(明治二十九)年に、再びオトタチバナヒメを描いている。『少年世界』第二巻二十四号の、折り込み口絵「橘媛投身之図」である。ヒメの体や顔の角度、衣服のはためき方などが酷似している。手は完全に見えないが、衣服のしわから両腕を体の前に抱えていると見られる。新たに加えられたものとして、ヒメのちようど真上の位置の背景に、船の舳先があり、縄もある。舟から下りるといふ場面をより具体的に示したものだらう。

16 『家庭教育歴史読本』第二版を所蔵する大阪国際児童文学館では、画家名を「不明。松本楓湖か。」としている。

17 「勅語が真つ先に登場する児童図書」とされる。勝尾金弥「天皇制教育下の児童文学・児童図書」(『日本児童文学』第三十五巻八号 一九八九年八月)による。

18 大江小波編・小林永興画『草薙剣』(日本お伽噺十七、博文館 一八九八年六月)

19 折山子『金港堂豪傑ばなし 日本武尊』(金港堂 一九〇二年八月)

20 青葉山人編・笠井鳳斎画『日本武尊』(日本お伽噺四十四、島鮮堂 一九一〇年三月)

21 木村小舟著・巖谷小波画『日本武尊』(歴史お伽六、彰文館 一九一一年一月)

22 指を組み合わせる形は一般にキリスト教における祈りのポーズと考えられている。しかし、実際には祈りの際に手の指を

組む、合掌するなど形式は自由であり、定められてはいない。

23 渡辺北海「少年歴史読本 日本武尊」の挿絵。『少年世界』第二十五卷第八号（一九一九年八月）。「妃殿下橘姫は、海神の崇りと思召して、あへなくも身を海底に沈められ、生命に代へて折られたので、漸く浪も静まり、尊は恙く上総にお着きになった。」とあり、海底で折ったとされている。

24 児童教育会編『日本武尊』（模範児童文庫、社会文庫 一九二三年四月）。「教科書のお話を最も詳しく、誰にも解るやうに、面白く書いた」叢書。オトタチバナヒメの入水場面では「なんといふけなげな、大丈夫も及ばぬ立派なお心懸でせう」と記している。

25 補助教育研究会編『草薙の剣』（少年歴史物語五、一九二四年五月）

26 下村三四吉著・山本舜山画『日本武尊』（少年大日本史三、建設社 一九三五年一月）。「大日本帝国」の「世界にかゞやく我が皇室」の歴史を示すため、ヤマトタケルの話に入る前にアマテラスからの系図をたどる「建国後の五百年」という章を設けている。

27 大木雄二著・黒崎義介画『日本肇国物語』（金の星社 一九四〇年三月）。発行年は「紀元二千六百年」にあたる。神武天皇即位から聖徳太子までの事蹟をまとめた児童書。はしがきで「皇室の御恩に感謝」し、「お国のためにつくし」「日本をまもり、日本のために働きませう」と呼びかけている。

28 池田宣政著・梁川剛一画『日本国史美談』第一卷（偕成社 一九四〇年二月）。第二卷には、諸家から寄せられた第一卷の批評が掲載されている。そこには、小・中学校、師範学校の校長、作家、童話作家、文学博士、新聞記者、子爵、軍人などさまざまな分野から、一様に感動と賞賛の言葉が寄せられている。

29 水谷まさる著・大石哲路画『童話日本国史』（金の星社 一九四三年十一月）。あとがきによれば「世界に比類なき日本の国体の精華を知らしめ、栄光にかがやく日本精神を明らかに感得させたい」という目的で書かれた。

30 現在は伊勢の神宮徴古館に所蔵されている。

31 「国史絵画」制作の経緯については所功編、小堀桂一郎著『名画にみる國史の歩み』（近代出版社 二〇〇〇年四月）を参照。この書籍の表紙は「弟橘媛」である。

32 『東京府養正館國史壁畫集』（一九四二年十二月）に掲載された、当時の東京府知事・松村光磨の巻頭文による。この画

集は養正館の「国史絵画」を纏めたものとして最も早く、「(壁画の)複製を刊行し、ひろく世に頒つことゝなつた」と記されるが、一枚ごとに台紙に貼られた豪華本であり、発行部数はごく少数であった。

33 前掲吉井巖『ヤマトタケル』。吉井は一九二二(大正十一)年生まれ。

34 一八七二(明治五)年に学制が發布されたが、初等教育教科書は自由発行、自由採択式であった。一八七七(明治十)年以降に統制が強化され制度化が進められ、一八八三(明治十六)年からは認可制度となった。一八八六(明治十九)年の小学校令制定により、教科書は検定制度となり、一九〇三(明治三十六)年に小学校令が改正されるまで、文部省の検定を経た検定教科書が使用された。

35 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第一八巻 歴史(一)』(講談社 一九六三年八月)、同『第一九巻 歴史(二)』(一九六三年三月)

36 師範学校編輯『日本畧史』上巻(文部省 一八七五年四月)、伊地知貞馨編輯『小学日本史畧』巻上(鴻文堂 一八七九年三月)、笠間益三編纂『新編日本畧史』(金華堂・文光堂 一八八一年八月)、大槻文彦『校正日本小史』巻之上(一八八二年十一月)、辻敬之・福地復一『小学校用歴史』第一(普及舎 一八八七年五月)、山縣悌三郎『小学校用日本歴史』巻之上(学海指針社 一八八八年四月)、金港堂編輯『小学校用日本歴史』前編第一(金港堂 一八九三年十月)

37 文部省編輯『高等小学読本 巻之一』第十三課「日本武尊ノ東夷征伐」(一八八八年五月)

38 「黒表紙本」「白表紙本」は表紙の色からの俗称だが、「白表紙」は実際にはねずみ色。両書には、田園用・都市用といった区別もあつたとされるが、どちらが田園用でどちらが都市用であつたかは不明。両書の編纂の大綱は共通していたにもかかわらず、担当者の違いや編纂方法の差異が両書を隔てた。「黒表紙本」は修正であり教材にあまり新味がなかつたためか、しだいに使用されなくなり、それゆえ「国語教科書の歴史においては特にこれを重視することができない」(「所収教科書解題」(海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第七巻 国語(四)』講談社 一九六三年十一月)とされている。

39 一九〇九(明治四十二)年発行の第二期国定国語教科書『尋常小学読本』巻五第十三課「小子部のすぎる」の挿絵は、『前賢故実』「少子部連蝶蠶」と酷似しており模写したことが明らかである。これも、国定国語教科書が『前賢故実』を参照していた一例である。

40 文部省『学制百年史』(ぎょうせい 一九七二年十月)資料編四「教育統計」I 明治六年以降教育累年統計、第1表「学



齡児童数および就学児童数」による。

41 井上起著 古田東朔編『国定教科書編集二十五年』(武蔵野書院 一九八四年五月)

42 『小学国語読本総合研究』巻七(国語教育学会・代表者藤村作編 岩波書店 昭和十三年三月)

43 岡崎義恵「『弟橘媛』について」(『文学』(岩波書店) 第七卷第二号 一九三九年三月)。この教材は小学校四年生前半に学ぶことから、「この話は単純なものではあるが、この中にこもる愛と徳との美は、考へやうによつては余り幼稚な児童には十分了解されず、ただお話の表面を意識がすべつて行く結果となる恐れがあるので、これは今一度女学校などで深い解釈を伴ふ教材として取上げられるならばよいが」とも記している。

44 前掲『学制百年史』資料による。

45 石岡信「新読本各課に対する児童の印象(第一報告)」(『教育』第七卷第三号 一九三九年三月)

46 高等女学校におけるオトタチバナヒメ教材の調査と考察については、棚田真由美「昭和戦前期における『古事記』の教材化についての研究―高等女学校の場合」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』五十 二〇〇二年二月)に詳しい。棚田によれば、一九四〇(昭和十五年)年までの検定教科書期では五年制で七種、四年制で四種の教科書に採録されている。また一九四一(昭和十六)―一九四三(昭和十八)年の五種選定教科書期では、五年制四年制それぞれ一種の教科書に採録されている。

47 前掲吉井巖『ヤマトタケル』による。

48 前掲吉井巖『ヤマトタケル』による。

49 前掲守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』による。守屋は一九一四(大正三)年生まれ。

50 中西進『古事記を読む3 大和の大王たち』(角川書店 一九八六年一月)。中西は一九二九(昭和四)年生まれ。

51 西郷信綱『古事記研究』(未来社 一九七三年七月)。西郷は一九一六(大正五)年生まれ。第三期国定教科書で学んでいる。

52 朝倉撰は一九二二(大正十一)年生まれ、鈴木たくまは一九一八(大正七)年生まれ、いずれも第三期国定教科書で学んでいる。

53 神奈川県横須賀市観音崎の走水神社にオトタチバナヒメのレリーフがある。また、千葉県富津市岩瀬海岸や、千葉県木更

津市「きみさらずタワー」などに石像や銅像がある。

## 結語

本研究は、近代における『古事記』の享受の様態を発掘することを主眼としたが、執筆の動機には、時代や社会を超えて、人々がなぜ『古事記』に飽くことのない魅力を抱き続けてきたのかを問いたいという思いがある。『古事記』は様々な文学的営為に移植されることによって歴史書という範疇を超え、何が伝えられ、何が果たされてきたのか。本論が、今後その問いを解く一助となることを願う。

ここでは、本研究のまとめとして、各章における考察の結果を概括し、その上でこれらの成果を踏まえ「近代における『古事記』の享受」をまとめたい。

第一章では、近代における児童向け『古事記』を対象に、戦時下における受容と変容、及び、児童向け『古事記』の代表的作品と考えられる鈴木三重吉『古事記物語』について考察した。

児童向けの『古事記』には四十数点の存在が確認された。この内容を調査した結果、児童向け『古事記』には、『日本書紀』などからの引用が施されたものがあり、その引用箇所題材はアマテラスによる「天壤無窮の神勅」と神武天皇の「金鷄」の説話が多いと確認された。『古事記』には本来無い「天壤無窮の神勅」と「金鷄」が『古事記』に加えられることによつて、万世一系の概念、天皇への崇拜、愛国精神の涵養がうながされたのである。そして、このような引用の追加によつて忠君愛国の精神の高揚、皇国史観が徹底されるという変化が見られるのは、戦時色の高まる一九二九、三〇（昭和四、五）年頃であった。また、いくつかの児童向け『古事記』の挿絵や序文からも、この変化の時期を裏付ける様相が見受けられた。

一方、鈴木三重吉『古事記物語』に関しては、三重吉が『古事記物語』を執筆する際に参照した『古事記』を特定した。固有名詞の表記とルビの誤植から、『古事記物語』の参照本が渋川玄耳『三體古事記』と認められた。『三體古事記』は明治末の発行だが、数度にわたり再版が繰り返された書物である。同書は新聞各紙に宣伝広告が掲載され、三重吉が入手しやすい状況にあったといえる。さらに三重吉と玄耳の接点や『古事記物語』執筆直前の三重吉の状況について触れ、『三體古事記』が『古事記物語』参照本であることを裏付けた。『古事記物語』以後、『古事記』を現代語訳した書物が増加し、『古事記物語』を模倣した児童書が現れることから、『古事記物語』とその参照本である『三體古事記』は、『古事記』の享受

において重要な意味をもつといえた。

第二章では、第一期から第五期（一九〇四〜一九四五年使用）の小学校国定国語教科書に掲載された『古事記』関連の教材について考察した。『古事記』の享受研究という観点から、『古事記』関連教材が『古事記』『日本書紀』等のいずれに依拠しているのかを検討し、各『古事記』関連教材と『古事記』原典との比較を行い詳細に検証した。対象とする教材は、『古事記』関連教材のなかでも話題として初登場のものとしたが、それは『古事記』の各説話が教科書にはじめて登場したときなどのような変容が生じていたのかという点に着目したためである。さらに、教材の特徴的な挿絵についても言及した。

『古事記』関連教材の典拠について先行研究者は、基本的に『古事記』にほかの要素が入る、あるいは『古事記』を脚色するという立場か、正史である『日本書紀』に依拠したと見る立場をとる。しかし、『古事記』関連教材を改めて検証した結果、『日本書紀』に依拠しながらも『古事記』の記述を取り込むという教材も存在することが確認された。ほかに「風土記」を典拠とした教材も見受けられた。

国語教材として生まれ変わった『古事記』の各説話は、教科書であるがゆえに、児童書のように興味を引くような大胆な脚色や、原典にない文章の大幅追加などは認められなかった。しかしながら、『古事記』原典と『古事記』関連教材を詳細に比較することで、教材の編纂意図や背後にある国家の意思、時代の様相を再確認することができた。たとえば教材で繰り返されるアマテラスの名、神武天皇、三種の神器といった話題は、皇祖・皇室への尊崇意識の強調に他ならないものであった。ヤマトタケルは天皇の命を忠実に果たす人物として描かれ、ノミノスクネや田道間守といった人物は、謙虚や忠節など、皇国民としてあるべき姿の持ち主として描き出されていた。国家が求めるような児童を育成するため、『古事記』『日本書紀』『風土記』から話が選択され、教材用に書き換えられたのだ。

第三章では、近代において『古事記』や『日本書紀』を素材として書かれた小説及び戯曲について取りあげた。『現代日本芸芸総覧』をはじめ各種目録類を調査した結果、『古事記』『日本書紀』を題材とした小説や戯曲は大正期に集中して現れたことが明らかとなった。そして、これらの小説や戯曲を執筆したどの作家も『古事記』『日本書紀』を自由に脚色し作品化していたことがわかった。また、作品によっては作家自身が執筆の経緯を記録しており、享受の様相を窺い知ることができた。

代表的な作家として芥川龍之介、武者小路実篤、山本有三の作品について詳細な考察を試み、そのほかの作品については

書誌情報や梗概を紹介することで情報の提示に努めた。確認したすべての小説作品と戯曲作品の共通点として挙げる事ができるのは、『古事記』から神代の部分を素材にして「神」を登場人物に設定していても、その内容は「人間」としての葛藤や成長を描くことにあつたという点である。神々として活躍する姿を描くことに重点が置かれることはない。スサノヲやオホクニヌシ、ヤマトタケルといった『古事記』の英雄たちは、小説や戯曲においては人間として人生や恋に悩む姿が描き出されたのである。これらの小説や戯曲の創造と同時期にあたる大正期の『古事記』研究者たちが、依然として本居宣長の『古事記伝』を踏襲した訓詁注釈を主流とした研究を行っていたとき、作家たちは『古事記』を自由に「解釈」し始め、新たに創造したのである。作家たちが『古事記』に誘発された部分と、作家たち独自の「思想」の部分とが相俟って『古事記』をもとにした様々な小説や戯曲が生まれたといえよう。しかしながら作家たちによる『古事記』の受容と創造には、大正期から昭和前期にかけての時代思潮及び情勢が影響していたといえる。

第四章では、近代において『古事記』や『日本書紀』を題材にして描かれた絵画について考察した。画家達が、原典である『古事記』『日本書紀』の記述をどの程度忠実に描いていたのか、原典をどこまで読んでいたのか、という観点から各々の絵画を「読み解く」作業を行った。考察の対象とした絵画は、日本画、書籍や雑誌の表紙・口絵・挿絵である。

まず日本画は、明治・大正・昭和戦前期を範囲として、美術関係の雑誌に掲載された『古事記』関連の絵画を対象に調査を行った。その結果、最も多い画題は「神武東征」関連であり、次いで「天の岩戸」に関連した場面、ヤマトタケルと続いた。これらの絵画のうち、時代の様相が窺えるものを中心にいくつか取りあげ、絵画制作当時の学説の反映、当時の日中関係や欧米列強に対する意識などを読み解いた。

次に、一般向け雑誌の表紙や口絵、挿絵用として描かれた絵画について考察した。『現代日本文芸総覧』をはじめとした目録類の調査の結果、口絵や挿絵は婦人雑誌に掲載された史談・史伝に多いという特徴が見られ、それら史談類のなかでも神功皇后の「三韓征伐」の話が多く取りあげられたことがわかった。そのため、婦人雑誌に掲載された神功皇后の画像を中心に分析を行った。良妻賢母を掲げる『女鑑』に対し女性の啓蒙教育を掲げる『女学雑誌』という、路線の異なる婦人雑誌が同じように神功皇后を取りあげるのは、神功皇后自身が「母」でありながら「戦士」であるという二面性をもつことに由来すると考えられた。また神功皇后の「三韓征伐」の話題と、明治期の対外進出という同時代情勢との呼応が、神功皇后伝の雑誌への掲載の多さとして表れていることを指摘した。

最後に、ヤマトタケルの後、オトタチバナヒメの「入水の図」に焦点を当て、その誕生から現在に至る受容と変容の様相を概説した。菊池容斎『前賢故実』（一八六八年）に掲載された「弟橘媛」の図像が典型的な「入水の図」の嚆矢といえ、この構図が昭和戦前期まで児童書に書き継がれ、小学校国定国語教科書にも採用されたことを確認した。そして『古事記』『日本書紀』原典には記述のないヒメの入水時の描写が描き込まれ、次第に「祈りの図」に変容する様相を、具体的に図像を例示しながら辿った。また、戦前においてはヒメの入水が夫への忠節を表すとして婦女の道と説かれ、戦後においては愛と犠牲の具現として表象されている事実について概説した。

『古事記』の享受については先行論で次のように述べられている。『古事記』が他書に引用されるとき、それぞれの書物における『古事記』の引用態度・方法そのものが、まさに『古事記』の受容の問題にほかならない」と。この指摘は近世以前の『古事記』逸文を対象とする研究の場で行われたものだが、近代における様々な媒体の『古事記』にも有効な指摘と考えられる。なぜなら近代には訓読文や口語訳ではない、作者たちの解釈や意図が込められた様々な形態の新しい『古事記』が生み出されており、それぞれの書籍や絵画における原典からの引用態度・方法や脚色、そして原典からの創造そのものが、当時の『古事記』の享受のあり方を示しているためである。たとえば児童向け『古事記』における他文献からの引用態度や、国定国語教科書における書き換え行為等には、天皇に忠節を尽くす皇国民の育成という意図が見受けられた。このような意図に基づき『古事記』を利用することが、当時の『古事記』の享受の仕方の一つと考えられる。一方で、スサノヲやオホクニヌシが恋に悩む青年として、人生に悩む「人間」として小説や戯曲に描き出された。このような様々な享受のあり方を可能にするのが、『古事記』といえる。

本研究は、調査と文献の検討作業を中心に考察をすすめ、その結果、近代における様々な形態の『古事記』の存在を発掘し、明るみにすることが可能となった。さらに、様々な媒体における流布状況から様々な読者、読書の様相を窺うことができた。児童向け『古事記』では、『古事記』に基づいた童話、『古事記』とタイトルに冠しながら内容は『日本書紀』による童話、児童劇の脚本、絵本、紙芝居等をあげることができる（巻末の「資料」参照）。国定国語教科書に採録された『古事記』関連教材については、『古事記』と『日本書紀』の記述を取り混ぜた教材が多く、愛国心涵養のために独自の本文が盛り込まれた教材が見受けられた。小説、戯曲の場合は『古事記』あるいは『日本書紀』を素材としながら登場人物やストーリーが自由に書き換えられ、当時の人間の葛藤の物語が紡ぎ出された。また『古事記』の図像としては、日本画、西洋画、

雑誌等の挿絵や絵本の絵があり、それぞれに『古事記』の解釈を定めるものとなっている。

『古事記』の享受については、本研究で述べたもののほかに、展覧会の場で紹介されることもあった。たとえば明治末及び昭和十年代に開催された「古事記撰上千二百年記念祭」「古事記・日本書紀展覧会」「古事記まつり」「古事記展覧会」は、『古事記』の口語訳や研究書を読むだけではなく、展覧会場に足を運び『古事記』の写本を見、研究者による講演を聴くなどして『古事記』を「体感する」というイベントであった。このうち東京帝国大学で開催された一九四三（昭和十八）年「古事記展覧会」では参観者が「会場入口に長蛇の列をなす盛況」であったと当時の新聞記事は伝えている。このようなイベントは、当時の人々にとって『古事記』を享受する機会として大きな役割を果たしていたことだろう。

これらの多様な『古事記』の存在と実態は、近代における『古事記』がどのような目的のもとで「再創造」され、またどのような場によって享受されてきたのかを示している。児童書や小説、戯曲、絵画類は、従来の上代文学研究の分野において研究対象の視野から漏れ、未整理・未考察の状態にあった。国定国語教科書に関しても詳細な分析はなされてこなかった。しかし本研究が、享受という視点をとることによってその問題を解決する一助となり、さらには『古事記』の新たな相貌を照らし出してゆくことを願う。

いま、『古事記』は様々な媒体において、新しい『古事記』を生み出す源泉として、ここにある。約千三百年前という遠い過去に記された神々の営為に、現在の自分を顧みる何かを求め、未来を生きることへと繋げてゆく。『古事記』に現れた登場人物の「生き様」に、現在に生きる様々な人々が眼差しを向けるとき、『古事記』の世界は広がり、文学に留まらない様々な媒体へと表現される。ここにも『古事記』のもつ潜在的な力は証明されている。

1 徳光久也『古事記研究史』（笠間書院 一九七七年一月）

2 青木周平編『古事記受容史』（笠間書院 二〇〇三年五月）

3 「古事記撰上千二百年記念祭」は一九一一（明治四十四）年三月十九日に東京靖国神社で開催された。「古事記・日本書紀展覧会」は一九三九（昭和十四）年十月十八日～三十日に天理図書館にて開催。「古事記まつり」は一九四二（昭和十

七) 年十一月二十三日(神田共立講堂)で開催。「古事記展覧会」は一九四三(昭和十八)年一月三十・三十一日に東京帝国大学で開催された。このうち「古事記・日本書紀展覧会」以外の展覧会の開催状況等については及川智早「近代における『古事記』『日本書紀』に関する記念会・展覧会について―明治期の古事記記念祭と昭和十八年の古事記展覧会を中心に―」(古事記研究大系二『古事記の研究史』高科書店 一九九九年六月)に詳しい。天理図書館で開催された「古事記・日本書紀展覧会」については、本研究の調査作業のなかで『古事記・日本書紀展覧会目録 開館九周年記念』(天理図書館 一九三九年十月)という目録の存在が確認されたため、展覧会開催情報としてここに加える。

4 「帝京大学新聞」(一九四三年二月一日)。ほかに「日本学芸新聞」(一九四三年二月一日)では「『古事記展』空前の賑ひ 篤學の入場者一萬を越ゆ」という見出しの記事を掲載している。



第一章 児童向け『古事記』の諸相

第一節 『古事記』の享受研究における問題点

原題「戦時下における児童向け『古事記』の受容と変容―引用の観点から―」

(『児童文学研究』第四十号 二〇〇七年十二月)の一部転用と書き下ろし

第二節 戦前及び戦時下における受容と変容

原題「戦時下における児童向け『古事記』の受容と変容―引用の観点から―」

(『児童文学研究』第四十号 二〇〇七年十二月)

第三節 鈴木三重吉『古事記物語』と渋川玄耳『三體古事記』

原題「鈴木三重吉が見た『古事記』―享受史の観点から―」(『日本文学』第五十六卷第二号 二〇〇七年二月)

第二章 国定国語教科書における『古事記』

書き下ろし

第三章 『古事記』を題材にした小説と戯曲

書き下ろし

第四章 視覚化される『古事記』

第一節 神々の視覚描写―絵画解釈の試み

原題「視覚化される『古事記』―近代における享受の観点から―」

(『甲南女子大学大学院論集 言語・文学研究編』第六号 二〇〇八年三月)の一部転用と書き下ろし

第二節 美術誌掲載の『古事記』関連絵画

原題「視覚化される『古事記』―近代における享受の観点から―」

(『甲南女子大学大学院論集 言語・文学研究編』第六号 二〇〇八年三月)

第三節 女性向け雑誌における挿画、口絵

書き下ろし

第四節 オトタチバナヒメの祈り―「入水の囃」の誕生と変容―

原題「オトタチバナヒメの祈り―「入水の囃」の誕生と変容―」

(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』第四十四号 二〇〇八年三月)

(資料)

児童向け『古事記』等作品目録 (近代編)

原題「児童向け『古事記』等作品目録 (近代編)」

(『神戸常盤短期大学紀要』第二十八号 二〇〇七年三月) を修正及び追加

## 主要参考文献一覧

【単行本】(著者名五十音順)

青木周平編『古事記受容史』(笠間書院 二〇〇三年)

芥川龍之介『芥川龍之介全集』(岩波書店 一九三四～一九三五年)

浅岡靖央『児童文化とは何であつたか』(つなん出版 二〇〇四年)

朝日新聞社電子電波メディア局データベース編集部『東京朝日新聞』戦前紙面データベース  
CD-ROM版(朝日新聞社 二〇〇二年)

石山洋ほか編『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』「人文科学篇」(皓星社 一九九五～一九九七年)

磯前順一『記紀神話のメタヒストリー』(吉川弘文館 一九九八年)

井上赴ほか著・国語教育学会編『小学国語読本総合研究』岩波講座国語教育(岩波書店 一九三七～一九三九年)

井上赴著・古田東朔編『国定教科書編集二十五年』(武蔵野書院 一九八四年)

入江曜子『日本が「神の国」だった時代―国民学校の教科書を読む―』(岩波新書 二〇〇一年)

岩崎爾郎・清水勲『明治大正 風刺漫画と世相風俗年表』(自由国民社 一九八二年)

植垣節也校注・訳『風土記』新編日本古典文学全集五(小学館 一九九七年)

上田正昭他『「古事記」「日本書紀」総覧』(新人物往来社 一九九〇年)

上田正昭『上田正昭著作集 歴史と人物』第七卷(角川書店 一九九九年)

有働裕『「源氏物語」と戦争 戦時下の教育と古典文学』(インパクト出版会 二〇〇二年)

大笹吉雄『日本現代演劇史』明治・大正篇、昭和戦中篇二(白水社 一九八五～一九九五年)

小田切進編『現代日本文芸総覧―文学・芸術・思想関係雑誌細目及び解題』上・中・下巻・補巻

(明治文献 一九六八～一九七三年)

- 『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 件名編』（紀伊国屋書店 一九八五年）
- 大山功『近代日本戯曲史』第一巻、第四巻（近代日本戯曲史刊行会 一九六八、一九七三年）
- 岡野他家夫監修『明治雑誌目次総覧』第一巻、第五巻（ゆまに書房 一九八五年）
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』三〇〇〇（講談社 一九六二年）
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』一九〇〇（講談社 一九六三年）
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』七〇〇（講談社 一九六三年）
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』二〇〇〇（講談社 一九六四年）
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』五〇〇（講談社 一九六四年）
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』六〇〇（講談社 一九六四年）
- 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』八〇〇（講談社 一九六四年）
- 上笙一郎『日本の童画家たち』平凡社ライブラリー五八三（平凡社 二〇〇六年）
- 河竹繁俊『日本演劇全史』（岩波書店 一九五九年）
- 菊池容斎『前賢故実』（一八六八年）
- 近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌目次総覧』第一巻、第一五巻（大空社 一九八五、一九八六年）
- 工藤隆『古事記の起源 新しい古代像をもとめて』中公新書一八七八（中公論新社 二〇〇六年）
- 倉野憲司編『校本古事記』（続群書類従完成会 一九六五年）
- 桑原三郎編『鈴木三重吉集』日本児童文学大系一〇（ほるぷ出版 一九七八年）
- 現代詩誌総覧編集委員会編『現代詩誌総覧』第一巻、第七巻（日外アソシエーツ 一九九六、一九九八年）
- 神野志隆光編『古事記日本書紀必携』別冊國文学四九（學燈社 一九九五年）
- 神野志隆光『古事記―天皇の世界の物語』（NHKブックス 一九九五年）
- 神野志隆光『古事記と日本書紀―「天皇神話」の歴史』（講談社現代新書 一九九九年）
- 教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』第I期、第IV期・全一〇一巻

（日本図書センター 一九八六、一九九四年）

- 古事記学会編『古事記研究文献目録・雑誌論文篇』（国書刊行会 一九八六年八月）
- 古事記学会編『古事記研究文献目録・単行書篇』（国書刊行会 一九九二年五月）
- 古事記学会編『古事記の研究史』古事記研究大系二（高科書店 一九九九年）
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『日本書紀』全三卷  
（新編日本古典文学全集二〇四 小学館 一九九四～一九九八年）
- 小林忠編『美術関係雑誌目次総覧 明治・大正・昭和戦前篇』（国書刊行会 二〇〇〇年）
- 浅岡靖央『児童文化とは何であったか』（つなん出版 二〇〇四年）
- 西郷信綱『古事記研究』（未来社 一九七三年）
- 志村有弘『近代作家と古典』（笠間書院 一九七七年）
- 書誌研究懇話会編『書物関係雑誌細目集覧』第一卷・第二卷（日本古書通信社 一九七四年、一九七六年）
- 鈴木三重吉『鈴木三重吉全集』（岩波書店 一九八二年）
- 祖父江昭二解説『近代戯曲集』（角川書店 一九七四年）
- 高木市之助述 深萱和男録『尋常小学 国語読本』（中公新書 一九七六年）
- 土屋文明・高橋健二編『山本有三全集 定本版』（新潮社 一九七六～一九七七年）
- 勅使河原彰『歴史教科書は古代をどう描いてきたか』（新日本出版社 二〇〇五年）
- 徳光久也『古事記研究史』（笠間書院 一九七七年）
- 所功編、小堀桂一郎著『名画にみる國史の歩み』（近代出版社 二〇〇〇年）
- 鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』（ミネルヴァ書房 二〇〇一年）
- 直木孝次郎『日本神話と古代国家』（講談社学術文庫 一九九〇年）
- 仲新・稻垣忠彦・佐藤秀夫『近代日本教科書教授法資料集第十一卷 編纂趣意書一』（東京書籍 一九八二年）
- 仲新・稻垣忠彦・佐藤秀夫『近代日本教科書教授法資料集第六卷 教師用書』（東京書籍 一九八三年）
- 中島悦治『古事記評釈』（山海堂出版 一九三〇年）
- 中西進『古事記を読む 3 大和の大王たち』（角川書店 一九八六年）

- 滑川道夫『少國民文學試論』（帝國教育出版部 一九四二年）
- 西宮一民校注『古語拾遺』（岩波文庫 一九八五年）
- 日本近代演劇史研究会編『20世紀の戯曲―日本近代戯曲の世界』（社会評論社 一九九八年）
- 日本児童文学会編『赤い鳥研究』（小峰書店 一九六五年）
- 日本年鑑協会編『演劇年鑑』一九二五年版（二松堂書店 一九二五年）
- 野辺地清江『女性解放思想の源流―巖本善治と「女学雑誌」』（校倉書房 一九八四年）
- 野溝七生子『野溝七生子作品集』（立風書房 一九八三年）
- 久松潜一編『古事記大成』一 研究史篇（平凡社 一九五六年）
- 福田久道編『古事記伝の研究』（聖文閣 一九四一年）
- 普通教育研究会編『毎時配当 尋常小学国語教授細案』（松村三松堂 一九一〇年）
- 松本武夫・福田清人『武者小路実篤 人と作品』（清水書院 一九六九年）
- 美濃部伴郎『立国根本之精神』（寶山堂 一九一三年）
- 三浦佑之『口語訳 古事記』（文藝春秋 二〇〇二年）
- 三浦佑之『古事記講義』（文藝春秋 二〇〇三年）
- 三好行雄『芥川龍之介論』（筑摩書房 一九七六年）
- 三好行雄編『芥川龍之介必携』別冊国文学（学燈社 一九七九年）
- 武者小路実篤『武者小路実篤全集』（新潮社 一九五四―一九五七年）
- 武者小路実篤『武者小路実篤全集』（小学館 一九八七―一九九一年）
- 守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』（和泉書院 一九八八年）
- 文部省編『学制百年史』（ぎょうせい 一九七二年）
- 文部省編『國定教科書意見報告彙纂』全五輯（日本図書センター 一九八一年）
- 矢川澄子『野溝七生子というひと』（晶文社 一九九〇年）
- 安田満『玄耳と猫と漱石と』（邑書林 一九九三年）

山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』新編日本古典文学全集一（小学館 一九九七年）

山田永『「作品」として読む古事記講義』（藤原書店 二〇〇五年）

山田孝雄校閲『古事記諸本解題』（國幣中社志波彦神社・鹽竈神社 一九四〇年）

山中恒『子どもの本のねがい』（NHK出版協会 一九七四年）

山梨俊夫『描かれた歴史 日本近代と「歴史画」の磁場』（ブリュッケ 二〇〇五年）

横山春一編『改造目次総覧 総目次』（新約書房 一九七四年）

吉井巖『ヤマトタケル』（学生社 一九七七年）

吉田精一『芥川龍之介』（三省堂 一九四二年）

吉田精一・中村真一郎・芥川比呂志編『芥川龍之介全集』（岩波書店 一九七七～一九七八年）

与那覇恵子・平野晶子監修『戦前期四大婦人雑誌目次集成』第一期～第四期

（ゆまに書房 二〇〇二年三月～二〇〇六年三月）

読売新聞社メディア企画局データベース部編『読売新聞』明治・大正・昭和戦前I・II CD-ROM版

（読売新聞社メディア企画局データベース部 一九九九～二〇〇二年）

若桑みどり『絵画を読む—イコノロジー入門—』（NHKブックス 一九九三年）

若桑みどり『皇后の肖像—昭憲皇太后の表象と女性の国民化』（筑摩書房 二〇〇一年）

【雑誌論文】（著者名五十音順）

石岡信「新読本各課に対する児童の印象（第一報告）」（『教育』第七卷第三号 一九三九年三月）

今井福治郎「橘神社考—橘・橘比売—」（『房総文化』四 一九六一年十一月）

入江英弥「オトタチバナヒメ伝承の民俗学的考察」

（『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第二十二輯 一九九一年三月）

及川智早「『古事記』底本の変換—本居宣長『訂正古訓古事記』から真福寺古事記へ—」

（『国文学研究』第一三七集 二〇〇二年六月）

- 大場磐雄「海神投供考」(国学院大学編『古典の新研究』第二集 角川書店 一九五四年十月)
- 大村治代「中里介山『夢殿』試論—(宗教小説)の試みに関する考察—」(『国文学研究ノート』三八 二〇〇四年一月)
- 岡崎義惠「『弟橘媛』について」(『文学』(岩波書店)第七卷第二号 一九三九年三月)
- 恩田逸夫「『古事記物語』の成立」(日本児童文学会編『赤い鳥研究』小峰書店 一九六五年四月)
- 香曾我部秀幸「明治大正期の小学校教科書における挿絵の考察—歴史・修身・国語教科書に描かれた英雄像(その一)—」  
(『神戸親和女子大学教育専攻科紀要』一〇 二〇〇六年三月)
- 片岡懋「山本有三の『海彦山彦』について」(『駒沢短大國文』九 一九七九年三月)
- 勝尾金弥「天皇制教育下の児童文学・児童図書」(『日本児童文学』第三五卷八号 一九八九年八月)
- 蒲池正紀「渋川玄耳と紫溟吟社—漱石をめぐる初期の熊本文学者たち」(『熊本商大論集』第四〇号 一九七三年九月)
- 川副武胤「日本神話と近代思想—鷗外『かのやうに』と芥川龍之介『老いたる素戔嗚尊』—」  
(『山県大学紀要』一〇— 一九八二年一月)
- 河北倫明「歴史画あれこれ」(山種美術館『描かれた歴史—近代日本画にみる—』図録 一九七二年三月)
- 久保喬「日本神話再論—現代文学の視点で—」(『日本児童文学』三二—二号、一九八一年二月号)
- 小宮豊隆「三重吉のこと」(『漱石 寅彦 三重吉』岩波書店 一九四二年一月)
- 佐藤宗子「三重吉と『赤い鳥』、その表と裏」(『神奈川近代文学館』六三 一九九九年一月)
- 志村有弘編「古典に取材した近代文学目録」(『国文学 解釈と鑑賞』五七—五 一九九二年五月)
- 杉田征吾「国定国語教科書における『古事記』『日本書紀』の教材化—因幡の白兔・熊襲征伐を中心に—」  
(『横浜国大國語教育研究』一〇 一九九九年五月)
- 瀬田貞二「解説」(『日本お伽集— 神話・伝説・童話』東洋文庫二二〇(平凡社 一九七二年十一月)
- 田中榮一「長与善郎の思想と文学—その出発前夜を中心に—」  
(『日本文学研究資料刊行会編『大正の文学』有精堂 一九八一年十月)
- 棚田真由美「小学校国定教科書における古事記」(『教育学研究紀要』第四五卷第二部 二〇〇〇年三月)
- 棚田真由美「昭和戦前期小学校国定教科書における『古事記』の教材化に関する考察」



『国語科教育』第四九集 二〇〇一年三月)

棚田真由美 「昭和戦前期における『古事記』の教材化についての研究—高等女学校の場合」  
(『広島大学大学院教育学研究科紀要』五〇 二〇〇二年二月)

棚田真由美 「昭和戦前期における『古事記』教材化と時代社会」(『教育学研究紀要』第四八卷第二部 二〇〇三年三月)

続橋達雄 「鈴木三重吉『古事記物語』考」(『野洲国文学』第五十四号 一九九四年一〇月)

徳田進 「卷三「国引き」の原拠性と教材性」(『児童教育』三二—五 一九三八年五月)

長沢雅春 「日本浪漫派と影山正治—“大東塾グループ”の昭和維新文学運動—」  
(『国文学 解釈と鑑賞』六七—五 二〇〇二年五月)

長野一雄 「神代記の出雲—その象徴性」  
(『太田善磨先生追悼論文集刊行会編『古事記・日本書紀論叢 太田善磨先生追悼論文集』(有)群書 一九九九年七月)

長野嘗一 「『素戔嗚尊』について」(『国文学 解釈と鑑賞』三二—二 一九六七年二月)

野町てい子 「赤い鳥と私」(『赤い鳥代表作集 三』小峰書店 一九五八年十一月)

平野馨 「弟橘媛の走水入水—舟玉信仰と袖もぎ信仰—」(『日本民俗学会報』一六 一九六一年二月)

福田隆義 「『サクラ読本』一期生の弁」(『文学と教育』一九四号 二〇〇二年四月)

前川明久 「ヤマトタケル東征伝説の一考察—弟橘媛入水説話の成立をめぐって—」(『日本歴史』三三七 一九七六年六月)

槇本敦史 「芥川龍之介—「素戔嗚尊」論—」(『解釈』四六—七・八号(通巻五四四・五四五号) 二〇〇〇年八月)

松本安生 「日本の放送開始と後藤新平」(『都市問題』二〇〇七年八月)

宮崎芳彦 「鈴木三重吉の仕事—編集者、出版事業家の原像」(『白百合児童文化V』一九九四年七月)

三浦佑之 「巖谷小波と古事記」(『大阪大学日本学報』二三 二〇〇四年三月)

三好行雄 「『南京の基督』に潜むもの」(『国語と国文学』四八一— 一九七一年一月)

村田秀明 「芥川龍之介「素戔嗚尊」論—漱石文学からの離脱—」(『方位』第一三三号 一九九〇年七月)

山梨俊夫 「描かれた歴史—明治のなかの「歴史画」の位置」(兵庫県立近代美術館・神奈川県立近代美術館編  
『描かれた歴史 近代日本美術にみる伝説と神話』展図録 一九九三年九月)

山本健吉 「武者小路実篤の女性観―『お目出たき人』の自分―」

(『文芸』臨時増刊・武者小路実篤読本 河出書房 一九五六年五月)

楊琇媚 「武者小路実篤『お目出たき人』論―主人公における「自己確立」の様相―」

(『日本研究』一七 (広島大学) 二〇〇四年二月)

和田萃 「チマタと橘―オトタチバナヒメ入水伝承を手掛りに―」 (『樞原考古学研究論集』七 一九八四年十二月)

資料

〈資料〉

児童向け『古事記』等書籍目録 〈近代編〉

凡例

一、本資料は、一八六八（明治元）年から一九四五（昭和二十）年までに刊行された、児童向け『古事記』及び『日本書紀』『風土記』等の書籍を収録した目録である。

一、分類は、次の二種に大分類する。

□ 『古事記』を典拠とする書籍

□ 『古事記』以外の上代文献（『日本書紀』『風土記』等）を典拠とする書籍

※典拠が明らかでない書籍を含む

さらに□、□を次の一〜四に小分類する。

一、童話（物語）―各著者が「口語訳」とするものを含む。さらに以下の二種に分類する。

（一）『古事記』等から話を部分的に抜粋したお伽噺、童話、物語。

（二）通史の形式をとるお伽噺、童話、物語。但し、神代部分だけの書籍を含む。

二、戯曲―主に学校劇（児童劇）用に書かれた脚本。

三、絵本・漫画―絵に比重を置いた書籍。

四、紙芝居

一、書籍の配列は発表年月日順とし、同年月日発行の場合は著者名の五十音順とした。

一、書名は、原則として表紙記載に従い、叢書名等は後に（ ）で囲んで示した。場合によっては叢書名を先に挙げた。

一、児童向け書籍には挿絵が多く含まれるため、極力画家名も挙げた。

一、著者名は氏名のみを記し、編集者名は「編」、編著者名は「編著」、挿絵画家名・絵本画家名は「画」を付して記した。

一、再版・改版に関しては原則として省略し、初版情報のみを挙げた。初版が管見に入らなかった場合もある。

一、書籍に関するコメント、特記事項がある場合は備考欄に記した。

□ 『古事記』を典拠とする書籍  
 書名に「古事記」と付かない書籍については、『古事記』を典拠と判断した理由を備考欄に記した。その他コメントがある場合も備考欄に記した。

一、童話（物語）

(一) 『古事記』から部分的に採用したお伽噺、童話、物語

書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『兎と鰐』 (日本昔噺14)	大江小波 高橋松亭画	博文館	1895(明28)年 10月10日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『海のお宮』 (世界童話集第5編)	鈴木三重吉	春陽堂	1917(大6)年 10月23日	「『古事記』といふ本の中から選んだ」と記される。
『日本武尊』 (偉人の幼年時代7)	碧瑠璃園	霞亭会出版部	1922(大11)年 3月20日	物語の展開が『古事記』に即している。
「いなばの白うさぎ」 (『二年生の童話』学校家庭 年別 模範児童文庫)	模範児童文庫刊 行会編 黒崎美介画	大阪宝文館・ 文教書院	1928(昭3)年 12月15日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『日本伝説童話 海幸山幸』	木村小舟	精文堂出版部	1942(昭17)年 9月15日	話の展開が『古事記』の話に拠る。

(二) 通史の形式をとるお伽噺、童話、物語。(神代のみの書籍を含む)

書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『日本開闢』 (日本歴史譚1)	大和田建樹 山田敬中画	博文館	1896(明29)年 2月22日	自序に「多く古事記を本として採れり」とある。

『日本神典 古事記断』	渋川玄耳	精美堂	1910(明43)年 10月25日	『古事記』全編を通した児童向け口語訳の嚆矢。
『天の浮橋』 (少年日本歴史読本1)	萩野由之編 尾竹国観画	博文館	1911(明44)年 2月1日	解題に「主として古事記より採り」とある。
『古事記絵ばなし 日本の神様』	渋川玄耳 名取春仙	有楽社	1911(明44)年 2月11日	
『大国主神』 (少年日本歴史読本2)	萩野由之編 尾竹国観画	博文館	1911(明44)年 3月12日	解題に「専ら古事記を基とし」とある。
『天孫降臨』 (少年日本歴史読本3)	萩野由之編 尾竹国観画	博文館	1911(明44)年 5月11日	解題に「主として材を古事記に求めた」とある。
『古事記物語』	鈴木三重吉		9(年)9月	雑誌『赤い鳥』3-15-3連載
『古事記物語』上、下	清水良雄画	赤い鳥社	上巻…1920(大9)年11月20日 下巻…1920(大9)年12月20日	
『現代語に全訳せる古事記』	福原武	洛陽堂	1921(大10)年 10月8日	
『日本神話 古事記物語』(世界少年少女名著大系12)	斉藤佐次郎	金の星社	1924(大13)年 11月18日	
『古事記』	新免忠	紅玉堂書店	1925(大14)年 11月20日	
(小学国史物語2)				
『神代の日本』 (課外読本 学級文庫)	ヨウネン社編	ヨウネン社	1926(大15)年 5月25日	附言に『古事記』を平易く書き改めたもの」とある。

『古事記時代』 (少年国史叢書1)	田中貢太郎	子供の日本社	1926(大15)年 7月20日	※題名には「古事記」と付くが内容は『日本書紀』中心。
『少年古事記物語』	宮崎久松	大同館書店	1926(大15)年 7月28日	
『日本建国童話集』 (小学生全集第6集)	菊池寛	文芸春秋社	1927(昭2)年 12月8日	『書紀』の話が一部含まれるが、神名表記が『古事記』で統一され、話は『古事記』依拠が多い。巻末に系図あり。
『古事記物語』 (児童図書館叢書 第36篇)	田中耕耘	イデア書院	1928(昭3)年 3月10日	
『新訳 古事記読本』	三浦藤作 丹宗律光画	文教書院	1929(昭4)年 6月25日	
『建国物語集』 (新日本少年文学全集1)	蘆谷蘆村	国民図書	1929(昭4)年 8月19日	神名表記が『古事記』で統一される。
『少年少女 日本建国物語』	藤田淳 太田霞岳画	文化書房	1930(昭5)年 6月25日	神名表記が『古事記』で統一される。
『子ども国史 神代の日本』	高橋立身	光学堂	1930(昭5)年 7月20日	「序」に『古事記』の校訂本によったとある。
『日本建国物語』	鈴木三重吉	アルス	1930(昭5)年 8月14日	古事記からとった、とある。
『やさしい古事記』	小屋民三 名取春仙画	誠文堂	1930(昭5)年 9月15日	「○」記号を使用した伏字箇所がある。
『日本建国物語』	中田千畝	丁未出版社	1931(昭6)年 3月5日	神名表記が『古事記』で統一される。
『日本神話 古事記物語』(少年少女世界名作物語8)	金の星社編集部	金の星社 松政徳次郎画	1934(昭9)年 2月15日	

『日本神典 古事記画譚』	渋川玄耳 太田天洋画	資文堂	1934(昭9)年 4月20日	
『古事記物語』 (少年少女世界名作物語)	三宅房子編 黒崎義介画	金の星社	1938(昭13)年 8月20日	
『古事記日本古典児童版』	新屋敷幸繁	日本文学社	1939(昭14)年 12月12日	
『カミサマノオハナシ』 1、2	藤田美津子	(三省堂か)	1940(昭15)年 1月	初版は戦災による消失のため発行所、発行日の詳細不明。
『皇国の肇め 神代の巻』	納富康之	汎洋社	1942(昭17)年 1月1日	はしがきに「『古事記』の本文を基にして、『日本書紀』の本文によつて、所々補つておきました」とある。
『少国民古事記 国のはじめ物語』	吉田禎男	輝文館	1942(昭17)年 7月20日	
『古事記 開発社少国民版』	新屋敷幸繁 木俣武画	開発社	1942(昭17)年 9月18日	『古訓古事記』による。
『古事記』 (青少年日本文学)	平林治徳 鈴木朱雀画	至文堂	1943(昭18)年 2月15日	
『少国民の古事記』	佐藤武	文松堂書店	1943(昭18)年 10月20日	各地神社の写真を多数掲載。

二、戯曲

『古事記』『日本神話』等が混在する戯曲集については、関連作品名をすべて挙げ、そのうち『古事記』を典拠とした作品名をゴチック体で示した。コメントは備考欄に記した。



書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『児童劇脚本』第6集 「神話劇 大国主命と白兔」	片岡魯月	明治図書	1923(大12)年 2月20日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『家庭用児童劇』第2集 「因幡うさぎ」「すくなびこな」「高 まが原」「国ゆづり」	坪内逍遙	早稲田大 学出版部	1923(大12)年 3月15日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『国語読本を戯曲化する児童劇脚本』 「白兔」「大蛇退治」「熊襲征伐」	宮川菊芳 三浦成作	厚生閣	1925(大14)年 12月15日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『児童劇集 上』 (日本児童文庫21) 「をろち退治」「因幡うさぎ」	坪内逍遙	アルス	1927(昭2)年 5月25日	
『児童劇集 下』 (日本児童文庫22) 「伊邪那岐命」	長田秀雄 岡本帰一画	アルス	1928(昭3)年 5月5日	神名表記が『古事記』に拠る。
『児童劇集』 (新日本少年文学全集17) 「すくなびこな」坪内逍遙、 「日本武尊」仲木貞一、 「いなばの白兔」多田不二	坪内逍遙ほか 河目悌二画	国民図書	1929(昭4)年 7月13日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『家庭用児童劇』 (春陽堂少年文庫91) 「をろち退治」「因幡うさぎ」 「すくなびこな」	坪内逍遙	春陽堂	1933(昭8)年 3月15日	
『建国児童劇集』	仙波安芸	帝国教育	1942(昭17)年	

「天の岩戸」三上秀吉、「白兔」渋 沢青花、「国ゆづり」加藤光、「二つ の玉」竹越和夫、「美々津の浜」秋 月浩霊、「皇国の礎」中川静村	建国祭本部編	会出版部	4月5日	
---	--------	------	------	--

三、絵本・漫画

書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『オトギエバナシ 因幡の兔』	石川謙次郎	富士屋書店	1930(昭5)年 5月5日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『大国主命』(講談社の絵本169)	松村武雄ほか 鴨下晁湖ほか画	大日本雄弁会 講談社	1941(昭16)年 2月1日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。
『大国主命』	大木雄二 黒崎義介画	児童の友社	1943(昭18)年 4月30日	題材、話の展開が『古事記』の話に拠る。

四、紙芝居

書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『大国主命と白兔』 (幼稚園紙芝居第5輯)	高橋五山 高橋五山画	全甲社紙芝居 刊行会	1936(昭11)年 5月20日	印刷紙芝居16枚。
『カミサマトシロウサギ』	川崎大治 西正世志画	日本教育画劇	1943(昭18)年 3月15日	印刷紙芝居11枚。日本教育紙芝居協会製作

□『古事記』以外の上代文献（『日本書紀』『風土記』等）を典拠とする書籍  
 ※典拠が明らかでない書籍を含む

一、童話（物語）

（一）『日本書紀』『風土記』等から部分的に採用したお伽噺、童話、物語

書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『家庭教育 歴史読本』第1編 「能褒野の露」	小中村義象・ 落合直文（共著）	博文館	1891（明24）年 2月22日	
『玉の井』（日本昔噺2）	大江小波 小林永興画	博文館	1894（明27）年 8月5日	
『八頭の大蛇』（日本昔噺13）	大江小波 尾形月耕画	博文館	1895（明28）年 9月10日	
『八咫鳥』（日本お伽噺1）	大江小波編著 久保田米僊画	博文館	1896（明29）年 10月23日	
『畝傍山』（日本歴史譚2）	大和田建樹 村田丹陵画	博文館	1897（明30）年 1月31日	
『三韓征伐』（日本歴史譚3）	大和田建樹 寺崎廣業画	博文館	1897（明30）年 3月23日	
『草薙剣』（日本お伽噺17）	大江小波編著 小林永興画	博文館	1898（明31）年 6月23日	
『仁徳天皇』（少年史談第1編）	木崎愛吉 稲野年恒画	吉岡書店	1900（明33）年 2月20日	仁徳天皇千五百年大祭年。
『金港堂豪傑ばなし 日本武尊』	折山子	金港堂書籍	1902（明35）年 8月22日	

『日本武尊』(家庭歴史文庫)	杉谷代水	久遠堂	1908(明41)年 8月18日
『日本武尊』 (日本お伽噺第44編)	青葉山人編 笠井鳳齋画	島鮮堂	1910(明43)年 3月28日
『日本武尊』(歴史お伽第6編)	木村小舟編著	彰文館本店	1911(明44)年 1月5日
『神武天皇』 (日本お伽噺第53編)	青葉山人 笠井鳳齋画	島鮮堂	1911(明44)年 2月28日
『素盞鳴命』 (日本お伽文庫第3編)	巖谷小波編 田代古婁画	博文館	1913(大2)年 11月23日
『神功皇后』 (日本お伽文庫第14編)	巖谷小波編 八幡白帆画	博文館	1915(大4)年 4月18日
『神様お伽噺』 「天の岩戸」「海幸彦と山幸彦」ほか	藤川淡水 小林士郎画	新光社	1920(大9)年 10月20日
『世界名作 教育童話一百選』 「天の窟戸」「八岐の大蛇」	遠藤早泉編	開発社	1921(大10)年 12月6日
『日本武尊』(模範児童文庫)	児童教育会編	社会文庫	1923(大12)年 4月20日
『子供に読ませる偉人の話』2 「神功皇后」	吉田助治	金星堂児童部	1924(大13)年 10月20日
『カタカナモノガタリ』 (カナオトギ叢書9)	須藤和彦	第一出版協会	1925(大14)年 11月15日
「国ビキ」「海ヒコ山ヒコ」 「ヤクソクニソムイタ神」ほか	江島武夫画		

『日本武尊』 (教訓童話 偉人と英雄 6)	童話研究会	積文館	1926(大15)年 4月10日	
『海幸山幸』(模範童話文庫2) 「海幸山幸」「唾の王子」「た ちばなの実」ほか。	巖谷小波編 室野素月画	文武堂	1926(大15)年 8月5日	
『カナ・レキシオトギ』 (カナ・レキシオトギ叢書1) 「ジンム天皇」「チイヒサコ ベノスガル」ほか	岡本瓊二	第一出版協会	1927(昭2)年 4月10日	
『カナ・レキシオトギ』 (カナ・レキシオトギ叢書2) 「ヲロチタイジ」「イナバノ 白ウサギ」「ノミノスクネ」ほ か	入交総一郎	第一出版協会	1927(昭2)年 4月13日	
『カナ・ナポレオン』 (カナ・レキシオトギ叢書3) 「ニントク天皇」ほか	岡本瓊二 むろのたくま画	第一出版協会	1927(昭2)年 5月15日	
『三年生の童話』(学校家庭年別 模範児童文庫) 「海幸彦と山幸彦」	模範児童文庫刊 行会 黒崎美介画	大阪宝文館・ 文教書院	1928(昭3)年 12月	
『カナ・サイガウタカモリ』 (カナ・レキシオトギ叢書4) 「ヤマトタケルノ尊」ほか	入交総一郎 室野たくま画	第一出版協会	1930(昭5)年 3月18日	
『カナ・ワシントン』 (カナ・レキシオトギ叢書5)	岡本瓊二	第一出版協会	1930(昭5)年 6月20日	『カナ・レキシオトギ』(カナ・レキ シオトギ叢書1)と同一内容

書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『家庭教育 日本歴史はなし』	松本謙堂	積善館	1891(明24)年 6月8日	
『新撰日本外史』	小中村義象・ 落合直文(共著)	博文館	1892(明25)年 12月19日	
『家庭教育 日本歴史談』	元木貞雄編	榊原友吉	1893(明26)年 3月25日	

(二) 通史の形式をとるお伽噺、童話、物語。(神代のみの書籍を含む)

『日本武尊』(開発社少国民版)	山岸外史 原田直康画	開発社	1943(昭18)年 3月25日	
『日本武尊』(青少年日本文学)	鈴木啓介	至文堂	1944(昭19)年 1月10日	
『日本武尊』(開発社少国民版)	久留島武彦 鈴木朱雀画	日向書房	1943(昭18)年 5月10日	
『三百六十五日 日本国史絵物語』	木村小舟 中井観邦画	皇国日本社	1942(昭17)年 6月20日	
『カナ・ノギタイシヤウ』 (カナ・レキシオトギ叢書6) 「ヲロチタイジ」「イナバノ 白ウサギ」「ノミノスクネ」ほか	岡本瓊二	第一出版協会	1930(昭5)年 6月	『カナ・レキシオトギ』(カナ・レキシオトギ叢書2)と同一内容
「ジンム天皇」「チイヒサコ ペノスガル」ほか				

『古代の巻』 (少年日本歴史1)	巖谷小波・ 福田琴月(共著) 宮川春汀画	博文館	1909(明42)年 5月8日	
『橿原の宮』 (少年日本歴史読本4)	萩野由之編 尾竹国観画	博文館	1911(明44)年 7月1日	
『三種の神器』 (少年日本歴史読本5)	萩野由之編 桐谷洗鱗画	博文館	1911(明44)年 10月4日	
『新羅征伐』 (少年日本歴史読本6)	萩野由之編 桐谷洗鱗画	博文館	1911(明44)年 12月28日	
『神代の話』 (少年書類第2編 歴史修身談 第1巻)	遊佐誠甫 柿山陽谷画	開発社	1900(明33)年 12月30日	
『日本神話 愛と剣』	木村小舟 田代古岨画	博文館	1911(明44)年 12月23日	
『伝説 面白い神代のお話』	中村徳五郎 山田忠一画	松雲堂	1919(大8)年 1月20日	
『伝説 面白い日本歴史のお話』 第2巻 上代の巻	中村徳五郎 山田忠一画	松雲堂	1919(大8)年 1月20日	
『童話の日本史』1 神代の巻「美しい国」	吉田助治 武田比佐画	文陽堂	1920(大9)年 9月5日	
『童話の日本史』2 上古の巻「宝の国」	吉田助治 武田比佐画	文陽堂	1921(大10)年 3月5日	
『日本童話宝玉集』上巻	楠山正雄	富山房	1921(大10)年 12月18日	『日本書紀』『古事記』『古語拾遺』伝説に よる。
『童話の日本史』(普及版) 1	吉田助治	文陽堂	1923(大12)年	

神代の巻（神代―垂仁）	武田比佐画		1月20日	
『童話の日本史』（普及版）2 上古の巻（景行―允恭）	補助教育研究会	而立社	1923（大12）年 7月20日	日本の物語と、同時代の海外の物語を同時収録。第2篇は奥付が無いため確認できず発行年月日不明。
『天の岩戸』 （少年歴史物語1）	編		1923（大12）年 7月23日	
『三種の神器』 （少年歴史物語2）			1923（大12）年 8月23日	
『海山の争ひ』 （少年歴史物語3）			1924（大13）年 3月23日	
『金色の鳥』 （少年歴史物語4）			1924（大13）年 5月10日	
『草薙の剣』 （少年歴史物語5）			1924（大13）年 6月10日	
『三韓征伐』 （少年歴史物語6）	小林篤里	文芸社	1924（大13）年 6月15日	
『建国より平安時代へ』 （日本国民史1）	元島英三 井上毅画	小学館	1924（大13）年 6月25日	
『小学国史物語』五年の前	吉田三男也	敬文館	1924（大13）年 12月10日	
『日本歴史挿話』	吉田助治	イデア書院	1926（大15）年 4月25日	
『日本の神話』 （児童図書館叢書）	武井武雄画	アルス	1928（昭3）年 4月5日	
『日本歴史物語 上』 （日本児童文庫1）	喜田貞吉 小村雪岱画			



『神の国日本肇国物語』	香川頼彦	文友堂	1939 (昭14)年	皇紀二千六百年記念出版。
『日本神話』	黒崎義介画 大木雄二	金の星社	10月20日 1938 (昭13)年	
『日本建国神話』 (日本歴史物語全集1)	菊池寛 布施長春画	新日本社	1月20日 1937 (昭12)年	
『少年国史物語』第1巻 (豪華版) — 神代、大和・奈良 ・平安時代—	羽石弘志画	学出版部	9月18日 1936 (昭11)年	
『少年国史文庫 神代と上古』	前田晁 西亀正夫	早稲田大 厚生閣	9月11日 1935 (昭10)年	
『神功皇后』 (少年大日本史第4巻)	井乃香樹 白田耕勢画	建設社	2月20日 1935 (昭10)年	
『日本武尊』 (少年大日本史第3巻)	山本舜山画	建設社	1月20日 1935 (昭10)年	
『神代の物語』 (少年大日本史第1巻)	河野通明画	建設社	10月20日 1934 (昭9)年	
『国記』	松村武雄	建設社	1934 (昭9)年	
『日本精神作興歴史読本 神武建国記』	実業之日本社編	実業之日 本社	11月10日 1933 (昭8)年	
『神代の歴史』 (小学文庫三年用)	小原国芳監修	出版部	9月29日 1930 (昭5)年	
『美しくやさしい国史物語』 — 神代より北條氏滅亡まで —	栗田茂治 畑米吉	玉川学園	6月30日 1929 (昭4)年	
『国史美談 大蛇退治』 「おろち退治」「神武天皇」 「日本武尊」ほか	可笑庵秋月	弘文館	5月13日 1928 (昭3)年	

『日本国史美談』1 ―神代より元寇まで―	池田宣政 梁川剛一画	中田敏夫画	借成社	1940(昭15)年 2月20日	
『建国物語 神の国日本』	蘆谷蘆村		文昭社	1940(昭15)年 2月24日	神社古蹟の写真多数。
『童話日本国史』1	水谷まさる 大石哲路画		金の星社	1940(昭15)年 9月25日	
『大國史美談』1	北垣恭次郎		実業之日 本社	1941(昭16)年 9月5日	
『皇國の肇め 人皇の巻』	納富康之 金子重正画		汎洋社	1942(昭17)年 4月29日	
『天の浮橋』 (日本神話英雄譚宝玉集第一冊)	楠山正雄		富山房	1942(昭17)年 6月28日	
『日本の神さま』	各務虎雄 吳羽麓郎画		弘学社	1943(昭18)年 7月30日	殆どひらがなで低学年向け。
『少國民の神社読本』	竹内武雄		電通出版 社	1944(昭19)年 5月25日	

二、戯曲

『古事記』『日本神話』等が混在する戯曲集については、関連書籍名をすべて挙げ、そのうち『古事記』以外を典拠とした書籍名をゴチック体で示した。コメントは備考欄に記した。

『玉の井』	『児童劇脚本』第1集	書名・題名	著者名・画家名 片岡魯月	発行所 明治図書	発行年月日 1922(大11)年 3月20日	備考
-------	------------	-------	-----------------	-------------	------------------------------	----

『家庭用児童劇』第1集 「をろち退治」「龍宮」	坪内逍遙	早稲田大 学出版部	11月4日	1922(大11)年	
『家庭用児童劇』第2集 「因幡うさぎ」「すくなびこな」 「高まが原」「国ゆづり」	坪内逍遙	早稲田大 学出版部	1923(大12)年 3月15日		
『八岐の大蛇』(お伽史歌劇第5 編)	町田桜園	盛林堂	1923(大12)年 7月15日		楽譜あり。
『国語読本を戯曲化する 児童劇 脚本』	宮川菊芳 三浦成作	厚生閣	1925(大14)年 12月15日		
「白兔」「大蛇退治」「熊襲征伐」 『児童劇集 上』 (日本児童文庫21)	坪内逍遙	アルス	1927(昭2)年 5月25日		
「をろち退治」「因幡うさぎ」					
『大國主命』(子供の喜ぶ童話劇 資料叢書「一九二七年版」3) 「神話児童劇 大國主命」	中西芳朗	コドモ芸 術学園講 演部	1927(昭2)年 6月1日		楽譜あり。
『学校史劇』第1編 (神代の巻1)	町田桜園	盛林堂	1927(昭2)年 9月28日		
『学校史劇』第2編 (神代の巻2)	町田桜園	盛林堂	1927(昭2)年 9月28日		
『学校史劇』第3編 (神代の巻完)	町田桜園	盛林堂	1927(昭2)年 9月28日		
『学校史劇』第4編 (上古の巻)	町田桜園	盛林堂	1928(昭3)年 6月23日		
『少女劇 天孫降臨』	田中蓮代	(出版社)	1929(昭4)年		

『児童劇集』 (新日本少年文学全集17) 「すくなびこな」坪内逍遙、「日本武尊」仲木貞一、「いなばの白兔」多田不二	河目悌二画	国民図書	1929(昭4)年 7月13日	
『小学国史を戯曲化する 児童劇脚本』 「御剣」「少女の姿」「走水」	長尾豊	厚生閣	1930(昭5)年 10月5日	「御剣」は「尋常小学国史」上巻第一の「天照大神」、巻第二「神武天皇」より。「少女の姿」は同第三の「日本武尊」より。「走水」は「国語」巻九の第三「弟橘姫」より。
『一日の素盞鳴尊』 (教室文庫5)	金子富太郎編	教育館	1931(昭6)年 1月10日	武者小路実篤の戯曲。
『すくなびこな』 (教室文庫6)	金子富太郎編	教育館	1931(昭6)年 1月10日	坪内逍遙の戯曲。
『家庭用児童劇』 (春陽堂少年文庫91) 「をろち退治」「因幡うさぎ」「すくなびこな」	坪内逍遙	春陽堂	1933(昭8)年 3月15日	
『日本国史児童劇集 上』 「おろち退治」	野村政夫	一進堂書 店	1940(昭15)年 10月25日	
『手軽に出来る青少年劇脚本集』 第1輯 「大蛇退治」	台湾総督府情報 部編	台湾総督 府情報部	1941(昭16)年 4月13日	
『建国児童劇集』 「天の岩戸」「三上秀吉」「白兔」	仙波安芸 建国祭本部編	帝国教育 会出版部	1942(昭17)年 4月5日	

渋沢青花、「国ゆづり」加藤光、  
 「二つの玉」竹越和夫、「美々津  
 の浜」秋月浩靈、「皇国の礎」中  
 川静村

三、絵本・漫画

書名・題名	著者名・画家名	発行所	発行年月日	備考
『素戔嗚尊』（お伽漫画1）	保積稲夫	丸善	1927（昭2）年 9月15日	
『少年国史絵画館』	中村孝也指導 大久保弘一解説 斎藤五百枝ほか画	大日本雄弁会 講談社	1936（昭11）年 10月1日	『少年倶楽部』10月号附録
『国史絵話』（講談社の絵本76）	（著者不明） 米内穂豊ほか画	大日本雄弁会 講談社	1938（昭13）年 8月1日	
『日本武尊』（講談社の絵本87）	西条八十 田中良ほか画	大日本雄弁会 講談社	1938（昭13）年 11月1日	
『日本よい国 建国絵話』（講談社の絵本97）	松村武雄解 尾竹国観画	大日本雄弁会 講談社	1939（昭14）年 2月1日	
『皇紀二千六百年奉祝記念 国史絵巻』（講談社の絵本135）	三島章道	大日本雄弁会 講談社	1940（昭15）年 2月1日	
『日本ヨイ国 建国絵本』	豊国年亮画	広文社	1940（昭15）年 4月25日	

四、紙芝居

書名・題名	『建国物語 神武天皇さま』
著者名・画家名	高橋五山 牧ヒトシ画
発行所	全甲社紙芝居 刊行会
発行年月日	1940(昭和15)年 11月5日
備考	印刷紙芝居17枚。